金正淑伝

朝鮮・平壌

チュチェ91（2002）年

金 正 淑 伝

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ 91（2002）





会寧（ヘリョン）の生家



抗日武装闘争の時期に金日成将軍とともに



金日成将軍と息子の正日とともに



金日成将軍に随行して息子の正日とともに第１中央軍官学校の第２回卒業式に臨席した金正淑



人民主権機関の代議員選挙に参加した金正淑





革命烈士陵

『金正淑伝』の刊行に寄せて

金正淑(キムジョンスク)は、祖国の解放と革命の勝利のためにすべてを尽くしてたたかった不屈の革命闘士であり、抗日の女性英雄である。

金正淑は偉大な領袖金日成(キムイルソン)主席を命を賭して守り、その指導のもとに朝鮮革命の勝利の道の開拓に寄与するとともに、非凡な英知と強靭な意志、卓抜な指導手腕をもって主席を補佐し、抗日大戦の勝利と新朝鮮の建設に大きな貢献をなした。

金正淑は同志と人民への愛、献身的奉仕の精神、そしておおらかで素朴な人民的品性をそなえた革命家の鑑であった。

金正淑は子息の金正日(キムジョンイル)を、主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業を受け継いでいくよう育てた。

金正淑はその気高い思想的・精神的品格、祖国と人民の前に築き上げた不朽の革命的業績により、主席の親衛戦士、抗日の女性英雄、すぐれた政治活動家、偉大な革命の母として朝鮮人民の心に生きつづけており、その名は朝鮮の現代史に燦として輝いている。

金正淑の生誕 85 周年にあたり、ここに『金正淑伝』を刊行するものである。

チュチェ 91(2002)年 12 月

目　次

一　受難のなかでの成長

幼 少 期

金正淑はチュチェ 6(1917)年[1]12 月 24 日、咸鏡北道会寧郡会寧面鰲山洞(現在の会寧市東明洞)の貧しい農家に、金春山と呉氏の次女として生まれた。

地主の苛酷な搾取と虐待に耐えかねて各地を転々としていたこの一家が会寧に移り住んだのは、祖父の代の 1895 年頃であった。一家はここでも小作人として細々と暮らした。さらに、祖父の死後、一家の柱だった父が独立運動に身を投じて家を空けることが多かったため、暮らしはいっそう苦しくなり、借財はふくらむばかりだった。

正淑が生まれる頃には、借金が返済できず地主に小作地を取り上げられたうえに粗末なわらぶきの家まで取り壊され、鰲山徳の他人の家に間借りしなければならなくなった。ひと冬を過ごした後、父は間借りしている家にもう一部屋建て増しした。正淑はこの家で呱々の声を上げたのである。

当時、朝鮮を占領した日本帝国主義は暴虐な「武断統治」を実施し、無辜の人民をむやみやたらに撃ち殺し、焼き殺し、生き埋めにするという蛮行を働いた。朝鮮民族は甚大な災難と苦痛にさ

いなまれ、全土は巨大な監獄と化した。亡国を痛嘆する人民の声が巷にあふれ、山河は同胞の血に染められた。朝鮮人民は日本帝国主義の銃剣に立ち向かって敢然と立ち上がった。

この民族受難の時期、正淑一家も日本帝国主義侵略者に抗して勇敢にたたかった。

祖父は早くから封建支配層に抗する農民蜂起に参加した愛国者であったが、志ならず 1908 年に他界した。

父は早くから豆満江（トウマン）を渡って反日独立運動を起こした愛国者であったが、1929 年に異郷でその生涯を閉じた。

母は夫の愛国闘争を助けながら、子女を愛国者、革命闘士に育てたが、1932 年 7 月に日本侵略軍の「討伐」の犠牲となった。

兄の金基俊（キム ギ ジュン）は有能な地下工作員で、金日成将軍の主体的な革命路線の貫徹に身を投じたが、1934 年に敵の手にかかって殺害された。

弟の金基松（キム ギ ソン）もやはり将軍に忠実な児童団員で、祖国解放のために命を投げだした幼い革命闘士である。

こうした愛国的で革命的な家庭が、正淑をして早くから偉大な革命家に成長させたのである。

正淑は幼年期の初めを会寧で過ごした。会寧は昔から住みよい美しい土地として知られていた。しかし、正淑には思う存分に遊び、楽しんだ幼年時代というものはなかった。最初に手にしたのは、母の汗がしみこんだホミ（草取り鎌）であり、最初に習ったのはままごとではなく、草取りや山菜摘み、落ち穂拾いであった。

母は貧しい暮らしのなかにあっても、人間は義理がたくまじめに生きねばならないとつねづねわが子に説いていた。

正淑は幼い頃から、自分のことより父母、兄弟のこと、隣人のことを先に考えるのがつねだった。

ある日、野良仕事に出た母の手助けにと水汲みをしたとき、つい道端の石につまずき陶製の器を割ってしまった。その陶器は母が嫁いできたときに持参したものだった。思いあぐねた末、正淑は数日後、村の近くにある土器店（焼き物屋）を訪ねた。そこでは、土窯から土器を取り出す日には人手が足りないために村の女手を臨時に雇い、手間賃代わりに土器をくれるからだった。けれども、正淑は幼過ぎて仕事をさせてもらえなかった。

がっかりして踵を返そうとした正淑に、むずかる乳飲み子をおぶったまま仕事に追われる婦人の姿が目に止まった。正淑はすぐさま乳飲み子を抱き取り、仕事が終わるまで子守をしてあげた。仕事が終わると、土器店の主人は女手たちに土器をいくつか分け与えた。その母親は正淑のところに来てわが子を抱き取ると、「おかげで助かったわ。本当にいい子ね」とねぎらい、手間賃としてもらった土器の一つを正淑の手に持たせた。正淑はびっくりしてそれを辞退した。母親は「どこの子？　気立てがやさしいこと」と何度も繰り返し、無理やり土器を正淑に持たせて立ち去った。

会寧の生家に行くと、いまでもかまどのそばに置かれているその小さな土器を目にすることができる。

正淑の一家は、借財に押しつぶされて小作地まで取り上げられ

てしまった。そのうえ、独立運動に奔走する父の手がかりをつかもうと頻繁に官憲が家に押し入っては乱暴を働いた。

これ以上故郷で暮らせなくなった一家は 1922 年の春、豆満江を渡って中国へ行くことになった。望羊（マンヤン）渡船場で小舟に身をゆだねた正淑は、遠ざかる故郷の山河を涙のうちに見やった。

後日、金正淑はそのときのことを次のように述懐している。

「わたしは会寧を離れても、一度たりとも故郷を忘れたことはありません。将軍のおともをして山中で戦っていたころ、うれしいときも悲しいときも、故郷の会寧を思い出したものです。行軍や戦闘のときなどは少しはましですが、密林の宿営でひときわ明るい月を眺めると、故郷の草木や石の一つ一つが目の前に鮮やかに浮かんできました」

豆満江を渡った一家が最初に住みついたのは、中国東北地方の延吉県北溝というところであった。うち捨てられていた仮小屋に住居を定めて小作を始めた。家族総出で農作に精を出したが、暮らしは会寧のころと変わらなかった。だが、一家は貧しいながらもいつもむつまじく暮らした。村人は勤勉で気立てのよい「会寧の家」をうらやましがり、尊敬した。

正淑は、日中は母と兄の野良仕事を手伝い、夜は姉と一緒に灯火の下で麻糸を縒ったり麻布を織ったりした。

ある日の夕方、朝早く山へ行って摘んだ山菜のかごを抱えて山を下りてきた正淑は、とある仮小屋の前で赤子の泣き声を耳にした。か弱い泣き声に引かれて仮小屋に入ってみると、病人らしき

年若い婦人が横たわり、赤子は乳の出ない母親の胸をまさぐっていた。正淑は泣く子をおぶって寝かしつけると、摘んできた山菜でかゆを炊いて病人に与え、残りの山菜をきれいに選り分けて翌朝の食事の支度までですませてから、空のかごを下げて家にもどった。

この話は村中に広まり、村人の誰もが「会寧の家の次女」は大人にもまさる義理のある子だとほめ称えた。

正淑が 10 歳になった春、姉の金貴人女（キム ギ インニョ）が借金のかたとして地主の下女になるという不幸に見舞われた。その日、姉はよよと泣き崩れた。正淑は母とともに地主の前に立ちはだかって姉をかばい、強く抵抗した。すると地主は乱暴に母を蹴りつけた。ちょうど家に帰ってきた兄の基俊はこの光景を見て憤激し、地主を殴り倒した。今度は地主の息子らが駆けつけて、基俊を棍棒でしたたか打ちすえた。兄は足に大怪我を負って倒れ、姉は結局、地主に引き連れられて行った。

この日の怨みは、正淑の胸に一生消しがたい痛手として刻みつけられた。

地主はこれに飽き足らず、正淑一家にとって唯一の生計の手段であった小作地を取り上げ､警官をそそのかして父に監視をつけ、時を選ばず捜索騒ぎを起こした。

こうしてそれ以上北溝で暮らせなくなった一家は､1928 年の春､八道溝から 2 ㎞離れた山村の西山里へ移らざるをえなくなった。

それ以来、一家の暮らしはますます苦しくなった。父は病床に

臥したままで､兄は不自由な体になってまっとうな仕事ができず、兄嫁まで産後の肥立ちが悪く床についていた。

正淑はさまざまな不幸と悲しみをもたらす搾取社会の矛盾にいち早く目覚め、日本帝国主義と階級の敵にたいする憎悪の念を抱くようになった。さらに、怨み多いこの世を去るときに遺した父の遺言は、幼い正淑に反日愛国の志、祖国解放の志を深く植えつけることになった。

「わしは死んでも朝鮮に骨を埋めたかった、朝鮮の土になりたかった。その願いはかなえられそうもない。

お前はどこへ行っても故郷を忘れず、朝鮮を忘れてはならん。そして、朝鮮のためにたたかうのだ」

父の死後、一家は 1929 年 6 月に延吉県符岩洞下村に移り住んだ。この地で地主・李春八（リ チュンパル）の土地を小作することになった。

下村に移り住んでからは、一家の支えとなっていた母までが病床についたため、大家族の家事一切が正淑の肩に担わされた。屈強な壮丁ですら生計を立てがたいこの世で、一家の重荷をか弱い肩に担って奔走する幼い正淑の姿を目にするたびに、村人たちは心を痛め、いじらしさを覚えるのだった。

けれども、正淑はそうした苦労をしながらも悲観しなかった。勤勉さと深い愛情、明るい笑顔で家族を力づけ、家計の切り盛りに努めた。

当時、下村には小さな私立学校があった。この学校には符岩洞やその周辺の村から 5、60 名の貧しい家の子どもたちが通ってい

た。正淑は家庭の事情で自分は駄目でも、弟の基松だけは是非とももう一度学校に入れてやりたいと思っていた。この願いがかなえられた日、正淑はむしろ当の弟よりもっと喜んだ。着古しの服ではあったが、それをきれいに洗って手直しし、勉強道具を風呂敷に包んで持たせてあげた。

正淑も学びたかった。その熱望が強まるほど、いくらあくせく働いても暮らしはよくならず、学びたくてもそれがかなえられない世の中を恨まざるにはいられなかった。

正淑の向学の念は1930年の夏にかなえられることになった。金日成将軍の意を体して各都市や農村に派遣された政治工作員の手で各地に夜学が設けられたのである。彼らは夜学と同時に革命組織をつくり、大衆を目覚めさせ、革命の大衆的基盤を築く活動を精力的に繰り広げた。その成果として符岩洞にも夜学が設けられたのだが、その教員に私立学校の教師であった郭燦永（クァクチャンヨン）が赴任してきた。彼はすでに金日成将軍が派遣した青年共産主義者によって結成された革命組織の一員として、反日愛国啓蒙活動にたずさわっていた。

正淑は夜学開講の日、真っ先に駆けつけた。後日、そのときの喜びについて、正淑は抗日遊撃隊の戦友たちにこう語っている。

「夜学ができて読み書きを教えてくれると聞いて、どんなにありがたいと思ったことか、……わたしはこの世に生まれて、あれほどありがたいと思ったのは、あのときが初めてでした。わたしはうれしさのあまり黒板にすがりついて泣いてしまいました」

夜学生を前にして、郭燦永は拳を高く振りかざし、熱弁を吐いた。

——知識は力、無知は破滅だ。だから学ばなければならない。知識ある者には教える義務があり、無学の者には学ぶ権利がある。……一生懸命に学ぼう！

その夜、家に帰った正淑は寝つくことができなかった。このせちがらい世の中に、貧しい人のために尽くしてくれるありがたい人たちがいるということに、激しく胸をゆさぶられたからである。

抗日革命闘士の林春秋（リムチュンチュ）〔2〕は、その頃の金正淑についてこう述懐している。

「当時の金正淑同志は、年のわりにはかなり大人びていた。礼儀正しく聡明で、人一倍向学心に燃えていた。村に夜学が設けられた日、彼女は誰よりも先に駆けつけたし、その後、一日として欠席することがなかった」

夜学では主に国語と算数を習い、そのほかに講話の時間があった。学生たちはこの時間をいちばん好んだ。数多い話の中でも、彼らをもっとも感動させたのは、金日成将軍にまつわる伝説のような話であった。

「朝鮮の夜空に明星が現れ、天地を明るく照らしている」「明星のように天地を明るく照らし出す方が、山を狭しと駆けめぐり、日本の侵略軍を一刀のもとになぎ倒す武術を修めている。その方が軍を率いて立てば朝鮮は独立する」

本当にそんな偉人がいるなら、その偉人の兵士となって日本帝

国主義と地主、資本家を打ち倒すたたかいに加わることができるなら!……

　これは正淑が夢にまで描いた切なる願いであった。

　正淑は並々ならぬ情熱をもって勉強に打ち込んだ。そして夜学に通うのをためらう友人には、女性も読み書きを習えばこの社会の不条理がわかり、立ち後れた封建思想をなくすことができるのだと説いた。

　革命組織では村の民俗遊戯や冠婚葬祭なども大衆啓蒙の機会として利用した。とくに符岩洞の婦女子のあいだで以前からおこなわれてきたテノリ(村人が穀物を持ち寄って会食しながら談笑、歌舞などを楽しむ集い)を、女性に明日への希望と革命的熱意を鼓吹する集いに変えていた。

　ところが、それを目の上のこぶのように思っていた地主の悪だくみで、正淑の一家はまたも思いもよらぬ不幸に見舞われることになった。

　その年の秋、符岩洞ではテノリの準備が進められていた。取り入れの前で、どの家も食糧事情は苦しかったが、正淑の家庭ではなおのこと、祖母の葬儀をすませたばかりで持ち寄り分の穀物がなかった。こうした事情を知った弟の基松は、とっさに鎌を手にして畑に出た。そして、よく実った小作畑のコーリャンを何本か刈り取ってきて、姉の持ち寄り分を用意してやった。

　ところがテノリが終わった数日後、これを知った地主は息子まで連れて正淑の家に押しかけてきた。そして、刈り分もきめてい

ない小作畑から許しも得ずにコーリャンを刈り取ったと「泥棒」呼ばわりし、すぐさま法に訴えると脅した。「泥棒」と言われて我慢できなくなった正淑は、「自分の手でつくったコーリャンを刈り取ってきたのにどうして『泥棒』だというのですか」と抗弁した。

地主は「土地を貸した主人」の恩義もわきまえないのかと怒鳴りちらし、いますぐ借金を返済できなければ、このひと冬、家族の誰かが自分の家にきてひきうすを挽けと迫った。そして、これに応じなければただちに法に訴えて家を取り壊し、小作地を取り上げ、基松を柴刈り下男にすると息まいた。

正淑は歯がみして悔しがり、地主が立ち去ると母の懐に抱きついてむせび泣いた。

こうして仕方なく、正淑は幼い身で地主の家のひきうすを挽く苛酷な労働を強いられる羽目になった。正淑は自分のことよりも、愛する母や兄嫁に奴隷の首かせをかけさせることはできなかったし、ましてや幼い弟を地主の下男にすることもできなかったのである。

ひきうす小屋は地主の家の庭の片隅にあった。ひきうすの回る音が少しでも止まると、地主は部屋から飛び出してきて怒鳴りちらした。

そうこうするうちに正淑の 13 回目の誕生日がめぐってきた。その日、母と基松は盛り切りの飯を風呂敷に包んでひきうす小屋を訪ねてきた。誕生日だというのに、ひきうすの長柄から手を離

せない娘を見た母は、見るに耐えず風呂敷をほどくと、基松と一緒に長柄をつかんだ。すると、正淑は母と弟の手を振り払ってこう言うのだった。

「お母さん、やめて。なんでお母さんまでこんなことをしなければならないのですか。お母さんや基松がこの家の米を一斗余計に挽いてやるからといって、うちやわたしの境遇が変わるとでも思うのですか。ただ心が痛むだけです……」

こうして母と弟を家に帰した正淑は、またひきうすの長柄を握るのだった。正淑の胸には、こんな世の中をそのままにしていては貧困と恥辱、侮蔑を振り払うことはできない、この世の不義とはあくまでたたかわなければならない、という闘志がむらむらとわき起こるのであった。

たたかいの第一歩

1931 年にいたり、満州を席巻しようとする日本帝国主義の野望はますます露骨化し、満州全土はきなくさい雰囲気に覆われていた。

一方、日本帝国主義のファッショ的暴圧統治に抗して立ち上がった朝鮮人民の反日闘争は、集団的な暴力的性格をおびて激しく展開されはじめた。

卡倫会議で抗日武装闘争路線をうちだした金日成将軍は、こう

した情勢下で武装闘争の準備を急ぐため、活動舞台を豆満江沿岸に移し、より広範な大衆を革命隊伍に結束する活動を進めた。

革命の熱風は符岩洞にも吹きつけた。金日成将軍が派遣した政治工作員によって、この村にも反帝同盟、農民協会、革命互済会[3]、婦女会などの革命組織が結成され、それらの組織に大衆を結集させる活動が活発に繰り広げられた。

この頃すでに、金基俊は反帝同盟の中核メンバーとして活動していた。家族はそういうことを知らずにいたが、正淑は兄が何かしら重要な使命をおびて夜毎出歩いていることに気づいていた。正淑は、それはまさに国を救うたたかいの道に違いないと考え、自分もきっとその道に立とうと心に決めるのであった。

共青組織は、正淑を実地闘争を通じて革命組織の一員に育てるよう夜学の先生に委任した。

正淑は、朝鮮革命を指導しているのは金日成と呼ばれる人物であることを先生に教えられ、全民族の悲願がこめられたその名を何度も口ずさむのだった。

いったいどんな方だろうか、その方はきっと朝鮮民族に、奪われた祖国を取り戻してくださるだろう、そして、搾取も抑圧もない新しい世の中をもたらしてくださるに違いない、朝鮮を踏みにじっている日本帝国主義を打倒し、逆さになったこの世の中を立て直してくださるはずだ、その方にしたがって一生たたかおう！

このときすでに、正淑の心にはこうした信頼感と信念が根づきはじめていた。

1931 年の春であった。ある日、正淑は革命組織から初の任務を受けるため、胸をときめかせながら指定された南山のふもとへと向かった。現地に着くと、薄暗い林の中から夜学の先生が現れ、その後ろに兄の基俊の姿が見えた。正淑の胸は兄への尊敬の念と誇り、そして兄が立ったその道に自分も一緒に立つことになったのだという喜びにときめいた。

その夜、正淑は村の住居や村人のたまり場にビラをまく任務を受けて村へもどった。

翌朝、符岩洞は大騒ぎになった。家の庭先や道端のあちこちにビラがまかれ、地主の家の門にはひときわ大きな檄文が貼りつけられていたのである。初の任務を問題なく遂行した正淑は、その後、ビラの散布、レポなどの重要な任務をたびたび遂行した。そして、ときには山菜を売り歩く山里の少女に、または学校へ行く生徒に、ときには弟を伴って親戚の家へ遊びに行く子どもに早変わりして敵の警戒の目をくぐり、任務をりっぱに遂行した。その大胆さと利発さに組織のメンバーは目を見張った。

革命の真理を体得し、革命家としての意志と英知を培った正淑は、1931 年 9 月 12 日、金日成将軍によってつくられた青少年の半軍事組織である少年先鋒隊に入隊した。これは正淑にとって新しい人生の出発であり、金日成将軍に忠誠を尽くす闘争隊伍の一員となる意義深い第一歩であった。

それから数日後の 9 月 18 日、「満州事変」が勃発した。

中国の東北地方、瀋陽北大営西部の柳条溝で、日本満鉄会社所

有の鉄道線路を爆破し、それを口実に満州への武力侵攻を開始した日本帝国主義は、「後方の安全」を期するという美名のもとに、朝鮮人民にたいする反動攻勢を全面的に強化した。彼らはとくに、新しい革命勢力が急速に台頭している東満州をはじめ、朝鮮人居住地域での弾圧蛮行をいっそう悪辣に強行した。

これに対処して金日成将軍は9月下旬、敦化での党および共青指導中核メンバーの会議をはじめ一連の会議で、武装闘争の準備を本格化する課題を示し、革命勢力を戦闘的に鍛練、育成し、拡大する活動を指導した。

将軍の派遣した政治工作員の指導のもとに、符岩洞の革命組織でも、「満州事変」を引き起こした日本帝国主義の侵略的本質を暴露し、大衆を反日闘争に立ち上がらせる村民集会を開いた。集会の場となった学校の運動場は、松明とたき火で明々と照らし出された。

集会ではまず、革命組織の委任を受けた青年たちの演説があり、つぎに少年先鋒隊員の正淑が演壇に立った。会場はがぜんざわめいた。こんな大がかりな集会で女性が、それも14歳の少女が演説するということは予想外だったからである。

だが、正淑の演説はたちまち群衆の心をとらえた。

「お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん！　わたしたちの祖国を占領した日本帝国主義者は、つい最近『満州事変』を起こして大々的な武装侵攻を開始しました。……どうしてわたしたちの年老いた父母が祖国を懐かしみ、恨みを抱いたままこの荒涼た

る異国で野たれ死にしなければならないのでしょうか。どうしてわたしたち若者が血の涙を流し、苦労ばかりして生気を失わなくてはならないのでしょうか。これは何のため、誰のためでしょうか。わたしたちの国を奪った日本帝国主義と悪魔のような地主たちのためです。日本帝国主義と悪質地主はわたしたちの不倶戴天の敵です。この敵を打ち倒さなければ、誰も安らかに暮らすことはできないのです。

みんなが力を合わせて、日本帝国主義とのたたかいに立ち上がりましょう」

この演説に胸をゆさぶられた群衆は拳を振り上げ、日本帝国主義と悪質地主を打倒しようと呼応した。そして、松明をかざし、革命歌をうたいながら蔵財村までデモ行進をした。

この闘争によって、正淑は八道溝一帯の住民のあいだに広く知られるようになった。

この年の秋、将軍の指導のもとに東満州全域では、日本帝国主義と悪質地主にたいする大衆的な暴力闘争、秋収闘争(取り入れ期の闘争)が繰り広げられた。

この闘争をひかえて符岩洞の革命組織では闘争委員会を設け、宣伝隊、行動隊、走狗掃討隊、呼号隊などを編成した。正淑は宣伝隊に属して活動することになった。

ある農家の粟の取り入れの互助作業があった日、正淑も村の女性と一緒に野良に出て取り入れを手伝った。正淑は仕事の合間に10 束の粟を 1 か所に立てかけると、そのうちの 3 束を抱き上げ、

「この３束が李地主の分で、あとの７束はわたしたち小作人の分です。これがわたしたちの主張する３・７制です」と説明した。３・７制、４・６制という言葉はよく聞かされていたが、現物を目にするのは初めてだった。これを見て納得した村の女性たちは、ぜひとも３・７制を実現させたい気持ちに駆られた。

「ですから、わたしたちは必ず勝たなければなりません。そのためには力を合わせなくてはならないのです。地主がいくら騒いでも、わたしたちがかたく団結すれば恐れることはないし、その力にかなうものはこの世にありません。団結すれば勝てます。団結してたたかいましょう！」

正淑のアピールは村の女性たちの闘志を燃え立たせた。

正淑は夜となく昼となく中村、上村、蔵財村、東谷などを巡り歩いて宣伝活動をつづけた。こうして符岩洞の男性はもちろん、女性、老人、子どもたちまでも秋収闘争に立ち上がった。

正淑は少年先鋒隊と児童団員を率いて行動隊の任務も遂行した。

符岩洞の村民はスローガンを叫び、歌声高く地主・李春八の家に押しかけたが、李春八は３・７制など絶対に容認できないとつっぱねた。そのさまがあまりにも殺気立っていたので、村民の一部は動揺した。これを見てとった正淑は、悪質地主・李春八の搾取のむごさとその罪状を村民の前で暴露した。これは村民の怒りを爆発させる起爆剤となった。村民は棍棒や農具を振り上げて怒号した。地主はとうとう屈伏せざるをえなくなった。こうして符岩洞の小作人たちは、収穫量の７割を割り前として取り戻すこと

ができた。

秋収闘争と春慌闘争[4]の勝利に東満州全域がわき立っているとき、いま一つ劇的なニュースが伝わってきた。1932 年 4 月 25 日、金日成将軍が安図で反日人民遊撃隊を組織したというニュースだった。

これは正淑の胸を激しくゆさぶった。父が存命中の数年前、女子は軍隊に入れないのかと尋ねたことのある正淑だった。そのとき父は、「国を愛し敵を憎む気持ちに男女の別があるものか。女だからといって独立のために戦う軍隊に入れないわけはない」と答えた。

東満州の各県に誕生した抗日遊撃隊と高揚した人民の革命的気勢に恐れをなした日本帝国主義者は、反日革命勢力を萌芽のうちに圧殺しようと狂奔した。彼らは、朝鮮人百人のうち少なくとも一人は共産党員か共青員だから、容赦なく殺してしまえと公言し、間島全域を血の海、火の海に変えた。

間島大虐殺の蛮行は、正淑の胸にいやしがたい痛手を負わせた。この年の 7 月 15 日の朝、正淑は山に登って児童団の会合を指導していた。ところが突如、村の方から犬のほえる声が聞こえてくるや、つづけてけたたましい銃声が響いてきた。日本の「討伐隊」が押し寄せてきたのだった。村はまたたく間に火炎に包まれ、銃声とともに救いを求める叫び声、馬のいななきが天地をゆるがした。

「討伐」による符岩洞の被害は甚大だった。村人は無惨に殺害

された。正淑が山から駆け下りてきたときには、兄嫁はすでに絶命し、母はひどい火傷を負って倒れていた。やっと気を取り戻した母は、娘の手を取ってこう言うのだった。

「正淑……義姉は焼け死にしながらも……お前の名を呼んでいたよ。……甥っ子を捨てないで育ててくれと……それをお前に伝えようと……」母は最後の力をふりしぼって言葉をついだ。「この目で……あの悪魔のような日本人めらが滅びるさまをきっと見てやろうと思ったのに……仇を討っておくれ……」母はこう言い残して、息絶えた。母と兄嫁の死は、幼い正淑にとって耐えがたい打撃であった。

後日、金正淑は革命戦友の一人にそのときの心境を次のように述懐している。

「母に死なれたとき、わたしはあまりのことに涙も出ませんでした。厳しい世の中で乳飲み子の甥を育てることを考えると、天が崩れ地が沈むような気持ちで先は真っ暗でした。泣いても身もだえても抜け出せないそんな絶望の中からわたしを立ち上がらせたのは、革命への自覚でした。金日成将軍が導く革命の道で最後までたたかわなければならないという自覚があったからこそ、わたしはあの大きな不幸にも絶望せず、強く立ち上がることができたのです」

正淑は母の墓の前で泣きじゃくる弟を抱きしめて奮然と立ち上がった。屈することなき闘争と容赦なき誅伐のみが、犠牲になった父母兄弟の恨みを晴らす唯一の道だった。

正淑はそれから 10 日後の 7 月 25 日、金日成将軍の指導する朝鮮共産主義青年同盟に加盟した。

その日、正淑は共青組織の前で厳かに誓った。

「わたしは栄えある共産主義青年同盟に加盟しながら、同盟の一員となった名誉と誇りを胸深く刻みつけ、革命の勝利のために身も心もすべてささげてたたかいます。

わたしは共青員らしく組織の規律を厳守し、組織の決定と指示を誠実に実行し、共青を革命的で戦闘的な組織にするために貢献します。……

わたしは闘争と生活で大衆の模範となり、つねに先頭に立って彼らを導いていく朝鮮革命の真の前衛になることをかたく誓います」

二　青年前衛

児童団のリーダー

朝鮮人民の初の革命的武装力である反日人民遊撃隊を組織した金日成将軍は、敵の攻撃と弾圧から結成されたばかりの遊撃隊と革命大衆を守り、革命勢力を速やかに拡大、強化するため、1932年5月、解放地区形態の遊撃根拠地を早急に建設する課題を示した。それにもとづき、符岩上村にも遊撃区が設けられ、周辺の革命大衆が集団的あるいは個別的に遊撃区に移住し始めていた。

その年の秋、金正淑も弟とともに遊撃区に移ることになった。それは兄や乳飲み子の甥との別離をともなった。その甥は、正淑が日に何回も隣村まで足を運んでもらい乳をし、ときには門前払いを食うという悲哀を味わいながら育ててきた子であった。腹をすかして泣きつづける甥をあやしきれず、一緒に涙を流して夜をあかすこともたびたびあった。

正淑は是が非でも甥を連れて遊撃区に入るつもりだった。しかし兄の基俊（キジュン）は同意しなかった。正淑が涙をのんで家の外に出ると、甥がはげしく泣き出した。兄があやそうとしたが、甥はなお泣きしきった。甥の泣き声にいたたまらず部屋に戻ってきた正淑は、その夜、とうとう出発することができなかった。ところが翌

朝、「討伐隊」が再び村を襲撃してきた。正淑は急いで甥をおぶって山に登った。その足で遊撃区に入るつもりだった。ところが、息せき切って追いかけてきた兄は、お前にはまだ革命にすべてを尽くす覚悟ができていない、革命に身を投じた以上、革命を先に考えるべきだ、家族のことにこだわっては革命はできない、さあ、早く行きなさい、りっぱにたたかうのだ、と言って子どもを抱き取り、山を下りていった。谷間に響く甥の泣き声は遠ざかっていった。正淑から離れまいとして泣き叫ぶわが子を抱いて血の涙を流しながら遠ざかる兄、わが身の一部のように思っていた甥の泣き声を背にして遊撃区に向かう妹、これは革命のために命も家庭もすべて投げだす覚悟をもって闘争の道に立つ兄妹の永遠の別離であった。

当時、創設されて日の浅い遊撃区の状況は困難をきわめていた。符岩の下村と中村をはじめ周辺の集落から数多くの人が移住してきたので、食糧も住宅も不足していた。加えて、遊撃区を初期のうちに押しつぶそうとする敵の「討伐」は連日打ちつづいた。

遊撃区での正淑の日課は早暁から始まった。正淑が誰よりも先に起きて路や庭を掃くころ、向かい側の山頂から児童団ラッパ手の基松（キソン）が吹く起床ラッパが鳴り響く。児童団員たちが集まってくると、正淑は彼らを整列させて朝の体操をさせた。児童団員の学習と課外活動の指導を終えると、区共青委員会から受けた大衆政治工作の任務を遂行するため、東谷や蔵財村へ行った。ときには、少年先鋒隊員とともに敵中偵察に赴いたり、遊撃隊を助けて「討

伐隊」との戦闘にも参加した。一日中忙しく走りまわり、食事を欠くときもたびたびあったが、正淑は疲れを感じなかった。

当時、正淑が居を定めていた家の主人の回想によれば、正淑はいつも足早に動き回っていたという。あるとき家の主人は、夜遅くまで帰ってこない正淑を探し回ったことがあった。そのとき、正淑は夕食もとらず川辺で遊撃隊員の軍服を洗っていた。正淑の濡れた手をとった主人はびっくりした。ひび割れてあざになった手は見た目にも痛々しかった。けれども正淑は、人民の天下となった遊撃区で革命に参加しているという誇りを抱き、それを苦にはしていなかった。

正淑は、主人にこう言うのだった。

――遊撃区での人民の活気にみちた生活と児童団員が列をつくって歌をうたいながら学校に通う幸せな姿は、日本の支配区域では想像すらできないことです。……わたしたちは金日成将軍がもたらしてくださったこの自由、この幸せを守るために力いっぱい働かなければなりません。この自由、この幸福を守ることは最上の栄誉だと思います。

正淑は符岩遊撃区の上村に移ってから間もなく、八区共青委員会の委員に選出され、八区の児童団の活動を指導する任務を課された。遊撃区での児童団の活動は、団員を革命の頼もしい後続隊に育てる重要な革命活動であった。区児童団のリーダーとなった正淑はまず、児童団活動の実状を具体的に調べた。

その年の 11 月 5 日に上村の区共青委員会事務所で開かれた符

岩遊撃区児童団指導員会議では、日本軍の「封鎖」策動に対処して児童団指導員の役割をいっそう高める問題について正淑が報告をおこなった。報告では、遊撃区の実態と児童団活動における欠点が具体的に分析され、活動を改善するための当面の課題とその方法が示された。また、児童団学校の運営上の欠点とその原因、指導員の責任感と役割を高めて学校をりっぱに運営する問題が強調された。そして児童団員の演芸隊活動を活発におこなう問題、遊撃隊への支援活動、児童団員の組織生活の指導を強化する問題など、指導員の諸任務が具体的に示された。報告について、各指導員が発言した。

この会議以来、遊撃区の児童団活動には新たな転換がもたらされた。指導員の責任感と役割は高まり、遊撃区における児童団活動の規律と秩序が確立された。

当時、遊撃区には革命組織が面倒を見てやらねばならない子どもが少なくなかった。その大半は、日本軍の「討伐」で両親を失い、遊撃区に入った孤児や革命家の遺児であった。

正淑は児童団員に、毎日のように金日成将軍のことを語り、彼らの胸に将軍への忠誠心を植えつけた。また機会あるたびに、祖国の美しい自然と豊かな天然資源について、侵略者とたたかった朝鮮民族の栄えある闘争史と燦然たる民族文化について、そして日本帝国主義者の搾取と抑圧のもとで朝鮮人民がなめている不幸と苦痛について語り､彼らに祖国への愛と未来への夢を育ませた。

正淑は児童団員を革命闘争の実践のなかで鍛えることにも努め

た。正淑は、革命的な実践は人々を革命家にする学校であるとし、団員を幼いときから闘争と労働を通して鍛えてこそ、将来、いかなる難関と試練に直面しても動揺することなく突き進む真の革命家になれるのだと説いた。

正淑の指導する児童団員は、背のうにはったい粉の入った袋や塩、下着、毛布、針、シラカバの外皮で包んだ黄燐マッチ、ノート、鉛筆などを入れ、棍棒を 2 本吊して歩いた。彼らはただの少年、少女ではなく、根拠地を守り、革命を守る幼い戦闘員であった。団員は戦場に弾薬を運んだり、「討伐隊」に向けて石を転げ落としたり、激戦たけなわの高地で太鼓を打ち鳴らし革命歌をうたったりした。

日本帝国主義は「討伐」を強化する一方、「経済封鎖」によって根拠地の人民を餓死させようと企んだ。これに便乗して悪質地主は、「討伐隊」による根拠地への攻撃があるたびに、数十人の人夫に牛車まで駆り出して、まだ収穫がすんでいない根拠地区域の畑の穀物を手当たりしだいに刈り取って運び出した。これに対応して根拠地の人民は、こぞって秋の取り入れ戦闘に立ち上がった。

正淑は、明け方から共青員と少年先鋒隊員、児童団員を率いて中村と下村の間の畑に出て、人民とともに取り入れに参加した。

ある日の午前 10 時頃、敵の「自衛団[5]」が発砲しながら押し寄せてきた。遊撃隊が応戦する間に、正淑は人々を安全地帯に避難させた。そのとき、機会を狙っていた地主が、多数の牛車と人夫

を動員して、根拠地の畑の穀物を刈り取りはじめた。

　正淑は、共青員と少年先鋒隊員、児童団員を率いて山に登り、急傾斜を利用して敵に石を転げ落とした。敵の攻撃を予測して、山に前もってたくさんの石を積んでおいたのである。思いがけない石の雨と遊撃隊の猛射に肝をつぶした「自衛団」は逃走しはじめた。あわてふためいた地主は、根拠地の人民が刈り取った穀物の束まで牛車に積んであたふたと逃げ出した。正淑は隊伍を率いて近道して先回りし、道路のわきで待ち伏せた。退却する「自衛団」が曲り角に姿を消すと、しばらくして穀物の束をいっぱい積んだ牛車の行列が現れた。全隊伍は正淑の合図にしたがい、槍や棍棒をかざして一斉に道路に躍り出た。地主を見つけた正淑の眼光が一瞬光った。あの恨めしい地主・李春八（リ チュンパル）だったのだ。正淑は、「みなさん！　こいつは悪どい地主・李春八です。以前は符岩洞の農民を苛酷に搾取し、いまはまた遊撃区の人々を餓死させようと血眼になっている仇敵です。こいつを大衆審判にかけましょう」と叫んだ。少年先鋒隊員たちは半狂乱になった地主を縛り上げて遊撃区に押送し、人夫は訓戒して帰らせた。遊撃区で開かれた大衆集会では、正淑一家と符岩洞住民の宿敵李春八に、人民の名で峻厳な審判を下した。この日、敵の手から穀物を取り戻してきた大胆なうら若い共青活動家の話は、遊撃区だけでなく、周辺の村落まで広く知れ渡った。

　正淑は日ごろから児童団指導員に、団員を革命家に育てるには組織生活を強化する必要があると話し、それに深い関心を払った。

あるとき、正淑は東谷児童団学校を訪ねた。そのとき、児童団学校の指導で基本は何か、学校をりっぱに運営するためにまず解決すべき問題は何かと児童団指導員から尋ねられた正淑は、団員の学習と訓練、組織生活の強化が基本であるとし、いかに複雑な問題が提起されても、それをおろそかにしてはならないと教えた。

正淑は、遊撃区の子どもや人民を親身になって見守った。ときには児童団員の命を救うため、銃弾が飛び交う戦場や燃え立つ火の中にもためらうことなく飛び込むこともあった。

ある日、荒れ狂う吹雪にまぎれて「討伐隊」が不意に遊撃区を襲ってきた。戦闘は熾烈をきわめた。正淑は児童団員を率いて山に登り、太鼓を打ち鳴らし、革命歌をうたって遊撃隊員を励ました。ところが、その最中に団員の一人がこっそり隊伍から抜け出して敵陣の方に下りて行った。彼は日ごろ、日本軍の銃を奪って「討伐」の犠牲になった父母の仇を討つと言っていた少年だった。しばらくして彼が隊伍を抜け出したことを知った正淑は、ためらうことなく山を駆け下りて行った。谷底近くまで来たとき、その少年が息を切らしながら雪だまりを掻き分け山に登ってくるのが見えた。そのすぐ後ろには一人の敵兵が追っていた。敵兵の死体から銃をもぎ取ろうとして見つかったのである。少年はすでに力尽き、敵兵との距離はわずか 5、6mしかなかった。谷間に遊撃隊がいないと思い込んだ敵兵は、周辺に気を配ることなく少年の後を追ってきたのである。

正淑は急いで岩のかげに身をひそめた。少年が岩の前を通りす

ぎると、その跡を踏んですぐ敵兵が現れた。敵兵が岩の前を通り過ぎようとした瞬間、正淑は敵兵の後頭部めがけて力いっぱい棍棒を振り下ろした。不意打ちを食らった敵兵が頭をかかえて振り返ろうとしたとき、いま一度棍棒で痛打を浴びせた。敵兵は雪の上に倒れ、少年は救われた。正淑の手に引かれて山頂にたどりついた少年は、正淑の胸に顔を埋めてむせび泣いた。

正淑が自身の危険や困難をかえりみず、遊撃根拠地の子どもを救ったのはこれだけではない。その年の冬、敵の「討伐」企図を探知するため、中堡格砬子村へ行く途中、敵に発見されたときには、追い迫る敵兵を自分の方に誘引して同行の児童団員を助け、また「討伐隊」が火を放った丸太小屋のなかで泣いている子どもを救うため、燃え上がる炎の中に飛び込んだこともあった。それだけではない。寒さに震える老人に自分の一着しかない綿入れを与え、根拠地に伝染病が流行したときには、感染したわが身をかえりみず患者を真心こめて看護した。

このように、遊撃区の人民と児童団員への限りない愛と犠牲的な献身によって、正淑は彼らから愛され尊敬された。

1933 年 3 月 27 日、金日成将軍は汪清で開かれた共青活動家会議で、『共青活動を改善するための課題について』と題する演説をおこなった。将軍は演説で、反日人民遊撃隊組織後の共青活動における成果と欠点を分析し、共青の組織活動に見られる左右の偏向を正して組織をたえず拡大し、思想教育をさまざまな方法でおこなうよう強調した。そして、児童団の活動を責任をもって指

導することは、共青と抗日遊撃隊を強化するうえで重要な保障であると指摘した。

同年４月、王隅溝北洞では、将軍の示した課題を実行するために延吉県内の共青および児童団指導幹部の会議が開かれた。正淑は会議で、すべての青年活動家が将軍の教えどおり活動すればなし遂げられないことはなく、万事円滑に進展すると強調し、将軍の意図どおり児童団員を革命の後続隊として育てるための指導員の課題について次のように述べた。

——児童団を指導するものは、指導員、児童団学校の教師になる前に、まず児童団員の兄となり姉となってこそ、彼らに心から慕われる教育者になれるのです。……わたしたちの一つひとつの言動がすべて児童団員の手本となり、鑑となるようにすべきです。

正淑の発言は、将軍の意図を深く把握し、しかも豊かな活動経験にもとづくものであったため、一同に深い感銘を与えた。

会議から帰った正淑は、新たな抱負と情熱に燃えて共青活動と児童団活動の指導に専念した。まず、児童団員に将軍の思想を植えつけることに力を入れた。そして、彼らの生活を親身になって世話した。焚き木が切れると率先して山へ柴刈りに行き、ノートや鉛筆がなくなると敵地にまで下りて行って手に入れてきた。夜は夜で児童団員を寝かせると、遅くまで彼らの衣服を洗濯したり繕ったりした。

正淑は実の姉、実の母のように児童団員の世話をしながらも、彼らに見られる欠点に目をつぶることはなかった。児童団員の性

格検討会には欠かさず参加し、彼らの生活と任務遂行状況を具体的に総括して過ちを改めさせ、幼いときから革命家としての品格と資質をそなえていくよう導いた。

児童団員が正淑の指導によっていかにりっぱな成長を遂げたかは、次のような日本の報道内容からしてもうかがえる。

「……今度の討伐のときにも八道溝付近で日本軍に逮捕された12 歳の少女は、懐中に日本語で書かれた数十枚の反戦ビラを隠していたが、審問に答えながら、最期の瞬間に日本軍兵士に見せて宣伝するつもりだったと、こんな大胆な言辞を吐いた」

朝鮮人民に広く知られるだけでなく、当時のコミンテルンの雑誌『コミンテルン』と中国の『救国新報』をはじめ各国の出版物に紹介されて人々を感動させた児童団員の金今順(キムグムスン)も、延吉県児童団演芸隊で活動した少女だった。

正淑が心血を注いで教育した児童団員は、その後みなりっぱな遊撃隊員、有能な政治工作員となり、祖国解放の聖戦で輝かしい偉勲を立てた。そのなかには金今順に限らず、金日成将軍のために、革命のために、祖国と人民のために貴い生命を惜しみなくささげた闘士が多かった。

育ちゆく新しい世代を人民の自由と解放のための栄えある闘争に身を投ずる革命家に育てたことが、祖国と人民の前に築き上げた金正淑の不滅の業績の一つである。

演芸隊とともに

金正淑は児童団活動を指導する一方、演芸隊の活動にも深い関心を払い、精力的に指導した。蔵財村児童団学校で初の児童団演芸隊を組織し、自ら演目を組み、練習の指導にもあたった。そして公演の準備が整うと、蔵財村の住民の前で数回にわたって公演した。このニュースはまたたく間に各遊撃区に広まり、根拠地の人々の関心の的となった。

この経験にもとづき、正淑は1933年の迎春公演の準備を進めた。県共青では、遊撃区での初の迎春公演を大晦日の夜、王隅溝北洞でおこなうことにした。公演の場所には近隣の村からも人々が集まり、立錐の余地もなかった。幕が上がると、正淑が舞台に出てあいさつした。正淑は、試練に満ちた一年を送り、希望に満ちた新年を迎えることになったと述べ、朝鮮人民にとって昨年は試練を乗り越えて抗日大戦を開始した年であり、新年は金日成将軍のまわりに団結して日本帝国主義侵略者にせん滅的な打撃を与える年になるだろう、みなこぞって、将軍の革命路線をかかげてたたかおう、とアピールした。

この日の公演では、『団結紐』〔6〕と基松のハーモニカ独奏をはじめ、さまざまな歌と踊りが観衆の絶賛を博し、遊撃区の人々に大きな喜びと希望を与えた。

児童団演芸隊は敵地の八道溝鉱山で公演したこともあった。数

多くの労働者を前にしての公演では、合唱と独唱、舞踊が演じられ、最後に正淑のアジ演説があった。労働者たちは児童団の生気はつらつとした姿に、遊撃区に生まれた新しい世の中を見た。数十個のカンテラの明かりのなかに響く正淑のアジ演説と、赤いネッカチーフ姿の児童団員の革命的な歌と踊りは、悲しみや苦しみにうちひしがれることなく、闘争に立ち上がらなければならないという自覚を労働者たちに与えたが、ことに青年労働者たちの胸を湧き立たせた。彼らは「あの若い女の子でさえも日本軍とのたたかいに立ち上がっているのに、われわれがこのままじっとしていられるものか。遊撃隊を訪ねて行こう。爆薬を背負ってあの子について山に入ろう」と遊撃隊への入隊を志願した。後日、朝鮮人民革命軍の有能な政治・軍事幹部として活躍する趙正哲（チョジョンチョル）、文（ムン）朋尚（ブンサン）も、そのときに八道溝鉱山から遊撃区に入った青年労働者であった。

労働者のなかに児童団演芸隊の公演をうらやむように観ている一人の少年鉱夫がいた。自分の名前すら知らないこの少年を遊撃区に連れてきた正淑は、金錦山（キムグムサン）と名づけ、りっぱな児童団員に育てた。錦山は基松と大の仲良しになり、正淑を実の姉のように慕った。その後、錦山は朝鮮人民革命軍隊員、機関銃射手に成長し、司令部を守る戦闘で英雄的偉勲を立てた。

同年 6 月、正淑は遊撃区の各児童団学校から抜擢された 20 余名の団員で県児童団演芸隊を組織した。演芸隊は遊撃隊の各中隊や反日自衛隊、病院、そして各遊撃区の村落、さらには 4、5 戸

しか民家のない山里にまで出かけて公演した。演芸隊はいたるところで遊撃隊員と住民の熱烈な歓迎を受けた。それは、公演をりっぱにおこなったためでもあるが、それにもまして、いつどこに行っても遊撃隊員と住民を誠心誠意助け、つねに礼儀正しくふるまったからである。

巡回公演スケジュールにしたがって遊撃隊の兵器修理所へ行くことになったときのことである。正淑は数日前から集めておいたかなりの量の古鉄を持って行った。鉄片が欠乏して炸裂弾の製造に支障をきたしていた遊撃隊員は歓声を上げた。この日の演目はすべてが遊撃隊員の絶賛を博し、彼らを大いに励ました。公演が終わると、演芸隊員は正淑の指示にしたがって 2 組に別れた。1 組は兵器修理所の内部と周辺をきれいに掃除し、鍛冶場のハンマーやふいごを使って遊撃隊員の作業を助けた。正淑に連れられた他の 1 組は山に登り、女の子は山菜を 1 かごずつ摘み、男の子はハギを束ねたほうきを背負子いっぱいに担いで帰ってきた。遊撃隊員は、演芸隊が兵器修理所の数日分の仕事を全部してくれたと言って、その誠意にこたえるためにもより多くの炸裂弾をつくろうと決意した。

演芸隊は遊撃区の村落で公演するときにも、宿泊した家の内外をきれいに掃除したり、水汲みをしたりした。また人手の足りない家庭のために柴刈りや畑の草取りなどもした。

児童団演芸隊は中国人反日部隊も訪ねて公演し、将軍の反日連合戦線方針の貫徹に大いに寄与した。当時、中国人反日部隊との

連合戦線を結成することが焦眉の急となっていた。日本帝国主義の悪宣伝と民族離間策動に乗せられた彼らは、あたまから朝鮮人を敵視し、抗日遊撃隊の軍事・政治活動に大きな障害をつくりだしていた。

金日成将軍は、汪清共青活動家の会議で反日部隊との活動を積極的に展開するための共青員の任務を示した。そして 1933 年 6 月には身の危険もかえりみず、反日部隊司令の呉義成と会談して反日連合戦線結成に向けて新たな局面を開いた。

延吉県では三道湾付近に駐屯していた徐奎伍の「平日軍」との統一戦線を実現する工作を進めていた。しかし、徐奎伍が敵対的な態度を取ったため、所期の成果を達成することができず、かえって痛ましい犠牲を出すのみであった。こうしたとき、正淑は勇躍「平日軍」を訪ね、徐奎伍に会った。金日成将軍の連合戦線方針を実現するために来たことを告げた正淑は、日本人の民族離間策動を暴露し、共通の敵―日本帝国主義に反対してともに戦おうと切々と訴えた。最初は冷ややかな態度で敵対感をむきだしにしていた徐奎伍だったが、正淑の謙虚かつ堂々たる態度、偽りや出まかせでない真情の吐露、並々ならぬ革命的熱意に動かされた。彼は、金日成司令の若い女性工作員には脱帽すると言って正淑を貴賓としてもてなした。そして、児童団演芸隊の反日部隊訪問公演に賛同した。正淑が帰った後も、徐奎伍は「金司令の配下には人材が多い」と、賛辞を惜しまなかったという。

数日後、児童団演芸隊は徐奎伍の反日部隊で公演した。歌舞『団

結紐』とハーモニカ独奏、革命歌の独唱や重唱の後、中国の歌謡もうたった。こうした公演を初めて観た「平日軍」の兵士たちは歓声を上げ、拍手を送り、しまいには舞台に上がって踊りの輪に加わった。とくに、金基松のハーモニカ独奏と、金今順、金玉順（キムオクスン）の双舞は彼らに深い感銘を与えた。なかには家に残してきた妹や娘をしのんで目頭を熱くする人もいた。その日、徐奎伍は演芸隊員の希望どおり実弾射撃をさせ、帰るときには馬車まで提供してくれた。その後もつづいた演芸活動と正淑の説得力あるアジ演説は「平日軍」兵士の反日感情をさらに高め、のちの八道溝市街襲撃の連合作戦の実現に大いに寄与した。

1933 年 9 月 23 日の八道溝市街襲撃戦には、延吉遊撃隊の各中隊と徐奎伍の「平日軍」が参加した。正淑には共青員からなる宣伝隊と輸送隊を引率する任務が分担された。戦闘は夜 10 時に開始された。敵の兵営と警察署を襲撃する銃声と炸裂弾の爆音で八道溝市街はまたたく間に修羅場と化した。自分らの主力部隊が集結している八道溝市街が攻撃されることはないと思っていた敵は、抵抗するいとまもなかった。兵営と警察署を制圧した遊撃隊と反日部隊は、一斉に市内に突入した。ところが、砲台にいた「自衛団」が猛射して抵抗した。攻撃は阻止され、時間を引き延ばせば敵が混乱を収拾して反撃に移ってくる恐れがあった。そのとき、正淑が共青の宣伝隊とともに砲台の近くに接近し、呼号工作を始めた。

「『自衛団』の兄弟のみなさん！　あなたたちは誰のために銃を

とったのですか。誰のために戦っているのですか。銃口を日本軍に向けなさい!」「『自衛団員』のみなさん!　民族と同胞に背いて犬死にするのは止めなさい!」

この呼号工作に砲台の敵は一瞬たじろぎ、銃声が止んだ。これで戦闘の勝敗は決まった。砲台の敵は制圧され、遊撃隊と反日部隊は市内を占拠した。正淑とともに共青宣伝隊は市内に入り、ビラをまき、反日スローガンを高唱した。共青宣伝隊の活動ぶりについて当時の出版物は次のように報じている。

「八道溝襲撃は既報の通りだが、時刻は23日午後10時から翌日３時半までで、遊撃隊は……壮丁団と警察を相手に激戦し……少年隊(共青宣伝隊)は４種のビラを散布し、一方、激烈な演説をした」

遊撃区では八道溝市街襲撃戦闘の勝利を祝う交歓集会が開かれ、徐奎伍の「平日軍」も参加した。集会での演芸隊の公演は、正淑の指揮する合唱『決戦歌』で幕を上げた。その頃すでに、正淑は反日部隊の兵士たちと親交を深めていた。

その日、反日部隊の一兵士と席をともにして公演を観たある抗日革命闘士は次のように回想している。

「わたしの横で、合唱を指揮する金正淑同志を見ていた反日部隊の兵士が、あの子は遊撃隊の幹部なのかと尋ねた。区共青委員だと答えると、彼は親指を突き上げて『いまに見なさい、彼女はきっと英雄になる。万人の鑑になるに違いない』としきりに感心していた」

1934 年の春、延吉県児童団演芸隊は金日成将軍がいる汪清に行くことになった。正淑は、将軍の前で披露する演目とその内容を一つひとつ丹念に再検討して完成し、演芸隊員の技量を一段と高めるため、熱心に練習を指導した。そして、困難な状況のなかでも小道具を新しく作ることにした。

演芸隊が出発する日、正淑は彼らを遠くまで見送りながら、みんなは金日成将軍を慕ってお会いしたいと思うわたしたちの気持ちを抱いて汪清に行くのだ、汪清に着いたら演芸隊員全員の心をこめて、将軍に忠実な戦士としてたたかう共青員と児童団員、そしてすべての人の願いをこめて、将軍の健康を祈る熱い思いを伝えてほしい、と頼んだ。

汪清県馬村に到着した演芸隊は、将軍の前で公演した。将軍は演目が変わるたびに拍手を送り、踊りや歌が上手だと満足の意を表した。そして、公演を終えて帰るときには、今後とも勉強に励み、演芸隊の活動もりっぱにおこなうよう励まし、40 枚の赤いネッカチーフを贈った。それは、革命の代を継ぐべき児童団員への父なる愛と大きな期待がこめられた貴重な贈り物であった。

遊撃区の旗手

1933 年の冬になると、遊撃区にたいする「討伐」攻勢はいっそう強化された。遊撃根拠地の「討伐」で惨敗を重ねてきた日本

帝国主義はこの年の冬、朝鮮占領軍「間島派遣隊」と「満州国」軍[7]、警察隊、武装自衛団など数万の兵力を繰り出して遊撃根拠地にたいする「冬期討伐」作戦を強行した。これには迫撃砲や飛行機まで動員された。延吉県の遊撃区の「討伐」だけでも数千名の兵力が動員された。

遊撃区を防衛することは、抗日武装闘争の拡大発展と朝鮮革命全般の継続発展にとって重要な問題であった。

金正淑は、符岩東谷駐屯の反日人民遊撃隊とともに根拠地防御戦に参加した。正淑は少年先鋒隊員と児童団員を率いて大人と一緒に塹壕を掘ったり、飛び交う弾雨をくぐりぬけて戦場にお湯を運んだり、ときには高地に登って敵の頭上に石を転げ落としたりした。

革命組織は、遊撃区の人々をより安全な四方台に移動させることにした。

1933 年 12 月下旬、正淑は先発隊を引率して蔵財村を発った。ところが、後続の隊伍が西側の山を登っていたとき、100 余名の日本軍「討伐隊」が彼らを見つけて追撃してきた。雪に覆われた登り坂で敵の追撃を受けた人々は危険にさらされた。大部分が老人や子どもを背負った婦女であったので足は遅く、背後からは敵の機関銃が火を噴き、弾丸が足もとで弾けるなか、群衆と「討伐隊」との距離はますます狭まり、全員が皆殺しになる危険が迫ってきた。この時、蔵財村西北方の鹿腓峰から突如、遊撃隊の突撃ラッパの音が響いた。金基松のラッパであった。組織から敵情監

視の任務を受けて鹿肺峰を登る途中、さし迫った状況を目撃した彼は、敵の注意をそらして人々を助けようと突撃ラッパを吹いたのだった。

突然のラッパの音に「討伐隊」は恐怖と混乱に陥ったが、やがて銃口を一斉に鹿肺峰の方に向けた。たちまち銃弾は基松に浴びせられた。けれども基松は、場所を変えながらラッパを吹きつづけた。敵はラッパの音を追いながら猛射を浴びせてきた。

基松はついに銃弾を浴びて雪の上に倒れ、そのまま二度と起き上がることはできなかった。当年 12 歳のあまりにも短い一生であった。

しかし、そのとき根拠地の人々はこれを知る由もなかった。ラッパの音を聞きながら西の山を越えて中間集結地点に無事到着した人々は、遊撃隊が突撃ラッパのもとで「討伐隊」を撃退したものとばかり思っていた。先に到着した人々とともに集結地点に来ていた正淑は、後から着いた人々のためにたき火をたいたり、宿営の準備をしたりしながらも、弟がみんなを救い、吹雪の荒れ狂う山頂に倒れていようとは夢にも思わなかった。

基松の遺体は敵地から帰路についた婦女会の活動家によって発見された。彼女は正淑とともに遊撃区に来て同宿していた活動家であった。彼女は鹿肺峰にたどりついた時、クヌギの木の下にラッパを握った少年が倒れているのを発見した。赤いネッカチーフが風に揺れ、背のうには 2 本の棍棒が垂れていた。その少年が正淑の弟であることを確認した瞬間、彼女の胸は張り裂けんば

かりであった。

「なんということに……お姉さんが知ったら……ああ、基松……」

彼女はあまりの悲痛さにむせび泣いた。彼女は麓の風の静かな場所を選んで雪をかきわけ、枯れ葉を敷きつめて遺体を葬ってから宿営地に向かった。

それまで眠れずにいた正淑が彼女を出迎えた。だが、彼女は正淑と視線が合うと涙が出そうで目をそむけるのだった。そして横になってからも、こみあげる涙を抑えようと唇をかんだ。その夜、彼女はついに基松の死を口に出すことができず、悶々と夜を明かした。

基松の訃報は革命組織に伝えられ、遺体はすぐ宿営地に移された。

革命組織は基松の追悼会を準備し、正淑に弟の戦死を知らせた。

思いもよらぬ知らせに、正淑は天が崩れ落ちたかのように動転した。数々の痛恨事にあっても互いに頼り合い、励まし合ってともにたたかってきた弟だったのに……。

宿営地では、遊撃隊員と人民、児童団員の参加のもとに基松の追悼式が執り行われた。

基松の英雄的偉勲が語られ、復讐を誓う追悼の辞が述べられたのち、正淑が弟の遺体の前に立った。

「基松はわたしの弟である前に革命の同志でした。わたしたち姉弟は、日本帝国主義侵略者のために両親を失い、家族、親類と

も離ればなれになり、生死すら分からないのです。しかし、わたしたち姉弟は、祖国を解放して故郷へ帰り、離別した親類と再会する日を思い描いてあらゆる難関と悲しみを乗り越えてきました。わたしは基松があれほど行きたがっていた祖国の地を一度でも踏んでいたなら、こんなに悲しむことはないでしょう」

会葬者一同は涙を抑えることができなかった。

正淑は言葉をつづけた。

「基松は犠牲になったが、敵の『討伐』から救われた十名、百名の基松が革命のために、祖国の解放のために基松の分まで戦うでしょうし、解放された祖国に帰る日は必ず来るでしょう」

数日後、正淑は弟が命をなげうって救った人々を引率して四方台に向かった。

四方台というのは、登りつめれば四方が見渡せるという意味でつけられた山の名前である。「討伐」を防ぐにはきわめて有利な天然の要害で、山小屋一つない深山幽谷であった。そういうところに、県内の各遊撃区から一挙に数百名の人が集結したので、住むところはおろか食糧もなかった。なかには悲観する人もいた。

正淑は共青員と一緒に、そこここに寄り集まって途方にくれている人々を訪ねては、たき火をたいて宣伝活動をおこない、児童団員による演芸を披露したりした。気を落として溜息ばかりついている人々と席をともにした正淑は、こんこんと説いて聞かせた。

——革命というものは苦難をともなうものです。わたしたちはここに来るまでずいぶん苦しい思いをしてきました。日本侵略軍

の銃剣に倒れ、飢餓にさいなまれながらも奪われた祖国を取り戻そうという一念でまた立ち上がり、死線を越えて戦ってきたのに、ここで気を落としてよいものでしょうか。わたしたちが心を合わせ力を合わせれば、必ず生きる道は開かれるはずです。

熱のこもった正淑の言葉は、人々に新たな決意を抱かせ、苦難を乗り越える力を与えた。

正淑は、自身の悲しみや苦しみは胸にしまい、四方台に集まった人々の食糧調達に心を砕いた。みんなで雪のなかから枯れた山菜や草の根を掘り、松の実を拾い集めた。また共青員を率いて何回となく敵地へ行って食糧を求めてきた。

正淑は半遊撃区[8]の赤岩洞にも足をのばした。そこには 2 年前に結成された組織があったが、それを頼って敵地にひとしいところに行くというのは冒険だった。しかし、正淑は、四方台の人々の食糧難を解決したいという一念で赤岩洞へ行き、多くの食糧を手に入れてきた。四方台に集結した人々がこの冬を無事に過ごすことができたのは、正淑のこうした努力に負うところが大きかった。

1934 年に入り、日本軍の「冬期討伐作戦」を粉砕せよとの金日成将軍の指示が緊急伝達され、それにしたがって敵背奇襲作戦が展開されることになった。そのとき正淑は敵地に派遣される小部隊に加わり、道案内をかねて斥候、偵察の役割を果たすことになった。

小部隊が九道溝に進出した時、正淑はいちはやく敵の軍需物資の輸送状況に関する情報を探知して報告した。この情報によって

遊撃隊は伏兵戦を展開し、物資輸送に動員されていた「自衛団」員を生け捕りにし、牛車 10 余台分の軍需物資を奪取することができた。同時に敵の「討伐」拠点の一つである八道溝にたいする綿密な偵察によって警察分署の襲撃を成功させた。また、北禿橋峰一帯で数ヵ所の集落の「自衛団」の動静を探知して、遊撃隊が一挙に敵を襲撃して多量の武器と弾薬を獲得できるようにした。

その年の 3 月、金日成将軍により、反日人民遊撃隊は朝鮮人民革命軍に改編された。この措置によって、各県に組織されていた遊撃部隊は一つの統一的な軍事組織系統に包括され、より大規模な遊撃活動が展開できる革命武力に強化された。

正淑は遊撃区の人民にこの改編がもつ意義を広範に宣伝し、それを祝う行事の際には、さまざまの重要なスケジュールをりっぱにこなした。行事をひかえて、昼は児童団員の分列行進の練習を指導し、夕方には演芸隊の公演指導にあたり、夜はまた寝もやらず講演テキストの作成に熱中した。

こうして４月、延吉県三道湾遊撃区の能芝営で慶祝行事がおこなわれたとき、児童団員の分列行進と演芸公演、そして「祖国の解放をめざす輝かしい闘争」という演題の講演は軍民の拍手喝采を博した。この日々、休む暇もなくひたすら革命活動に専心する正淑の姿を目にした県の幹部と人々は、「革命のためにこの世に生まれた人」だと称賛してやまなかった。

実に金正淑は、革命のために身をなげうって根拠地の活動に一意専心した遊撃区の旗手であった。

かなえられた願い

金正淑は 1934 年の秋、三道湾能芝営の延吉県共青委員会に召還された。

失望と悲観を知らず、いつも生気に満ちあふれ、児童団員には姉のように、根拠地の人々には娘のようにやさしくしながらも、敵にたいしては秋霜を思わせるうら若い共青委員を八区地域では知らない人がいなかった。２年あまりの共青生活、とくに八区共青委員としての正淑の活動は、革命任務にたいする強い責任感と限りない献身さ、巧みなオルグ・アジテーターとしての能力と革命家的品性によって、人々の信頼と尊敬の念を集めた。これは、より広い範囲における青年活動もりっぱにこなせるということを示していた。

正淑は県共青委員会で、主に内務と敵地の共青組織との活動を担当することになった。

当時、東満州の各遊撃区では、排外主義者と分派・事大主義者による極左的な反「民生団」闘争の旋風が吹き荒れていた。彼らは金日成将軍が北満州遠征中のすきに乗じて、真の朝鮮の革命家に「民生団〔9〕」のレッテルを貼って迫害し、殺害する惨劇を演じていた。

三道湾能芝営では、李相黙（リサンムク）が極左的な反「民生団」闘争に熱を上げていた。彼は、夜通し立哨勤務を務めた人が家に帰りながら

おなかがすいたと言ったからと「民生団」、炊事隊員がご飯を焦がしたからと「民生団」、「民生団」容疑者を同情したからと「民生団」と、むやみに「民生団」の烙印を押していた。

人々は誰を信じればよいのか分からず、またいついかなる災いを被るか知れず不安と恐怖におののいていた。「民生団」容疑者として監房に閉じ込められた人の中には、正淑が八区のころからよく知っている県党責任者の具命福（クミョンボク）、勇敢で原則に徹した遊撃隊指揮官の金東求（キムドング）もいた。

正淑は、彼らが決して「民生団」であるはずはないと信じ、この反「民生団」闘争が不純分子の策略によるものだと当初から感じ取っていた。正淑はすでに前年の春、誤った反「民生団」闘争に真っ向から反対してたたかった経験をもっていた。そのとき符岩地区では、「民生団」を裁く大衆集会があった。「民生団」として処刑される破目になったのは、早くから女性共青員としてりっぱに活動していた崔希淑（チェヒスク）であった。容疑の根拠は、遊撃区での生活が苦しいと「不平」をもらしたというものであった。彼女が決して「民生団」でないことは誰もが知っていたが、巻きぞえになるのを恐れてみなおし黙っていた。

そのとき、正淑が決然と演壇に立って彼女を弁護した。

――崔希淑同志は革命に限りなく忠実な人だと思う。言葉一つを聞いて革命同志を「民生団」だと断言することはできない。もし、わたしたちが革命に忠実な人たちに「民生団」のレッテルを貼って亡き者にするならば、喜ぶのは敵しかないはずだ。

すると、大衆が一斉に呼応した。審判席に座っていた排外主義者はそれ以上どうすることもできず、崔希淑を無罪にせざるをえなかった。その後、彼女が朝鮮人民革命軍の隊員としてりっぱにたたかい、敵に逮捕されて両眼を奪われながらも「革命の勝利が見える!」と叫んで朝鮮の革命家の不屈の意志と革命的節操を守り抜いたことは、周知の事実である。

それが、1年過ぎた今になって事態はさらに深刻になってきた。いかなる理路整然たる弁護や有力な証拠も無用であった。「民生団」容疑者を少しでも擁護したり援助したりすれば、ただちに「民生団」として処刑される有様であった。

しかし正淑は、真の革命家に「民生団」の濡れ衣を着せて殺害し、革命隊伍に不信と恐怖の雰囲気を醸し出しているのを黙視するに忍びなかった。

正淑は、排外主義者が東満反日自衛隊員を「民生団」連累者と決めつけたことを知り、ためらうことなく彼らを訪ねた。そして、悲観と不安にかられている彼らに、絶対に屈服せず、朝鮮の革命家らしく革命的原則と立場を守るよう力と勇気を与えた。これは、排外主義者と分派・事大主義者の忌諱に触れざるをえなかった。ある者は、正淑が反日自衛隊を訪ねたことを偏狭な民族主義の表れだと決めつけ、二度と彼らのところへ行くなと脅しつけた。

けれども正淑は、共青活動家である自分がなぜ青年を遠ざけなければならないのか、同じ朝鮮人だからと、彼らに近づくのを「偏狭な民族主義者」だというなら、そう見る者こそ偏見にとらわれ

た偏狭者であり、ひたすら革命に志す一念に燃えて勇敢にたたかっている彼らが信頼できないというなら、誰が信頼できるのか、と鋭く切り返した。

排外主義者と分派・事大主義者はさらに神経をとがらせ、さ細な欠点でも見つけようと、正淑に監視の目を光らせた。しかし彼らも、一挙一動に非の打ちどころがなく、大衆の厚い愛と信望を受けている正淑だけには、むやみに「民生団」の嫌疑をかけることはできなかった。

正淑は、何はばかることなく、共青員に極左的な反「民生団」闘争の危険性を説き､彼らの策動に警戒心を強めるよう強調した。そういう共青員のなかには、県共青幹部の全（チョン）姫（ヒ）や県党通信処に勤めていた李（リ）貞仁（ジョンイン）もいた。

正淑は李貞仁とともに毎日のように監視の目を盗み、「民生団」容疑者として「監房」に閉じ込められている同志たちに食べ物や必要な薬品を差し入れた。そのかいあって、「監房」の同志たちは、飢え死にや病死の危険から救われた。彼らは、見つかれば間違いなく「民生団」として処刑される危険なことを誰がしているのか、最初は知らなかった。それが分かったのは、「討伐隊」が三道湾に押し入ってきた日のことであった。

その日、正淑は李貞仁とともに、遊撃隊員の昼食の支度をしていた。昼食は、キノコを入れて炊いた粟の粥であった。粥が煮えたとき突然、「討伐隊」の銃声が聞こえてきた。遊撃隊員は急いで山に登り、敵は谷と尾根づたいに押し寄せてきた。状況を確か

めた正淑は、すばやく草で巻輪を作り、熱い粥の釜を頭にのせて山へ登った。李貞仁も小さな釜を持ち上げて正淑の後につづいた。

　これを目にした敵は、銃を乱射しながら追跡してきた。敵弾が耳もとをかすめて足もとに突き刺さった。釜からはもうもうと湯気が立ちのぼった。たまりかねた李貞仁は、いったん釜を下ろして待避し、後で取りにこようと叫んだ。しかし正淑は、釜を頭にのせたまま振り返り、「貞仁さん、もう少し頑張りましょう。そうしたら同志たちを飢えさせなくてすむのよ」と言って、とうとう山頂まで登りつめた。

　数人の人が走り寄って釜を下ろした。彼らは「監房」に閉じ込められていた「民生団」容疑者たちであった。「監房」の鍵を持っていた李相黙が逃げ出したので、彼らは戸を押し破り、遊撃隊が戦っている高地に登ってきたのであった。彼らは、敵に石を転げ落としながら遊撃隊員とともに勇敢に戦った。とうとう敵は撃退された。正淑は鉢に移した粥を遊撃隊員に一杯ずつついでまわった。粥からはまだ熱い湯気が立っていた。ところが、「監房」を破って出てきた人たちは、こそこそとその場から遠ざかるのだった。

　「みんなここに来て熱い粥を召し上がってください。持ってきたお粥を受けずにどうして避けるのですか」

　正淑のこの言葉に彼らは足を止めたが、誰か見てはいまいかとあたりを見回してこう言うのだった。

　「一杯の粥のために、あなたたちまでも『民生団』にされたら、

それだけ革命を損なうことになるので止めてください。……わたしたちはあなたたちのその誠意を革命の糧にして、どんな苦痛にも耐えていきます」

正淑は、みなさんは絶対に「民生団」であるはずはない、いまに将軍がこの重大な事態を正してくれるはずだ、だから信念をまげずにあくまで革命をつづけることを考えるべきだ、と言ってお粥の器を一人ひとりの手に持たせた。

そのときになって初めて、彼らは毎日のように危険をおかして励ましの手を差し伸べてくれた人が、ほかならぬ正淑であることを知ったのである。

お粥の器を手にした彼らは驚いた。熱い釜のせいで、正淑の髪の毛は半分以上も焦げ縮れていたのである。

正淑のこうした犠牲的な努力さえも、「民生団」容疑者を完全に救うことはできなかった。共青満州省委の巡視員という肩書きの排外主義者が能芝営に現れた 1935 年 1 月、遊撃隊の指揮官である金東求をはじめ数名が無残に殺されてしまったのである。彼らは「朝鮮革命万歳!」を叫んで最期を遂げた。

正淑は、無念にも濡れ衣を着せられ、命を失った革命同志を救うことができなかった悔しさに身もだえした。呪わしい排外主義者と分派・事大主義者の極端な反革命的罪業を阻止できないものか。

正淑は、将軍が朝鮮革命を危機から救ってくれる日を指折り数えながら待った。

当時、遊撃隊病院の軍医であった林春秋（リムチュンチュ）は、回想記にこう記している。

「……金正淑同志はいっそう切々たる声で……この革命の難局を打開して極左的な反『民生団』闘争を正してくれる方は朝鮮革命の英明な指導者、金日成将軍しかいないのに、将軍は今どこにおられるのでしょう、こんなにひどい事態をご存知なのだろうか、……と言って涙ぐむのであった。

私も心の中で泣いた。

偉大な金日成同志！

寝ても覚めても心のなかで呼びつづけてきたその尊名は、実に、『民生団』の狂風に縮み上がって不安な日々を送っていたわれわれ革命家にとって唯一の救いの星であり、よりどころであり、希望であり、勝利の象徴であった」

北満州遠征から帰ってきた金日成将軍がついに、1935 年 2 月の大荒崴会議で反「民生団」闘争の反革命的本質を明らかにし、その悪影響を払拭するための闘争を進めているという知らせが三道湾能芝営に飛んできた。

数日後、正淑の切々たる宿望がかなえられる日がきた。それまで日ごと思い描いてきた金日成将軍が 3 月のある日、三道湾能芝営を訪れたのである。

将軍にまみえた瞬間、正淑は感激の涙にくれた。

正淑は将軍が能芝営で招集した県党書記処活動家の会議に参加した。

春の日差しのように温かい微笑、排外主義者と分派・事大主義者に向けられるときの鋭い眼光、天に響きわたるような声、将軍を仰ぐ正淑の胸は高鳴った。

会議で、三道湾遊撃区での反「民生団」闘争の極左的な誤りを具体的に質した将軍は、革命に甚大な損失を及ぼした排外主義者と分派・事大主義者の犯罪行為をあばき、以後の反「民生団」闘争において守るべき原則と方途を示した。将軍の教えは人々のうっ憤を晴らし、彼らに信念と力を与えた。

悲しいときも苦しいときも、将軍にまみえてその教えを請いたかった正淑は、その願いがかなえられて限りない幸福感にひたった。そして会議が終わると、その経緯を知りたがる人々に将軍の教えを伝えた。

将軍が訪れた日から、三道湾をはじめ県内の遊撃区の軍民は、再生の歓喜にわき立った。「民生団」の濡れ衣を着せられて閉じ込められていた人々は解放され、家族や親友と抱き合って喜んだ。

将軍が能芝営を発った日の夜、正淑は同志たちにこう言うのだった。

「ほんとうに偉大な方です。……

わたしはいつどこにあっても、ひたすら金日成将軍のみを信じてたたかう決心です。一日生きても千年生きても、永遠に将軍の革命戦士らしく生き、勇敢にたたかいます!」

車廠子で

金正淑は1935年3月、安図県車廠子へ行った。

日本軍の狂気じみた「囲攻作戦」に対処し、白頭山の原生林地帯へとつながる車廠子に新しい遊撃区が生まれたのは1934年であった。

正淑は、老人や病弱者、子どもを連れ、いちばん最後に三道湾を発った。80㎞余りの道を歩いて車廠子に着いた3月20日頃には、すでに人民革命政府機関や遊撃隊の兵舎、児童団学校、病院、兵器修理所、縫製所などが設けられていた。

正淑は連隊指揮部に居を定め、炊事隊の仕事をしながら遊撃区の共青組織の指導にあたることになった。

当時、車廠子遊撃区の状況は困難をきわめていた。急に各地から1,000人以上の群衆が集まってきたうえに、敵の絶えまない「討伐」攻勢と「封鎖」策動によって根拠地は厳しい食糧難に見舞われていた。そのうえ、隊伍のなかに潜り込んでいた謀略分子と革命の裏切り者が車廠子の人たちを飢餓に追い込もうとやっきになっていた。

部隊が遠征に出るとき遊撃区の人々のために少なからぬ資金を預けていったが、責任ある地位にいた排外主義者はそれを活用せず私欲を満たしていた。この排外主義者は、敵地の住民はもちろん、革命組織のメンバーまで「民生団」の連累者扱いにし、彼ら

との連係を一切断ち切った。そのため根拠地には、一粒の穀物も入らなくなった。内外の敵の策動により、車廠子は餓死寸前の飢饉地帯になりつつあった。

遊撃隊員が犠牲を払って手に入れてきた食糧は、必要に比べあまりにも少量であったため、家ごとにさじで分け与えるありさまであった。人々は、早春とはいえまだ解けない雪のなかから草の根を掘り、ドングリを拾い、木皮や枯れた山ブドウの芽などで飢えをしのいだ。塩もなく枯れた山ブドウの芽を煮て食べると、のどから血が出たりした。しかし、それさえも不足した。食糧問題を解決するか否かは、遊撃区の存亡にかかわる危急の問題であった。

正淑は、根拠地にさし迫ったこの厳しい試練を乗り越えるための仕事に身を挺した。翌日から、共青組織の責任者と児童団の指導員を立ち上がらせて組織を立て直し、散り散りになっていた共青員と児童団員を組織に結束してこの試練を克服するため大衆の先頭に立たせた。

正淑は児童団の宿舎を設け、四方に散っていた児童団員に勉強させ、組織生活もできるようにしようと力を尽くした。

正淑は児童局長にこう言った。

――いま車廠子遊撃区がとても苦しい状態にあるのは確かです。だからといって、児童団活動に関する問題を誰かに解決してもらおうと待っているわけにはいかないではありませんか。……わたしたちは自力ですべての問題を解決していきながら、児童団員を

革命の後続隊にたくましく育てるようにとの金日成将軍のお言葉を実行すべきです。

また県政府の幹部たちには、児童団の宿舎を設ける問題を提起しながら、犠牲になった同志たちの子どもは毎晩わらくずのなかにうずくまって寒さに震えながら親をしのんで泣いているではないか、わたしたちがあの子どもたちの親代わりになって面倒をみてやるべきではないか、と訴えた。

正淑の努力により、飢饉の地、車廠子には児童団員の本を読む声と歌声が響くようになり、それは車廠子の人々に革命の勝利と明日への明るい希望と信念を抱かせた。

車廠子遊撃区に春が来た。山々の雪も谷間の氷も解けはじめ、若草が芽生えてきた。しかし、車廠子の人々は飢饉から逃れることはできなかった。春の種まきをしなければならないのに、人々は気力尽きて立ち上がれないほどだった。倒れた人を立ち上がらせようと走り回っていた共青員も、それ以上動く気力がなくなって座り込んでしまった。

正淑は彼らに訴えた。

「青年前衛のわたしたち共青員が立ち上がれなかったら、飢えて倒れた車廠子の人たちの運命はどうなるというのですか。立ち上がらなければなりません。わたしたちが立ち上がれば車廠子の革命大衆を奮い起こし、革命をおし進めることができるのです。共青員がへたばりこんでしまえば、根拠地の人たちはみんな飢え死にしてしまいます」

正淑の呼びかけにこたえて共青員たちは播種隊を組織し、種まきにとりかかった。一方、正淑は家ごとに訪ね回り、草を食べながらでも種まきをしなければならない、そうしてこそ遊撃根拠地を守り、敵を倒すことができる、みんな立ち上がって頑張ろう、と呼びかけた。

根拠地の人々は歯を食いしばり、共青播種隊と一緒に畑に出て種をまいた。ところが一夜が過ぎると、まきつけをした畑が全部掘り返されていた。遊撃区に潜入していた謀略分子の仕業であった。空き腹をかかえ這うようにして種をまいた人たちは、あっけに取られて座り込んでしまった。

この光景を見た正淑は言った。

「今日の種まきは文字どおり敵との厳しいたたかいです。車廠子でのこの種まきは単に生きのびるためのものではなく、日本帝国主義侵略者を打ち破り、祖国の解放をなし遂げるか、さもなければ日本帝国主義に踏みにじられて永遠に植民地奴隷になるかという深刻なたたかいなのです」

そして彼らに、将軍とともに解放された祖国に帰る日を思い浮かべよう、その時にはわたしたちが車廠子で苦労したことが昔話になるだろう、と言って、根拠地の人々を種まき作業に立ち上がらせた。

人々は立って歩く気力すらなくて、うねまを這うようにして種をまいた。なかにはうねまに倒れてそのまま息を引きとる人もいた。

やがて作物が芽生え、畑には麦、ジャガイモ、粟が青々と育った。しかし、それが実るまでにはまだ多くの時間を要した。飢饉は極点に達し、人々は蛙はもちろんその卵まで食べつくした。飢え死にする人が増えてきた。

しかし、遊撃区の幹部職についていた排外主義者は、食糧問題の解決をはかろうとはせず、敵地との障壁をいっそう高くし、ありもしない「民生団」の探索に狂奔していた。彼らは、遊撃区の糧食課長を務めていた李成学(リソンハク)が敵地へ行って食糧を求めてくると言ったからと、「民生団」扱いにして迫害した。

正淑は、意気消沈して仕事に手をつけようとしない彼を訪ねて、絶対に排外主義者の脅しに屈してはならず、金日成将軍のみを信じて革命のために働かなければならないと力づけた。その言葉に励まされた糧食課長は、最後の一握りの穀物まで遊撃区の人たちに分けてやり、自分は草の根で飢えをしのいで働きつづけ、とうとう餓死してしまった。

もう彼に「民生団」のレッテルを貼りつけることができなくなった排外主義者は、今度は餓死した彼を「民生団」が殺したと触れ回り、「民生団」を捜し出さねばならないと騒ぎ立てた。しまいには、自分たちの罪業があばきだされる危険にさらされると、それを知っている車廠子人民革命政府のメンバー 2 人を「民生団」と決めつけて殺害する蛮行まで働いた。

遊撃区にたいする日本軍の封鎖と「討伐」攻勢は日に日に強化されていた。実に、車廠子遊撃区は内外の敵の策動により、想像

を絶する飢饉地帯と化した。ネズミや蛇の１匹もいなくなり、草さえ残らなくなった。

車廠子での苦難を体験した抗日革命闘士の白鶴林（ペクハクリム）は、後日、次のように語っている。

「抗日戦争期に車廠子の人たちが体験した惨状を知らずに、いかなる生活難についてもあえて口にしてはならない。車廠子の軍民が封鎖のなかでどのように飢餓と寒さ、敵の『討伐』にうちかったかを知らずには、いかなる困難克服についてもあえて自慢してはならない!」

当時、車廠子の人たちにほかに道がなかったわけではない。峠を一つか二つ越えれば、食べ物も着る物もある敵地があった。敵は、遊撃区を捨てて来れば楽な生活を保障すると宣伝していた。

しかし、車廠子の人たちは飢えで倒れながらも、排外主義者に謀られ迫害されながらも、試練の地、飢饉の地を離れなかった。倒れても遊撃区に倒れ、死んでも遊撃区で果てた。

3 年そこそこの短い年月ではあったが、車廠子の人たちは、金日成将軍によってもたらされた人民の新しい世界、日本帝国主義者と地主、資本家のいない自由の世界があまりにも貴かったため、遊撃区の空に翻る赤旗があまりにも貴く、その赤旗をひるがえして金日成将軍とともに解放された祖国に帰る勝利の日が必ず来るという信念があったため、倒れても、息絶えながらも遊撃区の土を抱きしめていたのである。

正淑は、畑の麦が青々と育つと、その葉を手にして家ごとに訪

ね回り、ご覧なさい、もう麦がこんなに育ったのですよと言って力を与え、麦の穂が出ると、それを見せながら、もう少し辛抱すれば脱穀できるから頑張ろう、と励ました。そのたびに、倒れていた根拠地の人たちは力を奮い起こして立ち上がったのである。

共青員も児童団員も、いつも確信に満ちている正淑を見て力づけられた。

ある日の晩、人民革命軍の兵舎の前で児童団演芸隊の公演があった。そのとき、『総動員歌』をうたいながら踊っていた一番幼い少女が倒れた。飢餓は、少女の最後の気力まで奪ってしまったのである。歌声は止み、団員たちはあわてた。観覧していた遊撃隊員と人々は総立ちになった。

正淑が走り寄って少女を抱き起こした。すると、少女は、涙やうめき声は出さず、どす黒くなった唇をふるわせながらまたうたいはじめた。

進め進め　いざ戦いに

勇気をふるい　前へ進め

……

遊撃隊員と人々は、涙を流しながら少女と一緒にうたった。歌声は夜空に響きわたり、車廠子の人々の胸に悲壮な決死の覚悟を植えつけた。

正淑は飢餓と疲労でほとんど目が見えなくなったとき、どうか床について休むようにと勧める同志たちに、「それでは、誰がご飯を炊き、誰がたき木を拾い、誰が歩哨に立ち、誰が戦うという

のですか」と言った。

　ある日、連隊本部では食糧難の打開策を討議するための党、共青及び朝鮮人民革命軍指揮官、人民革命政府の幹部会議が開かれた。多くの人は敵地の地下革命組織と連携して食糧を求めるべきだと提起したが、排外主義者たちはまたも、敵地の地下組織のメンバーはほとんどが「民生団」の連累者であるから、絶対に彼らと手を結んではならないと、あたまからはねつけた。

　もう彼らの詭弁に我慢しきれなくなった正淑は席から立ち上がり、現状のもとでは敵地に行かずに食糧を解決する方法はない、敵地の地下組織と連携して食糧工作をしようというのに、敵地の地下組織のメンバーはほとんどが「民生団」の連累者だから彼らとは手を結べないと言うのは革命同志を信頼しない誤った態度であり、事実上、革命を放棄するのも同然だ、……わたしたちは敵地でたたかっている地下組織のメンバーを信頼して彼らと手を結び、食糧問題を解決すべきだ、と反論した。

　正淑の理路整然とした主張に多くの人が共感を示すと、排外主義者はそれ以上、反論することができなくなった。こうして遊撃区から小部隊が敵地に派遣され、地下組織との連携のもとに少なからぬ食糧を手に入れることができた。

　そうなるほど、隊伍内の革命の裏切り者の策動はいっそう悪辣さを増した。

　金日成将軍が寄こした派遣員たち（そのなかには趙東旭（チョドンウク）もいた）によって車廠子根拠地の事態が収拾されはじめ、趙東旭によって

彼らの悪業があばきだされるようになると、排外主義者は彼を暗殺する悪だくみを企てた。

以前から警戒心を高めて彼らの動静を注視していた正淑は、すばやく趙東旭を脱出させて危難を免れさせた。

祖国が解放された後、金日成主席は、あのとき正淑がいなかったら趙東旭は生きては帰れなかっただろう、自分を犠牲にする覚悟ができていない人には革命同志を危機から救い出すことができない、と感慨深く述懐している。

正淑は大胆に敵地工作に身を投じた。

ある日、正淑は、国内の革命組織と人民が朝鮮人民革命軍の国内進出と遊撃区との連係確保を待ち焦がれていることを耳にした。

敵地工作をそれ以上先へ延ばすことはできないと思った正淑は、それを革命組織に強く提起した。

組織では、正淑と私服姿で武器を携帯した4人の隊員で編成した政治工作班を国内に派遣した。

正淑は行く先々で、朝鮮人民革命軍の戦果を伝えて人民に勝利の確信を抱かせ、組織との連係が絶えて苦慮していた人々に連絡ルートをつけてやった。そして、大量の遊撃隊支援物資も確保した。

正淑が参加した政治工作班の活動について、当時のある出版物は次のように報じている。

「去る4日未明、咸北富寧郡下に〇〇団員が侵入せしことは既報の如きことなれば、犯人の行方は未だ不明にして、所管富寧で

は石幕駅前に捜査本部を設けて活動しているところ……今回の事件は現地で詳細に調査したところ、その日未明に現れた彼らの行動は大胆不敵であり……人命に何らの加害なく金の指輪、衣類、布地、その他物品約百余円相当分を持ち去りながら少しも慌てることなく、また来る日(7、8 日)を指示し立ち去った」

この資料は、敵の耳目を石幕付近に集中させて政治工作班の安全かつ幅広い活動を保障するために正淑が展開した陽動作戦の一端を示すものである。

正淑は仲坪（チュンピョン）村の人たちが真心を込めて準備した支援物資を持って撤収する際に、7、8 日頃にまた来ると駐在所に知らせるようにしたのであった。こうして政治工作班は、敵が仲坪村で捜査陣を張って 7、8 日頃まで待機している間に、他の地域で政治工作を進めて無事もどることができた。

その年の夏、車廠子遊撃区には、将軍の指示により汪清で活動していた中隊が帰ってきた。そのなかには呉仲洽（オ ジュンフプ）もいた。

正淑は呉仲洽から、将軍が苦難にみちた第 1 次北満州遠征の道すがら作った『反日戦歌』を聞かせてもらった。

その歌は、困難をきわめた北満州遠征の帰路、将軍が敵の追撃と包囲のなかで傷寒のため朦朧とする意識を取り戻し、最期を覚悟した隊員たちを奮い立たせるためにうたったものであった。

正淑はこの歌を共青員たちに熱心に教えた。数日後には車廠子のすべての人がこの歌をうたえるようになった。百度倒れれば百度立ち上がってでも日本帝国主義との決戦に奮い立とうというこ

の戦いの歌をうたいながら、車廠子の人たちは最後の試練を乗り越えた。車廠子の畑に穀物が実った。試練を乗り越えた車廠子の人たちの顔に喜びの色が浮かんだ。

車廠子での日々、正淑と一緒にいた金明花(キムミョンファ)の回想談は、今日も朝鮮人民の胸を熱くしている。

ある日の朝、お粥で飢えをしのいだ遊撃隊員たちを「討伐隊」との戦いに送り出した正淑は、夕食もまたお粥にしなければならないことに胸を痛めた。背のうをはたいてみると、少量の小麦粉が残っていた。それで別の夕食をこしらえようと思った正淑は、金明花と一緒に山に登って松の甘皮をむきとり、それをつぶし、小麦粉と混ぜて餅をつくった。餅が出来上がった時はもう夕暮れだった。この餅は、松の甘皮を煮こんだ薄い粥で食いつないでいた車廠子ではまれに見るごちそうだった。帰隊して思いもよらぬごちそうにありついた遊撃隊員たちの喜びようはひとかたならぬものだった。

正淑は金明花と一緒に炊事場の戸口に立ち、おいしそうに食事をとる遊撃隊員たちを見つめた。日がな一日、座るひまもなく、餅をつくるために立ち働いた疲労も忘れたかのようであった。

食事が終わりかけた時、正淑は炊事場に駆けこみ、自分の分として残しておいた餅を持ってきて隊員たちに配ろうとした。指揮官たちは受け取ろうとしなかったが、正淑は、これは余分に残しておいたものだと言って一つも残さず隊員たちに配った。金明花の分も同じように隊員たちに配られた。こうしてその晩、2 人は

手製の餅を味わうことなく寝床についた。

青い月の光が差し込む窓を眺めながら、2 人はなかなか寝つかれなかった。

「正淑さん、おなかすいたでしょう?」

正淑が静かに答えた。

「みんなが喜ぶのを見て、おなかがすいたことを忘れてしまいました。食べなくてはおなかが一杯にならないというものではないようです。みんながあんなに喜んでくれるなら、わたしはいくらでも我慢できます」

解放後のある日、金明花はその晩のことが思い出され、平壌(ピョンヤン)のカルゲ市場で松の甘皮でつくった餅をどっさり買って正淑を訪ねた。正淑はたいへん喜んで早速豆腐汁をこしらえた。けれどもその日、正淑は餅を一つも口にすることができなかった。苦難と試練に満ちた車廠子根拠地での生活と、草の根さえなくて倒れた車廠子の人たち、そして革命の勝利を見られず早世した戦友たちを思って胸がつまってしまったのである。

三　白頭の女将軍

朝鮮人民革命軍へ入隊

1935 年 9 月 18 日、金正淑は車廠子遊撃区で朝鮮人民革命軍に入隊した。このときより、朝鮮人民のあいだで数多くの伝説となって伝えられる「抗日の女性英雄」「白頭山の女将軍」としての金正淑の新しい生涯の一ページが開かれることになる。

車廠子の空にひるがえる赤旗の前で、正淑は戦いの道で倒れた同志たちの血潮と念願、全民族の願いがこもった銃を授与された。この日、正淑は大きな栄光と誇りを胸にこう誓った。

「わたしは、革命先輩の血潮がしみた、人民の祖国解放の願いがこもったこの銃を握りしめ、金日成将軍に最後まで忠誠を尽くします。この一挺の銃を百挺の銃として握りしめ、この一発の弾丸を百発の弾丸として敵を撃ちます」

正淑は入隊したその日から、この誓いを忠実に実行した。入隊すると同時に党組織から部隊内の共青活動を任された正淑は、任務をりっぱに果たす一方、遊撃戦術訓練や政治学習に励んだ。そして片時も銃を手放すことなく射撃訓練に専心した。正淑の射撃術のすばらしさは、入隊後初めて参加した遊撃区防衛戦のときから広く知られるようになった。

同年 10 月、敵地の地下組織から、車廠子遊撃区「討伐」のため１万の敵軍が出動するという通報があった。そのころ車廠子遊撃区を守備していたのは 100 名余の遊撃隊員と反日自衛隊、青年義勇軍だけであった。

100 対１、兵力の差はあまりにも大きかった。一部の指揮官は危惧と不安にかられ、それはまた陣地についている隊員たちにも伝染した。

このとき正淑は、われわれの防御陣地には水深の深い古洞河と切り立った絶壁がひかえているので、いくら多くの敵が攻めてきても防ぐことができると、戦友たちに勝利の確信を与えた。

戦闘は早朝から始まった。敵は重機や軽機、大砲、それに航空機まで動員して攻撃してきた。3 面から攻撃をかけてきた敵は古洞河の岸辺からはそれ以上前進できず、人民革命軍部隊の位置を探り当てるため、しばし盲滅法に砲撃と爆撃を加えた。彼らが攻撃をつづけるには、合流点に架けられた狭い木の橋を渡るよりほかなかった。

車廠子の「関門」といえるこの防御陣には部隊きっての名射手たちが配置されていた。人民革命軍の陣地から応戦する気配がないので、正午近くになって敵は橋を渡りはじめた。敵が橋の中間に至ったとき、遊撃隊員たちは一斉射撃を浴びせた。橋の上には、またたく間に敵兵の死体の山が築かれた。

正淑は、日本刀をかざして兵士たちを叱咤している将校を一発で撃ち倒した。これを見た敵兵たちはあわてて退却し、対岸の森

林の中で盲撃ちをつづけた。このとき中隊長が駆けつけ、敵が青年義勇軍の陣地を突破しようとしている、応援を送らなければならないと言った。正淑は即座に、自分が行くと申し出た。そこは正淑が何度か行った覚えのあるところであった。

　正淑が１名の古参兵を伴ってその陣地に駆けつけると、敵は川を渡っている最中であり、すでに渡河した一群はこちら側の高地に這い登ろうとしていた。戦闘経験のない青年義勇軍の隊員たちは狼狽してなす術を知らなかった。

　即座に状況を察した正淑は隊員たちのところへ駆け寄り、「石を転がしましょう！　石の雨を浴びせるんです！」と叫んだ。その周辺には防御工事のときに積んでおいた石の山があった。ようやく気を取り戻した隊員たちは一斉に石を転がしはじめた。これは敵にとってまったく予想外のことであった。高地を這い登っていた敵は石をくらって倒れる者、逃げまどう者など、瞬時にして大混乱に陥った。

　正淑はこの瞬間を逃さず、隊員たちに、あわてずに敵を１人ずつ狙い撃ちするようにと言い、自らも一発また一発と命中弾を浴びせて敵兵を撃ち倒した。

　翌日になって戦闘は苛烈さを増した。そのうちに弾丸が切れてきた。正淑は女子隊員たちとともに弾薬の運搬にとりかかった。正淑は１箱でも重い弾薬箱を２箱ずつ運んだ。そうして何回か運び、また弾薬箱を肩に高地をめざして登っていたとき、隊員たちの前方で爆弾が炸裂した。砲煙が消えたあと頭を上げると、先に

いた正淑の姿が見えなかった。不吉な予感がした隊員たちは正淑の名を呼びながら捜しはじめた。ところが意外にも、山頂から「みんな、そこでなにをしているんです？」という正淑の声が聞こえてきた。正淑は爆弾が降り注ぐ中でも沈着に行動し、高地へ駆け登っていたのである。正淑の果敢な行動に励まされた隊員たちは勇気百倍、弾薬箱の運搬をつづけた。

こうして車廠子遊撃区の防衛戦は勝利に終わった。

正淑が車廠子を発ったのは同年 11 月の初めであった。車廠子遊撃区にいた部隊が安図県内島山と迷魂陣へ移動することになったのである。

内島山への行軍路についた正淑は、車廠子の山並みを何回も振り返った。祖国が解放された後も、正淑は女性抗日革命闘士たちと席をともにするたびに、車廠子遊撃区にいた頃のことをよく回想したものである。

降りしきる雪をついて行軍をつづけた部隊は 10 日余りで安図県二道溝付近に至った。そこには日本の手先が経営している大きな朝鮮人参畑があった。部隊が現れると畑の主は逃げ去ってしまった。部隊はそこで多くの給養物資を得た。正淑のアジ演説で、労働者はわれ先にとろ獲物資の運搬を申し出た。

それから数日後、行軍をつづけていた部隊は「討伐隊」に遭遇した。部隊は機先を制して敵の気勢をくじいたが、やがて隊伍を収拾した敵は必死になって応戦してきた。指揮部では敵を牽制しながら、兵員の一部を有利な地点へと迂回させた。

正淑は隊員たちとともに倒木を乗り越え走りつづけながらも、追撃してくる敵兵に命中弾を浴びせた。正淑の沈着な行動とすぐれた射撃術は、浮き足立っていた隊員たちに力と勇気を与えた。ところがそのとき、新入隊員の一人が負い革を木の節にひっかけて銃を振り落としてしまったことに気がつかず駆けてきた。そばにいた隊員たちが大声でそれを知らせたが、彼は無我夢中で走りつづけた。

それを見た正淑は即座に敵弾が降り注ぐ中を引き返した。隊員たちが危ないと制止したが、正淑は走りつづけた。

正淑がその銃を持ち帰ってきたとき、ようやく自分の肩に銃がないことに気づいた新入隊員は「銃がない!」と叫んで正淑のところに駆け寄った。そして重ねて礼を述べ、正淑の犠牲的行動に感動して涙ぐんだ。ところが、彼はこのことを指揮官に知らせないでほしいと正淑に頼むのであった。

すると正淑は、過ちは隠してはならない、ありのままに話して批判を受けるべきであり、その批判を受け入れてこそ二度と同じ過ちを犯さなくなるのだとたしなめた。やがてその隊員は進んで同志たちの前で自らの過ちを悔いて自己批判し、りっぱな遊撃隊員になることを誓った。その日から、彼は就寝時には必ず銃を胸に抱きしめて寝るようになった。正淑の忠告は犠牲的同志愛にもとづく原則的なものであったため、過ちを犯した新入隊員だけでなく、全隊員の胸を打った。

部隊は 11 月の末に安図県内島山に到着した。内島山は西南方

に白頭山（ペクトウ）を望む森林地帯に位置する山であった。山の麓には 70 戸ほどの村落があった。この村で部隊は積極的な政治工作をおこなった。

正淑は婦女子を教育して婦女会を結成するために力を尽くした。その結果、婦女会の中核が育成され、翌年の 2 月 3 日に内島山村に婦女会が誕生した。

正淑は婦女会結成の会合で演説し、すべての女性を婦女会に結集するよう強調した。そして、女性が革命組織に加わって活動する必要性を説いた後、婦女会の当面の課題は多くの女性を組織のまわりに結集し、会員の組織生活を強化し、革命軍への支援活動を活発におこなうとともに、革命的警戒心を高め、家庭を革命化することだと述べた。

村では解散状態になっていた各種の大衆組織が立て直され、有名無実の存在となっていた大衆組織も活発に動きはじめた。

当時の日本のある出版物は、内島山における朝鮮人民革命軍部隊の活動について次のように記している。

「……共産軍ハ内島山ヘ移動シタ後､昭和 10 年(1935 年)11 月、部落民ヲ集メテ、其迄ノ満州国〔10〕制度ノ区長ヲ廃止シ、農民委員会ヲ組織サセタ。部落民ハ協議会ニテ会長、副会長、経理部責任者等ヲ選出シタ。

其後、農民委員会ハ……食糧供給、運搬作業、燃料採取等、革命軍ニ対スル援護活動ヲ行ツタ。

其外、昭和 11 年 2 月初旬ニ婦女会ヲ組織シタ」

部隊は大衆政治工作とともに、積極的な軍事活動を展開した。その一つが、柳樹村に陣取っていた悪質な「満州国」軍の呉大隊長部隊にたいする復讐戦であった。

呉大隊長部隊は村の種鶏までつぶして食べたり、婚礼を挙げる家に押し入っては真っさらの布団を奪い取り、新婦を引きずり出して乱暴を働き、激憤して駆けつけた新郎を虐殺するという蛮行を働いた。そのため、彼らにたいする村人の恨みは頂点に達していた。

1936 年 1 月 13 日、部隊は柳樹村から４㎞の地点で共同作戦のために駆けつけてきた第１連隊の一部の中隊と合流した。

柳樹村の南端にある敵の兵営は高い土城に囲まれ、土城の２隅にはやぐらづくりの砲台があった。

正淑は、城門から突入して兵営を襲撃する任務を受け持った第３襲撃班に属することになった。第３襲撃班が城門近くに至ったとき、他の襲撃班が敵に発見され、砲台から射撃が開始されたため事態は急迫した。しかし城門を打ち破って突入することはできず、身丈の２倍もある城壁を飛び越えることもできなかった。

このとき城壁にぴたりとついていた正淑は、足元に城壁から崩れ落ちた土くれがあるのを発見した。土で築いた壁だから押せば崩れるのではないかと思った。指揮官は正淑の意見を容れ、一斉に城壁を押し崩すよう指示した。城壁の一角が崩れた。襲撃班は城内に突入し、安泰範（アンテボム）は崩れた城壁の上に機関銃を据え、城外へ

飛び出そうとする敵に連射を浴びせた。こうして柳樹村の敵は全滅した。

内島山へ進出した朝鮮人民革命軍部隊の積極的な軍事・政治活動に極度の不安と恐怖を覚えた日本軍は、内島山村にたいする「討伐」を開始した。彼らはもっとも悪質な「新選隊」や日本軍迫撃砲中隊など、日本と「満州国」の軍警800余名を動員して内島山へ攻撃をかけてきた。「新選隊」は「東辺道土匪司令」と称される李道善（リドソン）が率いる悪質な部隊であり、後に金廠戦闘で崔賢（チェヒョン）〔11〕部隊により全滅させられることになる。

そのとき内島山には裁縫隊、兵器修理所、病院などの後方勤務者と児童団員、それに 40 余名の遊撃隊員しかいなかった。しかし、彼らは村人らとともに戦いに立ち上がった。

正淑は高地で戦いながらも、合間合間に村へ駆け下りては女性たちを動員して弾薬箱を高地へ運搬したり、炊き出しをしたりした。

防御戦闘が苛烈をきわめていたある日の夜、某女子隊員とともに湯の入った水筒を携えて高地へ向かっていた正淑は、つい足を滑らせて崖から落ちてしまった。同行した女子隊員が意識を失って雪に埋もれている正淑を抱き起こした。正淑はしばらくして意識を取り戻したが、そのときにも戦友に届ける水筒だけは胸にしっかりと抱きしめていた。こうした正淑の革命的同志愛と闘争精神に励まされた遊撃隊員は、酷寒と極度の疲労に耐えて戦いつづけた。

敵は人民革命軍の夜間奇襲を受けて多くの兵員を失い、夜には

たき火も焚けず寒さに震えながらも、人民革命軍の兵力が少数であることを知って攻撃をつづけた。

　正淑は敵の攻撃がもっとも激しい高地の突出部に位置を定め、敵に続けざまに命中弾を浴びせた。そこから 400ｍほどの山すそでは、日本軍将校がしきりに兵卒に突撃を命じていた。正淑はその将校を一発でしとめた。正淑の射撃の腕を見守っていた村の老人は、自分も長年独立軍で戦い、たわら２俵ほどの弾を撃ちまくったものだが、こんな百発百中の名射手は見たことがない、さすがに女傑と言われるだけのことはある､と感嘆してやまなかった。遊撃隊員と人民の英雄的闘争により、敵は 300 余の死体を残したまま退却した。

　同年 2 月、部隊は内島山を発って撫松県馬鞍山へと向かった。その日は吹雪であったにもかかわらず、村人たちは遠くまで遊撃隊員を見送った。

　その後、内島山の人々は「討伐」を避けてそれぞれ朝鮮や他の地方に散って行ったが、彼らを通じて、人民革命軍に百発百中の女将軍がいるという噂が各地に広まった。

馬鞍山で

　内島山から馬鞍山までは徒歩で 2 日の距離である。にもかかわらず、行軍は最初から困難をきわめた。千古の原生林、腰まで埋

まる雪、険しい崖、急傾斜の山道……。

正淑は 20 余名の児童団員を連れて行軍しなければならなかったので、人一倍苦労した。子どもたちは車廠子から部隊についてきたのである。

車廠子を発つとき一部の偏狭な指揮官や排外主義者は、部隊の行動に支障をきたすからといって児童団員を敵の支配区域へ送ろうと主張した。

そのとき正淑は、それは金日成将軍の意に反しており、朝鮮革命の将来を考えないゆゆしい行為だと反対した。多くの隊員が正淑の主張を支持した。こうして部隊とともに車廠子を発った児童団員たちは、途中で敵に遭遇した際に部隊と別れる破目になってずいぶん苦労したが、ようやく内島山にたどり着いた。彼らは、たとえ死ぬことがあっても遊撃隊についていって死のうと覚悟を決めていた子どもたちだった。

正淑は内島山へやってきた児童団員の破れた服を繕ったり、病気にかかった子を手厚く看護した。一方、彼らは敵情監視や衛兵勤務を果たし、「討伐隊」との戦闘のときには遊撃隊に加勢して戦った。

ところが、排外主義者と彼らに追従する一部の指揮官は内島山を発つとき、またも児童団員を置き去りにしようとしたのである。彼らの論拠は、ぼろをまとった子どもたちをこの厳しい寒さの中で苦労させることはない、部隊についていくために苦労する子どもたちがかわいそうではないか、そのうえ、われわれがここに来

る途中では戦闘で子どもたちが大きな足手まといになったではないか、というものであった。

　そのとき正淑は、それはまったく事実に反している、子どもたちをここに置き去りにしたのでは先に逝った同志たちに面目が立たない、自分が責任を持って子どもたちを連れていく、と強く主張した。正淑の毅然たる態度に、排外主義者はそれ以上反対することはできなかった。

　こうして出発した隊伍が馬鞍山付近に至ったときである。連隊指揮部は、本隊は蛟河方面へ向かうが、「民生団」嫌疑者と児童団員はここから馬鞍山密営へ行くよう指示した。これは、彼らを厄介払いしようとする排外主義者の偏狭な振る舞いであった。

　正淑は怒りをこらえ、疲労困憊した児童団員を引き連れて馬鞍山へ向かった。これ以上歩けないと座り込む子どもには、もう少しで馬鞍山に着くからと力づけ、幼い子はおぶいながら、やっとのことで馬鞍山にたどり着いた。

　ところが、馬鞍山に着いてみると、ねぎらってくれる人はおらず、密営の責任者は、誰の指示でここに子どもたちを連れて来たのかと怒りをあらわにし、子どもたちがそばにいると戦闘の邪魔になるから、遠く離れた丸太小屋へ連れていけと命じた。そして、一緒に来た隊員たちも「民生団」嫌疑者であるからと、そこから離れた参圃密営に隔離させられた。

　児童団員にあてがわれた丸太小屋は、戸もなく、明かり窓まで壊れて雪が吹き込む家ならぬ「家」であった。そこにはよその土

地からやって来た子どもたちが何人かいたが、その子らは正淑が連れて来た子どもたちよりもっとひどいぼろをまとっていた。彼らも親の仇をとろうと遊撃隊と行をともにし、馬鞍山に来て見捨てられた子どもたちであった。こうして、正淑は独りで数十名の児童団員の面倒を見ることになった。

2 日が過ぎたが、一人としてこの丸太小屋を訪ねる者はなかった。その間、正淑は児童団員たちと一緒に小屋を修繕し、どうにか風雪をしのげるようになったが、食糧だけは工面することができなかった。3 日目になって正淑は密営の責任者を訪ねた。しかし責任者は、ここは子どもたちを養育するところではない、敵地なりどこなり早く送り返してしまえ、とどなりつけるのだった。

しかし、正淑は絶対にそうするわけにはいかなかった。独りで数十名の子どもを養うというのは、力に余ることである。密営の責任者にさんざんいやみを言われた後に、やっともらってくるわずかな食糧だけでは、日に一食分の糧にもならなかった。

正淑は雪の中から草の根を掘り出したり木の実を拾い集めたりして、子どもたちの「食事」にあてた。そして自分は水で空腹をいやすのがつねであった。

そのうえ病気の子を看病したり、ぼろぼろになった子どもたちの服を繕ってやらなければならなかったので、ろくに睡眠もとれなかった。あるとき何人か子どもたちを連れて谷間の奥にある古寺にも行ってみたが、住職がいなくなって久しい寺に食べ物があるはずはなく、少量の米ぬかを得たにすぎなかった。

　こうしてほぼ１ヵ月が過ぎた。子どもたちは日に日にやせ細り、病人が続出した。子どもたちをこれ以上こんな状態で放置するわけにはいかないと考えた正淑は、一緒に密営にやってきた隊員たちのところを訪ねた。しかし、「民生団」嫌疑者のレッテルを貼られている彼らの境遇も児童団員たちと変わるところはなかった。この馬鞍山には、いまなお極左的な反「民生団」闘争の寒風が吹きすさんでいたのである。

　しかし、正淑には彼らしか頼る人がいなかった。

「どう考えても食糧工作に出なければなりません。子どもたちをこのままにしておいては何日ももたないでしょう。どうかわたしたちを助けてください。食糧工作のための小部隊を組織して下さい。わたしもついていきます」

　指揮官に切々と訴える正淑の目は涙にうるんでいた。隊員たちの賛同を得て、指揮官はすぐに食糧工作の小部隊を組織した。これは、「民生団」の嫌疑を受けている彼らとしては並々ならぬ勇断であった。

　指揮官は正淑に、食糧を手に入れてくる間、密営に残って子どもたちの世話をするようにと言った。しかし正淑は、子どもたちにおもゆ一杯食べさせられないのに密営に残ってなにをするというのか、一人でも多く行けばそれだけ多くの食糧を手に入れることができるではないかと言い張り、小部隊に同行することにした。工作班のメンバーの中で「民生団」の嫌疑をかけられていないのは正淑ただ一人であった。しかし、正淑は彼らと行動をともにす

ることをいささかもためらわなかった。そのとき、駆けつけてきた子どもたちが正淑を取り囲み、一緒にいてほしいと泣きついた。

正淑は、小部隊のメンバーが背のうをはたいて集めた少量の食糧を子どもたちに残して密営を発った。

小部隊は初め撫松方面へ向かったが、敵の警戒が厳重であったため、計画を変更して臨江方面へ向かった。小部隊には敵と戦闘ができるほどの弾薬がなかった。「民生団」の嫌疑者であるということで１人当たり数発の弾丸しか与えられていなかったのである。馬鞍山を発ってから１週間ほど経ったある日、臨江から東へ40 ㎞ほどの□蟻河村に来てはじめていくらかの食糧を得ることができた。□蟻河の住民は遊撃隊員を温かく迎えてくれた。

正淑は馬鞍山でひもじい思いをしている子どもたちを思い、差し出された食べ物にはほとんど手をつけず、そっと背のうにしまいこんだ。

小部隊が食糧を携えて村を発とうとしたとき、日本人指導官が率いる「満州国」軍が村を襲った。小部隊は明け方の薄闇にまぎれていち早く村を抜け出し、山の中腹の有利な地点を占めた。いましがた遊撃隊が村を抜け出たことを知った敵は山へ這い登ってきた。小部隊には少量の弾丸しかないので、できるだけ敵を近づけて命中弾を浴びせなければならなかった。敵が眼前に迫ったとき一斉射撃が始まった。

正淑はまず、射撃を開始しようとする敵の機関銃射手をしとめた。すると敵は地に這いつくばり、身動きしようとしなかった。

この機を逃さず正淑は敵に呼びかけた。

「日帝の手先として犬死にせずに、銃と弾丸を捨てて逃げろ!」

「われわれは中国人を害しはしない」

李斗洙(リドウス)、金確実(キムフアクシル)らもこれに加わった。ついで正淑と女子隊員たちが『満軍反変歌』を歌いはじめた。力強い呼びかけと歌声に戦意を失った「満州国」軍の兵士は、武器と弾薬を投げ捨てて逃げ去った。

こうして戦闘は勝利に終わり、食糧も手に入れたが、帰路につく準備をする遊撃隊員の気は重かった。密営で自分たちを待っているのは、ぬぐいがたい「民生団」の嫌疑と敵意に満ちた冷たい視線だけだったからである。

正淑は義憤ともどかしさに胸がふさがる思いだった。……敵との戦いでこんなに勇敢な人たちになぜ「民生団」の嫌疑がかけられるのか、それにいくらかの食糧を手に入れたものの、これが児童団員たちにどれほどの助けになるというのか、また子どもたちのぼろぼろの服はどうしたらよいのか……。

正淑は小部隊とともに帰路についた。そのとき、思いがけなく連絡員に出会った。

彼の話によると、金日成将軍が撫松に来て正淑らを待っているということだった。一同は一斉に歓声を上げ、抱き合って喜んだ。夢のような話であった。正淑は連絡員に、もう少し詳しく話してほしい、司令官同志はお元気なのか、いまどこにおられるのか、と矢継ぎ早に尋ねた。

筆舌に尽くしがたい苦難の中で、いつどこにあっても金日成将軍の無事を祈りつづけてきた正淑であった。

小部隊は羽でも生えたように険しい峰や深い森林を一気に踏破した。隊伍は夜も寝ることなく行軍をつづけ、馬鞍山に到着した。

「お姉さん!」と口々に叫びながら児童団員が正淑に抱きついてきた。彼らは新調の服を着ていた。その服にまつわる話を伝え聞いた正淑は目頭を熱くした。

新しい師団編成に関する迷魂陣会議の後、将軍は朴永純(パクヨンスン)から馬鞍山の児童団員の話を聞き、馬鞍山に到着すると直ちに彼らを訪ねたというのである。

見るもあわれな子どもたちの姿を目のあたりにした将軍は密営の責任者を叱責した。そして、武装闘争の道を踏み出すときに母からもらったいわれのある 20 元の金で布地を買い、子どもたちに服をつくってやるようはからったのである。それでも全員に服がゆきわたらなかったので、将軍は撫松にいる張蔚華のところに人を派遣し、布地をさらに手に入れたということであった。

正淑は児童団員の新しい服を撫でまわした。そして、「みなさん！　みなさんは必ず金日成将軍様の大きなご恩にこたえなければなりません。いつどこにあっても将軍様を慕い、将軍様を守る真の戦士にならなければなりません」と言い聞かせた。

しかし、小部隊が帰ってきた馬鞍山の参圃密営の丸太小屋には、依然として狂風が吹き荒れていた。

正淑が小屋に入ったとき、期待と希望を抱いて駆けつけてきた

隊員たちの前に現れた密営の責任者は、金日成同志はすぐきみたちに会うといっているが、各自それぞれの立場を忘れることなく、金日成同志の前で分別ある行動をとるようにと威嚇した。隊員たちの期待と希望は消えた。「民生団」の嫌疑をかけられたときからこのかた、それを否定し抗弁もしてきたが、その言葉を信じてくれる人も、親身になって聞いてくれる人もいなかった。ただ「陳述書」や「自白調書」の厚さが増すのみであった。

金日成将軍が小屋に入ってきても誰一人顔を上げる者はなく、きみたちが「民生団」だというのは本当なのかと聞かれても口を開く者はいなかった。

将軍が隊員の１人に重ねて問いただすと、彼はうなだれたまま、そのとおりだと答えた。いかなる力も自分を救うことはできないという絶望感から出た自暴自棄の態度であった。将軍は彼らの心中を察して丸太小屋を出た。

金確実、張哲九（チャンチョルグ）ら女子隊員は絶望感と無念さのあまりむせび泣いた。

符岩遊撃区のころから金確実とともに戦ってきた正淑は、この光景を見て義憤を抑えきれずこう言った。

――みなさんは誰に頼るつもりなのか。「民生団」の調書の束をかざして冷たい仕打ちをした人がみなさんの身の潔白を証明してくれるとでも思っているのか。さもなければ、金日成将軍にこれまでの無念やるかたない事のいきさつを話せる機会が来たいまになっても、なにが怖くて押し黙っているのか。みなさんをいま

の境遇から救ってくれるのは金日成将軍しかいないのだ。わたしたちはいつどこにあっても金日成将軍のみを信頼すべきだ。

正淑の言葉は隊員たちを力づけた。

金確実は正淑の手をかたく握りしめたかと思うと、とっさに小屋を飛び出した。

木の陰で待機していた彼女は、沈痛な面持ちで小屋の方へきびすを返した将軍の前へ進み出た。そして涙ながらに訴えた。

「将軍、わたしは『民生団』ではありません。わたしは『民生団』の嫌疑者と結婚したという理由で『民生団』の濡れ衣を着せられました。でも彼は『民生団』ではありません……。わたしたちがどうして日本人のスパイになるというのでしょうか。わたしも張哲九オモニも夫のために『民生団』の濡れ衣を着せられたのです」

将軍は彼女を連れて小屋に戻り、長時間にわたって「民生団」嫌疑者の訴えを聞き取った。そして「民生団」の嫌疑がかかっていない何人かの隊員に、きみたちはこの人たちをどう思っているのかと尋ねた。誰も口を開こうとはしなかった。

そのとき正淑がすっくと立ち上がり、調書にどう書かれているかは分かりませんが、わたしは革命のためなら命まで投げ出そうとするこの人たちの覚悟だけはよく知っています、この人たちは絶対に「民生団」ではないと思います、と彼らの身の潔白を保証した。正淑の革命同志への信頼はどんな逆境にあっても変わらぬものであった。

将軍は「民生団」嫌疑者の決意を聞いた後、「……きみたちはこの瞬間から再出発するのです。だからこれまでのことは問題になりません。『陳述書』や『調書』『証拠文書』といったこの書類の束よりも、きみたち自身が革命の道で戦うというその決意をわたしは信じる」と話した。そして「民生団」の書類の束を庭に積み上げさせた後、100 余名の「民生団」嫌疑者の目の前で火をつけた。これは、朝鮮革命の危機を身をもって救おうとする金日成将軍ならではの大勇断であった。

将軍は書類の束を焼き捨てた後、その場で「民生団」嫌疑者全員を新たに編成する師団に受け入れることを宣言した。そして「民生団」嫌疑者の一人であった張哲九を司令部付きの炊事隊員に任命した。また、撫松にいる張蔚華を通じて手に入れた布地で、主力部隊の全隊員に新しい軍服をつくって着せるようはからった。

正淑はほかの女子隊員とともに軍服づくりにとりかかった。夜通し仕事をしても疲れを覚えなかった。

将軍が児童団員の願いどおりみんなを連れていくことにしたという知らせに、正淑はいっそう感激した。

その後、馬鞍山の児童団員と「民生団」嫌疑者は厳しい革命闘争の過程で朝鮮革命の頼もしい根幹に成長し、祖国解放の歴史に永遠に輝く貴い業績を残した。

正淑は主力部隊の第 7 連隊第 4 中隊に編入された。この中隊は司令部護衛の任務も遂行することになった。

漫江で迎えた春

金正淑は、金日成将軍の率いる部隊に属し、1936 年の春を漫江で迎えた。

朝鮮人民革命軍の主力部隊は、東崗への行軍の途上、漫江付近で数日間宿営した。部隊は休息を取りながら理髪をしたり行軍の準備を整えたりした。

正淑も宿営地のほとりの小川で女子隊員の一人と一緒に洗濯をしながら休んでいた。漫江の春のせせらぎは望郷の念を呼び起こした。正淑は幼いころ故郷で愛唱していた歌を口ずさんだ。女子隊員もそれに和した。宿営地を見回っていた将軍がその歌声を耳にして小川のほとりに来た。

「きみたちも故郷を思い出しているようだね」

歌が終わったとき、将軍は微笑しながらこう言った。

正淑はあわてて女子隊員とともに立ち上がり、姿勢を正した。

将軍は 2 人に万景台(マンギョンデ)の美しさについて話した。そして深い感慨にひたり、川辺をゆっくり歩きながら歌を口ずさんだ

ふるさとをたつ朝　わが母は
門(かど)にでて涙ぐみ　「さあお行き」
その言葉　ああ耳をうつ

わが家のほど近く　小川あり
弟たちしぶきあげ　たわむれた
その姿　ああ浮かびくる

将軍のうたうこの『思郷歌』を正淑は涙ぐんで聴いた。それ以来この歌は、正淑がいちばん愛する歌となり、うれしいにつけ苦しいにつけ、この歌を口ずさんだ。　解放された祖国に帰ったとき、清津（チョンジン）での歓迎集会でも正淑はこの歌をうたった。

その日、正淑は漫江の小川のほとりで自分の家庭の来歴について将軍に話した。将軍はその話を聞いてしばし無言でいたが、やがてこう言った。

「……つまり、われわれはみな同じ境遇なのだ。だから、われわれは革命の道でたたかわざるをえない。誰よりもまず、われわれのような人間が革命の先頭に立たなければならない。……革命の道に生き、革命の道でたたかわなければならないのだ」

ふと歩を止めた将軍は、勉強はどれくらいしたのかと尋ねた。学校には入れず夜学で読み書きを習っただけだという正淑の返答を聞いて軽くうなずくと、言葉をつづけた。

「革命に邁進するためには学習に励まなければならない。きみたちは銃を手にして聖なる革命戦線に飛び込んだりっぱな女性たちだ。その責任を自覚してりっぱな女性闘士、女性革命家にならなければならない」

その日の夜、正淑はたき火を明かりにして将軍の教えと『思郷

歌』を手帳に書き込んだ。それは、生涯にわたって正淑の信念となり座右の銘となった。

漫江で迎えたこの春は、この世に生を受けて以来、苦しみと不幸、喪失の悲しみと重なる恨みのなかで生きてきた正淑の生涯において、一つの分岐点となった意義深い春であった。

漫江を後にした部隊は4月末に東崗密営にたどり着いた。この密営は標高1,100mの高原地帯の原生林の中にあった。

ここが朝鮮反日民族解放闘争史に末長く伝えられる東崗会議の場となる。

会場をつくる仕事は､第7連隊第4中隊の1個小隊が担当した。正淑は、各地から来る代表と愛国人士を案内し、彼らの寝食の世話をしながら、会場を整える仕事にも加わった。

会議は1936年5月1日に始まった。そして5月5日には将軍によって、朝鮮での初の反日民族統一戦線体である祖国光復会の創立が宣言された。将軍は祖国光復会の会長に推戴された。これは朝鮮人民が、金日成将軍を民族の領袖として戴いたことを国内外に宣言した歴史的な出来事であった。

会場から出てきた正淑が伝令や炊事隊員に真っ先に伝えたニュースはこのことであった。

「喜んで下さい。司令官同志が祖国光復会の会長に推戴されたのです!」

正淑はこの出来事がもつ歴史的意義を誰よりも深く知っていた。将軍が発表した『祖国光復会創立宣言』『祖国光復会10大綱領』

から、階級と政見、信教の違いを超越した祖国解放の大経綸と「以民為天」の思想をあらためて理解し、全朝鮮人民が将軍のまわりにかたく団結して抗日戦に奮い立つ明日を思い描いた。

会議後、正淑は司令部書記処の印刷所で『祖国光復会 10 大綱領』を謄写して部隊に配布し、誰よりも先に 10 大綱領の主旨を把握した。そして主力部隊の全隊員が人民にこの綱領を幅広く解説、宣伝できるよう準備するうえでも先頭に立った。

正淑は隊員たちに、「朝鮮人民革命軍の隊員は銃を手にして敵と戦う戦闘員であるだけでなく、司令官同志の思想で人民を武装させ、その実現をめざす闘争に大衆を動員する宣伝者、組織者です。それゆえ、敵に遭遇しては獅子のごとく勇猛果敢に戦い、人民のなかに入っては誰もが積極的な扇動家にならなければなりません」としばしば話すのだった。

撫松で立てた偉勲

東崗会議以後、金日成将軍は、抗日武装闘争の朝鮮国内への拡大をめざして白頭山根拠地の創設を推進させ、そのために朝鮮人民革命軍の主力部隊を撫松地区へ進出させてこの一帯の敵を軍事的に制圧することをはかった。これにより、数ヵ月間に老嶺戦闘、西南岔戦闘、西崗戦闘、撫松県城戦闘など幾多の戦闘が成功裏におこなわれた。

正淑が将軍の指揮のもとにおこなわれた戦闘に初めて参加したのは、1936 年 6 月 16 日の老嶺戦闘であった。老嶺は撫松県と臨江県の境にある高峰で、鴨緑江（アムノク）沿岸と満州の内陸地方を結ぶ幹線道路上にあった。「満州国」軍のなかでももっとも悪質な靖安軍が老嶺を通過するという情報を入手した将軍は、部隊を有利な地点にひそかに配置した。

正淑は女子隊員たちを率いて第 4 中隊とともに道路から 100m ほど離れた高地の斜面で待ち伏せした。朝 6 時頃になって遠方監視所から敵が現れたという合図があった。しばらくして 2 個中隊ほどの敵兵が伏兵圏内に入りはじめた。敵兵全員が伏兵圏内に入ると、将軍の射撃命令が下り、部隊の一斉射撃が始まった。不意打ちを食らった敵は、応戦の構えもできず右往左往した。正淑は命中射撃でつづけざまに敵を撃ち倒し、岩の陰に身を隠そうとする者にまで命中弾を浴びせた。

将軍は敵に息つく暇も与えず突撃命令を下した。全隊員が銃剣を振りかざして敵陣に躍り込んだ。白兵戦の真っ最中に、高地の斜面をつたって逃走しようとした一群の敵兵が正淑をはじめ女子隊員たちに遭遇した。もともと悪質な靖安軍であるうえに、相手がひ弱な女性だと見てとった敵は、銃剣を振りかざして襲いかかってきた。この白兵戦で正淑は、女子隊員とともに多数の敵を打ち倒し、多くの武器をろ獲して隊員たちを驚嘆させ、将軍から称賛された。

老嶺戦闘についで 7 月 10 日の西南岔戦闘のときにも、正淑は

将軍の戦術上の意図を深く読み取って、またも隊員たちを感嘆させた。西南岔は、約 300 戸の比較的大きな集団部落で、背丈の 2、3 倍にもなる丸太の城壁に囲まれ、部落の真ん中には「満州国」警察分署や兵営が配置されていた。部隊が占めていた山からは、西南岔の全景が一目で見渡された。

隊員たちはそれまでの経験を踏まえて、城市への襲撃は夜間に限るものとばかり思っていた。ある隊員は、城門の前で肩をいからせている歩哨を見下ろしながら、「今宵限りお前の命も尽きるのだ」とせせら笑った。正淑は、戦闘はどうして夜間におこなわなければならないのかと質問した。するとその隊員は、城市は夜襲してこそ敵の意表を突くことができるし、そうでなくては城壁や砲台に頼っている兵営に突入するのは無理だと、数回の戦闘経験からそれを「論証」した。正淑は城市を見下しながら、戦闘は必ず夜間でなくては敵の意表を突けないわけではない、城市襲撃戦だとしても、不意打ちができるならほかの有利な時間を選択することもできるではないか、と反論した。

やがて将軍の攻撃命令が下った。敵は夜になると城門を閉めきって神経をとがらせるが、昼間は城門を開けたままのんきに武器の掃除などをするので、そのすきに乗じて、白昼に不意打ちをかけて西南岔を占領するという作戦だった。隊員たちは申し合わせたように正淑を見つめた。戦闘は 2、30 分で完全な勝利となり、終結した。朝鮮人民革命軍は、西南岔の住民の前で演芸公演をおこなってから悠然と撤収した。

この戦闘があって間もなく西崗戦闘が断行された。西崗は朝鮮人民革命軍の活動に有利な白頭山の樹海地帯につながっていたため、敵はここに１個連隊の「満州国」軍を駐屯させ、遊撃隊「討伐」の前哨基地としていた。部落の周りに大木を使って背丈の３倍もある柵をめぐらし、その外側には背丈を越す外堀までつくってあった。そして城壁の四隅には砲台が構築され、東南と東北側のものは地下設備を備え、西南と西北側のものは望楼を兼ねた 2 階建てになっていた。

将軍は偵察資料にもとづいて、火攻め戦術、火力打撃、呼号攻勢で、一挙に西崗の敵を壊滅することにした。

隊員たちは直ちに火攻めの準備にとりかかった。綿のかたまりを鉄線で縛り、それにとげを挿し込んで石油をしみこませた。男子隊員たちの仕事の手助けをしていた正淑は、とげが短く少ないことに気づいた。これでは傾斜の急な屋根にひっかからず、そのまま転がり落ちるおそれがあった。これは戦闘の勝敗を左右することであり、ひいては将軍の作戦上の意図の実行にかかわることであった。正淑の助言で、綿のかたまりにより長いとげが多く挿し込まれた。

ところが、その日の夜、あいにく小雨が降り出して、兵営の屋根がすべりやすい状態になった。けれども事前に放火棒の欠陥が是正されていたので、放火班が投げた放火棒はそのまま屋根にひっかかり、兵営は火の海と化した。同時に、猛射撃を浴びせて連隊長を屈服させた。「満州国」軍連隊は、武器や装備、軍需物資

をそっくり人民革命軍に引き渡して降伏した。

将軍が白頭山西北部一帯の敵を完全に制圧するための作戦を指揮した同年 8 月 17 日の撫松県城戦闘は、正淑の「抗日の女性英雄」としての偉勲をとどろかす契機となった。撫松は白頭山周辺の諸城市のなかでも敵がとくに重視していた軍事要衝であり、「東辺道治安粛正」の中心拠点の一つであった。ここには、関東軍、「満州国」軍、警察隊などおびただしい兵力と実戦で鍛えられたという高橋の「精鋭部隊」も駐屯していた。撫松県城戦闘には、万順、呉義成の第 1 支隊などの各反日部隊も参加した。戦闘は午前 2 時に開始された。正淑が属した第 7 連隊は、東山砲台にひそかに接近し、銃声もあげず素早く敵兵を捕えて砲台を掌握した。連隊がすかさず小南門方面へ突進するや、城内の敵は兵力を総動員して頑強に抵抗した。

戦闘が長びくことを見通して小南門近くに指揮所を移した将軍は、正淑に、7 名の女子隊員を率いて東山砲台近辺の山ひだで、朝食の支度をするよう指示した。その山ひだは、煙が立ち上っても敵の目にとまらないところに位置していた。

山ひだに着いた正淑は、警戒措置を講じてから炊事に取りかかった。このとき、県城を東と北の両側から攻撃していた反日部隊が敵の頑強な抵抗に遭って勝手に退却したため、その方面の敵の兵力が小南門の方に集中することになった。小南門砲台の占領をめざす戦いは予想外に激しくなり、反日部隊の無秩序な退却で戦況は非常に不利になった。

将軍は敵を城門の外におびきだして壊滅することにし、部隊を東山と小馬鹿溝の稜線に撤収させた。誘引戦術の罠にかかった敵は、城門からどっと押し出てきた。そのうちの１個小隊が山ひだに先回りしようと攻め寄せてきた。山ひだは城内に突入した部隊が東山に撤収する唯一の通路だった。もし敵がその山ひだを占めることになると、部隊は包囲され、小南門近くに位置する司令部がのっぴきならぬ窮地に追い込まれかねなかった。敵は女子隊員たちが占めている前方にたどり着くと、小南門方面から撤収する朝鮮人民革命軍部隊の退路を断つ態勢に入った。

正淑は「みんな決死の覚悟で戦いましょう。司令部の安全を命をかけて守りましょう」と隊員たちに呼びかけ、射撃を始めようとする敵の機関銃射手をモーゼル拳銃で一発のもとに撃ち倒した。これを合図に女子隊員たちの銃口が一斉に火を噴いた。不意打ちをくらった敵は最初気をそがれて盲撃ちするだけだったが、相手が少数であることを知ると、喚声をあげながら攻め寄せてきた。近づいてきた敵に手榴弾が投げられた。敵もやっきになって襲いかかってきた。山ひだを誰が先に占めるかによって戦闘の命運が決まることを敵も十分知っていたのである。敵弾が降りそそぐなか、正淑は拳銃を両手にして 10 余名の敵を撃ち倒した。金確実も両眼を大きく見開いて命中弾を浴びせた。

「生命を賭して司令部を守ろう!」

正淑のシュプレヒコールは、女子隊員たちの敵愾心をさらに燃え立たせた。樹木の陰に隠れて兵卒を突撃に駆り立てていた将校

が正淑の銃弾を浴びて倒れた。敵が混乱に陥ったとき、第 7 連隊第 4 中隊が駆けつけ、交差射撃で敵を完全に掃滅した。その間に、部隊の主力は無事に撤収して伏兵の陣を張り、追撃してきた悪名高い高橋の「精鋭部隊」を壊滅した。

金日成主席は回顧録『世紀とともに』で、撫松県城戦闘のとき拳銃を両手にかざしてまたたくまに 10 余名の敵を撃ち倒した正淑の偉勲を回想し、こう述べている。

「事実この日、指揮部は山ひだを英雄的に守り抜いた女子隊員たちによって救援されたというべきであろう。女子隊員たちが敵を防ぎ止めなかったなら、われわれは敵より先に東山へ登ることができなかったに違いない」

数回の戦闘を通じて白頭山根拠地の創設に有利な条件を整えた朝鮮人民革命軍の主力部隊は、数ヵ月前に留まった漫江村にまた立ち寄り、数日間過ごすことになった。正淑は村人に『祖国光復会 10 大綱領』の主旨を宣伝し演芸活動もおこなった。

革命演劇『血の海』をはじめさまざまな公演によって、漫江の人々に深い印象を残した朝鮮人民革命軍の主力部隊は、ついに白頭山地区への行軍の途についた。

白頭山密営

漫江住民の歓送を受けて鴨緑江沿岸の国境地帯へ向かった朝鮮

人民革命軍の主力部隊は、果てしない千古の森林をくぐり抜けて多谷嶺に至った。多谷嶺は白頭山の西南に位置する高く険しい嶺である。

苦しい行軍ではあったが、この嶺をきわめれば祖国の地が望めるという金日成将軍の言葉に力づけられた隊員たちは、疲れも忘れて嶺を登りはじめた。

やがて頂から「祖国が見えるぞ!」という将軍の太い声が聞こえてきた。

金正淑は女子隊員と手を取り合って一気に嶺をかけ登った。

白雪を戴き太古然としてそびえ立つ朝鮮の祖宗の山――白頭山、そこから発する祖国の青い山並みが絵のように鮮やかに浮かび上がってきた。

なつかしい祖国!　銃を手にとった日から祖国の地を踏む日を思い描きながら戦ってきた隊員たちであった。

正淑は「会寧（ヘリョン）はどの辺でしょうか」と将軍に尋ねた。将軍は白頭山が見える北東を指差しながら、会寧は白頭山のずっと向こうの豆満江（トウマン）のほとりにあると教えた。

正淑は将軍が指差す方角を深い感慨をこめたまなざしで眺めた。

将軍は鴨緑江沿岸の祖国の地を指差しながら、あの茫々たる樹海と絶壁をなして深く落ちた渓谷を見なさい、祖宗の山――白頭の霊峰から発するこのりっぱな天険の要害は、われわれに誇らしい闘争の舞台を提供してくれるだろう、われわれはこれから、この大森林地帯の天然の要害を利用して、白頭山麓の深い密林の中

に密営を設け、人民を解放戦線にかたく結集して祖国解放ののろしを高くあげることになるだろう、と隊員たちに語った。

将軍の言葉を胸に刻みながら正淑は、この白頭山に至るまでの路程を思い返した。それは銃剣の林をかき分けてきた血路であった。この道で朝鮮革命の中枢的力量をなす朝鮮人民革命軍の威力は数倍に増強され、常設の反日民族統一戦線体である祖国光復会が創立され、その旗のもとに各階層の人民大衆が結集しているのである。

やがて白頭山に陣を張れば、国内のすべての愛国勢力を一つに結束し、全民抗争によって祖国解放の偉業を達成することになるであろう。その構想をあたためてきた将軍は、東崗会議後、ただちに白頭山地区に新たな革命根拠地を設けることを決心し、金周賢(キムジュヒョン)と李東学(リドンハク)を先発隊として派遣することにしたのである。

彼らが白頭山地区に密営の位置選定のため出発する日であった。

金周賢は、白頭山根拠地の選定は少々骨がおれても独りで担当するから、司令部護衛の任務を担っている李東学中隊長は部隊に残してほしいという意向を述べた。すると正淑は、白頭山地区に革命根拠地を新設することは、朝鮮革命全般にかかわる重大な問題なので、将軍が特別にはからってあなたたちを先に派遣することになったのだと思う、司令部の護衛はわたしたちが担当するから、心配せずに任務の遂行に専心してほしいと説得した。

こうしてまず金周賢、李東学が白頭山地区へ実地調査に向かったのである。

部隊が多谷嶺を下って長白入りした後、正淑は白頭山根拠地の創設に全力を尽くした。白頭山周辺地域での軍事・政治活動に積極的に参加し、大徳水戦闘をはじめ小徳水戦闘、十五道溝東崗戦闘、天橋溝戦闘、竜川里付近での遭遇戦、二十道溝二終点戦闘で輝かしい偉勲を立てた。また、新昌洞、吉州徳、天上水、黄公洞などの住民を祖国光復会のまわりに結集する大衆政治活動も精力的に繰り広げた。

1936 年 9 月 20 日の明け方、将軍に率いられた部隊は長白県二十道溝の黄公洞を後にし、北東方向への行軍の途についた。

金周賢が道案内を務めた。この行軍が将軍の構想を実現するためのものであることを理解していた正淑は、炊事道具など重い荷を背負いながらも、他の女子隊員を助けながら力強く歩きつづけた。

密林の間をぬって行軍をつづけた部隊は、夕暮れどきになって小白水（ソベクス）谷に到着した。高い峰で囲まれた谷間はなんとなく落ち着けるところだった。

翌日の朝、司令部のテントでは主力部隊の指揮官の会議が開かれた。会議では一連の問題とともに、白頭山根拠地の創設を早急に推進する問題が再び重要案件として討議された。白頭山根拠地の創設は密営の建設と革命組織の建設という二つの意味を包括していた。

密営の建設は会議が終わった翌日の朝から始まり、正淑はこれに熱心に参加した。

白頭山密営網の心臓部は、小白水谷に建設する「白頭山１号密営」であった。この密営の位置は、将軍が自ら定めた。これが今日、朝鮮人民のあいだで革命の聖地と呼ばれている白頭山密営である。

正淑は、白頭山１号密営の建設に参加した隊員たちに、この密営を建設する意義について説明し、自らこの建設に誠意を尽くした。

密営が建設されると、正淑はその周辺の立ち木の皮をはぎ、そこに意味深いスローガンを書き記した。

「白頭山に将軍星現るる。白頭山の将軍星、三千里を照らす」

「男尊女卑反対、女性解放万歳、貧困に苦しみ、さげすまれる朝鮮女性よ、総決起して抗日戦に参加せよ」

小白水谷に白頭山密営が建設されることによって、朝鮮革命の中心的指導拠点が構築され、朝鮮革命全般にたいする指導が確固と保障されることになった。白頭山密営の建設についで、国内の白頭山地区では獅子峰（サジャ）、熊山（コム）、仙五山（ソンオ）、間白山（カンベク）、無頭峰（ムドウ）、小胭脂峰（ソヨンジ）などに密営が設置され、西間島方面では黒瞎子溝、地陽渓、二道崗、横山、鯉明水、富厚水、青峰などに衛星密営が建設された。

白頭山密営の建設後、正淑は地下組織網の整備のため精力的に活動した。

白頭山密営建設の指導を終えた将軍は、黒瞎子溝へ向かうとき、鴨緑江沿岸の状況を具体的に調べる任務を正淑に与えた。

当時、鯉明水をはじめ白頭山周辺の地域では、その年の６月から

金周賢の指導のもとに祖国光復会の組織が結成されていた。正淑はそれらの組織に連絡員を派遣し、恵山(ヘサン)をはじめ鴨緑江沿岸、とくに白頭山周辺地域の状況や住民構成とその思想的動向、革命組織の活動状況を調べさせる一方、組織をさらに拡大、強化し、朝鮮人民革命軍にたいする支援活動を活発におこなわせる具体的な課題を示した。

　こうして、鯉明水や胞胎(ポテ)山など白頭山周辺の地域では、祖国光復会の組織網が急速に拡大されていった。

　当時、金日成将軍に会うため、密営に国内の革命家が訪ねてきたが、そのなかに李悌淳(リジェスン)と朴達(パクタル)〔12〕もいた。

　ある日、李悌淳が李東学中隊長の案内を受けて女子隊員の兵営の前を通りかかった。そのとき、正淑は武器の手入れをしていた。李悌淳は歩を止めてその様子を見つめた。李東学中隊長は、彼女が部隊全体が誇りとしてうらやむ名射手であることをいくつかの例を上げて話した。

　李悌淳が感心してその秘訣を尋ねると、正淑は、まだ未熟な女子隊員にすぎない自分にさほどの腕があろうはずはないと謙遜し、こう答えるのだった。

「敵を一発で撃ち倒さなければ、相手にわたしが倒されます。それに、わたしたちは死地で将軍につきそっているのです。それでわたしは、敵がいつどこから現れても一発で撃ち倒せるよう射撃訓練に励んでいます。……

　わたしは、朝鮮人民革命軍の隊員は身も心もすべてが将軍を守

り、朝鮮革命を守る銃にならなくてはならないと思います」
　李悌淳は、ここに来て名射撃術の秘訣を習うことができた、自分も金日成将軍の安泰と朝鮮革命の司令部を守る一挺の銃になる、と誓った。彼はその生涯を閉じるまで、この誓いに忠実であった。彼は、絞首台の露と消えたが、将軍のいる司令部と組織の秘密をあくまで守りぬいたのである。
　李悌淳は密営を離れるとき、革命軍の軍服を一度でも着てみたいと将軍に話した。李東学中隊長からその話を聞いた正淑は、李悌淳の身体にぴったり合いそうな軍服を選び、きれいに手入れして渡した。
　李悌淳の案内で将軍と対面した朴達も、密営に留まっている間に正淑から深い印象と感銘を受けた。朴達は、いつもにこやかな表情で細やかに面倒を見てくれる正淑に、女性の身で遊撃隊の生活はつらくないかと尋ねたことがある。戦闘と行軍の連続である遊撃隊の生活を目にしたからである。
　正淑は静かなほほえみをたたえて答えるのだった。
「もちろん苦しくつらいときがたくさんあります。それで苦難に満ちた革命だというのではないでしょうか。つらく苦しいときはいつも、将軍にしたがい、苦労に耐えて戦ってこそ国を取りもどし、父母兄弟の恨みを晴らすことができる、そう考えるようにしています。そうすると、困難に遭っても力が湧いてまた立ち上がり、革命に参加しているという誇りを感じるのです。わたしは、一度選んだこの道を変わることなく歩きつづけ、この道で命をな

げうつ決心です」

その日、朴達の心に、朝鮮革命の心臓部である白頭山密営が金日成将軍と金正淑の影像とともに深く刻み込まれた。その後、彼は「恵山事件[13]」のため身を潜めていたが、天上水洞窟の付近で正淑と再会した。それはほぼ 2 年ぶりであったが、彼は一目で正淑を見分け、「金正淑同志！」とのどを詰まらせて駆け寄った。

祖国が解放された直後、朴達が身動きもできない体で平壌に来たときも、正淑は彼を温かく迎えて面倒を見た。自宅のそばの朴達の家を度々訪ね、白頭山密営と天上水洞窟付近での出会いを回想しながら、彼を力づけた。

金日成主席が「愛国的地主」と回顧した金鼎富（キムジョンブ）も、正淑の世話になった。1936 年の夏から数ヵ月間、金鼎富は白頭山根拠地の横山密営に留まっていた。一部の隊員は、将軍にはトウモロコシ粥の食事をさせながら、地主の金鼎富には白米の飯を食べさせなければならないことを不快に思っていた。

そのとき正淑は、金鼎富は愛国愛族の志士だと言い、力のある人は力で、知識のある人は知識で、金のある人は金で全民族が反日聖戦に立ち上がってこそ祖国の解放をなし遂げることができるという将軍の反日民族統一戦線思想で隊員たちを説得した。

金鼎富は密営を離れる際、将軍に、自分は死んでも人民革命軍を助け、その道で死ぬつもりだ、金鼎富は生きても死んでも将軍の味方であることを信じてほしい、と言い残した。その後、彼は

その言葉どおり誠心誠意、人民革命軍を支援した。

正淑は、将軍直属の部隊に新しく編入される隊員が、直属隊員らしく身だしなみを整えるよう気を配った。

当時、各地域で活動していた小部隊は将軍の命を受け、白頭山根拠地に来て主力部隊に編入された。ところが、彼らのなかには新しく支給された軍服をろくに手入れもせずに着用したり、はなはだしくは、ひげがぼうぼうに生えても平気でいる隊員もいた。なかには、遊撃隊の生活でそれくらいのことは普通だと言う隊員もいた。

正淑は、主力部隊が百戦百勝の戦闘力をもった鉄の隊伍になったのはすべて将軍の命令と教えにしたがったからだ、だから、われわれは将軍が定めた規律と秩序を自発的に守り、まず容姿からして直属部隊らしく身だしなみを整えなければならない、と彼らを諭した。正淑の努力により、部隊に新しく編入された隊員は規律正しい生活をするようになっただけでなく、容姿の面でも将軍直属の部隊らしい面貌をそなえるようになった。将軍に率いられた朝鮮人民革命軍の主力部隊が、人民のあいだで「大学生部隊」と呼ばれ、追跡してきた敵が宿営地のたき火の跡を見ただけで将軍直属の部隊であることを知って逃げ出すまでになったのは、正淑のこのような努力に負うところが大きかった。

部隊には長白一帯からの新入隊員も少なくなかったが、彼らは遊撃隊の生活に慣れず、非常な苦しみを感じた。そのなかには馬(マ)東熙(ドンヒ)もいた。彼は扁平足であったため、行軍と戦闘がうち続く遊

撃隊生活はなおさら辛いものであった。ときには疲れきって、服がはだけていることにも気づかないこともあった。

正淑は、行軍のときには一緒に歩きながら力を与え、射撃動作にも熟達させ、将軍の革命思想も詳しく説明した。

馬東熙はりっぱな朝鮮人民革命軍の隊員に成長した。戦闘では勇敢で、学習でも模範であった。彼は疲れきって倒れているときでも、学習だというと誰よりも先に駆けつけ、討論にも熱心に参加した。学習の時間は、馬東熙が一番意欲に燃える時間であった。

彼は白頭山密営で、将軍からじきじきに任務を受け、地下工作もたびたび遂行した。

彼は、将軍の思想と意図をもっとも正確に把握し、名射手でもあり、同志のために献身する正淑を非常に尊敬し、ことあるごとに正淑を見習おうと努めた。

とくに 1937 年 3 月、撫松への行軍途上で聞かされた正淑の言葉を命の尽きる瞬間まで忘れなかった。撫松遠征の行軍路は困難をきわめた。隊員たちは休止の号令がかかると、たき火のそばにどっと倒れて眠り込んでしまうのであった。馬東熙もやはりたき火のそばで眠りこけ、帽子の耳隠しが焦げるのも気づかなかった。

正淑は彼を起こさず、そっと帽子を脱がせて火をもみ消し、それを繕いはじめた。しばらくして眠りから覚め、頭をなでながら当惑している彼に、「火の粉が散って帽子を焦がしたようですわ。わたしたちも入隊した当初はこんなことがよくあったのですよ」と言って正淑はほほえんだ。

馬東熙は、小学校のときに帽子なしで過ごしたことを思い出し、「この軍帽はわたしが生まれてはじめてかぶった帽子です」と言って、帽子にまつわる話をした。

彼は小学校に通っていたとき、成績はいつも一番であったが、金がなくて帽子をかぶることができなかった。ある日、先生が不当に権勢家の子を首席にしたことに憤慨した馬東熙は、学校を飛び出した。ちょうどその日、父が市場で学生帽を買ってきてくれた。そんな話をしながら彼は、その帽子はわたしがかぶれる帽子ではなく、その学校もわたしが通える学校ではなかった、遊撃隊こそ自分が通うべき学校であり、革命軍の軍帽こそ自分がかぶるべき帽子だと言うのだった。

馬東熙の話を聞いた正淑は、軍帽に赤い星をつけて渡しながら、この赤い星がこれから困難な闘争の道で金日成将軍に限りなく忠実な革命戦士になるようあなたを導く心の星、忠誠の星になることを望むと言った。

その後、馬東熙は敵に逮捕されたとき、最後まで白頭山密営の秘密を守って自分の舌をかみ切り、壮烈な最期を遂げた。

正淑は実践によって模範を示し、将軍の安全を守ることが革命遂行における最重要任務であることを隊員たちに悟らせた。

大木もひび割れるほどの吹雪の夜にも、戦闘や強行軍のためみんなが疲労困憊して身動きできなくなった夜にも、正淑はすすんで衛兵勤務を受け持った。

女子隊員は、正淑が毎日朝早く起きるのを知っていたが、それ

は朝食の支度をするためだとばかり思っていた。ところがある日、女子隊員は、夜明けの薄闇の中、銃を肩にして司令部の丸太小屋のまわりを見回っている正淑を見て、毎日のように司令部の安全のために歩哨に立っていることを知ったのである。

正淑は警戒勤務につく隊員たちに「いつも将軍のいらっしゃる位置に気を配ることを忘れてはなりません。状況がとくに困難で複雑をきわめているときなので、わたしたちは全身で将軍を守る鉄の防弾壁にならなければなりません」と念を押した。

1937 年 1 月 3 日、正淑は共産党に入党した。それは祖国の解放と人民の幸せのための栄えあるたたかいに一身をささげる金正淑の革命的生涯にとって新たな一里塚となった。

四　敵地で

桃泉里

金日成将軍は祖国光復会の組織をさらに強化し、それを全国的規模で早急に拡大する構想のもとに、朝鮮内外の各地域にすぐれた政治工作員を派遣した。

金正淑が将軍から桃泉里—新坡（シンパ）地区への地下政治工作任務を受けたのは、部隊が西崗地区に到着した 1937 年 3 月中旬のことである。

将軍は、桃泉里を拠点にして下崗区一帯の活動を盛りたて、新坡ルートを切り開いて祖国光復会の組織網を東海岸一帯に拡大する任務を正淑に与えた。そして「きみがこの難しい任務をきっと遂行してくれるものと、わたしは信じる。困難にぶつかれば、そのつど同志たちと人民に依拠しなさい」と述べた。

「司令官同志、必ず任務を遂行して帰ってきます」

短い返事ではあったが、いかなる試練や難関に見舞われても、将軍の信頼と期待にこたえようという正淑の決意がこめられていた。

当時、日本帝国主義者は朝鮮人民革命軍の国内進出を阻むため、軍隊を鴨緑江（アムノク）の国境一帯に集中させる一方、「協和会[14]」などの

悪質な手先を動員して朝鮮人民革命軍にたいするさまざまな悪宣伝を広め、人民の革命的熱意をそごうと悪辣に策動していた。

こうした時期に、正淑は司令部を離れて長白地区へ向かった。

まず天上水から8㎞余り離れた秘密連絡場所に半月ほど留まって祖国光復会支会の活動を指導するかたわら、新聞に載る資料を調べたり、金在水（キムジェス）をはじめ地下組織のメンバーに会って桃泉里と下崗区、それに国内の新坡地区の実態を聞き取り、地下工作の準備を整えた。

同年4月初、正淑は茂山（ムサン）から移住してきた厳玉順（オムオクスン）という名の人物に偽装して桃泉里へ向かった。

桃泉里は200戸余りの比較的大きな山村で、本村といくつかの村からなっていた。

正淑はまず、地下組織のメンバーである桃泉里区長の鄭東哲（チョンドンチョル）に会い、現地の実態と住民構成、組織関係などについて詳しく聞き取った。

桃泉里と腰房子をはじめいくつかの村に祖国光復会の支会と分会が組織されていたが、積極的な活動はしていなかった。中核の構築や大衆の革命化、組織の拡大など、多くの問題が未解決のままであった。

鄭東哲は、将軍が工作員を派遣してくれたので自信がついたと喜び、金在水も安心した様子だった。

正淑は彼らに、人民の尊敬と信頼を得てその心を動かすならなしえないことはない、という将軍の教えどおり、自分も野良仕事

をしながら人民の心の中に入っていくつもりだと語った。

正淑は日中は畑に出て村人と一緒に働き、夜は家々を訪ね回って顔なじみになった。こうして１週間後には「北青（プクチョン）の家」「甲山（カプサン）の家」などといった家々の呼び名とともに、200 世帯を越す村人たちの名前をほとんど覚えた。

この時期に、正淑は女性地下工作員としての資質をそなえるため毎晩、井戸端で水がめを頭にのせて歩く方法を習得した。そしてスリナル（端午）をひかえて、毎晩ぶらんこ乗りの稽古もした。

夏のある日、区長の鄭東哲の家で男の子が生まれて祝いの宴がもうけられた。その席には政治工作員や地下組織のメンバーが参加し、巡査や他の地域の区長、密偵なども顔を見せていた。

正淑は敵の目を欺くため、鄭東哲と示し合わせて工作員に初対面のあいさつをさせた。そして自らも朴正淑（パクジョンスク）の前に両手をついて「初めまして」と深々と頭を下げた。この芝居をうつため、正淑は区長に教わってお辞儀の仕方を練習していたのである。

正淑は桃泉里の人々のあいだで「先生」ではなく、娘、孫娘にもなり、姉、妹にもなって親しくした。通りすがりにちょっと立ち寄った家でも、そのまま腰を上げようとせず、薪を割ったり、水を汲んだり、踏み臼を使ったりした。嫁入りしたばかりの年若い女性が夫に着せるひとえ上着のつくり方が分からず困っているのを見ては、半日がかりでそれを教え、またある母親が頼りにしていた独り息子が重病で食欲をなくし鮮魚汁をほしがっていることを耳にしては、川へ行って魚を捕ってきたりした。正淑が桃泉

里の人々に消しがたい印象を刻したのは、劉家村の地主が熱病にかかった下働きの少女を山小屋に捨てたときのことである。隣人はもちろん､親戚たちでさえ少女に同情してため息をつくだけで、熱病に感染するのを恐れて助けようとはしなかった。

それを知った正淑はためらうことなくその山小屋へ行った。雨雪にさらされ半ば倒れかかった山小屋で少女は死を待つばかりだった。正淑は少女を抱きしめた。

意識を失ったまま高熱にうなされ、寂しく死んでいく少女のみじめな姿に、正淑は苦しみに身もだえる祖国の人民を思い浮かべた。

正淑の犠牲的な行為を知って山小屋の近辺に集まってきた村人たちは、信じがたい光景を目のあたりにして涙ぐんだ。正淑が熱病にかかった少女を抱いて､おも湯を口に含ませていたのである。

村人たちが帰った後、鄭東哲をはじめ組織のメンバーは、助かる見込みのない少女を看護して病気がうつったらどうするのか、司令部から受けた重要な任務が果たせなくなったらその責任は誰が負うのか、と言って、山小屋から引き上げるよう説得した。

正淑はほほえみながらこう答えた。

「心配しないで帰りなさい。命が惜しくて子ども一人、助けられないようでは、どうやって国を取り戻し、人民をどう救えるというのですか。人民にささげた命なのです。なにも恐れることはありません」

正淑は山小屋を離れずに看病をつづけ、少女は生き返った。村

人たちは正淑を、貧しい人のために「天が賜った義人」「うちの玉順」と呼ぶようになった。この呼称には正淑を自分たちの運命と固く結ばれた一心同体、実の娘、姉妹とみる村人たちの信頼と愛がこめられていた。

4 月中旬のある日、下崗区地下組織の責任者たちに会った正淑は、敵の攻勢が激しくなったからといって組織が活発に活動しないのは間違っている、大胆に立ち向かって主動的に革命組織をうちかため、拡大していくべきだといましめた。

正淑はまず、桃泉里一帯の青年を熱心に教育して中核に育て、彼らを中心に各村に反日青年同盟を組織した。

とくに下崗区一帯の組織で弱点の一つとなっていた女性の組織化に力を傾けた。

女性を組織に結集することは当時、祖国光復会の組織網を拡大するうえできわめて重要な問題であったが、下崗区の革命組織では女性を結集する活動に進展がなくて気をもんでいた。

こうした実態を知った正淑は、地下組織のメンバーが自分の母や妻、妹に革命的な影響を与えて中核に育て、彼女らを通じて村の女性をすべて革命化していくよう指導した。

正淑は、祖国光復会会員の妻である李貞愛（リ ジョン エ）を組織の中核に育てる目的で彼女の家をたびたび訪ねた。その家には6年も床についたままの年老いた父がいたが、女性が読み書きを覚えるために外出したり、社会活動に関与することを許さなかった。

李貞愛を教育するためには彼女の家族と親しくなり、まず父を

感化しなければならなかった。

正淑はその家の庭にある踏み臼を借りて穀物を搗いたり、何かと小用をつくって立ち寄ったり、また老父のためにおいしい食べ物をこしらえて持って行ったりもした。通りすがりに立ち寄っては、水汲みや薪割りなどの仕事を手伝った。李貞愛には苦労の末に病気にかかった老父をよく介護するよう諭し、自らも看護役を務めて実の父のように真心を尽くした。そうこうするうちに、老人は正淑に娘にもまさる親近感を抱くようになり、父への心づかいに深く感動した李貞愛も、正淑を姉のように慕うようになった。

正淑は彼女に読み書きや革命歌曲などを教えながら、階級的に目覚めさせようと努力した。山菜を摘んだり、石臼を回したり、踏み臼を使ったりする間も、教育しつづけた。

貧しいのは「宿命」だと思い込んできた李貞愛は、次第に階級的に目覚めてきた。正淑は彼女が成長するにともない、朝鮮人民革命軍を率いて、白頭（ペクトウ）山の険しい山々で日本の侵略軍を打ち負かしている将軍の話を聞かせた。そして将軍が抗日遊撃隊を創建したことや戦闘談について、また『祖国光復会 10 大綱領』についても説明した。やがて李貞愛は、自分も遊撃隊に入隊して銃を手に日本軍と戦ってみたい、と言うまでになった。

正淑はそういう彼女に、遊撃隊に入隊しなければ戦えないというわけではない、ここでも十分敵と戦えると言って、彼女にできることを教えた。はじめは市の立つ日に新坡市場で遊撃隊に送る地下足袋を何足か買ってこさせ、次に周辺に駐屯している「靖安

軍」の動静を探知する任務を与えた。李貞愛は、この過程で大胆さと勇敢さを培った。

このように正淑は中核を何人も育て、彼女らを通じて村の女性を革命化していった。

こうして 4 月 20 日、正淑の指導のもとに桃泉里婦女会の結成会合が開かれた。この会議で正淑は、桃泉里婦女会の結成を宣し、わたしたちはみな将軍の戦士であり、その指導にしたがって祖国の解放のためにたたかう革命の同志だ、いかなる困難に遭遇してもわたしたちは生死、苦楽をともにし、将軍の忠実な戦士としてたたかうべきだ、と強調した。

婦女会の会長には李貞愛が選出された。1 ヵ月前まで人前で満足に口もきけず、敵の銃を見ただけで縮みあがった女性が祖国解放をめざす反日聖戦に立ち上がったのである。

正淑は会合をしめくくる中で、将軍は朝鮮民族の太陽であり、わたしたちはその陽光になろう、と呼びかけた。

このように正淑は中核分子を数多く育て、彼らを動かして組織をたえず拡大していった。正淑が桃泉里に来ていくらも経たないうちに、多数の熱血青年が反日青年同盟に結集し、反日少年会、反日老人会、そして半軍事組織の生産遊撃隊が組織された。

正淑は区長(鄭東哲)の家で冠婚葬祭があると、その機会を利用して桃泉里に来る遊撃隊の工作員や各地方の地下組織の連絡員に会った。一方、下崗区の各地域に足を運んでは地下組織の活動を指導した。そして自ら育てた中核分子を周辺地域の親族や友人の

家に送って青年と人民の教育にあたらせた。

　こうして祖国光復会の傘下の組織は、桃泉里だけでなく、下崗区と上崗区の広い地域へと急速に拡大されていった。

　正淑は遊撃隊を支援するよう村人を教育し、支援運動に積極的に参加させた。また中核のなかから屈強な青年を人民革命軍に入隊させることに力を入れた。入隊者の数は桃泉里だけでも 10 数名、下崗区一帯では 100 余名にのぼった。

　遊撃隊への支援を促す正淑の教宣活動は効を奏し、桃泉里に定住した中国人までもが人民革命軍に支援物資を送るようになり、また児童団員は戦場の跡を歩きまわっては敵が残していった銃弾を拾い集めて革命軍に送り届けた。

　普天堡（ポチョンボ）戦闘の直後、正淑は祖国光復会の長白県下崗区委員会傘下の組織責任者会議を開き、下崗区委員会に組織部と宣伝部、教育部、壮年部、青年部、武装部などを設ける機構再編をおこなった。その結果、下崗区委員会は傘下組織にたいする指導を着実に、主動的におこなえるようになった。スリナルに開かれた普天堡戦闘勝利祝賀会には、その周辺地域はもとより十三道溝と新乫坡（シンガルパ）(新坡)の人々まで集まり、これが祖国光復会の組織を拡大し、人民を反日闘争へさらに奮起させる重要な契機となった。

　金日成主席はその頃の金正淑についてこう述懐している。

　――金正淑は桃泉里と新坡一帯で多くの活動をした。わたしが革命家としての彼女の並々ならぬ手腕と能力を発見したのも、まさにその頃である。彼女には大衆を感化し、目覚めさせ、奮起さ

せるすぐれた才腕があった。
　下崗区一帯に設けられた広範な地下組織網は、国内の広範な地域へと組織を拡大する足場となった。

「新坡ルート」

　当時、新坡は、朝鮮人民革命軍の国内進出を阻むための敵の軍事要衝の一つで、警戒が厳しかった。朝鮮人民革命軍が活動している長白とは向かい合わせにあり、恵山（ヘサン）、長津（チャンジン）、江界（カンゲ）方面の車道が伸びているこの新坡に、彼らは砲台を構築し、数十名の警官のほかに国境守備隊と憲兵隊まで配置していた。
　金正淑は新坡ルートを切り開くため、まず 4 月 25 日に胞胎山で下崗区一帯の地下組織責任者会合を開き、新坡地区での工作を積極化するための課題を示した。そして、地下組織のメンバーを国内の各地に派遣する一方、組織メンバーと桃泉里の人々を通じて新坡一帯の実情を調べた。
　桃泉里の人たちはわずかな穀物を売ったり、布地を買うにも新坡の市場に行かなければならない状態にあった。そのため、新坡へ出入りする人が多かった。彼らは履き物やマッチ、塩など遊撃隊に送る支援物資も新坡の市場で購入していた。
　正淑は新坡行きを気づかう桃泉里の地下組織のメンバーにこう語った。

「敵の警戒と弾圧が激しければ激しいほど、大胆に彼らの巣窟に入る必要があります。……

金日成将軍は日頃から、敵中工作では大胆さがなければならないと、地下工作員たちに教えています」

1937 年 5 月末、新坡に向けて桃泉里を発った正淑は、十三道溝三水谷を経て鴨緑江の渡し場に着いた。その日は、ちょうど市の立つ日であった。

正淑は行商の装いをした金在水とともに市場へ行く人々の中に混じって鴨緑江を渡った。2 人は重々しい砲台の前で厳しく検査する警官の目をくぐって新坡の渡し場を通過し、市場に向かった。市場では貧相な身なりの女性がわずかな麦を前にため息をついているかと思うと、ずだ袋を手にした子どもが通りがかりの金持ちに物乞いをしていた。

新坡のこの現実は、まさに受難にみちた祖国の縮図でもあった。正淑が祖国の地を踏んでまず目に触れ耳にしたのは、救いを求める祖国の姿であり人民の声であった。

新坡ルートを切り開くための正淑の工作は当初から危険がつきまとった。

新坡の渡し場から町中へ向かったときのことである。粗末な麦わら帽をかぶった男が正淑の後をつけてきた。彼はとある飲食店の前でタバコを口にくわえたのだが、それは刻みではなく巻きタバコであった。それを見て正淑は不審に思った。貧しい農民が巻きタバコなど吸えるはずがないからである。

正淑はあの裏通りからこの裏通りへと密偵を引き回して市場の雑踏に紛れ込んだ。そして幼児をおぶって重そうなかごを頭にのせて歩いている顔見知りの桃泉里の女の荷をすばやく受け取って頭にのせた。尾行の相手を見失ってあわてふためく密偵を尻目に、正淑はすばやく市場を抜け出した。これは、新坡工作の日々にあった逸話の一つにすぎない。

その日、正淑は市場を抜けて石田（ソクチョン）洋服店に入った。そこには、すでに将軍から聞いていた、三水（サムス）共産主義者工作委員会の中核メンバーの一人である張海友（チャンヘウ）が待ち受けていた。彼はかつて金亨稷（キムヒョンジク）先生の指導を受けたこともあって、将軍とは親しい間柄にあった。また、独立運動に関与したかどで逮捕され、獄中生活を送ったこともあり、一定の闘争歴をもっていた。正淑から将軍の親書を受けて感激した彼は、ためらうことなく自分の所信を表明した。

「金日成将軍が金亨稷先生の子息金成柱（キムソンジュ）であることを知った以上、この張海友は亨稷先生にしたがったときのように、将軍にしたがいます」

張海友はその年齢や闘争歴から高ぶったり小事にこだわるような人ではなかった。正しいことであれば無条件に支持し、そのためならためらうことなく自分を犠牲にする人であった。彼は日本帝国主義とたたかうため三水共産主義者工作委員会を結成し、数名の同志を糾合したものの、正しい闘争方途を見出せずに、悩んでいた。

正淑は張海友に会って、その活動を高く評価した後、十分な準

備もなしに何人かの人が集まって組織の結成を宣する方法で祖国光復会の組織を結成することはできない、まず三水共産主義者工作委員会のメンバーが各階層の大衆の中に入り、彼らを祖国解放をめざす金日成将軍の思想で教育し、実践闘争を通じて鍛えたうえで祖国光復会の組織を結成し、各種の反日組織を設けるべきだと諭した。そして、朝鮮人民革命軍の国内進攻作戦に備えて敵の動きや兵力の配置状態などを探知する任務を与えた。

その日、正淑は新坡市内の敵の統治機関の配置状態と敵の動きを偵察し、夕暮れどきになって渡し場へ向かった。市場に来た川向こうの人たちがほとんど帰った後だったので、渡し場はひっそりとしていた。ところが、新乫坡警察署の特高が帰りの遅くなった船客を取り締まっていた。見知らぬ人や少しでも怪しげな者は渡河監視所に引きたててあれこれと検問し、体まで検査していた。

正淑にとってこの日の新坡行きは初めてであったので、彼の目から逃れることは難しかった。ところが、このとき、新坡に渡ってきて一日中つかず離れず正淑を護衛していた金在水がつかつかと刑事に近づいて行った。彼は刑事の目を引くため、わざと空の袋を上着の中に丸め込んで体をふくらませていた。怪しげな素振りを見た刑事はただちに彼を呼び止め、胸元をはだけようとした。すると、金在水は両手で胸元をかかえこんで応じなかった。ますます怪しいと思った刑事は彼を連れて渡河監視所の中に入った。その機を逃さず正淑は監視所の前を通過して無事渡し舟に乗った。しばらくして、刑事をさんざんじらした金在水は平手打ちをくら

って放免された。

正淑が去った後、三水共産主義者工作委員会のメンバーは大衆の中に入り、彼らを祖国解放をめざす将軍の思想で教育する活動とともに、敵情資料の収集も積極的に進めた。

正淑は、彼らが収集した敵情資料を支援物資とともにいちはやく司令部に送った。

同年 6 月、普天堡戦闘のニュースが桃泉里にも伝えられた。普天堡の夜空に燃え上がった炎は、暗雲に閉ざされていた祖国の地に射し込む解放の曙光であり、抑圧されていた人民の胸に明日への希望と信念を抱かせる再生ののろしであった。全国が感激に震え、「日本帝国主義が滅亡する日は遠くない」「金日成将軍が再び鴨緑江を渡ってくる日は朝鮮が独立する日だ」と喜びにわき返った。

日本侵略者は「後頭部をガーンと強打せられたる如く」「千日刈った茅一炬に帰せしめた観あり」と悲鳴をあげ、普天堡戦闘が「一般民心に重大な激化」をまねいたと恐怖におののいた。

普天堡戦闘のニュースを伝え聞いた正淑は、将軍に率いられて祖国の地に解放の銃声を響かせた戦友たちが羨ましくてならなかった。そして将軍と戦友を懐かしみながら、将軍から与えられた新坡ルート開拓の任務を早急かつ確実に遂行する決意をかためた。

普天堡で痛撃を受けて周章狼狽した日本侵略軍は、いっそうものものしい警戒網を敷いた。新坡の渡し場だけでも国境警備砲台の兵員を増強し、渡河する人たちを厳しく取り締まった。しかし

正淑は、普天堡戦闘があってから 1 週間後に再び新坡へ渡った。市場や裏通りは普天堡戦闘の話でもちきりだった。

この日、正淑は石田洋服店の裏部屋で新坡地区革命組織の中核メンバーの秘密会合を指導し、祖国光復会新[illegible]坡支会の結成を宣言した。

その後、正淑の精力的な指導によって、支会傘下に多くの分会がつくられた。

この年の 6 月は、正淑によって新坡の随所に祖国光復会の下部組織が生まれ、革命的高揚がもたらされたときであった。

6 月 22 日、正淑は張海友、林元三(リムウォンサム)、徐載逸(ソジェイル)らをメンバーとする新坡地区初の党グループを結成した。

正淑の指導のもとに、新坡地区の地下組織メンバーは、将軍の祖国解放構想を人民のあいだに広く宣伝し、広範な人民大衆を祖国光復会のまわりに結集させた。こうして、新坡地区にはクモの巣のような警戒網が張られているなかにあっても、目に見えない地下組織がつぎつぎと生まれていった。

正淑は光鮮(クァンソン)写真館、石田洋服店、泉そば屋、新坡宿屋、陶器商店、水車小屋など随所に秘密連絡所と秘密工作の場を定め、組織メンバーとの活動を進めた。これらの場所は組織メンバーとの接触、連絡の場であっただけでなく、遊撃隊への支援物資の集結・保管の場でもあった。とくに、正淑が直接出向いて結成した祖国光復会の五(オ)函徳(ハムドク)分会と阿安(アアン)里分会は、支援物資を朝鮮人民革命軍に送り、組織メンバーを国内各地に派遣する重要なルートであっ

た。

赴戦(プジョン)、長津(チャンジン)、新興(シンフン)、興南(フンナム)一帯へ向かうメンバーは主に阿安里分会責任者の家で、甲山(カプサン)、徳城(トクソン)、北青(プクチョン)、端川(タンチョン)一帯へ向かうメンバーは家族ぐるみの分会組織である五函徳宿屋で、任務を受けて派遣されていった。この時期、正淑は三水郡の好仁(ホイン)地区にも組織を拡大していった。

正淑は組織の安全をはかってアジトをつぎつぎと変えて利用し、自らもいろいろと変装して活動した。そのため、新坡へ数十回も出入りしたが、「フクロウの目」呼ばわりされていた新乫坡の警官たちにはまったく気づかれなかった。国内からの大量の支援物資は新坡を経由して朝鮮人民革命軍に送られ、多くの地下工作員と組織のメンバーが新坡を経て国内各地に潜入した。

正淑はまた、国境周辺の敵情をもらさず探知し、そのつど司令部に通報することによって、朝鮮人民革命軍の軍事作戦遂行に大きく寄与した。

普天堡戦闘後、日本侵略者は総督府で緊急会議を開き、大規模な「討伐」計画を立てた。この計画によって朝鮮駐屯第 19 師団所属咸興(ハムフン)第 74 連隊が恵山に到着したという情報を入手した正淑は、これをいちはやく司令部に報告した。報告を受けた将軍は、ただちに国内と国境一帯の地下組織に、恵山に集結した敵の動きを探知する任務を与えた。

正淑は新坡地区のすべての地下組織を動かして敵の兵力数と企図をすばやく探知した。敵の「討伐」企図を完全に破綻させるた

めには、彼らの渡河地点と渡河日時を正確に探り出さなければならなかった。敵は毎日、恵山から一個部隊ずつ鴨緑江を渡らせていた。ところが、組織のメンバーと人民が探知したところによれば、敵は日中に渡河させた部隊を夜間にまたひそかに恵山へ引き戻らせていた。これは朝鮮人民革命軍の目を欺くための偽装渡河に違いなかった。

正淑は、敵の渡河地点と日にち、その兵力を正確に探知するため地下組織を積極的に活動させた。

その結果、敵は恵山から新坡に兵力を移動させて鴨緑江を渡河することになっており、それに利用されるトラックは 70 台、兵力は 1,500 余名、渡河決行は 6 月 27 日と 28 日であることを知り出した。この情報はただちに司令部に報告された。

新坡から鴨緑江を渡った敵の大兵力が間三峰方面へ向かった 2 日後の 6 月 30 日、この日の間三峰戦闘は、朝鮮人民革命軍の大勝利に終わった。朝鮮人民革命軍を「全滅」させると広言した敵は、200 名ほどの敗残兵をかき集めて退却した。「カボチャの頭」にまつわる話が広がったのはこのときのことである。

間三峰戦闘の勝利に大きく寄与した地下組織の先頭に立っていたのは金正淑であった。

特　使

1937 年 7 月初、金正淑は司令部の連絡員を通して金日成将軍からの新たな任務を伝達された。

伝達された任務は、至急国内に入って地下組織と愛国者に、今後の闘争目標と戦略・戦術を明示し、分散して活動している革命家とすべての反日団体メンバーを祖国光復会の組織に結集させ、党創立の準備活動を推進することであった。

とくに豊山(プンサン)地区へ行って革命組織の影響力が及んでいる天道教徒の代表をソウルで開催される天道教徒の大会に派遣して、全国の天道教徒に革命的影響を与えるようにし、また国内の地下組織から報告があった李周淵(リジュヨン)と李英(リヨン)、李鏞(リヨン)に会って工作する任務が指摘されていた。これは、反日民族統一戦線運動と党創立の準備活動を国内に拡大し、東海岸一帯に革命のとりでを築くための重大な課題であった。

実体をつかんでいない豊山地区の天道教徒や、不慣れな国内各地の革命家、反日愛国闘士にたいする工作は困難かつ慎重を要するものであった。

天道教は、1860 年に 1 世教祖崔済愚(チェジェウ)により、「人乃天」「輔国安民」を理念として創始され、2 世教主崔時亨(チェシヒョン)、3 世教主孫秉熙(ソンビョンヒ)を経て当時は 300 万の教徒を擁する全国的な宗教団体であった。「斥洋斥倭」「輔国安民」の旗をかかげて甲午農民戦争[15]や義兵

闘争[16]、3・1人民蜂起[17]を経てきた天道教は、この頃になって上層部が改良主義的立場に変質していた。崔麟（チェリン）は投獄されて親日派に転落していたが、絶対多数の教徒はさまざまな組織を結成して反日闘争を展開していた。

このような実態を推し量り、300 万の天道教徒をすべて祖国光復会に結集する構想をあたためていた将軍は、1936 年の冬、獅子（サジャ）峰（ボン）密営で朴寅鎮（パクインジン）道正に会い、3 日間にわたりその実現方途について論じ合った。そのとき朴寅鎮は将軍の祖国解放構想に全面的な賛同を示し、100 万の天道教青年党員を朝鮮独立の聖戦に出動させる決意を表明し、今後緊密な連係を保つことを確約した。

その後、彼は天道教中央大会が開かれるソウルに行き、天道教中央の上層部にいた崔麟と会談した。

祖国光復会に加わってたたかおうという朴寅鎮の提唱にたいし、崔麟は改良主義的で親日的な詭弁を弄して受け入れなかった。

憤慨した朴寅鎮は崔麟と決別して豊山に帰り、毎年おこなっていたソウルへの穀物の拠出を取り止め、ソウルの天道教青年党本部の常務を務めていた役員も呼び戻してしまった。

その結果、天道教徒の祖国光復会運動は、朴寅鎮が道正を務めていた嶺北（リョンブク）地方に局限される岐路に立たされた。これは、300 万の天道教徒をすべて祖国光復会のまわりに結集しようとする将軍の構想とは距離があった。

一方、正淑の工作対象の李周淵は、国内各地に支会を設けて活動した反日愛国団体—新幹会[18]に関与し、端川農民暴動を主導し

て逮捕され、獄中生活もした人物であった。

1907 年にハーグの万国平和会議に参加し、割腹自決した愛国烈士李儁（リジュン）の息子李鏞は、父親の悲報に接するや、その愛国精神を引き継ぐ決意で中国に入り、吉林省朝鮮人「懇民会」の総務を務め、浙江省へ行っては陸軍士官学校に通い、10 月社会主義革命後には極東地方に居を移して「韓人社会党」にも関与した。彼の経歴は複雑だった。「高麗（コリョ）義勇軍」を組織してソ連赤軍とともに白衛軍やシベリア出兵の日本軍とも戦い、また「黒河事件」という血なまぐさい同族の派閥争いを目撃して、民族の恥辱に身もだえした。彼は決意を新たにして 1931 年の秋、東満州へ渡ったが、日本警察に検束され、当時は居住制限の制裁として、故郷の北青（プクチョン）で「杜門不出(外出禁止)の罰」を受けていた。

李英も李鏞と同じような人生を歩んできた人物であった。3・1 人民蜂起に参加し、その後「ソウル青年会」(ソウル派)に属して青年運動や朝鮮共産党(1925 年創立)に関与したかどで西大門（ソデムン）刑務所で 4 年間服役した。出獄後は、北青一帯で共産党再建運動や労組、農組運動に加担して再び逮捕され獄につながれた。

異なる経歴の持ち主ではあったが、彼らはいずれも試練と挫折を体験し、正しい闘争の道に導く指導者に会えずにさ迷い、当時にいたっては闘争意欲と勇気さえも失っていた。

正淑は、司令部の伝令である金鳳錫（キムボンソク）、それに朴正淑（パクジョンスク）とともに豊山へ向かった。豊山では天道教徒で朴寅鎮の弟子であった第 7 連隊第 4 中隊の隊員李昌善（リチャンソン）の案内を受けた。

李昌善の紹介で正淑と対面した天道教豊山宗理院院長元忠熙（ウオンチュンヒ）は、その日、前年 12 月の中央天道教徒大会に参加した教導者の会合を催した。

会合は清水を供えて24字の呪文を唱えることからはじまった。それは朴寅鎮道正がソウルから帰った後、長白県十七道溝王家洞で天道教徒の会議を開き、その年を天道教の新紀元の年に定め、それにふさわしくつくり直したものであった。「耀光日星、輔国安民、大同団結、一心同体、祖国光復、地上天国」というもので、日と星、燦然と光放てば国と人民は安寧を保ち、その光のもとにすべてが結集し一心同体となれば、祖国の解放を成し遂げ、地上の天国を創れるという意味である。会議のあと、元忠熙は参会者に、金正淑女史は金日成将軍がわれわれ天道教徒につかわされた特使だ、と紹介した。

彼らに初対面のあいさつをした正淑は、本年に開催される天道教の中央記念行事にもう一度代表団を送るのがよいという将軍の意見を伝えた。そして2,000万の朝鮮民族が今日まで植民地奴隷の境遇から抜け出せずにいるのは、全民族が一致団結して日本帝国主義とたたかうことができないからだ、金日成将軍は、国を愛し日本帝国主義を憎む者であれば誰であれ、一つの隊伍に団結させるために祖国光復会を結成したのだとして、こう語った。

——われわれがソウルに代表団を派遣するのは、決して崔麟のような者を立ち返らせるためではない。崔麟一派とその影響下にある人たちを区別しなくてはならない。崔麟のような者はあくま

で孤立させるべきだが、彼にたぶらかされている大多数の天道教徒はすべて教育し救い出すべきである。すべての天道教徒と全民族をかたく団結させ、その団結の力で日本帝国主義を打倒しようというのが金日成将軍の意図である。

正淑の話を聞いた参会者はみな、大海原のような度量の持ち主である金日成将軍こそ朝鮮の真の「ハンウルニム」だとし、その年の丁丑年記念行事に以前にまさる大型の代表団をソウルに送る問題、天道教青年党中央本部の常務であった者を再びソウルに派遣し、当該地の教導者たちや各地の宗理院に将軍の反日民族統一戦線路線を伝達する問題、平安（ピョンアン）南道と咸鏡（ハムギョン）北道、黄海（ファンヘ）道をはじめ全国各地の宗理院に当方の立場を知らせて中央行事で足並みを揃える問題などを討議、決定した。

こうして正淑は、将軍の特使として第一の任務を遂行した。

正淑が工作すべき李周淵や李鏞、李英などの人物は、恒常的に日本官憲の監視を受けている「要注意人物」であった。

しかし正淑は、臨機応変の知略をもって、敵の警戒が張り巡らされているどまん中で彼らに会い、国内の闘士に送る将軍のメッセージを伝え、たたかいの道に導いた。

監獄で病に倒れ端川郡松坡（ソンパ）里の道徳寺の僧房で病床についていた李周淵は、金日成将軍の指示で先生に会いに来たという正淑の言葉を聞くや、がばと起き上がった。

正淑は彼の手をとり、将軍は国内で活動する同志たちを一時も忘れておらず、今回も同志たちと今後の活動方向や対策を協議し

合うようわたしをつかわしたのだと言った。そして、将軍が示した朝鮮革命の性格と反日民族統一戦線路線、朝鮮民族自身の力で祖国の解放を達成するという南湖頭会議の精神、国内の党組織を急速に拡大し、革命組織にたいする整然とした組織指導体系を確立する方針などを伝えた。

李周淵は、獄中のときから暗中模索していた問題が解けて展望が開けたと喜び、別れるときには自信にあふれた顔で正淑を遠くまで見送った。

同年８月に再び国内の地を踏んだ正淑は、端川郡石隅(ソクウ)里にある李周淵の親戚の家で彼と再会し、平壌(ピョンヤン)に出て工作する任務を与えた。

その後、李周淵は平壌に居を移し、平壌ゴム工場や穀物加工工場などの各工場に地下組織を拡大し、南浦(ナムポ)、江西(カンソ)地区の共産主義者たちとも連係を結んで活動した。祖国が解放された後、彼は北朝鮮臨時人民委員会総務部長を務め、後日は内閣副首相として活躍した。李周淵にとって正淑との対面は、人生の座標を定め直す契機となった。

端川を後にした正淑は、李原(リウオン)を経由して遮湖(チャホ)に行った。

正淑は、敵の厳しい警戒をかわすため、観光客でにぎわう「赤壁崗」で李鏞に会った。李鏞は、自分が組織した反日会メンバーの家に来ていたとき連絡を受けて出てきた。彼は最初、あたりを見回しながらいぶかしげなまなざしだったが、金日成将軍の指示でその言葉を伝えるため白頭山から来たのだという正淑の話を聞

いてはじめて警戒心を解き、感激の色を浮かべた。

「祖国光復会の会長であり、朝鮮国の正統領である抗日の名将金日成将軍が名もないわたしのようなものを知って、こんな死地に大事な工作員を送ってくださるとは!」

正淑は彼に、われわれは李鏞先生が父上の李儁先生の貴い愛国精神をあくまで守り、国の解放をめざすたたかいに一命を尽くすであろうことを少しも疑わないとし、祖国光復会の創立宣言と10大綱領について説明した。

李鏞は将軍の祖国解放構想に深く感動し、これからは将軍に忠実な戦士となって愛国精神をあくまで守り、祖国解放の聖業に心身ともにささげるという自分の決意を将軍に伝えてほしいと頼んだ。

正淑はその後も国内に出て来たときに彼を訪ね、李鏞先生がたたかいをつづけているのは非常にりっぱなことだとした将軍の言葉を伝達した。その後、李鏞は、日本帝国主義の暴圧のなかでもゆるぎなく革命闘争の道を歩み、解放後には朝鮮の初の都市経営相を務めた。

その日、正淑は李鏞が仕立てた馬車に乗って遮湖を後にし、北青に足をのばした。

北青郡青興(チョンフン)里で祖国光復会北青地区の責任者に会い、この一帯の敵情と地下組織の実態を聞き取った正淑は、初期の共産主義運動家であった李英の最近の動向についてあらためて詳細に調べた。

李英に会いたいという正淑の言葉を聞いた組織の責任者は驚き、それは危険だといってかぶりを振った。日本の軍警が警戒の目を張りめぐらせているところで「要注意人物」に会うというのは冒険に違いなかった。

しかし正淑は、将軍から与えられた任務を遂行しようという一念に燃えて、人々が一番多く遊びにくる青興里の松林で、真昼に李英と対面するという大胆な計画を立てた。

李英は疲れ切った陰気な顔をして現れた。正淑が将軍の派遣した工作員であることを知った彼は、正淑の手を両手で握りしめ、「どうしてそれを早く言ってくれなかったのですか」と涙ぐむのだった。

国内の反日運動家に送る将軍のメッセージを伝達された李英は、もう疑問もないし恐れることもない、金日成将軍が望む道にすべてを尽くす、と悲壮な決意をかためた。

その後、彼は正淑に言われた通りソウルへ行き、反日運動関係者たちに将軍の革命路線を宣伝し、同志を糾合して「スターリ団」「山岳隊」などを結成した。そしてソウルを中心に江原（カンウオン）道、慶尚（キョンサン）北道、平安南道一帯へ組織網を拡大していった。

祖国が解放されると李英は、将軍の新しい朝鮮建設路線にしたがって献身的に働き、共和国創建後には、最高人民会議の責任ある地位で活動した。

将軍の特命をおびてその実行のために正淑が歩んだ厳しく遠い道のりは、国内の闘士を将軍の導く闘争の道に進ませた道のりで

あり、また後日、ソウルや東京に祖国光復会の組織網を拡大すべき闘士を育て上げた意義深い道のりでもあった。

　正淑は豊山へ向かう途中、文藻（ムンジョ）里陽地（ヤンジ）村の朱炳譜（チュビョンボ）の家に留まって彼を革命的に教育し、豊山秘密根拠地に立ち寄っては小部隊と工作班の活動を指導した。そして洪君（ホングン）地区に行って、洪君ケーブルで働きながら李昌善の指導を受けていた某労働者を教育して組織メンバーの一員に育て、中日戦争勃発のニュースを聞いて帰隊する途中、把撥（パバル）里で、黄水院（ファンスウオン）ダム工事場で働いていた李仁模（リインモ）に会って闘争の進路を示した。

　正淑が去った数日後、彼女が金日成将軍によって派遣された朝鮮人民革命軍の工作員であることを知った李仁模は、なぜその時に教えてくれなかったのかと李昌善をなじり、それを知っていたなら是が非でもついて行って革命軍に入隊したはずだと悔しがったという。

獄中からの手紙

　中日戦争を引き起こした日本帝国主義は、革命軍と人民との連係を断ち切るため「集団部落」の設置に狂奔した。

　金日成将軍は、直面した情勢に対処して長白一帯と国内各地に派遣されていた政治工作員と地下組織の責任者を白頭山密営に呼集した。

司令部の連絡員とともに密営に到着した金正淑は、下崗区や新坡一帯、そして豊山、端川、利原、北青などでの活動について将軍に報告した。

将軍は、正淑が司令部の意図どおり、課された任務をりっぱに実行したと称賛した。

獅子峰密営では政治工作員および地下組織責任者の会議が開かれた。この会議で、将軍は当面の情勢に対応して積極的な活動を展開する課題とその遂行方途を示した。

正淑には、すでに掌握した桃泉里と新坡一帯を本拠にして、国内に革命のとりでを築く任務が課された。

桃泉里に戻った正淑は、組織の中核メンバーに、獅子峰密営での会議で将軍が示した方針を伝え、白色テロに対処する対策を立てた。

各地下組織は、敵の「集団部落」策動に対処して組織のメンバーを敵の機関に潜り込ませ、彼らを通じて地下組織を守り、敵の密偵や手先の一挙一動を注視する一方、組織のメンバーが地下工作の原則を守って警戒心を高めるよう綿密に手配りした。こうして、下崗区や新坡一帯の敵の支配機構は、深く潜入した地下組織メンバーの活動によって混乱に陥り、少なからぬ支配機構は朝鮮人民革命軍の末端機関のごとき様相を呈してきた。区長の鄭東（チョンドン）哲（チョル）は、警察署長、税関長、面長などと「義兄弟」の契りを結んで敵の秘密を常時探り出していたが、この「義兄弟」には新坡から派遣された特高まで加わっていた。十三道溝警察署の管下にも2、3 名の祖国光復会特殊会員が潜入し、区長や十家長もほとん

どが地下組織のメンバーだった。

新坡地区には、正淑が掌握して育てた中核的な祖国光復会会員によって特殊分会が組織され活動していたが、彼らの擬装ぶりは堂に入ったもので、敵はもとより、祖国光復会新乫坡支会の責任者であった張海友でさえ、祖国が解放されてからようやく彼らが祖国光復会の特殊会員であったことを知ったほどである。

その過程には、はらはらさせられる数々の危険がともなった。

桃泉里で地下工作にあたっていた 1937 年 8 月、正淑は逮捕された。桃泉里の婦女会員たちが朝鮮人民革命軍の出版所に送ろうとしていた紙束が「靖安軍」の捜索で発見されたのが原因だった。

8 月初めのある日、正淑は幾人かの婦女会員が新坡の市場で買い入れてきた紙束や他の支援物資を前にして仕事の相談をしていた。ところが、そのとき人民革命軍の行方を捜して山中をさまよい無駄骨を折った「靖安軍」が村にやってきた。腹いせに家々を回り歩いて略奪を始めた彼らは、婦女会員たちが集まっていた家に押し入って隅々まで捜索しているうちに、納屋から例の紙束を発見した。中隊長はたちまち殺気立って拳銃を引き抜き、「共産党のすみか」だと断言し、主人は誰かと質した。正淑は平然とした態度で拳銃を払いのけ、彼に問い返した。

「何の根拠があって共産党だと断定するのか」

「これが証拠ではないか」

「これは『住民台帳』に使う用紙だ。あなたたちが『住民台帳』を作って来いと言ったではないか」

「それならこの紙をなぜ納屋に隠して置いたのだ」
「考えてみなさい。ここはいつ共産軍が降りてくるか分らない所だ。外に出しておいて共産軍に持って行かれてもよいのか」
言葉に窮した中隊長は「では、なぜこの家に隠して置いたのか。区長は何をしているんだ」と大声を張りあげた。
「区長から安全なこの家に隠して置くようにと頼まれたからだ。それがいけないとでもいうのか」
中隊長はすっかり逆上してしまった。
「怖がりもしないでつべこべ言うのを見ると、共産軍のスパイに違いない。旅団指揮部に行って調べよう」
こうして捕捉された正淑は、「靖安軍」の旅団指揮部がある腰房子へ護送された。
「討伐」で毎日のように無駄骨を折っていた中隊長は、「共産軍の女」を逮捕したと旅団に報告した。そして、革命軍工作員だという自白を取りつけようと残忍な拷問を加えた。しかし正淑の口からは何の秘密も引き出すことができなかった。
正淑の前に現れた某「靖安軍」は、流暢な朝鮮語で、わたしは「良心的な人間」だ、あなたが工作員であることを認めて組織ルートさえ教えてくれれば無事釈放されるよう手を尽くしてやる、もしこれに応じなければ「靖安軍」はあなたを死刑に処するだろう、と脅かした。
正淑は、自分が工作員だと自白するまで彼らは食い下がってくるだろう、犠牲になることを覚悟しなければならない、自分はい

ま犠牲になるか脱出するかという二者択一の岐路に立たされている、と実感した。

正淑が監禁されていたのは腰房子のある農家だった。庭には兵士が一人歩哨に立っているだけだった。歩哨をかたづけて脱出するのは難しいことではなかった。けれども正淑は脱出の道を選ばなかった。もし脱出すれば、自ら革命軍の工作員であることを認めることになり、この家の老夫婦や、自分を保証してくれた桃泉里の人々は報復を免れない。地下組織は白色テロの旋風に巻き込まれ、ひいては将軍が重視する新坡ルートが危険にさらされることになる。正淑にとってこれらすべてを救うことは命にも代えがたいことであった。最期を覚悟した正淑は組織あてに手紙をしたためた。

「安心してください。

わたしは死ぬでしょう。けれども組織は生きつづけるでしょう。わたしの財産のすべてである２元を送ります。組織の資金にあててください」

この手紙は翌日、農家の老婆を通じて桃泉里の地下組織に伝えられた。

不安にかられていた組織のメンバーは、思いも寄らぬ手紙を受け取って涙ぐんだ。そして命をかけて正淑を救出する決意をかためた。

組織はメンバーを動かして緊急救出作戦を繰り広げた。代表団を「靖安軍」部隊の本部に送って供応する一方、無実の良民を不法逮捕したことに強く抗議し、即時釈放するよう要求した。

「靖安軍」部隊は移動にかこつけて正淑を十四道溝警察署に移送した。

組織では釈放の方途を慎重に討議した末、十三道溝の警察署長と談判する任務を鄭東哲に与えた。

そのころ鄭東哲と「義兄弟」の契りを結んでいた十三道溝警察署長は、革命軍の軍事活動に恐れをなして縮み上がっており、日本人に不満も抱いていた。それを知っていた鄭東哲は彼に会って、いま十四道溝警察署に拘留されている厳玉順は金日成将軍が派遣した工作員だ、彼女の救出に力を貸してもらいたい、まず、十四道溝からあなたの管轄下にある十三道溝に移すのだ、と迫った。十四道溝警察署は一級高い警察署である十三道溝警察署に従属していたので、移送は難しくはなかった。

正淑は両手を縛られたまま、桃泉里部落を通過して十三道溝警察署に護送されることになった。

後日、鄭東哲はそのときの状況を次のように回想している。

「午後2時頃であった。……

縄をかけられた金正淑同志が警官の厳しい警戒のもとに桃泉里の大道を歩かされていた。全身に残忍な拷問の跡が歴然としていた。いつも端正に身につけていた白いチョゴリと黒いチマはさんざんに裂かれていた。

村人は道端を埋めて彼女を見つめた。……金正淑同志は堂々としていた。敵の銃剣に囲まれて素足で歩いていたが、昂然と頭をもたげ、いつも強靭な意志と英知に輝いていた両眼は、依然とし

て闘志と信念に燃えていた。……

ゆっくりと足を運んでいた金正淑同志は大衆の前で歩みを止め、頭を下げてあいさつをした。その様子に、女性も、青壮年も、老人も、すべての村人がすすり泣いた。……わたしはそのとき、心のなかでこう叫んだ。

(金日成将軍がああいう人を育てたのだ!)……」

鄭東哲だけでなく、桃泉里のすべての人が正淑を涙のうちに見送りながら考えた。

(革命家とはまさにあのような人間なのだ。人間はあのような生き方をしなくてはならないのだ)

ある老婆は、わらじを持って駆け寄り、血のにじんだ正淑の足にはかせながら警官をののしった。

「うちの玉順になんの罪があって引き立ててゆくんだ。うちの玉順を共産党だと言ってつかまえていくというが、玉順のような人が共産党なら、わたしも共産党についていくよ!」

鄭東哲はその足で正淑のあとを追い、十三道溝警察署へ行って釈放を求めた。署長は500名分の良民保証書を持ってくれば、正淑を「良民」と認めて釈放すると言った。これは、後日、上級から追及を受けた場合、その責任を回避する証憑を残しておくためであった。警察署長は、鄭東哲との「友情」に絡まれ、体面上こう約束したものの、それはとうてい不可能だろうと考えていたのである。

事実、200戸余りにすぎない桃泉里村で500名の良民保証書を

つくるというのは、無理もはなはだしい要求だった。「不穏分子」とみなされた人を良民と認める保証書に拇印を押したがらないのは当然の大衆心理であった。ところが、鄭東哲はたった一日のあいだに500名の良民保証書を取りそろえて署長の前に差し出した。署長は目を丸くした。

金日成主席は後日、これについて次のように述懐している。

「金正淑が人民からこのような信頼を受けることができたのは、彼女がわが身を惜しまず奮闘した結果だった。彼女はなにごとであれわが身をささげ、死を決する心構えで働いた。それで危険な境遇にぶつかっても生きのびることができたのだ。金正淑は、人間にたいする燃えるような愛情をもった人であり、他人のために犠牲になるのをいささかもためらわなかった。同志のためなら水火をいとわずやり遂げるのが彼女の天性なのだ」

良民保証書にしばらく目を通していた署長は、どうすることもできず正淑を釈放した。

これを知った桃泉里の村人はこぞって正淑を出迎え、喜び合った。ひどい拷問でやつれた正淑のために、ある老人は何年も使わずにおいていた蜂蜜を壷ごと持ってきた。またある女性は、祝い事のためにしまっておいたもち米で餅をつくってきた。地下組織では正淑の健康を気づかってゆっくり養生するよう勧めた。しかし正淑は、将軍から与えられた革命任務を果たすまでは休む権利がないと言い、地下組織のメンバーに会ってその間の活動状況や新たに入手した敵情を聞き取った。

胞胎山のふもとにある秘密連絡所で司令部の連絡員に会った正淑は、将軍の安否を尋ね、司令部の指示を早く伝えてくれるよう催促した。

将軍は正淑が逮捕されたという報告が入る前、正淑に、国内に入って白頭山密営と獅子峰密営で提示された新たな方針と司令部の意図を小部隊と政治工作員、地下組織に伝えてその活動を指導する一方、具体的な実状を調べる任務を与えていたのである。この任務を遂行するために巡回すべき地帯は、狼林（ランリム）、赴戦から東海岸沿いの端川、虚川（ホチョン）にいたる広い地域だった。

ところが正淑は、拷問の後遺症で身を動かすのもやっとの状態にあった。連絡員は、司令部にもどって実状を詳しく報告するから、健康を回復してから出かけるか、さもなければ他のメンバーを行かせるのがよいと助言した。

しかし正淑は、将軍がわたしを信頼して任務を与えたのに、体が少々悪いからといって、その実行を遅らせたり他の人に任せたりしては、将軍のためにすべてを尽くしてたたかう真の革命戦士とはいえない、と言うのだった。

8 月上旬のある日、正淑は警戒の厳しい敵陣を突破して、遠く100 余里もの国内政治工作の途についた。

正淑は新坡を経て慈江（チャガン）道狼林郡仁山（インサン）里で政治工作員と地下組織の責任者たちに会った後、蓮花（リョンファ）山脈の芝草（チチョ）嶺を越え、玉連（オクリョン）山にある赴戦嶺秘密根拠地の密営に足を向けた。

この地で活動する小部隊のメンバーに会い、白頭山根拠地を狼林山脈と赴戦嶺一帯に拡大させるという将軍の意図どおり、根拠

地をより強固にすることに努め、この一帯の政治工作員と地下組織責任者たちに会っては、祖国光復会の組織を拡大し、根拠地周辺地域の青年によって生産遊撃隊を組織する課題を提示した。

正淑は、新興地区秘密根拠地の設営に力を傾けた。これは、咸興、興南をはじめ日本の軍需工場が集結している東海岸地区に党および祖国光復会組織と各種の反日大衆団体を拡大し、とくに労組、農組を革命的に改編し、愛国的人民を政治的、思想的に覚醒させるうえできわめて重要な意義を有していた。

新興地区に行った正淑は、既設の密営を見て回り、今後設置すべき密営の位置について討議し、その日の夜には、この一帯で活動する朝鮮人民革命軍小部隊、工作班メンバーの会議を開き、赴戦嶺山脈をよりどころにして武装闘争を国内各地に拡大しようとする将軍の構想実現において新興地区秘密根拠地がもつ意義を強調した。

正淑は長津（チャンジン）郡高台山（コデサン）密営で小部隊メンバーに会った後、新興炭鉱村へ行って各組織の責任者、炭鉱労働者とその家族たちの胸に革命の火種をつけ、興南地区と新興炭鉱地区の地下組織責任者に会っては、将軍の反日民族統一戦線思想を説明した。

こうして、新興地区をはじめ、興南、咸興地区の労働者階級の組織は拡大され、新興地区秘密根拠地を構築する活動も成功裏に推進された。

新興地区での工作を終えた正淑は、その足で東海岸地区の工作地に向かった。

洪原（ホンウオン）で政治工作員に会って農組を祖国光復会の傘下組織に発

展させる課題を与えた後、北青、利原、端川を経て厚峙嶺（フチリョン）秘密根拠地にたどり着いた。

正淑の歩んだ道は、日本官憲の警備が網の目のように張りめぐらされ、密偵や特務が随所に張り込んでいる危険な道であった。

厚峙嶺を越え、豊山と三水を経て9月中旬に桃泉里に着いた正淑は、それまでの政治工作状況を連絡員を通じて将軍に報告した。報告を受けた将軍は正淑の活動を高く評価した。

100余里にわたる正淑の遠征路は、同年9月の将軍の新興地区進出の布石となった。

同年10月、正淑は司令部から帰隊の命令を受けた。

多くの村人たちが、桃泉里を後にする正淑を見送った。

正淑が胞胎山の曲り道を登って森林近くまで来たとき、ついてきた婦女会員たちが口々に声をかけた。

「どこへ行くの……便りを寄こしてくださいよ!」

正淑は振り返り、顔をほころばせて高く手を振りながら答えた。

「白頭山の方から銃声が響いたら、正淑もそこで金日成将軍におともしてりっぱに戦っていると信じてください!」

10月中旬、将軍がいる富厚水付近の密営に着いた正淑は、新しい軍服に着替えて将軍のもとに参じた。

地下工作の任務を果たして帰隊した正淑を、丸太造りの司令部の前で将軍が出迎えた。

「ご苦労だった。りっぱだ……本当にりっぱだ! わたしは信じていた。きみがりっぱにたたかってこうして帰って来るに違い

ないと信じていた」

　将軍は、正淑がその間、貴重な敵情資料や多量の支援物資を送って普天堡戦闘や間三峰戦闘をはじめ幾多の戦闘勝利に寄与し、鴨緑江沿岸の国境地帯と国内深部の東海岸一帯に祖国光復会の組織を拡大し、軍事・政治活動を有利に展開できるようにしたことを高く評価した。

五　厳しい試練に耐えて

戦友の死を無駄にすまじ

金正淑が地下工作の任務を果たして帰隊したころ、情勢はきわめて厳しく複雑さを呈していた。

1937 年 7 月 7 日、中国関内への全面的な侵攻を開始した日本侵略軍は、「後方の安全」をはかるという口実のもとに、朝鮮人民にたいするファッショ的暴圧と朝鮮人民革命軍にたいする「討伐」攻勢をかつてなく強化した。

金日成将軍は 7 月の白頭山（ペクトウサン）密営での朝鮮人民革命軍主力部隊の指揮官会議をはじめ一連の会議、そして 9 月に発表した『全朝鮮同胞へのアピール』で、急変する情勢に対処して抗日武装闘争を強化し、朝鮮革命全般を新たな高揚に導く方針を示した。それはまず、朝鮮人民革命軍の各部隊が国境地帯と国内で武装闘争を積極化して敵の背後をたたき、全国各地で全民抗争の準備を急ぐことであった。

1937 年の冬期作戦と 1938 年の春期攻勢は、この戦略的・戦術的方針を貫徹するための重要な作戦であった。将軍は地下組織をうちかため、部隊の新たな作戦遂行に必要な被服と食糧を確保するため、各地に小部隊を派遣した。

将軍のこの新たな戦略的方針を受けとめた正淑は、帰隊後、数日も経たないうちに、再び地下工作の任務をおびて佳在水村へ向かった。任務は「恵山事件」による敵の弾圧から佳在水の地下組織を保全する対策を至急講じ、当地で進めていた小部隊の被服と食糧調達工作を指導することであった。

佳在水村に来た正淑は、地下組織のメンバーが敵の弾圧のなかでも組織を保全し、遊撃隊への支援活動を順調に進めていることを称賛した。そして彼らに、敵の白色テロが激化している状況下で地下組織を保全することは何よりも重要だ、……しかし銘記すべきことは、地下組織は闘争のために必要なのであって、保全するためのものではないということだ、革命組織は闘争のなかで強化されるのだ、と強調した。

正淑は地下組織をさらに戦闘的な組織にする活動を進めるかたわら、小部隊の被服および食糧調達工作を指導した。

任務を果たして帰隊した正淑は、裁縫隊員とともに冬期用軍服の縫製に取り組んだ。昼夜兼行の作業によって、部隊では短時日のうちに冬期作戦に必要な軍服や背のう、弾帯、脚半などを一切整えることができた。

正淑はまたも部隊と別れなければならなくなった。主力部隊を率いて濛江方面へ進出することになった将軍は、正淑に裁縫隊を引率して長白に留まり、国内と長白一帯の組織の活動を指導しながら、翌年の春期作戦のための準備を整える任務を与えたのである。

残留することになったメンバーは寂しさを隠しきれなかった。部隊の行軍路は遠く、今回の遠征が春までかかることを知っていたからである。

部隊にもどって間もなかった正淑であってみれば、将軍に随行したい気持ちは誰にもまして切なるものがあった。将軍の身近で、部隊とともに戦うことは、敵中工作の日々にも正淑が胸に秘めつづけていた切なる願いであった。その気持ちを察した指揮官の一人が、正淑を遠征に参加させるよう将軍に進言しようとすると、正淑はそれを制止した。

正淑が抱いていた希望と念願、喜びと幸せは、ひたすら将軍の意図と構想をよりりっぱに実現させようというひたむきな思い以外にはなかった。部隊が出発するとき、正淑は佳在水の地下組織一同から贈られた毛織りのシャツをほぐして編んだ手袋を伝令の背のうに入れ、寒くなったら将軍に使ってもらうようにと頼んだ。

この年の冬、長白県に大雪が降った。密営は雪に閉ざされ、朝になると穴を掘らなくては外に出られなかった。裁縫隊員が居所とした干巴河子密営は、２㎞の間隔を置いた２棟の丸太小屋からなっていた。一方の棟には正淑と一部の女子隊員が、もう一方の棟には朴洙環（パクスファン）をはじめ女子隊員がいた。この密営の存在は極秘にされていた。正淑は密営の秘密を保つことに細心の注意を払いながら、国内と長白一帯の祖国光復会組織の指導に専念した。

そうするうちに 1938 年が明けた。ところがそのとき、密営に思いもよらぬ大きな不幸が襲ってきた。「恵山事件」で破壊され

た地下組織の被害状況を調べ、組織を立て直すため司令部が派遣した馬東熙（マドンヒ）、張曽烈（チャンツンリョル）が、金泰善（キムテソン）の密告によって逮捕された。馬東熙は舌をかみ切ってまで司令部と組織の秘密を守ったが、張曽烈が拷問に耐えきれず、十九道溝のアジトを密告したため、そこにいた池泰環（チテファン）と曹開九（チョゲグ）が逮捕された。かたく口を閉ざした池泰環とは反対に、曹開九は干巴河子の密営をばらしたのである。

1 月のある日、変節漢の「道案内」のもとに「討伐隊」が干巴河子宿営を奇襲した。

朴洙環をはじめ女子隊員が敵を発見したときには、すでに密営は包囲されていた。熾烈な銃撃戦が繰り広げられた。正淑がその銃声を聞きつけたのは、その日の軍事・政治学習を終えたときだった。正淑は直ちに隊員に戦闘準備をさせ、銃声の響く方へ駆けつけた。けれども、腰まで埋まる雪をかき分け、倒木を越えながら、密営が見下ろせる小高い丘まで来たときには、すでに銃声が止み、密営は黒煙と炎に包まれていた。丸太小屋の周りには「討伐隊」の荒々しい足跡が残っていた。

正淑は１本の大樹の下に手に手を取り合って倒れている６名の戦友たちを発見した。とっさに駆け寄ってその戦友たちを抱き起こしてゆさぶり、もどかしげに名を呼びつづけた。

正淑の目からとめどなく涙がこぼれ落ちた。戦友たちの体はすでに冷えかかっていた。大樹の周りには薬莢が散らばっていた。隊員たちは銃弾が尽きるまで戦って壮烈な最期を遂げたのである。きぬた棒で日本人巡査を打ち倒し、銃を奪って遊撃隊に入隊した

朴洙環、名射手として名を馳せた許順姫（ホスンヒ）、夫(馬東熙)の後を継いで入隊した金容金（キムヨングム）、そして金相国（キムサングク）……。彼女たちはみな、ひたすら金日成将軍を民族の太陽と仰ぎ、将軍に忠実な戦士になろうという誓いを立て、寒風吹きすさぶ峻嶺、血戦の火の海をともにかき分けてきた貴い戦友たちであった。生死をともにしようとかたく誓い合った戦友たちが、あれほど望んだ祖国解放の日を見ることなく、名も知れぬ異国の雪原を血で染めて倒れたのである。

立ち木には戦友たちが最後の力をふりしぼって書き記した「朝鮮革命万歳」という血書が鮮やかに残っていた。この6字の書体はそれぞれ異なっていた。1人が1字ずつ記した「朝鮮革命万歳」のスローガンは、革命の途上で最期を遂げた戦友たちの遺言であり、信念の叫びであった。

正淑は悲憤をこらえ、戦友たちの心臓は鼓動を止めたが、その革命精神は立ち木に記された文字とともに永遠にわたしたちの心に残るであろう、とその心情を吐露した。

「みなさん、悲しみを憎しみに変えて、戦友たちがあれほど望んだ祖国解放の日を早めるため、百千倍の力と勇気を奮い起こして、強盗日本帝国主義を撃滅しましょう。戦友たちの死を無駄にしないようにしましょう！」

正淑は隊員たちと一緒に日当たりのよい山裾の雪を取り除き、枯れ葉を集めて敷いたくぼ地に6名の戦友を横たえ、上衣を脱いでその顔にかぶせた。

その夜、正淑は小部隊を率いて干巴河子密営から撤収した。朴

洙環の丸太小屋が発覚した以上、密営の安全を保つことは困難であったからである。

小部隊は雪上の足跡をかき消しながら、2 日目に第７連隊第 2 中隊が留まっていた富厚水密営に行き着いた。

貴い戦友を失った悲しみを抱き、正淑はこの密営できたるべき復讐戦に備えていっそう軍事・政治訓練に励んだ。とくに隊員たちに、百発百中の射撃術を練磨させることに力を注いだ。そして、将軍が主力部隊を率いて長白にもどってくるはずの春を心待ちにしていた。

とうとう待ちに待ったその日が来た。4 月上旬のある日、将軍が長白に来たという朗報が、司令部連絡員によって富厚水密営に伝えられたのである。

正淑は小部隊の隊員たちとともに将軍を迎えに駆けつけた。感激的な対面の場で、６名の戦死者について報告を受けた将軍は、沈痛な面持ちでしばし遠い山並みを見つめていた。やがて将軍は、濛江から長白に来る途上で金確実（キムファクシル）も戦死したことを告げるのだった。金確実は延吉県にいたときからの正淑の戦友だった。困難な敵中工作をともにし、車廠子での試練もともに耐え、老嶺戦闘のときには敵の奇襲を受けて白兵戦をともに展開し、撫松県城戦闘のときには山ひだの陣地を一緒に守り抜いた勇敢な戦友の金確実、その人が戦死するとは……。正淑の胸は悲しみに閉ざされた。じつにこの冬は、あまりにも多くの犠牲と喪失をともなった胸の痛む冬であった。

翌日、将軍は全隊員に実弾射撃訓練を命じた。これは戦死した戦友のための復讐の誓いであり、百千倍の報復宣言であった。標的は 100m、150mの距離の立て板と「討伐隊」の姿を形どった雪だるまだった。銃座を占めた正淑はつづけざまに引き金を引いた。銃弾はすべて命中し、標的の心臓部や両眼に差し込んであったガラスのかけらを粉々に打ち砕いた。

この年の春に開始された春期攻勢で、正淑は大胆さと一発必中の射撃術で多くの敵を打ち倒した。

十二道溝戦闘とそれにつづく 4 月 26 日夜半の六道溝城市攻撃は痛快なせん滅戦であった。城市は区域が広かったうえに、警察署付近の砲台には外灯が明々とともっていて、夜襲をかけるには不利な状況だった。だが、戦闘が開始されるや、桃泉里で入隊した韓昌鳳（ハンチャンボン）が遠隔狙撃で外灯をすべて撃ち砕いてしまった。

正淑が属していた襲撃班は、猛烈に火を噴く中央砲台をまたたく間に占領した。敵兵は武器を投げ出して投降しはじめたが、一部の砲台では依然として抵抗がつづいた。前方を注視していた正淑は、敵の銃口から閃光がひらめくたびに、それをめがけて銃火を浴びせ、敵兵をつぎつぎと打ち倒した。この日、部隊は砲台と兵営、警察署などを襲撃して敵を掃滅した。

戦闘が終わると、隊員たちは勝利の喜びにわいて語り合った。

「今夜の戦闘では多くの敵をやっつけた。これで戦死した戦友たちの仇討ちを思う存分することができた」

しかし、正淑は首を横に振った。

「いや、まだまだです」

正淑にとって、戦死した同志一人ひとりは何十、何百の敵兵とも代えがたい貴重な存在だったのである。

復讐戦の機会は翌日にもやってきた。将軍は、六道溝での惨敗を挽回しようと追撃してくる敵を双山子の裏山で撃滅する作戦を立てたのである。

双山子の裏山は四つの峰からなっていた。正淑は司令部が陣取っていた真ん中の高地にいた。

戦闘は早朝から夕暮れどきまでつづいた。最初、敵は100名余りの騎馬隊を繰り出して高地に攻め寄せてきた。500m、400mと敵との距離はだんだん縮まってきた。正淑は最先頭の騎馬兵に狙いを定めた。将軍の射撃命令が下ると同時に、最先頭の騎馬兵がもんどり打って倒れた。騎馬隊による攻撃が失敗すると、敵は歩兵を繰り出した。敵兵は機関銃の掩護のもとに一歩一歩よじ登ってきた。けれども、今度もおびただしい死者を出して退却した。午後になると、敵は再び1,000余の兵力で攻撃してきた。

熾烈な戦闘がつづいた。午後5時頃になると、にわか雨が降り出した。敵はそれを好機とばかりに生き残りの兵を総動員し、必死になって高地によじ登ってきた。決戦の時が迫った。苛烈をきわめた双山子戦闘は視界が閉ざされる頃になってようやく終わった。敵はおびただしい死体を残して敗走した。

正淑はその後の賈家営戦闘や新台子戦闘など多くの戦闘でも勇敢さを発揮した。

春期攻勢を総括する場で、将軍は正淑の特出した戦功を高く評価し、表彰として金の指輪を授与した。

再び国内の闘士を訪ねて

1938 年の春、金正淑は金日成将軍の意を体して再び国内工作の途についた。

当時、恵山と長白地区の地下組織は「恵山事件」のため厳しい試練に直面していた。白茂（ペクム）線鉄道工事場での工作員逮捕によって端緒をつかんだ日本の官憲は、極秘裏に朝鮮と満州の国境地帯の警察を動員して甲山（カプサン）、恵山と長白県内の祖国光復会組織にたいする不意の捜索旋風を巻き起こした。そのため権永璧（クオンヨンビョク）、李悌淳（リジェスン）をはじめ多くの祖国光復会の指導メンバーが逮捕され、地下組織は破壊された。

将軍は敵の弾圧から地下組織を守り立て直す一方、全国的規模で武装闘争と全民抗争の準備を早急に拡大、強化するための対策を講じ、その実現に専心していた。

正淑は、「恵山事件」のため試練に直面している地下組織や逮捕された同志たちのために将軍がどれほど心を痛め、消息が絶えた朴達（パクタル）をはじめ国内闘士たちと連係をつけるため、いかに苦慮しているかをよく知っていた。

前年の 11 月、将軍は朴達と連係をつけるため馬東煕を派遣し

たのであった。その馬東熙が逮捕されたという知らせを受けた将軍は、数日の間まんじりともせず夜を明かした。そして是が非でも朴達を捜し出さなければならないと言い、今度は国内の地理に詳しい白永哲（ペクヨンチョル）を派遣した。白永哲は並々ならぬ苦労の末に、敵の目をかすめて東海岸一帯を巡り歩き、雲興（ウンフン）にもどってきた朴達を捜し当て、彼の手紙を携えて帰隊した。

　連絡地点で白永哲と落ち合った第７連隊の政治委員と金洪洙（キムホンス）が、その手紙を受け取って白頭山密営に来た。

　朴達は手紙で、敵の検挙旋風を避けて他の地方へ行っていたが、最近また雲興にもどってきた、その間に組織は破壊され、検挙旋風はなおつづいており、今後の活動方向が定まらずもどかしい思いをしている、朝鮮民族解放同盟のメンバーが試練にさらされている状況下で、自分はここを離れることができないから、司令部から工作員を派遣してほしいと要請してきた。

　手紙を読んだ将軍は、第７連隊の政治委員を呼び、直ちに工作員を派遣する必要があるから、国内の実状に明るい者を選抜するよう命じた。

　これを知った正淑は将軍にこう提言した。

「司令官同志、朴達同志のところにはわたしを行かせてください」

「……」

　将軍は正淑を見つめたまま、じっと黙り込んだ。またも難しい任務をまかせるのが心苦しかったのである。

正淑は「わたしはある程度、国内工作の経験があり、実状も知っていますから、わたしが行くべきだと思います」と重ねて承諾を求めた。

将軍は、馬東煕夫妻が果たしえなかった任務を、自分がきっと果たして彼らの願いをかなえてやりたいという正淑のかたくなな懇請を拒みきれなかった。

将軍は正淑に、敵の検挙旋風によって破壊された朝鮮民族解放同盟をはじめ各地下組織を早急に立て直し、試練をなめている朴達と国内の革命家に自信をもたせるためにきみを派遣するのだ、自分に代わって国内の革命家たちに戦闘的あいさつを伝えるようことづけた。

翌日、正淑は２名の隊員を伴って国内へ向かった。一行は日光も射し込まない原生林をぬって 40 km余りの道程を強行軍し、普天(ポチョン)面青林(チョンリム)里の村外れにたどり着いた。そこでは金洪洙と白永哲が待ち受けていた。

正淑は彼らの道案内を受けてその夜のうちに再び移動し、温水坪(オンスピョン)と大鎮坪(テジンピョン)の中間に当たる天上水(チョンサンス)の洞窟に宿営地を定めた。そして至急朴達を捜し当てるため工作班を二手に分け、白永哲と金洪洙は雲興面東浦(トンポ)里へ、他の者は普天面温水坪と大鎮坪地区に残って工作にあたることにし、接触の日と合図を決めた。正淑自身は隊員１名を伴って温水坪村へ下りていった。野中の１軒家を訪ねて主人と話を交わす過程で、「恵山事件」後のこのあたりの状況を聞き取った正淑は、大鎮坪と麗水(リョス)里地区へ行って逮捕をま

ぬがれた組織のメンバーや被検挙者の家族に会い、実態をさらに調べてから朴達に会うことにした。身を潜めた組織のメンバーとその家族が監視と尾行の対象になっているに違いない状況下で、直接彼らに会うというのは危険きわまりないことであった。

けれども正淑は、ためらうことなく大鎮坪を経て麗水里の下村付近へ向かった。そして、反日会のメンバーとして活動中に「恵山事件」で逮捕された人の家族の手引きで、朴達の居所を知っていそうな人に会った。

翌日の早朝、白永哲と金洪洙が、朴達と李竜述（リ リョンスル）、金鉄億（キムチョルオク）を連れて天上水の洞窟に現れた。

正淑は朴達と熱く握手を交わした。そして彼の健康状態を尋ね、国内の革命家への将軍のあいさつを伝えた後、将軍が自分たちを派遣した趣旨と伝言を告げた。朴達は正淑に、「恵山事件」のいきさつと地下組織の実態、そしてその間の活動状況を詳しく説明した。

朴達によれば、前年 10 月の「恵山事件」以前まで、朝鮮民族解放同盟の下部組織は 40 に及び、その傘下に前進会、政友会、反日会、反日青年団、反日少年会、反日婦女会など各種名称の組織がたくさんあった。ところが日本官憲の検挙旋風で約 150 名の組織メンバーとその影響下にあった人たちが逮捕され、残りのメンバーは四方に姿を消した。朴達をはじめ組織の中核メンバーは甲山地区での工作が難しくなった実状を考慮して、冬の間は各地方の鉱山や炭鉱、工場、伐採場、または身内の家に身を潜めて、

春になってまた甲山地区に集まり組織の再建工作をすることにしていた。朴達自身はあちこちと職場を変えながら組織・政治活動を進め、本年の４月末になって再建工作の準備をしている最中だが、中核メンバーが検挙され四散したうえに、敵の弾圧が激しくて思うように活動できない状態だとのことだった。

洞窟では正淑の指導のもとに、朴達をはじめ朝鮮民族解放同盟指導メンバーの会合が開かれた。正淑は、敵の検挙旋風が吹き荒れている状況下にあって、まず地下組織とそのメンバーの保護対策を講じることが急務であると指摘した。そして、組織の保全にとどまらず、組織をひきつづき拡大していくべきだとし、弾圧におびえて組織の活動を積極化せず、隠れ回って自己保全にのみ努めるならば、組織そのものも維持できなくなると戒めた。

そして、革命組織を親睦会や兄弟契といった親睦団体の形でうまく偽装し、人民のなかに入って、朝鮮人民革命軍のめざましい戦果を伝えれば、「恵山事件」で萎縮した人たちに明日への希望と自信を抱かせ、彼らを反日闘争に立ち上がらせることができると話した。

会合を終えた後、朴達と別個に会った正淑は、将軍の北朝鮮反日人民遊撃隊組織に関する方針とその意義を述べ、その政治委員に朴達を任命するという将軍の命令を伝えた。

朝鮮革命が厳しい試練にさらされていた時期に、正淑が死線を越えて国内の闘士に会い、将軍の教示を伝えて闘争の前途を示したことにより、萎縮していた国内の革命組織とそのメンバーは勝

利の確信を抱いて隊伍を収拾し、整備しながら活動を積極的に進めていくようになった。

この年の夏、第７連隊に属して濛江、輝南一帯で活動し、新台子付近の密営に来た正淑は、9 月中旬に将軍から再び新たな国内工作の任務を受けた。

任務は、豊山(プンサン)地区の革命組織を指導することであり、同行者は朴貞淑(パクチョンスク)、金鳳錫(キムボンソク)とされた。しかし正淑は、一人で行かせてほしいと願い出た。新たな任務をおびて発つたびに、将軍にもしものことがあってはと心配でならなくなる、将軍の身近に戦友たちが多くいれば出立するわたしの気も軽くなる、豊山地方は歩きなれてよく知っているところだから一人で行かせてほしい、と重ねて要請するのだった。

忠実な革命戦士の真情のこもった請願を受けた将軍は、感動にひたった声で感謝の言葉を述べ、司令官を思う同志たちの熱い気持ちは決して忘れないと言った。

じっと立ちつくす正淑を見つめていた将軍はやがて言葉を継いだ。

――みんなはいつもわたしのことを気づかってくれるが、わたしはどこへ行っても隊員と一緒であり、１歩を進んでもいつも護衛がついている、考えてもみたまえ、男子でもないきみをいつも単独で敵地に向かわせるわたしの気持ちを少しは分かってもらいたい……。

革命戦士への限りない愛と信義のこもった将軍の一言一言は

正淑の胸に熱く染み入った。

出発に先立って、将軍は派遣員たちに拳銃を１挺ずつ手渡した。朴貞淑は桃泉里での地下工作や前年の国内工作のときにも正淑と同行しており、金鳳錫もやはり前年の国内工作の際、護衛を兼ねて同行した隊員であった。

司令部を後にした一行は、十二道溝付近の山小屋で最初の宿営を張った。そこは昨冬、朴洙環、金容金をはじめ６名の裁縫隊員が「討伐隊」と決戦を交えて壮烈な最期を遂げた干巳河子密営からほど遠くないところであった。

正淑は朴貞淑と金鳳錫に、戦友たちが生前あれほど望んでいた祖国解放の日を早めるために一日も早く祖国へ行き着こう、そして戦友たちの恨みを晴らしてやろう、と語った。

翌日、一行は日暮れどきになって十三道溝付近の山頂にいたった。

連絡の場となっていた三水谷薬局は廃屋となっていた。党グループの一員だった息子が逮捕され、薬局一家は李原（リウオン）の方へ引っ越していた。五函徳（オハムドク）宿屋の主人に会ってはじめて、少なからぬ組織が破壊され、多くの同志が逮捕された新坡（シンパ）の実態をおおよそ把握することができた。

翌日は新坡の南山のふもとで祖国光復会新乫坡（シンガルパ）特殊分会の責任者に会った。そして彼に、敵の機関に勤めている利点を生かして、地下工作員とこれから組織される半軍事組織をしっかり保護する任務を与えた。

その日の夜に居所を移し、新坡から２㎞ほど離れた林の中で一夜を過ごした正淑は、翌日、当地の組織メンバーに会い、破壊された組織を収拾、再建し、さらに拡大する任務とその方途を示した。これは、一時萎縮していた新坡一帯の組織を再生させる契機となり、この地域に闘争の火を点ずる新たな導火線となった。

新坡を後にした正淑は、豊山郡文藻（ムンジョ）里陽地（ヤンジ）村の朱炳譜（チュビョンポ）の家を訪ねた。その頃、朱炳譜も官憲の弾圧にあって窮地に陥っていた。ソウルの学校に籍を置いて活動していた彼は、この時期、帰郷して夜学にも関与していた。そのため、夜学で「不穏な宣伝」をしていると目され、３日にあげず駐在所に呼び出されては詰問されていた。

もともと活動的なタイプの彼は、敵の監視のため身動きができなくなると、いらだたしさのため居ても立ってもいられない気持ちになった。そんなときに正淑に会った彼は、あまりの驚きとうれしさに手を握ったまましばし口を開けられなかった。しばらくして気が静まった彼は、国内ではもう活動できないから、朝鮮人民革命軍に入隊させてほしいと懇願した。

しかし正淑はそれよりも、彼がソウル地域の人たちと一定のつながりをもっていることに注目した。彼によれば、ソウルや仁川（インチョン）、永登浦（ヨンドンポ）一帯には豊山出身の反日運動家がおり、竜井で学生運動を一緒にした学友との連係を結ぶこともできるとのことだった。

正淑は、新たな情勢と朝鮮革命の展望について説明し、全民抗

争の準備を整えるという将軍の方針を伝えた。そして、こういう時こそ、国内の実情に詳しく、学生運動と地下活動の経験をもっている朱同志が活動すべき舞台はソウル地域だと主張した。そして、ソウルに行ってからは、前年７月に北青(プクチョン)で対面し、ソウルに派遣した李英(リヨン)と連携して活動する任務を与えた。また彼が在籍している学校に組織をつくり、徐々にソウルと永登浦、仁川地区の労働者や労組の中に浸透して、彼らを祖国光復会の組織に結集する方途も示した。

数日後、正淑は李仁模(リインモ)をはじめ豊山の革命組織の中核メンバーに会い、豊山の各組織の当面の課題を示したあとで、朱炳譜をソウルへ送り出した。

陽地村を発った正淑は、豊山邑から４㎞ほど離れた新元(シンウオン)里間(サイ)村で、豊山郡天道教宗理院〔19〕の院長元忠熙(ウォンチュンヒ)に会った。まる一年ぶりに正淑と会った彼は感きわまって涙をたたえ、将軍の健勝のほどをうかがった。そして、朴寅鎮(パクインジン)道正が逮捕された後、先が見通せず、なす術を知らずにいたところ、将軍がこうして高名な工作員をまたつかわしてくださるとは、まさに茫々たる大海原に漂流していた難船が灯台の灯を発見したときのような気持ちだと、感慨を吐露するのだった。それから、朴寅鎮道正が逮捕されたいきさつや、ソウルの天道教上層部の実態、黄海(ファンヘ)道、平安(ピョンアン)南道、咸鏡(ハムギョン)北道など各地の宗理院にたいする工作状況を説明した。

正淑は、朴寅鎮道正が逮捕された状況のもとで、今後はソウルと各地の包体（天道教の末端組織）との活動を豊山郡宗理院が主導

し、全国各地の天道教の教導者を反日民族統一戦線にさらにかたく結集させるべきだと説いた。また、天道教青年党員の中からすぐれた青壮年を選抜して生産遊撃隊をさらに拡大し、軍事訓練を強化し、いったん然るべき情勢が生じれば直ちに武装暴動を起こせるよう万端の準備を整える課題を示した。

元忠熙は、話を聞いて自信がついた、将軍が示した通り祖国解放の聖業にすべてを尽くす、と改めて誓いを立てた。

翌日、正淑は豊山地区の秘密根拠地を訪ねた。その日の午後、密営では正淑の指導のもとに豊山地区と厚峙嶺（フチリョン）地区で活動していた朝鮮人民革命軍の小部隊、政治工作班、この地区の革命組織責任者の会合が開かれた。

この会合で正淑は、敵の弾圧にめげず地下組織をかたく守り、一時的な混乱状態を早急に収拾し、破壊された組織の再建に力を入れる問題、大衆政治宣伝活動を強化して秘密根拠地周辺の地域を革命化し、生産遊撃隊などの半軍事組織を拡大、強化して武装闘争の大衆的基盤をうちかためる問題などについて強調した。

ここでの活動を終えた正淑は、行軍速度を速めて早々に鴨緑江（アムノク）を渡った。

新台子付近の密営に到着した正淑は、将軍に一行の活動状況を報告した。

豊山地区での正淑の活動は、祖国光復会の組織網を全国的規模に拡大し、全民抗争の準備を整えるのに大きく寄与した。豊山地区では祖国光復会の組織がいっそう強化され、各地に半軍事組織

の生産遊撃隊が生まれて活動を開始し、革命軍への支援活動は活発になっていった。

とくにソウルへ行った朱炳譜は、法政学校に籍をおいて李英と連係を保ち、やがて永登浦を中心とする工場地区に強固な足場をつくった。彼はソウルの「コミュニスト・グループ」に将軍の祖国解放路線を伝達し、主要労組活動家の一人であった金三竜（キムサムリョン）と緊密な連係のもとに、ソウル－仁川地区の労組運動圏内に深く浸透し、ソウル地区の労働運動が将軍の祖国解放路線を貫徹するのに大きく寄与した。

彼の援助者兼連絡員として活動したのが李仁模である。李仁模は豊山とソウルを行き来する一方、朱炳譜と相談のうえ東京へ渡り、豊山出身で組織された「豊友東京苦学生親睦会」を祖国光復会の傘下組織に改編する活動を展開した。

朱炳譜は解放後も、ソウルで将軍の祖国統一路線と南朝鮮革命路線を貫徹する地下活動をつづけた。共和国が創建されて初の勲章、メダルが制定されたとき、最初の受勲者のなかに彼の名も含まれていた。彼は生の最期の瞬間まで、正淑によって植えつけられた信念と意志を曲げずにたたかい、1950 年 3 月に敵の手により死刑に処された。

李仁模は回想録『信念とわが生涯』で、朱炳譜の最期について詳しく記述しており、正淑との 2 回にわたる出会いについても感慨深く回想している。

青峰密営

1938 年の冬は、朝鮮人民の抗日武装闘争史においてもっとも困難な試練の時期であった。朝鮮人民革命軍の猛烈な敵背攻撃作戦と人民大衆の力強い反日闘争によって甚大な政治的・軍事的打撃をこうむった日本帝国主義は、朝鮮人民の革命的進出を阻もうとかつてない反動攻勢に出た。

一方、極左冒険主義者によって強いられた熱河遠征[20]が禍して抗日連軍部隊は多大の損失をこうむり、朝鮮人民革命軍は白頭山西南部一帯に増強された大兵力の敵とほぼ単独で戦わなければならなくなった。こうして、朝鮮革命は厳しい難局に直面することになった。

１万余の大兵力に包囲された状況のもとで、将軍はこの年の 11 月 25 日から 12 月 6 日にかけて、南牌子で朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部会議を招集した。

将軍はこの会議で、熱河遠征の極左冒険主義的本質と重大な結果を厳しく批判した。そして、朝鮮人民革命軍の主力部隊が即時、白頭山を中心とする鴨緑江、豆満江沿岸の国境地帯へ進出し、広い地域で軍事・政治活動を活発に展開することにより、革命組織と人民に勝利の信念を抱かせ、日本侵略軍の悪辣な策動を粉砕すべく新たな軍事的・政治的課題を示した。これは、熱河遠征の極左冒険主義的「路線」がまねいた深刻な結果を早急に克服し、朝

鮮革命の主体的立場と自主的支柱を固守して、朝鮮革命全般をひきつづき高揚へと導くための一大攻勢を意味していた。

会議では三つの方面軍と独立連隊が編制され、その活動地域が分担された。正淑の属する第２方面軍は、将軍の指揮下で朝鮮国内と国境一帯で活動することになった。

将軍は各部隊を新たな戦域に送り出す際､彼らの戦果を祈願し、新しい武器とともに冬期の軍服や下着、脚半、軍靴、それにはったい粉まで供給するようはからった。これらは、部隊の軍服を短期間に準備するよう将軍から指示を受けた正淑が、濛江県二道花園付近の森の中で裁縫隊員とともに連日連夜奮闘して整えたものであった。

会議が終わって各部隊が出発した後、第２方面軍は南牌子の樹林一帯を幾重にも取り巻いた日本軍「討伐隊」の包囲網を突き抜けて遠征の途についた。部隊は最初から、南牌子を包囲していた「討伐隊」の追撃を受けながら行軍しなければならなかった。これが後日世に知られた、史上類を見ない「苦難の行軍」である。

金日成主席は当時のことを次のように述懐している。

「苦難の行軍の内容を一言で要約すれば、厳しい自然とのたたかい、甚だしい食糧難と疲労とのたたかい、恐ろしい病魔とのたたかい、奸悪な敵とのたたかいが一つに絡まったものであったと言えます。これにいま一つ、深刻なたたかいが伴いました。それは苦難にうちかつための自分自身とのたたかいでした。まずは生き残るためのたたかい、ひいては敵と戦って勝つためのたたかい

が、まさに苦難の行軍の基本内容でした。じつに苦難の行軍は終始、耐えがたい試練と難関の連続でした」

この年はハンガイ（中秋）が訪れる前に初霜が降り、ハンガイが過ぎると初雪が降った。100 年来の大雪と酷寒に見舞われた冬であった。

正淑は第 7 連隊の狙撃班とともに隊伍の最後尾についていた。敵の追撃は執拗をきわめた。敵は部隊が行軍を開始した矢先から「猛攻長追戦術」に出た。いわば、ダニのようにしつこく食いついて相手をいたたまれなくする戦術であった。

正淑は狙撃手と一緒に雪中に待ち伏せて、敵兵が現れるたびに命中射撃で追撃をかわした。これが日に何回も繰り返された。正淑はまた、呉仲洽（オ ジュンフプ）連隊長と一緒に手榴弾地雷も埋設した。

「100 年来の大雪」に覆われた密林の中で、敵軍はあえて先回りしたり迂回することなどは考えも及ばず、部隊が踏み分けて行った雪道にそって追いつづけるだけだった。敵のその弱点を利用し、部隊が通過した雪道に手榴弾を埋め、引き抜き線を伸ばしておくのが手榴弾地雷である。これを知る由もない敵は、これにかかって多くの死者を出した。さんざんな目に会った敵はそれ以上足跡を踏むことができず、処女雪を踏み分けて遠回りしはじめた。

正淑は敵が迂回してきそうな地点に狙撃手とともに待ち伏せ、そのつど命中弾を浴びせて敵兵を倒した。正淑が遠距離の敵の大隊長を射止めて隊員たちを驚かせ、将軍から名射手だと称賛されたのは、この時期の話である。

正淑は苦難の行軍が始まった最初の１ヵ月間に、濛江県二道花園付近の集団部落襲撃戦、五道岔と四道岔襲撃戦、臨江県の腰溝集団部落襲撃戦と[illegible]蟻河付近での要撃戦、煙筒拉子付近での要撃戦、王家店襲撃戦など数多くの戦闘に参加して無比の勇敢さを発揮した。

この期間、正淑は強靭な意志と犠牲的精神、熱い革命的同志愛をもって隊員たちを導いた。

相次ぐ戦闘と行軍でわが身を支えるのがやっとの状態にありながらも、枯れた草の葉や木の実、サルナシのつるなどを背のうに収め、隊員が寝入ったときにも深い雪をかき分けて草の根を掘ったりした。

ある日、炊事隊員とともに草がゆを炊いていたとき、突如銃声が響いた。正淑はとっさに肩の白布を脱ぎ、煮え立つ釜を包んで持ち上げた。他の炊事隊員たちもこれにならって釜を白布に包み、正淑の後を追った。そのときのかゆが隊員にどれほど大きな力を与えたか、祖国が解放された後も、苦難の行軍に参加した抗日闘士たちはその草がゆの話をよく語ったものである。

苦難の行軍が始まって１ヵ月経った 1939 年１月上旬、部隊が長白県七道溝の奥地に至ったとき、敵は長白—臨江県一帯に前もって配置しておいた大兵力と航空機まで繰り出して「討伐」にいっそう狂奔した。

さし迫った状況を打開するため、将軍は大部隊で行軍していた主力部隊を三つの方向に分散させて行動する戦術的方針を示した。

負傷者と病弱な者、それに女子隊員は青峰密営に行くことになった。

司令部と別行動をとることになった正淑は別れぎわに、背のうの中にしまっていた非常食のはったい粉の袋を伝令の背のうに入れながらこう言った。

「一合にもなるかどうか……どうにもならなくなったときに、司令官同志に差し上げてください」

今日、朝鮮人民のあいだに伝説のように広く伝わる『一合のはったい粉』(抗日闘士の回想記)は、これにまつわる話である。

正淑は警護中隊の隊員の手を取って重ね重ね頼んだ。

「司令官同志の安全を頼みます!」

正淑は後ろを振り返り振り返り、青峰密営へ向かった。

青峰密営は朝鮮人民革命軍の後方密営だった。この密営には第７連隊兵站部のメンバーと負傷者がいて、その責任者は連隊給養担当官の厳光浩(オムグァンホ)だった。彼は正淑が 1937 年に桃泉里で地下工作に当たったとき、一緒に活動したことのある人物である。

将軍は厳光浩を青峰へ派遣する際、畑を耕して部隊の食糧を備蓄し、部隊の冬期軍事・政治学習に支障がないよう兵舎を建てておく任務を与えていた。ところが彼は、予備の兵舎一つ満足に建てず、食糧も十分に蓄えていなかった。密営の日課は守られておらず、１日の食事も２食がやっとという状態だった。さらに驚いたことには、新入者が落ち着けそうな兵舎も満足に用意されていなかった。

正淑をはじめ新しく来た女子隊員や負傷者は、寒さの厳しい真冬に兵舎を建てることから始めなければならなかった。

青峰密営は、将軍が歩んでいる苦難の行軍の道とはあまりにも異なる沈滞と無秩序、低迷した雰囲気に包まれていた。

正淑はこうした雰囲気を拱手傍観することができなかった。朝鮮人民革命軍の隊員であれば、どこにあっても将軍の革命思想を体して行動しなければならないのだ。正淑はまず密営をきちんと整え、患者の治療対策を講じるかたわら、長い間部隊と離れていた隊員たちに、将軍が南牌子会議でうちだした方針を説明し、鴨緑江沿岸に進出している主力部隊の戦闘ニュースを伝え、彼らの精神状態を改めさせることに努めた。

そして軍事・政治学習を通じて隊員を将軍の思想で武装させることに力を注いだ。しかしこの問題について、正淑は厳光浩や政治キャップの金俊（キムジュン）(一名李東傑（リドンゴル）)としばしば議論しなければならなかった。彼らの主張によれば、密営入居者の半数が病弱者か負傷者だというのに、学習をさせたところで頭に入るはずがないというのだった。

けれども正淑は動揺することなく、同行してきた女子隊員たちと学習を始めた。すると負傷者たちも１人、２人と学習に参加しはじめ、やがて密営のメンバー全員の関心が正淑に注がれるようになった。こうなると、厳光浩は急に態度を変え、金俊の指導のもとに学習を始めることを全員に告げた。彼は軍事・政治学習を自分が主導して始めたかのように体面をつくろい、その識者ぶり

で人々を引きつけようとした。

1939 年 2 月初めのある日、密営では南牌子会議での将軍の演説内容について学習討論がおこなわれた。隊員たちの討論を聞いていた厳光浩は、討論が的外れだとし、革命の戦略戦術というものは主観的欲求によってではなく、客観的情勢と環境に適応すべきものだ、したがってこの冬のように情勢が厳しく不利なときには敵との正面対決を避けていったん退き、有利な情勢が到来するのを待たなければならないという「理論」を並べ立てた。

女子隊員の 1 人が、将軍の方針どおり国内へ進出して朝鮮革命の新たな高揚をもたらすということが、なぜ主観的欲求だというのか、と質問した。

厳光浩の顔色がにわかに変わった。

「一つ聞こう。きみは二言めには国内進出を主張するが、なぜ進出せずにここへ来たのかね、この密営にだ」

「……」

「見たまえ、革命というものは誰かの思いどおりになるものではない。すべて客観的情勢と環境に支配されるものなのだ」

正淑はそれ以上こらえることができなかった。これは明らかに将軍の思想に反する発言であるばかりか、将軍の思想と路線にたいする挑戦でもあった。

正淑は憤然と席から立ち上がった。

――厳光浩同志はあたかも朝鮮革命の運命が決定的に客観的情勢に依存するかのように論じているが、それは誤った考え方だ。

わたしは客観的情勢が革命闘争に影響を及ぼすことを否定するものではない。だが、それを絶対視してはならない。情勢が不利であるほど、革命家はより積極的にたたかい、禍を福に変えるために奮起すべきだ。これが司令官同志の意志だ。情勢が複雑であるときは敵と戦わず、後退して時を待つのが上策だというのは逃避主義であり投降主義だ。現況下でわれわれには退却すべき後方もない。敵を打ち倒すためには血を流さねばならず、折重なる難関を果敢に突破して前進しなければならない。革命はうちつづくたたかいによってのみ勝利をおさめるのだ。

厳光浩は体面を保とうとして、レーニンの「一歩前進、二歩後退」の命題をもちだして机をたたいた。しまいには、朝鮮人民革命軍主力部隊の国境地帯への進出についてさえも、「無謀な行動」だのどうのと誹謗中傷した。

正淑は即座に彼の詭弁に反論を加えた。

――われわれは司令官同志がかかげた朝鮮革命の旗のもとで革命に参じ、司令官同志が示した革命路線をあくまで擁護し貫徹する決意を抱いてたたかう朝鮮の革命家だ。いま司令官同志は当面の難局を打開し、朝鮮革命を一大高揚へと導くため、部隊を率いて国境一帯への進軍を断行している。この道こそ朝鮮革命を救う道であり、破壊された国内の革命組織を立て直し、人民に勝利の確信を与える唯一の道だ。司令官同志のこの正当な革命的方針に照らしてみるとき、革命の「退潮期」だのどうのと、敵との戦いを避け、国境沿岸にも進出すべきでないという発言は、司令官同

志の革命路線に反するきわめて不健全かつ危険な見解だ。

厳光浩は一言の反論もできず席を立ってしまった。しかし、彼は自分の思想を見直すどころか、日和見主義的で投降主義的な反革命的正体を隠そうと策動した。

ある日の夜半、彼は急に「非常呼集」をかけた。正淑が引率してきた女子隊員の中から何かしら「欠点」を見つけだし、屈伏させようとしたのである。しかし、女子隊員からは何の欠点も発見できなかった。すると厳光浩は、長白で入隊して間もない新入隊員を呼んで隊伍の前に立たせた。部隊の生活に慣れていなかった彼は、非常呼集がかかるとあわてたあまり、銃を兵舎に置き忘れてしまった。

厳光浩はこれをよいことに、彼の武装を解除し、食事もとらせず圧力をかけた。空腹をこらえきれなくなった新入隊員は、こっそり兵舎から抜け出し、畑で凍ったジャガイモを何個か掘り出し焼いて食べた。厳光浩はこれを正淑をはじめ女子隊員を陥れる絶好の機会とばかりにその新入隊員を逃亡者として逮捕し、スパイの嫌疑をかけようと拷問を加えた。新入隊員は拷問に耐えきれず、厳光浩の強要に負けて「スパイの任務」を受けて入隊したという偽りの陳述をした。厳光浩はそれを「端緒」にさらに拷問を加え、彼から数名の女子隊員がスパイ活動に共謀したという「自白」を取りつけ、その物的証拠として「毒薬」まで押収した。その「毒薬」とは、新入隊員が苦しまぎれに背のうから取り出した歯みがき粉だった。

新入隊員から「自白」を取りつけた厳光浩は、敵の「スパイ」がすべて吐いたと言って、正淑をはじめ数名の女子隊員をうむを言わせず逮捕した。

正淑は憤激して厳光浩を指弾した。

「……あなたはわたしたちがどんな人間か分からずに日本のスパイ扱いするのか。……わたしたちがスパイだというなら、あなたは桃泉里から無事に帰ってこれなかったはずだ。恥知らずにもほどがある」

1937 年 8 月に正淑が逮捕されたとき、命を投げだす覚悟で組織の秘密を守ったため、厳光浩も難を逃れることができたのである。にもかかわらず、彼は鉄面皮にも「スパイ組織」の詳しい内幕を明かせと問いつめた。

それ以上こらえきれなくなった正淑は、断固として抗弁した。

「……わたしたちは朝鮮人民革命軍の隊員だ。わたしたちは金日成将軍の戦士だ。お前は一体何者か。お前は革命の敵だ。革命はお前のような者を許さない。しかと覚えておくがいい。お前は革命にたいして犯した罪によって処刑されるだろう」

これにたいして厳光浩は、お前たちは何を頼んでそんな強がりを言っているのか、主力部隊は雪に埋もれてみんな凍死してしまったはずだ、とほざいた。彼はその本性を完全にさらけだした。

延吉地方で 5 ・ 30 暴動〔21〕の波に乗って革命運動に加わった厳光浩は、分派的悪習に染まった野心家だった。ひところ中隊政治指導員を務めたが、最初から人望を失い、反「民生団」闘争のと

きには極左的な言動で人々を苦しめた。けれども将軍は彼を教育し、再び中隊政治指導員の重責を担わせた。また、過ちを是正できなかったにもかかわらず、後方の密営に送って改悛の機会を与え、農作を営み、破壊された敵地の革命組織を立て直し、部隊の食糧予備を整える任務を与えた。ところが、彼はかえって職位に不満を抱いて課された任務をどれ一つ誠実に果たさず、思想的に変質、堕落して革命の裏切り者に成り果てていたのである。

青峰での日々、正淑をもっとも苦しめたのは、厳光浩のむごい拷問や「スパイ」嫌疑ではなく、将軍の革命思想と路線に反対する彼の罪業が何の打撃も受けず容認されていることであった。

司令部から連絡員が密営に派遣されてきたとき、正淑は両手を縛られた状態にあった。そんな状態で連絡員と会った正淑は、密営の不正常な事態を将軍に報告するよう頼んだ。

連絡員は、旧正月をひかえて将軍から託された食糧や肉類など、十三道湾部落襲撃戦でろ獲した物資を届けに来たのであった。

連絡員は驚きのあまり何も言えなかった。

その日、厳光浩と金俊も将軍への手紙と「毒薬」の袋を連絡員に渡しながら、至急司令部にもどって「スパイ団事件」を将軍に報告するよう委託した。

連絡員は早々に司令部にもどった。連絡員の報告を受けて手紙を読んだ将軍は激昂した。そして隊員の制止を振り切って、証拠だという「毒薬」の袋を解いて舌先で確かめた。それは毒薬ではなく歯みがき粉だった。将軍は即刻、第７連隊の政治委員を青峰

密営に派遣する一方、事態を収拾する対策を講じた。

1939 年 4 月 5 日、厳光浩は北大頂子で、革命の名で峻厳な審判を受けた。

その日、正淑は厳光浩を断罪してこう言った。

——われわれはいつどこにあっても高い政治的自覚と革命的信念をもって将軍の革命思想を断固擁護し、それを誹謗する行為にたいしては容赦なくたたかわなければなりません。

金日成主席は当時のことを次のように述懐している。

「そのとき金正淑が先頭に立って厳光浩の敗北主義を辛らつに批判した。彼女は司令部の路線や作戦上の方針に反する誤った思想にたいし、いささかも妥協することなく断固としてたたかった。彼女は徹底した思想論者だった」

命を投げだしても将軍の革命思想を断固として擁護するというのは、正淑が生涯貫いた不変の信条であり、確固たる意志であった。

これに先立つ 3 月上旬、青峰密営から帰ってきた正淑は、司令部に随行して再び苦難の行軍をつづけた。

正淑はこの苦難の行軍期間、何よりもまず将軍の安泰をはかることを歴史と革命にたいする最大の本分とし、いついかなる状況下においても将軍の身辺の安全に最大の注意を払った。

部隊が東大頂子裏山の尾根を伝って一晩中行軍をつづけ、翌日の早暁、とある台地で休止したときだった。疲労困憊していた隊員たちは、雪上に座り込むやいなや眠りだした。

しばらくすると、山裾の方から銃声が響いてきた。隊員たちは一斉に起き上がり、銃声の鳴る方に駆け下りて行った。山裾では、吹雪に紛れてひそかに這い登ってくる「討伐隊」を相手に、正淑が単身で必死に防戦していた。そのとき正淑は、朝食の支度のため、司令部の位置からかなり離れた山裾に下りて、草の根を掘り出していた。「討伐隊」が司令部に接近するには、山裾から登ってくるしかなかったので、それと思われるコースを見定め、草の根を掘りながらいざというときは銃声を鳴らして知らせる考えだった。案の定、敵を発見した正淑は銃声を鳴らし、機先を制したのである。

「本当に金正淑同志でなかったなら、重大事になるところだった」

難を逃れた後、隊員たちは正淑の手を取り、口をきわめてほめちぎった。

長白県上崗区一帯で活動していた呉仲洽の連隊が司令部と合流した後、撫松方面に進出していた第８連隊と独立大隊もやがて司令部と合流した。

分散していた各連隊が一つになって活動するようになって、いちばん困ったのは塩が切れたことだった。食糧は敵を襲撃して少なからず手に入れたが、塩は敵の統制が厳しくて手に入らなかった。何日も塩を切らしているうちに、隊員のなかには行軍中に酒に酔ったように体の均衡を失ってふらついたり、顔が腫れ上がったり、なかには腫れがひどくて目も開けられない者もいた。

そうしたとき、将軍の命を受けたその土地出身の隊員が、村人を通して相当量の塩を手に入れてきた。給養担当者はすぐさま、各連隊と中隊にその塩を配分した。各隊は早速その塩を使って食事をとった。

しかし、将軍の身辺の安全に最大の注意を払っていた正淑は、まず塩に酢をかけてみた。すると塩は怪しげな色に変わった。正淑は急いで塩を水に溶かし、銀製の箸とクロツバラのさじを浸けてみた。箸とさじは次第に変色しはじめた。塩に毒薬が入っていたのである。

正淑は急いで将軍に告げた。将軍がたき火に塩をまいてみると、青い炎が舞い上がった。間違いなく毒入りの塩だった。

革命の司令部を狙った敵の凶悪な企みは未然に防止された。だが問題なのは、第７、第８連隊がすでにその塩を食して木材所奇襲に出陣していたことであった。

革命軍部隊に毒入りの塩を送り込んでその効果が現れる頃合いを見計っていた敵は、いまこそとばかりに攻撃をかけてきた。

将軍は第７、第８連隊を直ちに呼び戻す措置を講ずる一方、中毒を起こしていない司令部のメンバーを率いて戦闘を指揮した。こうして、司令部のメンバーを除いた全部隊が中毒に陥った状態で戦いにのぞまざるをえなくなった。

これは、1937 年に小湯河で数千の敵に包囲されたときよりさらに危急な状況であったと将軍が後日回想しているように、部隊が全滅するか、戦力を保持して反日抗戦をつづけるかの瀬戸際であった。

「背のうの弾丸を全部出しなさい。きょうはここで生きるか死ぬかの決戦をする」

将軍は悲壮な面持ちでこう言った。

機関銃小隊と司令部護衛兵は決死の覚悟で奮戦した。その間に、第７連隊と第８連隊は比較的安全な森の中に隠れ込むことができた。

正淑は敵を牽制しながら、非常用に持っていた緑豆を取り出し、それを煎じて解毒処置を講じた。しばらくして中毒症状のなくなった第 7、第 8 連隊が戦闘に加わった。司令部と主力部隊を一撃のもとに壊滅させるか、生け捕りにしようとした敵は、おびただしい死者を出して敗走した。

その夜、呉仲洽連隊長をはじめ指揮官たちは、生死を決する危急に際して司令部を守り、革命を救った正淑に心から感謝した。

茂山に響き渡った勝利の凱歌

苦難の行軍を成功裏に終えた朝鮮人民革命軍の主力部隊は、北大頂子に至って雪解けの季節を迎えた。

1939 年 4 月、金日成将軍は北大頂子で開かれた朝鮮人民革命軍幹部会議で苦難の行軍を総括し、積極的な反撃戦によって日本侵略軍に連続的打撃を加え、再び祖国に進軍する闘争方針を提示した。

その後、白頭山西南部一帯で春期反撃戦を猛烈に展開し、白頭山が望まれる小徳水台地の森林に至った部隊は、メーデーの前夜に軍装を解いてテントを張り、夏の軍服に着替えた。

翌日、小徳水の台地では祖国進軍をひかえてメーデー祝賀集会と演芸公演がおこなわれた。

メーデーを盛大に祝った後、将軍は警護中隊と一部の小部隊のメンバーを率いて間白山密営へ赴いた。そこで鯉明水（リミョンス）、三池淵（サムジヨン）、茂浦（ムポ）、大紅湍（テホンダン）一帯に偵察班を派遣して住民の動向と敵情を確認した後、祖国進軍の作戦計画を立てた。そして黒瞎子溝密営に戻って隊員の出発準備状況を確かめた。

その頃正淑は、青峰密営での辛労のためかなり衰弱していた。司令部では後方病院で治療にあたるよう正淑に勧めた。しかし正淑は、途中で倒れるようなことがあっても今度の国内作戦からは抜けたくない、祖国進軍の隊伍にぜひ加えてほしいと重ねて懇願した。将軍がその願いを聞き届けてくれたときの正淑の喜びようは、ひとかたならぬものであった。

5 月 18 日の早朝、部隊は五号堰を伝って鴨緑江を渡った。祖国の岸辺にはツツジの花が咲きこぼれていた。

正淑はツツジを抱きかかえて熱い涙を流した。そして、朝露に濡れたツツジを手折って将軍に差し上げた。

それを受け取った将軍は感慨をこめてこう語った。

「朝鮮のツツジは見れば見るほど美しい!」

降り注ぐ朝の日差しを浴びながら再び行軍を開始した部隊は、

やがてトウシラベやエゾマツ、カラマツの大樹が茂る山の麓に至った。

一年中青々とした針葉樹に覆われているため、そこは青峰（チョンボン）と呼ばれていた。将軍はここで宿営を命じた。祖国での最初の宿営であった。またたく間に、青峰の森林の中に司令部を中心にいくつものテントが立ち並んだ。

一夜の宿営地であったが、正淑は将軍の指図どおり周辺の整備に気をつかい、支柱を立ててテントを張り、炊事場や湧き水の周りもきれいに整えた。

宿営の準備が終わると、正淑は他の隊員たちと一緒に立木の皮をはいで、革命的スローガンを書き記した。

「朝鮮民族の自由と独立、解放のために最後までたたかおう」

「朝鮮青年よ！　こぞって抗日戦にはせ参じよう」「立ち上がれ、団結せよ、全世界の勤労者大衆よ！　自由と解放のためにたたかおう」

正淑が記したスローガンは、長年の風雪に耐え、革命勝利の永遠の賛歌として今日に伝えられている。

忘れがたい夜であった。隊員たちはたき火を囲んで祖国について語り合った。ハーモニカや笛を吹く者もいた。正淑は張哲九（チャンチョルグ）、張正淑（チャンジョンスク）と一緒に歌をうたった。

翌日、青峰を発った部隊は乾滄（コンチャン）で第二夜の宿営をし、枕峰（ペゲボン）へ向かった。

5 月 20 日、将軍は枕峰で指揮官会議を開いた。そして、敵が胞（ポ）

胎山を中心とする山岳地帯と鴨緑江沿岸一帯に密集し徘徊しており、昼間よりも夜間の警戒を強めている状況のもとで、白頭山麓の広大な高原地帯を横切る「甲茂警備道路」を伝って、白昼に茂山地区へ抜けるという一行千里の戦術を示した。

枕峰を発った部隊は三池淵で昼食をとった。

正淑は三池淵の清らかな水をすくって将軍に差し上げた。将軍はその水を飲みほして語った。

「三池淵は景色も美しいし水もおいしい。この水を心ゆくまで飲んで力いっぱいたたかい、祖国の解放をなし遂げよう」

出発の命令が下ったが、女子隊員たちは立ち去りがたい思いだった。

そのとき正淑は彼女たちに、祖国を解放した後、将軍と一緒にこの美しい湖を再び訪ねる日が必ず来るだろうと言った。

三池淵を発った部隊は、日本帝国主義が抗日遊撃隊の「討伐」を目的に建設した道路、それも開通式を間近にひかえてきれいに掃き清め、竣工検査を待っていた「甲茂警備道路」を白昼に行軍した。

40 km近い「甲茂警備道路」を一気に踏破した部隊は、夕暮れどきに豆満江畔の茂浦に着き、そこで宿営した。

その夜、正淑は女子隊員たちとともに、金色の五角星を印した300 枚の腕章をつくった。人民革命軍を識別する目印にするためであった。

5 月 22 日の朝、部隊は大紅湍へ向かった。将軍は第 7 連隊を新

開拓（ゲチョク）方面に派遣し、自らは第８連隊と警護中隊を率いて新四（シンサ）洞に出た。

将軍と行をともにして新四洞に来た正淑は、女子隊員たちとともに、ある丸太小屋を訪ねた。そこには木材所労働者の老人と14、５歳の娘が住んでいた。明かりを手にして出てきた彼らは軍服姿の一行を見て声をのみ、後ずさりした。部屋の中には寝具らしきものはなく、古びた木箱が一つと釜が一つ、棚の上に欠けた茶碗がいくつかあるだけだった。父娘が身に着けているのは、肌をおおい隠すだけの麻の粗衣であった。

「ご老人、ご安心ください。わたしたちは貧しい朝鮮人のために戦う朝鮮人民革命軍です」

こうあいさつした正淑は娘の荒れた手をとり、なぜこんなになったのかと尋ねた。

娘の手はひび割れて見るに耐えなかった。娘はうなだれたまま涙を浮かべ、黙っていた。正淑は背のうの中からクリームを取り出して娘の手に塗ってやった。そして、朝夕手を洗ったあとでこれを塗れば直るからと、クリームを手渡した。横でこの様子をじっと見ていた老人は、もしや白頭山から来た人たちではないかと尋ねた。

「わたしたちは金日成将軍を司令官に戴き、祖国解放のために日本帝国主義と戦う朝鮮人民革命軍です」

こう答えた正淑は、朝鮮の同胞に祖国解放の信念を植えつけるため、金日成将軍が日本軍の国境警備陣を突破し、自ら大部隊を

率いて茂山にやって来られたと話した。

老人がびっくりしたのは言うまでもないことだった。そして感無量の面持ちで、一生の願いだから将軍に一目お目にかからせてほしいと懇願した。

正淑は父娘の手を引いて将軍がいる木材所の飯場に案内した。将軍は、だだっぴろい宿舎を埋めつくした労働者にアジ演説をしていた。

将軍にまみえた老人は、もう死んでも思い残すことはない、老い先短い身ではあるが、祖国解放の偉業に尽くすつもりだと重ね重ね決意を述べた。

労働者はわれがちに遊撃隊への入隊を願い出た。村はお祭り気分に包まれ、女性たちは司令部の食事の準備をする正淑の手助けをした。

翌日の 5 月 23 日早暁に、正淑は将軍の率いる警護中隊と第８連隊の隊員たちとともに大紅湍原に至った。将軍はそこで新開拓に進出した第７連隊が戻ってくるのを待ちながら、敵の追撃を予見して戦闘準備に万全を期した。この大紅湍原で敵を掃滅する腹積もりなのであった。

大紅湍原は東は大老隠山（テロウン）、西は鵲峰（カチ）、南は小紅湍水（ソホンダンス）、北は甑山（ツン）に囲まれた高原地帯の比較的広い沼沢地である。

将軍は警護中隊と第８連隊の機関銃が並んで据えられた丘に指揮所を定めた。正淑は女子隊員たちとともに将軍のそばで待ち伏せの態勢をとった。

東の空が白みはじめたとき、将軍が予想したとおり重武装した数百名の日本の守備隊と警察隊が現れた。彼らは新開拓に進出した第７連隊の後をつけてきたのであった。日本人が経営する新開拓地区の木材所を襲撃して引き揚げてくる第７連隊は、深い霧のため 200mほど後ろに敵が迫っていることに気づかなかった。

将軍は第７連隊をそのまま通過させ、追尾してくる敵が完全に伏兵圏内に入ったときに射撃命令を下した。

正淑はそれまで多くの戦闘に参加したが、祖国の地で敵を討つ戦いは初めてであった。自分の銃弾が切れると、正淑はそばの張哲九の予備弾丸をもらって撃ちつづけた。

たじたじとなって退却したかに見えた敵は、増援部隊と合流して再び攻撃をかけてきた。

将軍は機関銃が据えられた丘で戦闘を指揮していた。

正淑は将軍の身辺を警護しながら、カヤ原から頭をもたげる敵兵につぎつぎと命中弾を浴びせた。機関銃射手たちも猛烈な射撃で敵を撃ち倒した。正面からの攻撃は不可能だと判断した敵は、あたりにカッパと鉄かぶとをかぶせたワラ人形を立て、数人の狙撃兵だけを残して北の方角へ迂回した。人民革命軍の側面と後方を討とうとしたのである。

敵の企図を看破した将軍は、一区分隊に敵を逆包囲するよう命じた。この日の戦闘で、敵は数百名の死傷者を出した。

部隊は豆満江方面へ向けて撤収しはじめた。そのとき、新四洞からついてきた 200 余名の労働者が、危険をものともせず遊撃隊

の物資運搬に協力したいと申し出た。

将軍は彼らを引率して豆満江を渡る任務を正淑に課した。ところが正淑が物資運搬隊を率いて「甲茂警備道路」付近に至ったとき、予期せぬ事態が生じた。基本部隊と物資運搬隊の間に敵が入り込んだのである。

正淑は女子隊員たちに、敵はまだこの状況を察知していないようだからあわてないようにと言い、労働者たちを林の中に潜ませる一方､すばやく伏兵陣をしいて不意討ちをかける態勢に入った。

道路のそばに待機していた防御隊もこれに加勢して挟撃したので、敵はまたたく間に壊滅状態に陥った。兵士を満載して「甲茂警備道路」を疾走してきた敵の軍用トラックも、遊撃隊の猛射を浴びるや、あわてて逆戻りして逃走した。

労働者のなかに負傷者はなかった。部隊は労働者とともに豆満江を渡り、安図県の長山嶺の麓で宿営することになった。

その夜、正淑はろ獲物資をかついできた労働者たちに食事をとらせ、娯楽会を催し、歌や踊りを繰り広げて彼らを楽しませた。そして将軍の「縮地の術[22]」や人民革命軍の軍事・政治活動について話して聞かせた。

翌朝､労働者たちは豆満江を渡って帰ることになった｡正淑は､祖国解放をめざす闘争の道でまた会おう、勝利の信念を失わずに強く生きて戦うようにと、彼らを励ました。

のちに分かったことであるが、豆満江を渡った労働者たちは農（ノン）事（サ）洞駐在所の巡査に捕まり尋問を受けた。彼らは正淑から教えら

れたとおり、2 日の間に見たり聞いたりしたことをありのままに話した。すると巡査たちは目を丸くし、そのことを絶対に口外してはならないと釘をさした。

しかし、労働者たちは親戚や友人に会うたびにその話をして聞かせた。そして大紅湍戦闘と白頭山東北部地域における朝鮮人民革命軍の活動のうわさは全国に広まり、国内の人民と革命家たちを反日闘争へとさらに力強く立ち上がらせることになった。

六　白頭山東北部で

豆満江沿岸の新たな戦域

朝鮮人民革命軍の主力部隊は長山嶺から大馬鹿溝方面に向けて行軍し、安図県大溝に到着した。

1939 年 5 月 24 日、金日成将軍はここで朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、白頭（ペクトウ）山東北部で軍事・政治活動を強化し、この一帯にいま一つの強固な革命のとりでを築く方針を示した。

将軍は、主力部隊を連隊規模に分け、各部隊が一定の地域を受け持ち、軍事活動と政治活動を緊密に結びつけたたたかいを展開することにより、いたるところで敵に打撃を加えることにした。そして、警護中隊と第 8 連隊は和竜県玉石洞を経て輝楓洞方面へ、第 7 連隊は烏口江の西方へ進出し、同時に多数の政治工作班が国内へ向かった。

工作班のメンバーには、青峰密営で厳光浩の反革命的策動に巻き込まれて重大な過ちを犯した李東傑（リドンゴル）（金俊（キムジュン））もいた。彼は、将軍から国内政治工作の任務を与えられた日、金正淑を訪ねた。

正淑は李東傑が政治工作の任務を受けたことを心から喜んだ。彼が処罰を受けて炊事隊に回されたとき、誰よりも心を砕いたのは正淑だった。青峰密営であれほどひどい仕打ちを受けたにもか

かわらず、正淑はいやな顔一つせず、炊事場や宿営地のたき火の前で、また行軍の途上で彼を力づけ、革命家の立場と姿勢、革命的信義と同志愛について説いてきた。だから、彼が新たな任務を受けたことをわがことのように喜び、ともに司令官同志の祖国解放の構想をりっぱに実現させていこう、困難に直面したら司令官同志のことを考えなさい、そうすれば力が湧き、活路も開けるに違いない、ともに司令官同志の意を体して豆満（トウマン）江沿岸に強力な革命のとりでを築こう、と励ましたのであった。

李東傑はきっとそうすると誓った。その後、彼は敵の厳重な警戒の目をかいくぐり、三長（サムジャン）、延社（ヨンサ）地区の革命組織を拡大していった。そうしたある日、敵に包囲された彼は単身で敵を誘引して革命組織と同志たちを救い、自らは敵に逮捕された。彼は獄中でも革命家の志操を守りぬき、1945 年 3 月、ソウルの西大門（ソデムン）刑務所で李悌淳（リジェスン）、権永璧（クォンヨンビョク）らとともに刑場の露と消えた。

李東傑の工作班が発った後、正淑は第 7 連隊第 4 中隊の隊員たちと一緒に、新たな工作地である烏口江の南にある東京坪の集団部落に向かった。

正淑は数名の隊員とともに、夜遅く、集団部落の西側城門から少し隔たったところにある村長の家を訪ねた。そこには地下組織のメンバーである村長が、革命軍の活動の邪魔にならないように集合させておいた「自衛団員」たちが泊まっていた。そんな内幕を知る由もない村長の妻は、夜中に軍服姿の人たちが現れたのでうろたえた。

彼女から、いまその家にいる「自衛団員」たちはみな貧しい農民の子弟で、日本人に強要されて木銃を手に警備に駆り出された若者たちだということを聞かされた正淑は、彼らに政治工作をおこなおうと決心した。

正淑はせき払いをして戸を開けた。振り向いた「自衛団員」たちは目を丸くした。夜更けに軍服姿の女性が突然現れたのだから、彼らが驚くのも無理はなかった。部屋の中を見回した正淑は、みなさん驚かないでください、わたしたちは金日成将軍が率いる朝鮮人民革命軍です、みなさんに話したいことがあってお邪魔しました、と言った。

「自衛団員」たちは依然として茫然自失の態であった。

「みなさん、みなさんはわたしたちと同じく貧しい人民の子弟です。わたしたちは、みなさんが『自衛団』に入っているのは敵の強要によるものであって、みなさんの本意であるとは思っていません」

「自衛団員」たちの顔色は次第に明るくなった。

正淑は、異国に来てまで言い知れぬ苦労をなめている彼らのみじめな境遇について語った後、祖国と人民に背くことをしてはならないと諭した。

若者たちは首をうなだれて正淑の話を聞いていた。

やがて、一人の青年がおずおずと立ち上がり、実際自分たちはみな貧しい農民の子だ……日本人に虐げられながらも、彼らの言いなりになり、ばかな生き方をしてきた、と言った。

すると、他の青年たちも、これ以上日本人の奴隷として生きるのはごめんだ、われわれも革命軍に協力しよう、と決然と立ち上がった。

その夜の東京坪村での政治工作班の活動は、「自衛団員」の保護のもとに進められた。工作班が引き揚げるときには多くの青年が支援物資をかついで後に従った。それ以来、彼らは東京坪村を革命化するうえで積極的な役割を果たした。このことは他の集落の「自衛団員」にも大きな影響を及ぼし、「自衛団」は大きな混乱に陥った。

正淑はそのあと、直洞のはずれにある 3 軒の農家の主人を祖国光復会下部組織の反日会に引き入れ、彼らの住家を国内工作のアジトに定めた。こうして、朝鮮人民革命軍小部隊・工作班の豆満江渡河に有利な秘密拠点が築かれた。

将軍はこのルートを利用して 1939 年 6 月 17 日の夜、国内に入り、翌日、国師峰（クッサボン）会議を指導した。

茂山（ムサン）、延社地区をはじめ北部朝鮮一帯を革命のとりでに築く活動は、この地区で工作していた李東傑の逮捕によって、重大な事態に直面した。

将軍は正淑に、延社地区の事態を収拾し、この地区の革命組織にたいする整然たる組織・指導体系を確立する任務を与えた。

正淑は、第 4 中隊の崔一賢（チェイルヒョン）中隊長を責任者とする掩護班を伴って、その日のうちに国内の延社地区に向かった。

翌日、延社に到着した正淑は、組織のメンバーの家に宿所を定

めて政治工作を開始した。

それまで延社支会は組織の発覚を恐れて、信頼のおける人だけを受け入れていたため、反日青年会を結成した5年前や、祖国光復会の支会結成当時に比べて組織はほとんど拡大されておらず、その活動も消極的なものにすぎなかった。

正淑は組織のメンバーに、延社は面機関所在地で日本の統治機関もあり、さまざまな職業を持つ人たちがいるのだから、こうした環境と条件を踏まえて活動すべきである、祖国を愛し、民族を思い、日本帝国主義を憎む人であるなら、その人が精米所を経営していようが、商店や飲食店を営んでいようが、また面事務所の書記を務めていようがみな教育して味方につけ、反日戦線に結集すべきだ、と説いた。ついで、分会を結成し、敵の弾圧から組織を守る課題とその実行方途などについて述べた。

6 月末、正淑は延社地区のすべての祖国光復会組織を統一的に指導する祖国光復会延社地区委員会を組織した。そして、祖国光復会延社地区委員会の指導のもとに、組織の中核メンバーが横のつながりを持たずに縦のつながりだけを持ち、敵の蠢動を鋭く注視しつつ組織の露呈を防ぐ積極的な対策を立てるよう手配りした。ついで正淑は、中核メンバーによって延社地区党組織を結成した。

正淑がこの地を発つとき、延社地区の祖国光復会組織は各種の支援物資を朝鮮人民革命軍に送ったが、そのなかにはミシンもあった。このミシンは、後日、600 着の軍服をつくるうえで大きな役割を果たした。

正淑によって延社地区に結成された革命組織は、豆満江沿岸と北部朝鮮一帯を革命のとりでに築くうえで強固な足場となった。

正淑の精力的な活動によって、将軍が第７連隊と第８連隊、警護中隊を率いて茂山、延社地区へ進出する確実なルートが開かれた。

同年８月、将軍が茂山、延社地区に進出する際、正淑は第７連隊の一小部隊とともに本隊より先に豆満江を渡り、司令部の宿営予定地にたいする敵情偵察をおこない、警備の手はずを抜かりなく整えた。

600着の軍服

三長、延社地区での工作を終えて帰隊した金正淑は部隊が五道揚岔の密林に到着したとき、金日成将軍から病中の張哲九（チャンチョルグ）を看護するよう命ぜられた。

張哲九は中風のため片腕が利かず、そのうえ熱病に冒され、しばしば意識不明に陥っていた。

どんなに難しい任務も喜んで引き受ける正淑を見つめながら、将軍は１ヵ月後にはきっと帰ってくると約束し、草小屋を建て、最後の非常米まで残して、部隊に出発命令を下した。かよわい女子隊員たちを千古の密林に残して発たなければならない将軍の心痛を和らげようと、正淑は微笑をたたえて部隊を見送った。

しかし、部隊が去り、独り取り残されると、急に心細くなり、密林が暗さを増し恐ろしいほど静まり返ったように思われた。敵の密偵が徘徊して遊撃隊の行方を探っているとき、正淑は病魔と敵の魔手から革命同志を守らなければならなかったのである。

正淑は、29 本のキノコを戸口に吊り下げ、意識を取り戻した張哲九に、司令官同志は1ヵ月後に帰ってくるとおっしゃいました、だから、このキノコがすっかりなくなったときに、きっとお見えになるでしょう、と言った。

その日から、正淑は一人の同志のために軍医ともなり、給養担当官ともなった。薄暗い樹林を縫って山腹や谷間を渡り歩き、崖にも這いのぼってマツやエゾマツのやにを掻き集めてきては、火にとかして患者の腫れた腕や手の甲に塗ってあげた。また、解熱剤になる木の実や薬草を摘んできては、夜通しそれを煎じて患者に飲ませた。強い日差しを浴びながら険しい山を登り降りすると疲労困憊したが、夜は夜で患者のそばを離れずに湿布をしたり手足を揉んでやったりした。日が差し込まず、古い落ち葉が積もっている密林の中では、山菜のようなものもほとんど育たないので、遠くまで足を運ばなければならなかった。

正淑の手厚い看護により、患者の病気は次第に回復しはじめた。

2 週間ほど経ったある日、思いがけないことに、将軍が伝令を伴い、小麦粉や大豆油、牛肉などの副食物を携えて訪ねてきた。

将軍は張哲九の治療状況について尋ねたあと、病気にうちかつためには意志が強くなければならない、だから、早く元気になっ

て帰隊し、また敵と戦ってみせるという強い意志をもって治療に専念するように、と彼女を励ました。

将軍は正淑の方に向き返り、一人の革命家は千金にも代えがたいものである、熱病の治療は最後の半月が大切だとし、「わたしはきみが哲九オモニを必ず快復させてくれるものと信じる」と言い残した。

張哲九の病気が快方に向かっていたある日、雨が激しく降りはじめ、深夜、嵐が吹き荒れて草小屋の屋根が吹き飛ばされてしまった。患者は寒さに震えだした。そのままでいては病気がぶりかえして悪化する恐れがあった。

正淑は軍服を脱いで患者に着せ、自分の毛布まで掛けてあげたが、それだけではしのつく雨を防ぐことはできなかった。正淑は患者を抱きしめて雨を防いだ。

後日、張哲九はその夜のことを次のように回想している。

「稲妻が走り、あたりがぱっと明るくなったとき、金正淑同志の姿をはっきり見ることができた。雨で髪はもとより全身がびしょ濡れになり、降り注ぐ雨に顔を打たれながらも、暴雨と狂風に荒れる夜空をにらみつけながら歌を口ずさむ金正淑同志の姿、それは敵との血みどろの決戦場でしか見られない不死鳥のような闘士の姿であった。その神々しい姿をまのあたりにして、わたしは胸が熱くなった」

ついに、29 本目の最後のキノコを手にとる日が来た。その日、待ちに待った将軍が隊員たちと一緒に訪ねてきた。病気がすっか

り治って清潔な軍服を身につけた張哲九と並んで、将軍にあいさつをする正淑の目から熱い涙がこぼれ落ちた。

正淑は任務を全うした大きな喜びに包まれて、張哲九と一緒に隊伍に加わった。

その後、正淑は将軍から 600 着の冬の軍服をつくる任務を受けた。

将軍は、敵の大々的な「討伐」作戦にそなえて、白頭山東北部の広大な地域で大部隊旋回作戦を展開する構想を立てていたが、厳冬のなかで進められるこの作戦の成否は、冬の軍服の準備に大きくかかっていた。わずか数名の裁縫隊員の手で、満足な裁縫道具もなしに 1 ヵ月の間に 600 着の軍服をつくるというのは、常識では不可能なことであった。ミシンも不足していた。

しかし、正淑は任務を受けると、それを一日でも早く遂行する方途を模索しつづけた。

服地とミシンを携えて裁縫隊の密営に到着した正淑は、作業場を整えて待っていた女子隊員たちに、わたしはここへ来る途中こんなことを考えました、司令官同志から与えられた任務を 10 日間早めて 20 日間でやりとげることはできないだろうかということです、と言った。

女子隊員たちは驚き、顔を見合わせるばかりであった。

正淑は、冬の軍服の準備が冬期作戦の成否を決めることになるのです、と言ってみんなを立ち上がらせた。真っ先に賛成したのは、裁縫隊の最年長者崔希淑(チェ ヒ スク)であった。彼女は符岩遊撃区にいた

ころから、何事であれ決心しさえすれば必ずやり遂げずにはおかない正淑の気性をよく知っていた。希淑は正淑より八つも年上だったが、符岩での反「民生団」闘争や桃泉里での地下工作、将軍直属の部隊における戦いぶりなどを見て、正淑に深い尊敬の念を抱いていた。他の隊員たちも正淑の意見に賛成した。

裁断の経験を積んでいた崔希淑は裁断を、朴正淑（パクジョンスク）は仮縫いを引き受けた。正淑は軍服製作の基本工程であるミシン掛けを受け持った。こうして作業場では軍服づくりの全期間、正淑が回すミシンの音が止むことなく鳴りつづけた。日が暮れると、松ごっぱに火をともして仕事をつづけた。休憩はもとより睡眠もほとんどとらなかった。

正淑は他の隊員たちが深い眠りに落ちたあとも、そっと起き出して火を点じ、音を立てずにできる仮縫いをしたり、ボタン穴を開けたりして滞っている仕事を片付け、夜明けには朝食を整えた。

何日も休みなく仕事をつづけるうちに、隊員たちはひどい疲労を覚えはじめた。なかでも耐えがたいのは睡魔であった。軍服に綿を入れながらうとうとしたり、縫うべきでないところに針を入れてしまうこともあった。そんなときには、眠気をさます鐘の音のように、正淑の明るい歌声が作業場に響きわたった。

歌をうたいながら正淑は干巴河子密営で戦死した戦友のことを思い、彼らが血潮をもって書き残した「朝鮮革命万歳」という文字を思い浮かべた。正淑の歌声を聞くと女子隊員たちの疲労や眠気は消えうせ、作業場は倒れた戦友の分までやり遂げようという

覚悟で沸き立った。

　こうして20日近くになると、600着の軍服づくりは最後の段階に入った。ところが、この大事なときにミシン針のめどが切れてしまった。一本しかない針を長時間使用したので、すり減ってしまったのである。女子隊員たちは、あと数着つくればすむのだから手縫いで仕上げようと言った。しかし正淑は、どんなに丹念に縫ってもミシン掛けには及ばないと言って、糸がめどから外れないよう片手で調節しながらミシンを掛けつづけた。これは、瞬時も手と目を離さず、身を引き締めておこなわなければならない作業であった。崔希淑はそばに座って正淑の額の汗を拭きとってやった。

　ついに600着の軍服ができあがった。女子隊員たちは正淑を抱き締めてうれし涙を流した。

　金日成将軍は、軍服づくりを10日も繰り上げて帰隊した女子隊員たちをほめたたえた。

　正淑は、将軍からまた重要な任務を受けた。

　その頃将軍は、大部隊旋回作戦の準備のため東牌子密営に出向いていた参謀長林水山（リムスサン）にたいし、深い疑惑を抱いていた。

　10月初め、両江口会議で主力部隊の各連隊と小部隊に、大部隊旋回作戦の成功を期して秘密コースの重要地点に食糧を確保しておくよう指示した将軍は、林水山にも食糧工作の任務を与えて東牌子密営に派遣したのであった。ところが数日後に、林水山が東牌子に向かう途中、ある密営に立ち寄って余分の機関銃を要求

したという連絡が司令部に届いたのである。

将軍は、食糧工作に出る人が何挺もの機関銃をどこに使うつもりなのかとつぶやき、深い物思いにふけった。

林水山は、それまで敗北主義的傾向をたびたび露呈しており、前年春の六道溝城市襲撃戦闘は彼の拙劣な指揮と臆病風のため失敗に終わり、双山子戦闘のときにも戦いの途中撤収を主張して、一部の隊員に悪い影響を与えていた。それに、彼は規律生活を嫌い、よくうそをつくので、何度か批判を受けたこともあった。

将軍は、東牌子密営に人を送って、そこでの活動状況を詳しく調べることにしたが、人選に迷った。林水山は参謀長である。この任務は鋭い洞察力と階級的原則性、妥協を知らぬ闘争精神の持ち主でなくては果たせない。

将軍は熟考の末、長年の闘争の過程で失敗や挫折、動揺、任務遂行における不可能というものを知らなかった正淑を派遣することにした。

将軍から特別任務を受けた正淑は、警護隊員の李斗益（リドウイク）を伴って東牌子密営に向かった。目的地に到達するには、濛江高原の原生林を突き抜け、400Km 以上の道を踏破しなければならなかった。高原は早くも一面雪に覆われていた。

二人は強行軍をつづけて１週間後に東牌子密営に到着した。

ところが、密営にはまともな丸太小屋一つなく、ただならぬ空気が漂っていた。林水山は将軍の命令を実行しようとせず、密営に閉じこもって堕落した生活を送っていた。彼は、地元人民のあ

いだに革命組織をつくる任務をなおざりにし、敵情が思わしくないという口実を設けて、地方組織との連係もとらず、食糧の備蓄はおろか、小部隊の越冬用の食糧すら確保していなかった。

　正淑は、林水山の安逸で敗北主義的な思想的傾向を見破った。絶対に黙過することのできない問題であった。正淑は、なによりもまず密営を建設し、小部隊の越冬準備を整えてこそ、沈滞した雰囲気を一新し、大部隊旋回作戦に必要な食糧工作も順調に進めることができると考えた。

　林水山はしぶしぶ密営づくりに応じたが、建設現場には一度も顔を見せなかった。長い間飢えに苦しんできた隊員たちは、寒さが激しくなると萎縮症にかかり、一人、二人と倒れはじめた。

　こうした状況のなかでも頑強に作業を進めて密営づくりを終えた正淑は、ただちに地方組織との連係をとり、食糧を調達する対策を立てるよう、林水山に強く求めた。しかし、彼は依然として不利な情勢と複雑な敵情を盾にとって、動こうともしなかった。隊員たちは彼の不当な振る舞いに憤慨しながらも、正面きって批判することはできなかった。彼らは、林水山の卑怯で安逸な振る舞いを目にしながらも、それが意識的な反革命的行為だとは考えていなかったのである。それは、林水山が部隊の参謀長であるためでもあった。

　しかし、正淑は林水山の振る舞いに第二の厳光浩（オムグアンホ）を見てとった。

　正淑はこみあげる怒りを抑えながら、林水山に、敵の警戒が厳

しく、「討伐隊」が威勢を振るっているからと、腕をこまぬいて心配ばかりしていたのでは結局、死を招くほかない、……参謀長が司令官同志の命令についてどう考えているかはよく分からないが、とにかく隊員たちの力と知恵を信じ、それを発揮させるなら不可能なことはないと思う、と主張した。

それでも林水山は、あるつてを通していま食糧を求めている最中だからしばらく待ってみようと言い、小部隊が積極的な活動を開始することにあくまで反対した。正淑は彼のこうした態度がたんなる卑怯さによるものではないことを確信した。それは、将軍の命令、指示にたいする意識的な怠慢であり、革命勝利の信念を失っていることの現れであった。このことを一刻も早く将軍に知らせなければならなかった。

翌朝、正淑は林水山に、自分の任務は果たしたから司令部に帰ると告げた。

正淑は李斗益にここを発とうと言った。彼はためらった。正淑の健康が損なわれ、到底行軍に耐えられそうになかったからである。彼は、発つにしても病気が回復してからにしようと言った。しかし正淑は、いまは一人や二人の苦しみや病気を問題にしているときではない、這っていき、転んでいってでも、司令官同志にここの実態を報告しなければならない、と諭した。

その日の夜、二人は密営を後にした。

正淑は病魔や疲労とたたかいながら雪を掻き分けて進んだ。寒さと風はいよいよひどくなった。いつ「討伐隊」に出くわすか分

からない危険な道のりであった。高熱にさいなまれていた正淑は、ついに意識を失って倒れた。年少の李斗益は涙声で正淑の名を呼びつづけた。

「正淑同志!　目をさまして下さい。正淑同志!」

おぼろげにその声を聞いた正淑は、超人的な力をふりしぼって起き上がった。

「わたしたちはどんなことがあっても司令部へ帰りつかなければならない。司令官同志に事態を報告するまでは、死ぬ権利もないのです」

寒風のなか、膝までつかる雪を掻き分け、苦痛をこらえながら必死に歩を進めようとする正淑の額に脂汗が流れた。

正淑はこのように濛江県東牌子から 400 余 Km の密林の道、積雪の道を踏破して司令部にたどり着き、将軍に東牌子密営の実態をつぶさに報告した。

林水山は、正淑が東牌子をあとにした数ヵ月後、日本軍に投降し、「討伐隊」の道案内に立って司令部が位置する密営を襲撃させた。

大部隊旋回作戦の途上で

東牌子から司令部に帰った金正淑は、金日成将軍の指揮のもとに進められた朝鮮人民革命軍主力部隊の大部隊旋回作戦に参加し

た。

1939 年 10 月、将軍は安図県両江口で開かれた軍事・政治幹部会議で、主として密営に依拠し限られた地域で活動してきた従来の闘争方式を変え、事前に定めた秘密コースをたどって広い地域を旋回しながら、敵の意表に出て奇襲をかけ、敵軍が押し寄せてきたら迅速に他所へ移動して活動するという、大部隊旋回作戦の方針をうちだした。

これは、朝鮮人民革命軍を放置しておいては日中戦争でも対ソ作戦でも成果をあげることができないという「研究総括」にもとづき、日本帝国主義が関東軍司令部直属の「野副討伐司令部」を吉林に置き、20 余万の大兵力をもって同年末までに朝鮮人民革命軍を「掃滅」するため、「東南部治安粛正特別工作〔23〕」の名目のもとに開始した悪辣な「討伐」攻勢に対処して立てられた作戦であった。

正淑は大部隊旋回作戦の日々、つねに隊伍の先頭に立って隊員たちを励まし導いた。

部隊が安図から敦化方面に移動した頃には、非常用のはったい粉も切れ、何日もの間水しか口にしていない隊員たちは、倒木を踏み越える力さえなくなり、それをよけて進まなければならなかった。

しかし、正淑は一度も疲れた様子を見せずに、年少の隊員の手を引いたり、年配の隊員の背のうを担いだりしながら先頭に立って歩いた。

部隊のなかに、熱病に冒されたうえ、治療中にひどいやけどを負った隊員がいた。

正淑はその年若い隊員に、これからはわたしと一緒に歩こう、わたしを姉さんと思って、疲れたり苦しいことがあったら隠さずに打ち明けるようにと力づけ、傷が悪化してはとたえず気を配りながら、彼の装具を担いで歩いた。

宿営の際には、少年兵たちの眠りを妨げないように気をつけながら、夜通し彼らの破れた軍服を繕った。また、ある晩、一人の少年兵の靴が破れているのを目にすると、眠りこけている彼の足からそっと靴を脱がし、疲労とたたかいながらそれを縫った。隊員たちが目を覚ましたとき、正淑は繕い直した靴を膝に乗せたまま、テントの柱にもたれてまどろんでいた。

12 月中旬、部隊は苦しい行軍の末、敦化県六[illegible]松に到着した。

そこには、日本人が軍需用材を切り出すために急設した大伐採場があり、600 余名の労働者が酷使されていた。伐採場には 70 名内外の山林警察隊がたむろしていたが、彼らは兵営のまわりに丸木の柵を巡らし、さらに内部に鉄条網を 3 重に張ったうえ、兵営から東北側の高地の砲台まで地下通路を設けていた。

将軍は木材所の敵を襲撃し掃討する作戦を立てた。六[illegible]松木材所襲撃戦闘と呼ばれているこの戦いは、和竜と安図一帯に集中している敵の「討伐隊」を混乱に陥れる目的で進められた。

12 月 17 日の夜、六[illegible]松木材所襲撃戦闘の火ぶたが切られた。人民革命軍は一挙に砲台を占拠し、山林警察隊の兵営に突入した。

敵兵は地下通路に逃げ込み、兵営はもぬけの殻であった。隊員たちは綿を持ち込んで地下通路の入り口を塞ぎ、火を放った。

ところが、戦いが一段落したとき、呉仲洽（オジュンフプ）連隊長が致命傷を負って倒れた。彼が立っていた地下通路の入り口の内側で、敵兵がひそかに銃口を向けていたのである。

正淑は、「みなさん！　連隊長の敵を討ちましょう。敵に百倍、千倍の死を！」と叫びながら地下通路に飛び込んだ。復讐戦が繰り広げられ、敵兵は全滅した。

同志の胸に抱かれた呉仲洽連隊長は、金日成同志の命令を最後まで遂行できずに死ぬのが残念だ、金日成同志の身を守ってくれ、と言い残して息を引き取った。

この日の戦いでは、正淑が工作のため延社地区へ赴く際、しばしば同行した第 4 中隊長の崔一賢（チェイルヒョン）と機関銃小隊長の姜興錫（カンフンソク）も戦死した。

部隊は戦死した同志たちを担架に乗せ、西北岔方面に向けて行軍し、夜が明けると、森の中に埋葬し追悼式をおこなった。

追悼の辞を述べる将軍の声は、愛する戦士を失った悲しみのあまりかすれていた。

正淑は、追悼の辞を終えた後も呆然と立ちつくしている将軍に「呉仲洽同志が持ち歩いていた祖国の土です」と涙声で話しかけ、土の入った袋を差し出した。彼の背のうに大切にしまわれていたものであった。

将軍は弔銃の鳴り響くなか、霊前にその土をまいた。正淑と指

揮官、隊員たちも背のうから祖国の土を取り出し、将軍にならってそれをまいた。

将軍は土が半分ほど残っている袋を正淑に渡して、こう言った。

「呉仲洽同志の念願どおり、この土を解放された祖国の大地にまいてあげよう」

かけがえのない同志を失った部隊は、百倍、千倍の復讐を誓いながら夾信子に向かった。

六[illegible]松木材所襲撃戦闘につづいておこなわれた夾信子木材所襲撃戦闘は、瞬時のうちに終わった。六[illegible]松の山林警察隊が抵抗したあげく、全滅したということを伝え聞いていた夾信子の山林警察隊は、兵営に閉じこもったまま抵抗を試みることなく降伏したのである。

人民革命軍の威力に勇気づけられた300余名の労働者がわれ先にと食糧の運搬を申し出、そのうち100余名は人民革命軍への入隊を志願した。こうして、新入隊員の数は六[illegible]松で入隊した人員を合わせて200余名にのぼった。

革命戦友を失って大きな悲しみにとらわれていた正淑は、すべての新入隊員を戦死した同志たちのように、将軍に限りなく忠実な革命戦士に鍛えあげようと誓った。

部隊が夾信子を後にして3日後、将軍は松花江のほとりで宿営を命じ、正月を迎えて新入隊員を歓迎する演芸公演を盛大に催そうと言った。

正淑は隊員たちと一緒に木を切り出して舞台を組み、テントを

つないで幕を作り、赤旗を垂らし、演目も大きく貼り出した。そして舞台と観覧席のまわりにはたき火をいくつも燃やした。暗い樹林を背景に設けられた舞台と赤旗は、あかあかと照らし出されて新入隊員を興奮させた。

将軍が席につくと、笛の音が鳴り響いて幕が開き、100 余名の合唱が始まった。

正淑が合唱を指揮した。力強い『革命歌』の歌声は新入隊員の胸を打った。

ついで舞踊、独唱、ハーモニカ独奏など、さまざまな演目が舞台にかけられた。遊撃隊の生活を見せる寸劇もあった。

正淑は『反日戦歌』をうたった。新入隊員は正淑の歌を聞きながら、血の海と化した祖国の現実を思い描き、戦意をかきたてた。

演芸公演は、新入隊員に将軍の率いる朝鮮人民革命軍に入隊した誇りを抱かせ、同志たちの犠牲によって重い沈黙が流れていた部隊の雰囲気を一新させる契機となった。

六[illegible]松と夾信子で敵を掃討した部隊は、撫松県の白石灘密営で 40 余日間、軍事・政治学習をおこなった。

これは、部隊に多数の新入隊員を受け入れたことを考慮し、部隊の戦闘力を強化するために将軍が講じた措置であった。

敵兵が敦化の雪の中で寒さに震えているときに、ストーブをたいた兵舎で学習をすることになったので、新入隊員は言うにおよばず、一部の古参兵までがうきうきしていた。

しかし正淑は、今度の軍事・政治学習はとりもなおさず大部隊

旋回作戦の継続であり、行軍と戦闘の一環であると受け止めた。

正淑は司令部の炊事と護衛の任務を遂行しながらも、警護中隊機関銃分隊の学習班の一員となって、欠かすことなく学習に参加した。学習討論の時間には、将軍の著作と教えにもとづき、朝鮮革命の戦略戦術的問題を、部隊の当面の課題や大部隊旋回作戦の目的と結びつけて理路整然と論述し、隊員たちに将軍の革命思想の真髄を深く把握させるよう努めた。

新入隊員の学習を助けることにも深い関心を払った。新入隊員のほとんどは読み書きがまったくできないか、やっとできる程度で、簡単な政治用語や遊撃隊の軍事用語すら分からないありさまだった。なかには、読み書きを習うのを非常に難しいことと考え、しりごみする者もいた。

古参兵たちはそのような新入隊員に、将軍のもとで読み書きを習い、革命の真理を体得した自分たちの体験談を話して聞かせた。

正淑は何人かの新入隊員を受け持ち、まず朝鮮語の字母を教えた。

最初は「革命」「朝鮮」「解放」などの単語を覚えさせ、ついで「朝鮮民族を総動員して広範な反日統一戦線を実現しよう」「強盗日本帝国主義の統治を覆して、真の朝鮮人民政府を樹立しよう」などのスローガンや短い文章を暗誦させ、それを書き取らせた。夜学にすら通ったことのない隊員には、『祖国光復会10大綱領歌』などの革命歌を教える方法で字を覚えさせ、ある程度読み書きができるようになると、「ぼくはなぜ金日成将軍の遊撃隊に

入隊したのか」「金日成将軍に初めてお会いした日」といった題目で作文を書かせ、彼らが将軍に忠実な革命戦士になるためにはどう生き戦うべきかを深く自覚するようにした。

新入隊員は読み書きの学習に劣らず、軍事知識や訓練の動作を学ぶのに苦労した。それまで斧やのこぎりしか手にしたことのない彼らに、小銃や機関銃のような兵器について、その構造から作用の原理、分解と組合わせ、故障の修理法にいたるまで習熟させるのは並大抵のことではなかった。

正淑は新入隊員の軍事学習や訓練にともに参加し、武器の分解・組合わせをはじめ隊列動作、射撃、戦術訓練などすべての動作を一つひとつ自らやって見せ、彼らが軍事学習にいっそう励むようにした。

第1期軍事・政治学習が終了すると、将軍は部隊の全般的戦闘準備状態および新入隊員の準備程度を点検するため、非常呼集命令を下した。指揮官と古参兵はいうまでもなく、新入隊員もみな迅速正確に行動して戦闘位置についた。

将軍は、わずか1ヵ月の間に新入隊員がこのようにしっかり訓練されたのは大きな成果だ、この程度ならいますぐにでも祖国へ進軍できる、と満足の意を表した。

将軍は第1期集中軍事・政治学習を総括する際、学習で優秀な成績をおさめ、新入隊員の学習を助けるうえで模範を示した正淑に、表彰として万年筆を与えた。

第2期軍事・政治学習が始まって10数日経ったとき、部隊は

白石灘密営を発たざるをえなくなった。白頭山東北部の森林や渓谷、敦化の密林を彷徨していた敵が白石灘密営をかぎつけて押し寄せてきたのである。彼らは山の峰々に無線通信器を設置して連絡を取り合う一方、「いま残っているのはお前たちだけだ。むだな抵抗はやめて帰順せよ」というビラをまいた。ビラはいたるところにまかれ、行軍する隊伍の頭上にも落ちた。

しかし、軍事・政治学習を通じて心身を鍛えた隊伍は、赤旗をなびかせながら大部隊旋回作戦のコースをたどって行軍をつづけた。

1940 年 3 月 11 日、朝鮮人民革命軍の主力部隊は敵の軍事要衝である大馬鹿溝を襲撃し、またたく間に敵を壊滅させた。人民革命軍の勝報は、茂山対岸の国境地帯に集結していた敵軍を一大混乱に陥れた。また、その知らせは、敦化の奥地で遊撃隊が全員凍え死にしたという敵のデマのため不安に駆られていた人民に大きな喜びを与えた。

部隊が大馬鹿溝から撤収するとき、正淑は、ろ獲物資の運搬を申し出た 300 余名の労働者と並んで歩きながら、次のような話をした。

——みなさんはたぶん、朝鮮人民革命軍に会う前までは「共産軍はみな山の中で凍え死にした」という日本軍警の宣伝を真に受けていたでしょう。しかしわたしたちは、このように祖国の対岸にある大馬鹿溝に現れて敵を撃滅したではないですか。飢えと貧困に苦しんでいるみなさんの運命を救ってくれる方は、金日成将軍以外にい

ません。だから人民革命軍を物心両面から支援するのが、みなさんがなつかしい父母妻子が待つ故郷に早く帰る道なのです。……

物資の運搬を終えて大馬鹿溝に帰った労働者たちは、行く先々で金日成将軍と朝鮮人民革命軍について、また女子隊員たちの印象について、伝説のように話して聞かせた。

当時、日本の出版物は、「武装した女子隊員も参加、金日成部隊の全貌判明……」という見出しで、「12 日早暁、咸北対岸の大馬鹿溝で金日成司令官の率いる遊撃隊について行った 140 名中……帰ってきた人たちの話によると、遊撃隊は 150 名ほどであるが、そのなかには武装した女性も 7、8 名混じっていたという」と報じた。偏ったニュースを流すのが習慣になっている敵の御用出版物までもが、厳然たる事実を前に大きな衝撃を受け、上のように報じた「武装した女子隊員」のなかには、正淑もいた。

祖国の独立、人民の自由と解放をめざして、あらゆる困難にうちかっていく正淑の名声は、白頭山東北部と北部朝鮮一帯の朝中人民のあいだに知れ渡り、敵にとって驚異の対象となった。

とりでとなり盾となって

金日成将軍は抗日革命闘争の全期間、危険な地下闘争や苛烈な戦闘をつねに先頭に立って指揮した。朝鮮の革命家にとって将軍の安全をはかることはなににもまして重要なことであった。

金正淑は、領袖決死擁護の精神をもって、数知れぬ危険のなかでわが身を盾とし、肉弾となって将軍の身辺を守った。

1940 年 3 月 25 日のことである。

将軍は、大馬鹿溝からずっと追跡してくる敵を振り切らずには茂山地区への進出は困難だとし、この日、紅旗河の谷間で敵軍を撃つことにした。

敵は「常勝部隊」「討伐の王者」と自称する極悪非道な前田部隊であった。朝鮮人民革命軍との戦いで痛撃を受け、死に絶えながらも撃発装置をはずして捨てたり、腕時計を石で叩き壊したりするのを見ても、その悪質さのほどがうかがえた。

そのような敵であったので、戦いは最初から激烈をきわめた。

敵兵を伏兵圏内に誘い込み殲滅戦を展開していたとき、そこから抜け出した数人の敵兵が司令部の位置している東側の高地に向かって這い上がってきた。

司令部を守っていた正淑は、彼らを発見するや銃を連発しながら敵を誘引して司令部と反対の方向にひた走った。司令部からかなり離れた地点に達すると、命中射撃を浴びせて敵兵を一人残さず撃ち倒した。

隣の稜線から響いてくる銃声に驚いて隊員たちが駆けつけたとき、あたりはもうひっそりとしていた。隊員たちが首をかしげながら周囲を見回していると、下の方から正淑が上がってきた。正淑は彼らに向かって、「安心なさい。司令官同志はご無事です」と言った。正淑が背負っていた金だらいには、弾痕が

2 ヵ所もついていた。敵兵を誘引していたときに撃ち込まれた敵弾の跡であった。みな弾痕を見て驚いたが、正淑はそんなことよりも、将軍が無事であったことに安堵の胸をなでおろしていたのである。（この金だらいはいま、朝鮮革命博物館に所蔵されている）

紅旗河戦闘後、正淑は第 8 連隊とともに茂山地区に進出し、軍事・政治活動を活発に展開して、大部隊旋回作戦のニュースで沸き立った国内人民の反日闘争気勢をさらに高揚させた。

紅旗河で甚大な打撃をこうむった敵は、なんとしても朝鮮人民革命軍の主力部隊を掃滅しようといっそうやっきになった。花拉子の谷間は「討伐隊」で埋めつくされた。

このような状況に対処して、将軍は同年 4 月、安図県花拉子で大部隊旋回作戦の勝利を総括し、分散活動によって各地で敵を奇襲、掃滅する方針を示した。こうして、朝鮮人民革命軍の各部隊は 4 月下旬から分散活動に移った。

正淑は分散活動の日々にも、司令部の警護を朝鮮革命の運命にかかわる第一の任務と心得、わが身を盾となして将軍の安全をはかった。

同年 6 月下旬、小哈爾巴嶺に向かって行軍していた部隊が安図県大沙河の奥地まで来て川を渡ろうとしていたとき、後を追ってきた敵が高地から突如射撃を始めた。将軍の指揮する部隊であることに気づいた敵だった。彼らは敵軍の中でもとりわけ悪質なことで知られている安図県の「新選隊」であった。この「新選隊」

を率いてきたのは、3 年前、安図県金廠での戦闘で崔賢(チェヒョン)部隊に誅殺された悪名高い李道善(リドソン)の兄であった。弟の仇を討とうと必死になっていた彼は、つねづね「大日本帝国」のため「粉骨砕身」するとうそぶいていた日本帝国主義に忠実このうえない手先であった。「新選隊」の大半は、人民革命軍の手にかかって死んだ悪質な反動分子の身内からなっていた。

部隊は危険きわまりない状況におかれた。先頭の隊員は川に足を踏み入れ、後につづく隊員もズボンをまくりあげていたときのことで、後方から敵の射撃を受けながら川を渡り、開豁地帯に走り込もうとすれば、敵の狙い撃ちにあって取り返しのつかない損失をこうむる恐れがあった。

とっさにあたりの地形を見てとった将軍は、高地に向けて突撃するよう命じた。突撃ラッパの音が高々と鳴り響き、隊員たちはときの声をあげながら高地へ駆けあがっていった。

人民革命軍のこの猛烈な気勢にあわてふためいた敵兵は、有利な位置を占めているにもかかわらず、守勢に回った。しかし、悪質な彼らは、気を取り戻して激しく抵抗した。戦闘は激烈をきわめた。

将軍は山腹の岩の上に立って戦闘を指揮した。正淑は、将軍のそばを離れず、注意深くあたりを見回していた。

ふと妙に揺れ動くカヤの茂みに目を向けたところ、5、6 名の敵兵が茂みに潜んで将軍の方に銃口を向けているではないか。危機一髪の瞬間であった。長年、厳しい抗日武装闘争を陣頭に立っ

て指揮してきた将軍が危険にさらされたことは数限りないが、これほど危険な瞬間はなかった。

「司令官同志!」

とっさにこう叫んだ正淑は、すばやくわが身で将軍をかばいながら、モーゼル拳銃の引き金を引いた。息づまるような瞬間、谷間を揺るがす一発の銃声とともに一番前の敵兵が銃を落として倒れた。つづけていま一発の銃声が響いた。正淑の肩越しに放った将軍の銃声であった。正淑の拳銃はつづけざまに火を噴いた。茂みの中の敵兵はまたたく間に全滅した。

毅然として戦闘を指揮している将軍を仰ぐ正淑の目から涙がこぼれおちた。それは将軍の身辺から危険が去ったという喜びの涙であり、無事な将軍を仰ぎ見、限りない幸福感と安堵の思いにつつまれた革命戦士の清らかな涙であった。

正淑の熱い忠誠心によって、将軍の安全はしっかりと守られ、朝鮮革命は力強く勝利の一路をたどることができたのであった。

七　必勝の信念

小哈爾巴嶺会議の直後

日本帝国主義者は「大東亜共栄圏」の野望を遂げるため、中日戦争を終結できないまま東南アジア地域に戦火を拡大しつつ、「後方の安全」を確保するため朝鮮人民にたいする未曾有の政治的暴圧と経済的収奪を強行する一方、20 万の精鋭部隊を投入して朝鮮人民革命軍の「完全掃滅」を狙う全面的な大「討伐」攻勢を展開した。

国際的には、第 2 次大戦の炎が全世界に燃え広がっていた。

情勢はますます厳しくなっていたが、金日成将軍は祖国の解放を確信し、その日を主動的に迎えるための戦略的方針をうちだした。

1940 年 8 月 10 日と 11 日の両日、小哈爾巴嶺で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で、将軍は、祖国解放の大事を主動的に迎えるため、朝鮮革命の枢軸をなす人民革命軍の力量を保持、蓄積しながら、彼らを有能な政治・軍事幹部に育てるとともに、朝鮮人民を政治的、思想的にしっかりと備えさせ、全国的な規模で全民抗争の準備をおし進めるべきだとし、そのためには大部隊作戦から小部隊作戦へ移行しなければならないとする新たな

方針を示した。

会議後、人民革命軍の各部隊は小部隊と工作班および軍事・政治訓練をおこなう部隊に再編制された。

その頃、金正淑は、将軍の指揮のもとに進められた安図県黄花甸子付近の沼沢地戦闘、延吉県発財屯付近戦闘など数々の戦闘や小部隊活動に参加し、行く先々で人民を祖国解放の聖戦へと立ち上がらせる大衆政治活動を繰り広げた。

同年９月、正淑は将軍にしたがって間白山密営に到着した。それは白頭山（ペクトウ）の主峰と間白山の間につくられた密営で、広い盆地に展開されていた。

小哈爾巴嶺会議以降の小部隊と工作班の活動状況を全般的に確認した将軍は、小部隊・工作班責任者会議を招集した。正淑も会議に参加した。

将軍は会議で､小部隊､工作班のメンバーが自らを有能な軍事・政治幹部に鍛えるとともに、北部朝鮮一帯の有利な山岳・樹林地帯に臨時秘密根拠地と活動拠点を設け、重要な産業地帯と農漁村に深く入り込んで広範な大衆を意識化、組織化し、各種形態の反日闘争をより強力に展開する具体的な課題と方途を示した。さらに、一部の小部隊を新たに編制し、小部隊と工作班の活動区域を分担した。

この頃、人民革命軍小部隊・工作班の縦横無尽な活動によって大混乱に陥った日本帝国主義者は、将軍のいる司令部の行方を突きとめようと血眼になっていた。「討伐隊」のほか、多くの密偵

や革命の裏切り者が山や谷をくまなく捜索した。

こうした状況下で、正淑は将軍の身辺の安全を守ることを直属小部隊の第一の任務とみなした。

正淑は、小哈爾巴嶺会議の直後に開かれた小部隊の党細胞会議で、司令官同志の身辺にいるわれわれ司令部護衛兵の任務は、一にも二にも三にも司令官同志の身辺護衛をりっぱにおこなうことである､司令官同志が朝鮮革命の陣頭にしっかり立っていてこそ、祖国の解放も革命の明るい未来もあるということをわれわれは肝に銘ずるべきだ、と強調した。

正淑は、将軍の指揮のもとに進められた小部隊活動の日々、つねに真っ先に立って危機を切り抜けていく先兵となり、将軍の安全を命を賭して守る交替なき哨兵となった。行軍の際には隊伍の先頭に立って辺りに目を配り、宿営時には時を問わず周囲を見回って安全を確かめるのを常とした。

司令部直属の小部隊が安図県黄溝嶺基地で活動していた 1940 年 10 月のある日の明け方、敵が司令部の位置を探り当てたようだから、迅速に移動するようにという将軍の指示により、小部隊は出発の準備を急いだ。

隊員たちが朝食を終えかけたとき、歩哨に立っていた機関銃副射手の李乙雪（リ ウルソル）がテントの中に入ってきた。どうしたのかと聞く隊員に、彼は、司令官同志が食事をするようにと言い、歩哨を代わってくれたと答えるのだった。

正淑は話を最後まで聞こうともせず、テントを飛び出そうとし

た。その瞬間、監視所の方から「誰だ!」という将軍の声とともにモーゼル拳銃の銃声が響いた。ついで機関銃の火を噴く音がした。

正淑は「司令官同志！」と叫ぶが早いか、監視所めがけて駆け出した。雨あられと飛び来る銃弾も気に留めなかった。

将軍は倒木を盾にして這い寄る敵兵に命中弾を浴びせていた。正淑はすばやく将軍をわが身でかばい、敵の機関銃射手を撃ち倒した。

「司令官同志!　危険です。早くここを避けてください」

危険きわまる瞬間であった。

李乙雪をテントに送った将軍は、倒木に腰をおろして今後の作戦を構想していた。そのとき、どこかで枯れ枝の折れる音がした。密林で枯れ枝が折れるのはごくありふれたことであった。しかし将軍は、長年の戦いの過程で身についた第六感で、敵兵がすぐ近くに接近していることを察知した。将軍は倒木から滑りおりながらモーゼル拳銃を抜き、音のした方向に向けて射撃した。ほとんど同時に、敵の機関銃の音が鳴り響いた。大勢の敵兵が朝もやに乗じて宿営地を包囲し、じりじりと接近していたのである。彼らは宿営地のすぐ近くまで来て機関銃を据え、引き金を引こうとした瞬間、枯れ枝を踏んだのである。

将軍は機関銃射手と数名の隊員に敵を牽制するよう指示し、残りの隊員には戦闘に有利な裏山の台地を占めるよう命じた。

「みなさん!　司令官同志を守って早くあの台地に登るのです」

正淑はこう叫ぶと、機関銃射手のそばに身を伏せ、援護射撃を

はじめた。敵の攻撃はすさまじかった。朝鮮革命の司令部をなんとしても掃滅しようという魂胆であった。

モーゼル拳銃をしまい､弾倉を替えて機関銃をつかんだ正淑は、猛烈な射撃を加えた。敵兵は頭をもたげることもできなかった。

やがて、からみあったヤマブドウの蔓を銃剣で切り払いながら台地にたどり着いた隊員たちが射撃を開始し、ついに敵を完全に制圧した。

敵軍は、裏切り者の林水山（リムスサン）が道案内してきた「特殊部隊」であった。敵を駆逐し、戦場を捜索していたときにこのことを知った隊員たちは怒りに震えた。かつて師団の参謀長まで務めたことのある男が、悪辣な日本帝国主義者の手先になりさがったことに憤慨せざるをえなかったのである。

正淑は林水山をよく知っていた。正淑が蔵財村で児童団の指導員をしていた頃、彼はそこで中隊政治指導員を務めていた。

正淑は小部隊の隊員たちに、革命家は良心を失うと変節するものである､革命家にとってもっとも大切なのは革命的良心であり、もっとも有力な武器は革命勝利の信念である、革命家が良心と信念を失えば革命を放棄して敵に投降し、同志たちに銃口を向けるようになる、林水山の例がそれをよく示している、と話した。

林水山はその後、日本帝国主義者からも見捨てられて酒売りになりはて、祖国が解放されたことも知らずに日々を送っていた。そして、普天（ポチョン）地区で日本軍の敗残兵を掃討していた柳京守（リュギョンス）の手で逮捕された。

司令部直属の小部隊で、正淑は炊事と病人の看護を担当しながら、全隊員の面倒を見た。

隊員たちに冬の軍服を着せることになったとき、正淑は連日、夜も寝ずにたき火のそばで軍服を縫った。それを見かねた全文燮（チョンムンソプ）が、自分が縫ってみると言うと、正淑は、簡単な縫い物さえしたこともないあなたに、軍服など縫えるはずがない、と笑って取り合おうともせず、最後の軍服まで独りでつくりあげた。

その頃、将軍は連絡員が戦死したため音信の絶えた呉白竜（オベクリョン）小部隊のことを気にかけ、日に何度も、彼らがまともな軍服を着ているだろうか、飢えに苦しんでいるのではなかろうか、とつぶやくことがあった。深夜や早暁に密営のはずれまで足を運んだこともたびたびだった。

正淑は、呉白竜小部隊の隊員たちの名前を一人ひとり思い浮かべては、彼らの背丈や体格を考えながら綿入れの軍服を縫いあげた。そして、煙草入れをつくり、「革命勝利」「祖国解放」という必勝の信念を抱かせる文字を縫い込んで、冬服のポケットに一つずつ入れた。

綿入れの軍服と煙草入れを見た将軍はたいへん満足した。

「本当にりっぱなことをしてくれた。敵中で苦労している同志たちがこの綿入れを受け取ったら、どんなに喜ぶことだろうか。寒さに震え、飢えに苦しんだこともすっかり忘れてしまうに違いない」

司令部直属の小部隊は将軍にしたがい、一刻も早くソ満国境地

帯に向かわなければならなかった。将軍はそのとき、朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍、ソ連極東軍との連合作戦問題を討議するため、ハバロフスクで開かれる会議に参加することになっていたのである。

ところが、出発の日になっても呉白竜の小部隊は現れなかった。

部隊が出発する前に、正淑は隊員たちと一緒にたき火の跡の地面を掘り、枯れ木を切って底に敷いた後、そこに綿入れの軍服と二俵の米を埋めた。

その後、遅れてそこに到着した呉白竜小部隊は米と軍服を見つけた。湿り気一つない冬服のポケットに刺繍入りの煙草入れが入っているのを見た彼らは、「金正淑同志の心づかいだ!」と歓声をあげ、感激に目をうるませた。

司令部直属の小部隊が汪清県百草溝や蛤蟆塘で軍事・政治活動を繰り広げ、琿春付近に至ったときは、もう薄氷が張りはじめた初冬であった。

ある日、宿営命令が下ると、相次ぐ戦闘と行軍に疲れきっていた隊員たちは、たき火の前ですぐ眠り込んでしまった。

その間に、正淑は谷間に降りていき、薄氷の張った谷川の水で将軍の衣服を洗った。洗濯を終えたとき、正淑の軍帽からのぞいている髪や眉は霧氷で白くなり、唇は真っ青になっていた。

正淑が洗濯物をたき火で乾かしていたとき、非常呼集の号令がかかり、出発命令が下った。敵が近くに現れたのである。

正淑は濡れた衣服をたたんで懐の中に入れた。

小部隊はただちに行軍を開始した。

次の宿営地で、手入れの行き届いた乾いた衣服を持って司令部のテントに入ってきた正淑の顔は、寒さのため真っ青になっていた。乾いた清潔な衣服と凍えた正淑の顔を見比べながら、将軍は低い声ではあったが、強く面詰した。

「誰がきみにこんなことをしろと言ったのだ！？」

「……」

正淑は口を閉ざし、その場に立ち尽くしていた。

将軍は声を和らげてこう言った。

――わたしを思ってのきみの誠意には頭が下がる。それだけはいつもありがたいと思っている。しかし、どんなつもりでそんなことをしたのだ。そんなことをして傷寒にでもかかったらどうするのだ。きみを犠牲にしていい目を見ても、わたしの心が安らぐはずはない。

金日成主席は後日、そのときの心情を次のように述懐している。

「ひどく凍えて真っ青になった彼女の顔を見て、わたしは涙が出そうになった。生前の母にもできなかったことを彼女がしたのだと思うと、何をどう言ったらよいのか分からなかった。母でさえできなかったことを自らすすんでなした金正淑の犠牲的な同志愛、それはいま思えば、司令官にたいする革命的な同志愛であると同時に、熱い人間愛でもあった」

将軍はそれ以上言葉をつぐことができず、テントを出た。外はぼたん雪が音もなく降りしきっていた。

将軍はゆっくり歩を移しながら、2 年前、双山子戦闘の際にあった出来事を思い浮かべた。

それは、将軍自らが機関銃を手にして戦わなければならないほど熾烈な戦闘であった。一息入れて食事をとるひまもなかった。ところが、急に脇腹にぬくもりが感じられた。ポケットを探ってみると、なんとマントーが入っているではないか。あたりを見回すと正淑が戦場をぬって、隊員たちにマントーを配っていた。

また、ある戦闘の際、指揮をとっていた将軍は、誰かが自分のポケットに何かを入れる気配を感じた。振り返ってみると正淑だった。それは、松の実を一粒一粒割って紙に包んだものだった。戦闘が終わったあと、将軍がどこで手に入れたのかと聞くと、正淑はただ微笑を浮かべるだけだった。

将軍は、自分が着用している綿入れの外套についても回想した。それは、真綿が銃弾を通さないということを知って、正淑が機会あるたびに真綿を集め、幾晩も眠らずに縫い上げたものであった。外套が将軍の体にぴったり合うのを見て、正淑はうれしさを隠しきれなかった。

正淑はまた、暇を見ては将軍のために毛糸の靴下や腹巻きを編んだ。季節が変わるたびにつづけられることだったので、いつか将軍が毛糸はどこからどう手に入れるのかと尋ねたことがあった。そのときも、正淑はただほほえむだけで、なんとも答えなかった。正淑には毛糸の靴下があるのかと聞いても、やはり答えなかった。将軍が重ねて問いかけると、正淑は物静かにこう答えた。

「将軍は大事をあずかっておられるのですから、そんなことを気にすることはありません」

「他郷で春を迎え」

1941 年 1 月初旬、ハバロフスクでは、満州で活動する朝鮮人民革命軍と中国人抗日武装部隊、ソ連極東軍各代表の会議がコミンテルンの名義で招集された。

ハバロフスク会議で重点的に討議されたのは、東北抗日連軍と朝鮮人民革命軍の活動方向に関する問題であった。会議では議論の末、今後の活動は小部隊活動、大衆工作、実力培養に基本をおくことにした。これは、金日成将軍が小哈爾巴嶺会議で示した方針と一致するものであった。会議ではまた、ソ連領内の訓練基地を根拠地にして、朝鮮と満州の広い地域で小部隊活動を展開することについても合意を見た。

ハバロフスク会議後、ソ連極東地域に南キャンプと北キャンプが開設され、朝鮮人民革命軍の一部の部隊は南キャンプに集結した。

金日成将軍は人民革命軍各部隊を小部隊に再編制して国内および満州一帯に派遣することにし、自らも一小部隊を率いて白頭山東北部と国内に進出し、軍事・政治活動を展開する決心を明らかにした。そして金正淑には、白頭山密営に行って、国内各地と長

白一帯に派遣されている小部隊と工作班に司令部の作戦的意図を伝え、小部隊と工作班および革命組織の指導にあたる任務を与えた。

正淑を白頭山地区に派遣する問題が持ち上がったとき、指揮メンバーは非常に心配した。彼らが心配するのも無理はなかった。その頃、日本帝国主義者は対ソ侵略戦争を予定して前年初秋から朝鮮人民革命軍への大々的な攻勢を強行する一方、朝鮮人民にたいする未曾有のファッショ的暴圧と収奪を強化していたのである。こうした状況のもとで、各地に分散している小部隊と工作班の活動を指導するというのは容易なことではなかった。まして、内外の情勢が複雑をきわめているとき、身近にあって将軍を補佐すべき正淑が長期間将軍のもとを離れるというのは、慎重を期すべき問題であった。

将軍は彼らのそうした憂慮ももっともだと思った。しかし、他のことならともかく、この任務だけは、現地の実情に明るく、地下工作の経験を積んだ彼女をおいて適任者はないとし、正淑に白頭山密営へ行く準備を整えるよう指示した。

その日以来、正淑は、先に小部隊活動の途につく将軍と工作地に向かう隊員たちの旅支度を手伝いながら、自らの出発準備を急いだ。

そんなある日､隊員たちが将軍に写真を撮りましょうと言った。将軍が小部隊の工作に出かけたらいつまた会えるか分からないので、写真を撮って記念に残そうというのであった。

気の早い隊員がカメラを手にして、将軍はお顔だけ貸してくださればいいのです、とおどけた調子で言った。指揮メンバーの崔賢（チェヒョン）や安吉（アンギル）〔24〕も同じ思いで、外で撮影場所を定めて将軍を待っていた。

将軍は、みんながどうしてもと言うなら、今日は天気もよいことだし写真を撮るのも悪くなかろう、と言って外に出てきた。将軍は春の水気を含みはじめたシラカバの木の前で、指揮メンバーと写真を撮り、隊員たちとも何枚か撮った。そのとき誰かが将軍に、小部隊工作に出かける記念に正淑同志と一枚撮るようにと勧めた。それを聞いて正淑は顔を赤らめ、女子隊員たちの後ろに隠れた。女子隊員たちは正淑の背中を押して将軍の傍らに立たせた。その瞬間を逃さず、「カメラマン」がシャッターを切った。それは、正淑にとって結婚記念写真とも言えるものであった。

前年の晩秋、訓練基地へ向かう苦しい行軍の途上で結婚を公表してからも、多忙な二人はゆっくり話を交わす時間すら見出せずにいた。それがこの日、戦友一同の祝福を受けながら、末長く伝えられることになる記念写真を撮ったのである。将軍はその春を永遠に記念しようと、写真の裏に、「他郷で春を迎え、1941・3・1」と記した。

もともと将軍と正淑は、祖国を解放する前に結婚しようとは一度も考えたことがなかった。他の同志たちの場合も同じだった。しかし、祖国の解放は1年や2年で達成できるものではなく、革命は代を継いでつづけなければならない事業であった。それに歳

月は人を待ってくれるものではないため、二人は思い直して結婚に踏み切ったのであった。

実に、他郷で迎えたその春は、二人の生涯にとって忘れることのできない祝福すべきものとなった。

戦いは困難をきわめ、革命の道は遠い。これからまた、いかに多くの春を他郷で迎えることになるのか分からない。しかし、解放祖国の春を早く迎えるため、再び厳しい国内遠征の道を歩まなければならない二人であった。

数日後、将軍は正淑に、豆満(トウマン)江沿岸一帯の政治工作班と革命組織の活動状況を確かめ、5 月中旬までに汪清県夾皮溝臨時秘密根拠地に到着するよう指示し、小部隊を率いて先に遠征の途についた。

その前に正淑は、人知れず自分の髪を切って将軍の軍靴の底に敷いた。正淑はひたすら、遠く険しい道を歩む将軍の無事を祈ったのである。

人民革命軍の隊員たちは明日への確信と楽観に満ちて小部隊活動を果敢に展開する一方、軍事・政治訓練に拍車をかけた。

そうした 4 月中旬、ソ連と日本の間に中立条約が締結された。このニュースは革命家たちに大きな衝撃と失望を与えた。人民革命軍の隊員のなかにも、朝鮮革命の前途を憂え、悲観するものが現れた。

こうした状況を察知した正淑は、出発の準備で多忙をきわめていたが、隊員たちを集めてこう言った。

「われわれは情勢が複雑になるほど、自国人民の力を信じ、自らの力で自国の革命を責任をもって最後までやり遂げるという意志と信念をもたなければなりません」

つづいて正淑は、大国の援助なしには祖国を解放できないと考えるのは事大・依存思想だ、われわれは他人に頼って革命をはじめ、他人の力に依存して革命を進めてきたのではない、われわれはひたすら将軍にしたがう広範な人民大衆を組織、動員し武装させて、強大な日本侵略軍と戦っているではないか、われわれが革命で勝利するためには司令官同志のお言葉どおり、事大・依存思想を捨て、自己の革命力量をさらにしっかりと整えなければならない、と強調した。

その後も、正淑は、指揮メンバーや隊員たちにたびたび会って、日ソ間の解消しがたい矛盾、そして朝鮮革命の勝利の必然性について話して聞かせ、彼らの胸に将軍の思想と路線にもとづく必勝の信念を植えつけた。

5 月の初め、正淑は小部隊を率いて訓練基地を発った。

正淑は豆満江沿岸一帯の政治工作班と地下組織の活動状況を確かめたあと、5 月中旬、汪清県夾皮溝臨時秘密根拠地に到着した。

秘密根拠地の外哨で金一（キムイル）が正淑を迎えた。司令部へ案内された正淑は将軍に、訓練基地から当地へ来る途中に確認した豆満江沿岸一帯の政治工作班と地下組織の活動状況および各地の小部隊から届けられた通信資料、それに自ら収集した情勢資料を報告した。報告を受けた将軍は、貴重な資料だと言って満足した。

正淑はまた、日ソ中立条約の締結に関連して隊員たちのあいだに見られる思想的動揺と偏向について詳しく報告した。

将軍は指揮官たちに向かって、自分も予測していたことだが、この問題を速やかに解決しないことには朝鮮革命は大きな難関にぶつかることになる、できるだけ早く国内に入って小部隊と工作班の責任者と組織メンバーの会議を開き、彼らに日ソ中立条約にたいする正しい認識を与え、革命闘争で自主的立場を堅持するよういま一度強調する必要があると述べた。

将軍の指示により、会議の準備のため指揮官の一人が直ちに現地に派遣された。

その後、将軍は「われわれの力で朝鮮革命を完遂しよう!」というスローガンをうちだし、人民革命軍内の事大・依存思想を一掃し、自力で朝鮮革命をなし遂げるための教育活動を強化する措置を講じた。

5 月中旬、正淑は将軍にしたがって夾皮溝臨時秘密根拠地を後にした。隊伍は二道河子を経て安図県寒葱溝に至った。

将軍は正淑に、6 月の中旬に国内と長白地区で活動している小部隊と工作班、革命組織責任者の会議を開く予定だと言い、この一帯で活動中の各小部隊と工作班の責任者に連絡して、間白山密営に呼び集めるよう指示した。

正淑は韓昌鳳（ハンチャンボン）、韓泰竜（ハンテリョン）など小部隊のメンバーを伴って寒葱溝を発った。目的地は白頭山密営であった。

安図県小沙河に至ると、正淑は、その一帯の革命組織の活動状

況を確かめるよう指示して一部の隊員を残した。そして長白県十五道溝天上水付近で小部隊をいくつかの班に分けて各地域に派遣し、自分は佳在水村へ行くことにすると言った。

隊員たちは正淑が村へ行くことに反対した。しかし正淑は、「恵山（ヘサン）事件」によって当時、長白一帯の多くの組織が破壊されたにもかかわらず、佳在水一帯の組織は健在でりっぱに活動していた、苦難の行軍の際にも危険をものともせず、われわれに物心両面の支援をしてくれた、いま彼らはわれわれとの再会を待ち焦がれているに違いないと言い、先に立って歩いた。

長い間組織との連係が絶えてもどかしい思いをしていた当地の組織メンバーに会った正淑は、当面の情勢と祖国解放の大事を主動的に迎えようという将軍の構想を説明し、勝利の確信をもってさまざまな大衆闘争を果敢に展開するよう強調した。

その後、正淑は韓昌鳳、韓泰竜の二人が待っている桃泉里の胞胎山に向かった。

小部隊は数日間胞胎山に留まり、下崗区一帯の村々の実態をくまなく調査した。

やがて胞胎山を後にした小部隊は、黒瞎子溝方面に向かい、途中、十九道溝徳富洞付近で銃を肩にしたまま釣りをしている二人の「満州国」軍兵士を捕らえた。二人は、自分たちは紅頭山一帯に駐屯中の「満州国」軍に所属し、長白一帯の「治安」が「確保」されたので帰郷する準備をしているところだと言うのだった。これは、当地域の敵が安心しきっていることを示す重要な情報であ

った。

二人の陳述と工作班が各地で入手した資料にもとづいて敵情を分析した正淑は、敵が油断している間に革命組織を国内に拡大する活動を積極的におし進めるべきだと考えながら、行軍をつづけた。

一行は６月の初めに白頭山密営に到着した。

再び白頭山密営で

白頭山密営の小部隊の隊員たちと会った金正淑は、休息する間もなく、間白山会議に参加するメンバーを呼び集めるため各地に連絡員を送る一方、将軍に提出する活動報告を準備した。そのあと、密営の責任者と一緒に、将軍の指導のもとに開かれる重要会議の場所に定められた間白山密営に向かった。ここで正淑は、会場と会議参加者の宿所を見て回り、会議の準備に手抜かりのないよう当地に留まって綿密な手配りをした。

その間、白頭山密営では、丸太小屋を一棟新築する作業が進められた。正淑の使う小屋であった。それまで正淑は、裁縫隊の営舎で女子隊員たちと一緒にすごしていた。韓昌鳳、金俊益（キムジュンイク）らは、小白水のほとりにある将帥峰(現在の正日峰)の麓の日当たりのよいところに敷地を定め、太さの一様な良質の木を切り出して丸太小屋を建てた。

当時は誰も、この丸太小屋が半世紀後に「白頭山密営の生家」と呼ばれる歴史的な建物になるとは思ってもいなかった。

その数日後の６月中旬、将軍が白頭山密営に到着した。間白山密営から帰って待機していた正淑は、将軍を司令部にあてられている丸太小屋に案内した。将軍の護衛を務めていた抗日革命闘士金益鉉（キムイクヒョン）は、その日のことをこう回想している。

――金日成将軍につきそって司令部の小屋に足を踏み入れたとたん、わたしはびっくりした。……机と椅子は新しく作られ、やかんもぴかぴかした新品に取り替えられていた。密営の責任者に、こうまでするにはずいぶん苦労しただろうと話しかけると、彼は手を左右に振って、これはみな金正淑同志によるものだと答えた。

正淑は将軍に、国内各地と長白一帯での小部隊と工作班、革命組織の活動状況について報告した。

それが終わったのは日暮れどきだった。このとき密営の責任者は、小白水のほとりに新築した丸太小屋のことを将軍に報告した。密営の隊員たちが誠意をこめて建てたその丸太小屋は、正淑が入ることを拒んでいたので、まだ空き家のままであった。

将軍は驚いたようにしばらくおし黙っていたが、やがて、みな久しぶりに会ったのだから、夕食を一緒にとり、そのあとで相談しようと言った。食卓には、キビとアワを混ぜて炊いたご飯と、イワナ、山菜の副食が並んでいた。

食後、将軍は正淑に向かって、密営の同志たちが誠意をこめて建ててくれた家ではないか、革命活動をもっとりっぱにおこなっ

てみんなの愛情にこたえることにし、せっかく建てた家だから、彼らの誠意を受け入れるほうがよい、と言った。指揮官や隊員たちも将軍の勧告に熱烈に賛同した。こうして、正淑は小白水のほとりのこぢんまりとした丸太小屋に入ることになった。

2 日後、正淑は将軍にしたがって間白山密営へ出向いた。ここでは、国内と長白一帯で活動中の朝鮮人民革命軍の小部隊、政治工作班および革命組織責任者の会議が開かれた。

将軍は会議で、国内各地の小部隊と工作班、革命組織の活動実態を具体的に聞き取ったあと、今後の活動方向を示した。とくに、日ソ中立条約の締結を機にいっそう悪辣になった日本帝国主義者の思想攻勢に対処して、すべての政治工作員と革命組織のメンバーが自主的な立場を堅持し、必勝の信念を抱くよう強調した。そして「われわれの力で朝鮮革命を完遂しよう!」というスローガンをかかげていっそう果敢にたたかうべきだと言った。

会議を終えると、将軍は白頭山密営で遂行すべき任務を正淑に与えて、再び遠征の途についた。

正淑は、この任務をりっぱに果たすためにはなによりも、国内と鴨緑江（アムノク）、豆満江一帯で活動する小部隊、工作班、革命組織と緊密な連係を保ち、彼らが司令部の意図をいち早く知って、その実現に奮い立つようにすることが重要だと考えた。そこで、ただちに密営の隊員を二人組、三人組に分けて、各地の秘密根拠地と臨時秘密根拠地に派遣した。

当時、白頭山密営では、各地の小部隊と工作班を現地に出かけ

て助ける活動をほとんどおこなっていなかった。そのため、小部隊や工作班の方から密営を訪ねてきて活動状況を報告し、新たな任務を受けて帰るというのが慣例になっていたのである。

　正淑は、このような活動方法を改めて、二人組、三人組を国内各地に派遣し、彼らがその地の革命組織と小部隊、工作班の活動状況を調べ、司令部の意図を伝えるようにした。その結果、司令部の意図が各地に迅速に伝えられ、活動が機動的におこなえるようになった。

　1941 年 8 月、正淑は白頭山密営で将軍からの手紙を受け取った。そこには、白頭山密営を中心とする国内と鴨緑江沿岸一帯で卓上谷（タクサン）会議と夾皮溝会議の方針を貫くべく指示事項がしたためられていた。将軍は白頭山密営を発ったあと、穏城（オンソン）郡豊利（プンリ）里卓上谷で、政治工作員および地下組織責任者の会議を開き、ついで汪清県夾皮溝で朝鮮人民革命軍小部隊責任者の会議を招集して、『必勝の信念を抱いて祖国解放の偉業を成就しよう』と題する演説をおこなったのである。

　正淑は手紙の行間から、将軍が切り抜けてきた死線の厳しさを読み取った。

　当時、情勢はますます錯綜していた。ソ連侵攻を開始したファシズム・ドイツは、先制攻撃と技術装備の優位によって広大な領土を占領し、それを国内深くにまで拡大していた。社会主義ソ連は未曾有の厳しい試練に直面していた。

　日ソ中立条約の締結 2 ヵ月後にドイツのソ連侵攻が開始される

と、日本は待っていたとばかりに、「関東軍特別大演習」の実施を発表した。これは対ソ戦の予告にひとしいものであった。

しかしソ連は、中立条約がやがてウラル東方のソ連領土を占拠するための日本の術策であることをよく知りながらも、東西両面戦争に巻き込まれないため依然として中立の立場をとっていた。

このような事態にあって、朝鮮革命は誰に頼り、誰の支持を待たなければならないのか、世界大戦という激浪のなかで、朝鮮革命は停泊する港を失った小舟のようなものではないか、というのが、少なからぬ人たちの心理状態であった。かてて加えて、日本帝国主義者の反動的な思想攻勢はいちだんと猛烈になっていた。

金益鉉の小部隊から池甲竜（チ カプリョン）という隊員が革命を放棄し敵中に逃亡したのも、この頃のことである。

正淑は、車廠子で活動していたときから池甲竜を知っていた。戦場では勇敢に戦う遊撃隊員であった彼が、情勢が変わるや革命の逃避者に落ちぶれたのは、激変する国際情勢、そこからくる二重三重もの闘争の苦しさに耐え切れず屈服したからであった。

この厳然たる事実を前にして、正淑は毎夜寝つかれなかった。

数日後、各秘密根拠地に派遣されて帰隊した工作班から茂山（ムサン）、延社（ヨンサ）地区革命組織の活動実態にたいする報告を受けた正淑は、現地へ出向くことにした。そこでも急変する情勢のため、一部思想的に動揺する者が現れていたのである。隊員は全員、正淑の意向に反対した。正淑の健康がすぐれず、安静が求められていたからであった。しかし、正淑は決心をひるがえさなかった。

正淑は早速、白頭山密営で活動している数名の隊員を伴って、茂山、延社地区に向かった。国師峰（クッサボン）秘密根拠地の水車谷密営に到着した正淑は、茂山、延社、三長（サムジャン）地区革命組織責任者との会合を持った。

彼らから実態報告を受ける正淑の胸は痛んだ。そこは以前、日本帝国主義者の木材略奪反対闘争が伐採場やいかだ流し場で相次いで展開された延社地区であり、敵の電力開発の企てに大きな打撃を与えた西頭水（ソドゥス）水力発電所の工事場であった。数十㎞の延面水（ヨンミョンス）流域と西頭水流域の伐採場やいかだ流し場などで、サボタージュ、スト、いかだ破壊闘争がつぎつぎと起こり、そのため日本人は 1939 年の 1 年間だけでも数万㎥の木材損失をこうむり、その翌年も、1 ヵ月の間にいかだを流せない日が 10 日を超えたほどだった。日本人はその年の夏、木材所労働者を懐柔しようと、「宴会」を催すようなことまでした。一方、白茂（ペクム）線鉄道工事場では革命組織の指導のもとに、労働者たちが大量の電線と工具を地中に埋めて工事を大きく混乱させた。ところが、いまはせいぜい、いかだ破壊程度の闘争しかやれないでいるのである。

正淑は、会議の参加者たちに、まず卓上谷会議と夾皮溝会議における将軍の演説内容を伝えた。そして、茂山、延社地区の一部革命組織の活動における欠陥を指摘し、今後の課題を明らかにした。正淑は、当地に見られる現象は一部の政治工作員と地下組織責任者が、あたかも朝鮮革命が孤立無援な状態に陥ったかのように考えて必勝の信念を失い、反日愛国勢力を結集させる活動と反

日反戦闘争を積極的に展開していないことに原因があると指摘し、われわれはいかなる風波や試練のなかでも、朝鮮革命を自力で完遂しなければならないという金日成将軍の教えを肝に銘じ、祖国解放をめざす闘争を最後までつづけていくべきだと強調した。

また、中核分子を育成し、組織を拡大する問題、現在の大衆政治活動における中心的な問題、組織を守り、闘争を強化する問題、労働者突撃隊、生産遊撃隊といった半軍事組織を結成する問題などを提示した。

この地を後にした正淑は、茂山郡篤所（トクソ）里烟頭（ヨンドウ）峰に赴いた。

連絡を受けて集まった茂山一帯の政治工作員と革命組織責任者たちが、山麓の指定された地点で待っていた。彼らは、白頭山から遠く離れたところまで、敵の厳しい警戒網をくぐり抜けて訪ねてきた正淑に会い、言い知れぬ感激につつまれた。

正淑は、各組織の実態と活動状況、持ち上がっている問題について報告を受けたあと、烟頭峰烽火場址で会合を持った。会合で正淑は、現情勢と将軍の祖国解放構想、それを実践する課題を示した。

正淑のこうした活動によって、厳しい情勢のもとで一時萎縮していた茂山、延社地区の革命組織は活気を取り戻して活動しはじめた。

その後、西頭水水力発電所工事場の労働者は、待遇改善と労働保護対策など 5 項目の要求条件をつきつけ、第 1 坑から第 10 坑まで波状ストを断行して日本人企業家を屈服させ、ついに発電所

工事は中止せざるをえなくなった。他方、大陸侵略と太平洋戦争遂行のために開始した白茂線鉄道工事も労働者のひきつづくサボタージュとストのため、日本帝国主義者はその敗亡を目前にした1944年12月になってようやく終えたのである。

茂山、延社地区革命組織の闘争がいかに激烈であったかは、国境沿線を巡察した咸鏡(ハムギョン)北道警察部長が「……小事から大事に至るまで緊張一貫で任務に当たらなければ、いつどんな出来事が起きるか予測できない」と述べたことや、警察官駐在所の一警部補が「拳銃を手にしていなければ、どんなに疲れていても眠れない。……夢想の間にも非常警戒を忘れることができない」と悲鳴をあげたことからもうかがい知ることができよう。

白頭山密営に帰った正淑は、すぐにまた新坡(シンパ)地区へ出かけ、地下組織責任者たちの活動報告を聞き取ったあと、将軍の意図を伝え、彼らに必勝の信念を植えつけた。そのあと一隊員に金昌(クムチャン)地区、五佳(オガ)山、狼林(ランリム)山一帯の活動を指導する任務を与えて厚昌(フチャン)方面に送り、他の隊員には、将軍の新たな軍事・政治活動方針を伝える任務を与えて、黄海(ファンヘ)道の谷山(コクサン)方面に派遣した。

このように、正淑は白頭山密営で活動する間、一日も休息をとることなく、密営をひっきりなしに訪ねてくる隊員たちから報告を受けては、新たな任務を与えて送り出し、自らも死線を越え敵中で活動した。

パルチザンの子の誕生

1942年2月、白頭山密営で大きな慶事があった。

2月16日の早朝、朝鮮人民の偉大な指導者金正日総書記が密営の質素な丸太小屋で呱々の声を上げたのである。

その日、白頭山密営にいた抗日革命闘士たちは、前日まで吹き荒れた吹雪がうそのように収まって空が青々と澄み渡り、いつになくうららかな日和であったことを今日も感動深く回想している。

日本気象機関発行の『朝鮮気象月報』にも、その日、白頭山一帯はもとより清津（チョンジン）、新義州（シンイジュ）、平壌（ピョンヤン）、ソウル、釜山（プサン）など朝鮮全域が快晴で温かい日であったと記録されている。

南朝鮮の21世紀研究委員会委員の崔徳俊（チェドクジュン）は、『海外朝鮮革命運動小史』の筆者崔一泉（チェイルチョン）から聞かされた話を回想し、この日の意味を次のように書いている。

「金正日将軍は……もっとも厳しい新旧時代の対決場である抗日大戦の炎の中で、パルチザンの放つ銃声を聞きながら、祖宗の山、白頭山でパルチザンの子として誕生した。5千年の民族史上初めて見る白頭山の子の誕生であり、人類史にかつてないパルチザンの子の誕生であった。

歴史には偉人、名将、名人が数多い。……しかし、金正日将軍のように民族の聖山で天下のパルチザン名将を父母にいただいて誕生したパルチザンの子はなく、まことに非凡な家門における空前絶後の誕生

であった。それで、ある天道教徒が、金正日将軍は誕生からして偉大である、その方は誕生と同時に早くも救世主の使命を担ってお生まれになったと念誦したのであろう。荒涼たる広野で艱難辛苦に耐えながら血戦を繰り広げていたパルチザンの勇士たちが、やがて白頭山に腰をすえて天下を平定する英雄が出現したとして、将軍に『白頭の光明星』という雅号を奉り、金日成大将軍とまったく同じ太陽だという意味で、もっとも明るい太陽になっていただくよう念願して正日という名をつけたのもそのためであろう」

抗日革命闘士たちは丸太小屋の背後に高くそびえる峰を、金日成将軍のあとを継ぐいま一人の将軍をいただいたとして「将帥峰」と名づけた。

その頃、金正淑のそばには数名の女子隊員と小部隊のメンバーがいただけであった。正淑は自分の軍服でわが子を包んだ。

女子隊員は粒トウモロコシを炊き、乾燥山菜に塩を入れて山菜汁を作り、背のうにしまってあった大小の布切れを取り合わせ、各自の冬服から少しずつ綿を抜き取って布団を作った。彼女らは間白山密営から布地を少し持ってこようとしたのだったが、正淑が許さなかったのである。

正淑は継ぎ合わせの布団を申し訳なさそうに出す女子隊員たちに、あなたたちの真心がこもっているこの布団が一番だと言って明るくほほえんだ。

正淑は彼女たちに、いまに祖国が解放されたら、そのときは全国各地にりっぱな託児所を設け、子どもたちをすこやかに育てま

しょう、と言った。

正淑は継ぎ合わせの布団と軍用毛布でわが子を包み、子守歌をうたった。

ねむれねむれ　いとしいわが子
早く大きくなって　銃を担い
解放万歳の声　高いところに
おまえは前に　わたしは後ろに立ってたたかおう

ねむれねむれ　いとしいわが子
早く大きくなって　赤旗かかげ
共産主義の世を迎え
おまえは前に　わたしは後ろに立ってたたかおう

密営では正淑の健康に大きな関心が払われていたが、彼女は自分へのどんな特恵も許さなかった。密営で「おじさん」と呼ばれていた金俊益が非常用の大豆でうち豆をつくって勧めたときも、そんなことをしてはいけないと厳しくとがめた。

あるとき、司令部伝令長の金鳳錫（キムボンソク）が、正淑のためにモチアワを一袋背負って密営にやってきた。1937 年夏の国内地下工作時代以来たびたび正淑と同行していた彼は、身体が衰弱した正淑にアワ餅をつくってあげようと金俊益にはからったのである。

しかし正淑は、情におぼれて規律に背いてはいけない、規律を無視しては金日成将軍から授かった任務を果たすことはできない

と言って、水に浸けてあったモチアワを取りだして乾かした。

このようにつねに最小限度の食事をとりながら、正淑は、各地に小部隊や連絡員を派遣し、送られてきた通信資料にもとづいて活動対策を講じた。それればかりか、夜を明かしながら松ごっぱの灯の下で司令部書記処で出している将軍の著作を学習し、また地方の各組織から持ち込まれてくる図書や新聞、雑誌を読んだ。

金俊益は正淑がひもじさに耐えながら毎晩夜を明かしていることに胸を痛めた。

彼にとって正淑は、小部隊や工作班、革命組織を将軍の作戦上の方針貫徹へと導く指揮メンバーであり、未来の太陽をはぐくむ革命の母であった。

彼は正淑に向かって、学習はこの先いくらでもできるから、夜は少し休むようにとたしなめた。正淑はほほえんで、おじさんは祖国の解放後どんなことをしたいと思っているのか、と尋ねた。彼は日頃考えていたとおり、故郷に帰って野良仕事をする、と答えた。

正淑は、解放なった故郷で野良仕事をするのも楽しいことだが、革命活動に従事してきたわたしたちが、いざ祖国が解放されたらのうのうと土をいじくって暮らせるようにはならないだろう、自分も最初は日本侵略者や地主のいない故郷で楽しく野良仕事をする夢をよく見た、その後、児童団活動をしていたときには、倒れた闘士たちの子弟や、労働者、農民の子どもたちのために教育者になろうと思った、けれども、いまではそういう考えも変わった、

将軍を身近で補佐していた呉仲洽（オジュンフプ）同志や金周賢（キムジュヒョン）同志も世にいないのだから、彼らに代わってわたしたちが将軍を助けなければという思いが頭を離れない、だから、最近は経済書も読み、社会生活についての本にも目を通すなど、もっともっと勉強に励むようになったと言うのだった。

このように正淑は、このうえなく困難な状況のなかでも革命の任務を果たしながら、解放祖国のために学び、わが子を育てた。

数ヵ月後、将軍が小部隊を率いて白頭山密営に到着した。

歩哨兵は喜びのあまり敬礼するのも忘れ、「司令官同志がお帰りになったぞ!」と叫んだ。密営から全隊員が飛び出してきた。正淑はわが子を抱いて彼らの後ろに立っていた。一人の女子隊員が赤子を抱き取って将軍の前に差し出した。

わが子を抱いた将軍は、こう言った。

「白頭山で高くかかげた革命の赤旗を、次の世代もひきつづきかかげていくようにするのがわれわれの意図です」

将軍を迎えて、白頭山密営では重要な会議やさまざまな講習などで多忙な時間が流れたが、指揮官や隊員は暇さえあれば生家の丸太小屋へ駆けつけた。所帯道具といえるものは、台所の棚にあるいくつかの食器と、壁に掛けてあるお膳とハギ製のかご、それに室内の軍用毛布と質素な布団、背のうがすべてであった。目立つものといえば、継ぎ合わせの布団と伝令がワシの羽根でつくったほうきだけであった。ある日、丸太小屋へやってきた指揮官と隊員たちは、自分たちの無能無策を恥じた。そのとき、正淑は外

出中で、一女子隊員が赤子の世話をしていた。彼らが次回に派遣される小部隊と工作班が各自、何か一つずつでも手に入れてくるようにしようと話し合っているとき、将軍が部屋に入ってきた。

将軍は微笑して、みんなが心をこめて建ててくれた家なのに入居祝いもできず申し訳ない、とにかく少し休んでいきなさい、いま布団の話をしていたようだが、それがどうしたというのだ、もちろん、みんなの気持ちは分かる、わたしもそうだし、正淑もいつも同志たちの愛情につつまれて健康な身体で革命活動をつづけていることを本当に有難く思っている、いまは時が時だけに、子どもたちを安らかに育てることができず、実際そのような状況でもない、と言った。

しばらく口をつぐんだ将軍は、こう言葉をついだ。

「われわれは子どもたちを抗日大戦の砲声の中でたくましく育てなければならない。暖かい温室ではなく、寒風吹きすさぶこの白頭の嵐の中でだ。そうしてこそ、やがて彼らが解放された祖国で恵まれた生活をするときも、今日のことを思い返しながら革命をつづけていくことができるのだ」

金正日が生まれ幼年時代を過ごした当時、白頭山密営と訓練基地の生活条件は劣悪であった。日本帝国主義者の苛酷な収奪によって朝鮮人民は豆かすで飢えをしのぎ、訓練基地の生活も独ソ戦争のさなかのことで非常に倹素であった。

幼い正日は、祖国解放の日まで将軍と正淑の軍服を作り直した衣服を着、白頭山密営でつくった継ぎ合わせの布団を掛けて過ご

した。

当時のことが忘れられず、林春秋（リムチュンチュ）は祖国が解放された後、中国東北部の延辺で活動中、休暇で祖国に帰るとき高級毛布500枚を入手してきて、将軍と正淑に贈った。

抗日革命闘士たちは暇さえあれば正淑を手伝い、幼い正日と一緒に過ごした。

金明俊（キムミョンジュン）と林春秋は毎日正淑のところへヤギの乳を持って来たり、食卓にのぼるパンを少し残しておいては持って来たりした。

正淑と林春秋の交友関係は古くからつづいていた。正淑が符岩洞で夜学に通っていたとき、林春秋はその講師であったし、正淑の母が病床にあったとき治療をしたのも林春秋であり、また正淑が遊撃区に入る途中、意識を失ったとき救ったのも林春秋であった。

二人の深い交友は、正日の誕生後、将軍が開いたチュチェの革命偉業を継承し、完成していく後継者への献身性として引き継がれた。林春秋は小部隊工作から帰る途中、幼い正日のためにと、数十個の鶏卵を手に入れ、厳しい敵中をつき抜けて帰隊したこともあった。

李乙雪は小部隊活動の日々、つねに幼い正日の安全と生活について気づかい、暇さえあれば一緒に過ごした。呉振宇（オジンウ）〔25〕や他の闘士たちも同じだった。金策（キムチェク）〔26〕は正日をいつも「幼い将軍」と呼んだ。

後日、金日成主席は抗日革命闘士と金正日総書記との血縁的つ

ながりについてこう語っている。

　——いま多くの人はわたしが指導の継承問題をりっぱに解決したと言っているが、この問題の解決では抗日革命闘士に負うところ大であったと言うべきであろう。抗日革命闘士は幼い正日に着る物、食べる物を与え、あんよを教えた。その頃から正日の心には、抗日革命闘士への信頼と尊敬の念が芽生え、抗日革命闘士の心には正日への信頼と親愛の情が芽生えたのである。正日の思想的・精神的成長と感情・情操の発展においてもっとも主動的かつ積極的な作用を及ぼしたのは、ほかならぬ抗日革命闘士だ。金正日同志が備えている必勝の信念と鉄の意志、革命的楽天主義は抗日革命闘士と親しくするうちにいっそう充実したものとなり、しっかり鍛えあげられたと言える。

八　最後の決戦の日に備えて

訓練基地での軍事・政治訓練

金正淑は 1943 年 3 月、わが子を抱いて白頭山（ペクトウサン）密営を発ち、ハバロフスク近郊の訓練基地に向かった。

当時、朝鮮人民革命軍は、訓練基地に依拠して小部隊作戦と偵察活動をおこなう一方、軍事・政治学習と訓練に専念していた。

正淑は訓練基地で、人民革命軍の指揮幹部と隊員を祖国解放作戦をりっぱに遂行できる有能な軍事・政治活動家に鍛えあげ、ひいては新しい祖国建設のすぐれた担い手に育てあげようという将軍の意を体して、政治学習と軍事訓練に励んだ。

正淑は女子隊員たちの生活の指導にあたった。

訓練基地における教育は軍事一面に偏ることのない総合的な政治・軍事教育および訓練であった。

正淑は食事すら忘れるほど学習に熱中した。戦友が、学習も大事だが食事を欠かすのはよくないとたしなめると、食べ物より学習のほうがもっと貴重な革命の糧だと言ってほほえむのであった。

将軍が朝鮮人民革命軍政治幹部および政治教員におこなった演説『朝鮮の革命家は朝鮮をよく知るべきである』を熱心に学んで内容に通暁した正淑は、将軍の演説を学習してみると、白頭山の

頂から全朝鮮を見下ろすような思いがする、と言うのだった。

ある日、部隊では将軍の著作学習討論会が開かれた。そのとき、内容を掘り下げて把握した正淑の筋道だった討論に深い印象を受けた林春秋（リムチュンチュ）は、30 数年が過ぎた後も、正淑の発言内容をほとんどそのまま人に話して聞かせていたほどである。

訓練基地では軍事理論学習のほかに実動訓練もおこなった。戦術、落下傘、射撃、スキー、無線電信など現代戦に備えての各種訓練が連日盛んにおこなわれた。それは屈強な男子隊員ですらくたくたになるほど激しいものであった。そうした訓練にも正淑をはじめすべての女子隊員が参加した。

将軍は海洋国朝鮮の実情にかんがみ、水泳訓練に特別力を入れた。隊員のなかには水泳というものを知らない女性が少なくなかった。ほとんどが海を知らずに育ったのである。正淑は、そのような女子隊員を水泳の上手な全順姫（チョンスンヒ）につけて習わせた。

渡河訓練中、疲れておぼれそうになった隊員に正淑は、あの向こう岸を祖国だと考えれば力が湧くはずだと励まし、川幅数百mのアムール川を全員無事渡河するよう導いた。

女子隊員にとっては強行軍も苦しい訓練であった。

1943 年の冬、区分隊別の強行軍競技がおこなわれた。正淑を責任者とする区分隊は大半が女子隊員と年少の隊員で構成されていたが、他の区分隊をどんどん追い抜いてなんと一番最初にゴールインした。もちろん落後者は一人もいなかった。この予想外の結果に指揮官も隊員もみな感嘆し、ともども正淑に祝いの言葉を

述べた。

落下傘訓練と空挺隊訓練を始めたときのことである。

訓練指揮部では、安全上の理由で女子隊員を訓練から除外することにした。

しかし正淑は、この訓練も祖国解放の最後の決戦に備えての訓練だから、女性を除外しないで欲しいと、訓練指揮部に強く申し出た。こうして女子隊員も参加することになった。

まず着地時に両足を揃える訓練と、回転椅子に座って抵抗力をつける訓練は円滑にいったが、次の訓練からはそれが容易でないことを知った。一部の女子隊員のあいだでは、空中から飛び下りるときに目を閉じてしまう欠点がなかなか是正されなかった。これを見た正淑は、この訓練は敵を撃滅し、父母兄弟を解放するための訓練ではないか、と言って女子隊員を力づけた。

このようにして女子隊員の降下動作は次第に上達していった。

最初の飛行降下訓練が始まった。正淑は降下命令が下ると、「みなさん、地上でまた会いましょう」と言って真っ先に飛行機から飛び下りた。女子隊員たちはその後につづき、全員指定の地点に正確に着地した。男子隊員たちは一斉に走り寄って、彼女たちに花束を渡した。

正淑は無線電信の訓練でも誰よりも早く送受信動作に習熟した。

一部の女子隊員が看護訓練を軽視してこれにあまり力を入れないのを見た正淑は、わたしたちが治療法を知らなかったために大切な同志を失ったことをどうして考えないのです、それは一度や

二度のことではなかったはずです、わたしたちは二度と大事な同志を失ってはならないのです、そんな悲しい思いをしたことを考えても、看護学を熱心に学びましょう、と言い聞かせた。

正淑にとってその日々のすべての訓練は、祖国解放の最後の決戦に備えてのものであった。

休息を勧めたり訓練の度合いを加減しようという隊員に向かって正淑は、わたしたちには時間があまりありません、司令官同志とともに祖国へ進撃する日は遠くないのです、と言うのであった。

正淑にとっても 1 日は 24 時間であった。他人なら 10 日、20 日をかけてすることを、その 24 時間の間に将軍を助け、その意図するところを正確に実行し、また部隊内の大小の仕事を処理し、指揮メンバーと隊員の生活の面倒をもみた。訓練の合間には、山菜をとってきて食卓を潤すことも忘れなかった。

このように正淑は、軍事・政治訓練ばかりでなく、部隊の生活を営むうえでも先頭に立って隊員たちを導き、祖国解放の日を早めるのに積極的に寄与した。

名　射　手

金正淑は訓練基地で、人民革命軍隊員の射撃訓練に深い関心を払い、つねに自らその手本を示した。

1944 年 3 月のある日、基地では朝鮮人民革命軍の盛大な射撃

競技大会が催された。それは、祖国解放の最後の決戦に各自がどのように準備したかが試される重要な競技大会であった。

隊員のなかには、日本軍との戦いで勇名をとどろかせた名射手が多かった。暗夜に百数十m先にある敵陣の電球をまたたくまに一つ残らず撃ち砕いて敵兵のどぎもを抜いた名射手もおれば、屋根の上に架かった電話線を一発の拳銃射撃で切断し、敵の通信を麻痺させた名射手もいた。

競技種目は小銃と拳銃、軽機関銃、重機関銃による射撃であった。小銃の射撃対象は 100m先の円形標的、200m先の半身形出現標的、300m先の走者形移動標的、それに 100m先の５本の瓶であり、拳銃の射撃対象は円形標的と３本の瓶で、この３本の瓶は振り向きざまに撃ち当てなければならなかった。

射手たちが入れ代わり立ち代わり出場して、その腕のほどを見せていくなか、いよいよ正淑が射台に現れた。すると、射撃場はしいんと静まり返り、全隊員の視線が正淑に注がれた。正淑の射撃は百発百中という表現ではとても言い尽くせないほど伝説的な語り草となっていた。

紅頭山戦闘のとき、隊員たちは正淑に敵を何名撃ち倒したかを聞いたのではなく、弾帯の弾丸が何発無くなっているかを見て、40 名の敵兵が射殺されたことを確認した。

正淑の驚くべき射撃術は、訓練基地でもいかんなく発揮された。スキー訓練中の休憩時間、一隊員のすぐそばからキジが一羽飛び立った。隊員たちはわれ先に銃をつかんで立ち上がった。何発も

の銃声が同時に鳴り響いたが、キジは悠然と遠ざかっていった。そのとき、正淑がスキーを滑らせてキジを追った。滑走しつつ拳銃を抜き、ジャンプした瞬間に引き金を引いた。飛んでいたキジは石ころのように落ちた。その見事な射撃に、指揮官も隊員もただただ驚嘆するのみだった。その場に居合せなかった隊員たちはその場面を見られなかったことを非常に残念がった。

ついに射撃の合図が鳴り、同時に 3 発の銃声がつづけざまに上がった。信号手は両手の旗を 3 度上げた。30 点満点。3 発が全部標的の銅貨ほどの中心を射抜いたのである。正淑はつづけて 200m、300m先の標的もまたたくまに撃ち当てた。次の標的は 100m先に立てられた 5 本の瓶であった。それらは五つの点としか思われないほど小さかった。正淑は沈着に狙いを定めて引き金を引いた。五つの瓶はつぎつぎに砕け散った。

つづいて拳銃射撃に移った。円形標的を射撃した後、振り向きざまに横木の上に置かれた３本の瓶を撃つのである。３本とも命中させた射手はそれまで一人もいなかった。

正淑は円形標的を射抜き、振り向きざまに３本の瓶をつぎつぎに撃ち砕いた。正淑の射撃には拍手よりも嘆声が上がるほどだった。「弾に目がある」「神様も脱帽する」……。

その日の射撃競技で正淑は、一発の狂いもなくすべての標的に弾を命中させた。

競技を総括した将軍は、最高点数を獲得して優勝した正淑に表彰として小型拳銃を授与した。全部隊が惜しみない拍手を送った。

正淑の一発一発の命中射撃が戦場で勝利の突破口を開き、朝鮮革命を危機から救ったことは一度や二度ではなかった。紅旗河戦闘のとき司令部の近くにしのび寄った敵兵を掃滅したのも、大沙河奥地の戦闘のとき将軍を狙う敵兵を一発のもとにしとめ、朝鮮革命と朝鮮民族の運命を救ったのも、正淑の百発百中の名射撃術であった。

正淑はその拳銃を、踏みにじられた祖国と塗炭の苦しみをなめる人民を一日も早く解放するためにいっそうかたく握りしめるべき革命の武器、世界に帝国主義が残っているかぎり決して手放してはならない階級の武器として受け取った。

射撃競技が終わると、隊員たちは正淑に、名射撃の秘訣を教えてほしいとせがんだ。なかには、その非凡な射撃術はもって生まれたものに違いないという者もいた。

正淑はほほえみながら、まさかもって生まれた射撃術なんてあるはずがないでしょう、これは、夢にもうつつにも司令官同志を守らなければという一念で熱心に練習を繰り返したおかげです、将軍のもとで戦う戦士にとって射撃術を高めることは、たんなる軍事的な義務ではなく、朝鮮民族の運命を一身に担う将軍を守る気高い使命なのです、と言った。

将軍を守る警護隊員には、たった一発の誤射も許されない、というのが正淑の生涯の信念であり、座右の銘であった。

祖国が解放された後、正淑が将軍と一緒に万景台（マンギョンデ）を訪れたときのことである。警護隊員たちは紺碧の空を舞うタカを見て、正淑

に一度射撃のお手並みを拝見させていただきたいとせがんだ。彼らは正淑の見事な射撃術については噂に聞いているだけで、実際に目撃したことのない新入隊員たちであった。

正淑はただ笑うだけで応じようとしなかった。傍らでそんな様子を見ていた将軍の祖父・金輔鉉（キムボヒョン）が、「なんてことを。空飛ぶ鳥をどう射止めるというのじゃ」と言った。正淑の射撃術について話は聞いていたが、矢のように飛ぶ鳥まで射止めるとはとても思えなかったのである。

そのとき、空を見上げていた将軍が、正淑に一度撃ってみてはと言った。

正淑はすぐさま警護隊員から小銃を受け取った。空高く舞うタカは一つの点のようであった。しかし銃声が一発上がると、タカは真っ逆様に地上に落下した。祖父は、「ふうむ……確かに聞いていたとおりじゃ」と大きくうなずいた。

正淑が将軍とともにある地を訪れたときに、拳銃射撃で岩に字を刻んだことや、金剛山（クムガン）の三日浦（サムイルポ）で、遠く波間に漂う標的を一発で撃ち当てたことは広く知られている話である。伝説のように語り継がれている三日浦の銃声——朝鮮人民はこれを『忘れ難い三日浦のこだま』という歌にして広くうたっている。

朝鮮の歴史をひもとけば、数えきれないほど多くの名射手がいたが、その矢や銃弾に歴史と民族、革命にたいする無上の使命感をこめることはできなかった。

正淑はその一発一発の銃弾に、民族と革命の運命を守り将軍の

安全をはかるという、祖国と民族から授かった大いなる使命感をこめていたのである。

最後の決戦前夜

1944 年に入って、内外の情勢は朝鮮人民の祖国解放偉業の完遂にきわめて有利に展開していた。日本帝国主義は朝鮮人民革命軍の小部隊、工作班の活動と、国内の労働者、農民をはじめ各階層人民の各種形態の反日闘争、それに太平洋戦争と中国戦線での連戦連敗によって泥沼に陥っていた。

当時、金正淑は、朝鮮人民革命軍の総攻撃と全人民的蜂起、敵背連合作戦など、祖国解放に向けた金日成将軍の３大課題を貫くため精力的な活動を繰り広げていた。

正淑は、日本軍との最後の決戦をめざす軍事・政治訓練に励むかたわら、国内へ派遣される小部隊と工作班の活動も細心に指導した。正淑は白頭山密営で長らく小部隊と工作班、地下組織の活動を指導していたため、鴨緑江（アムノク）と豆満江（トウマン）一帯の実情と国内各地の秘密根拠地については誰よりもよく知っていた。こうしたことから、国内へ向かう小部隊と工作班は、必ず正淑に会って密営を後にした。

正淑はこの年の秋、国内へ向かう小部隊と工作班に、国内各地の革命組織をはじめ生産遊撃隊、生産突撃隊、労働者突撃隊など

と緊密なつながりを持って正しく導き、祖国の解放をめざす最後の攻撃作戦が開始されたとき、各自その役割をりっぱに果たすようにしなければならないとし、彼らが出向いていく地方の実情や山勢についても詳しく教えた。そして彼らの旅装にも気を配り、途上の食べ物までこしらえて背のうに入れてあげた。

一方、正淑は自らもたびたび小部隊を引率して国内へ出かけた。国内で正淑はすでに何度も指導した延社(ヨンサ)、茂山(ムサン)地区の党および祖国光復会各組織の中核メンバーと会い、全民抗争の準備を早めるよう強調した。

とりわけ、祖国光復会西頭水(ソドゥス)支会にたいする正淑の指導は、逆境を順境に、禍を福に変える非凡な英知と知略の模範であった。

1939 年以来、正淑の指導を受けて闘争を繰り広げてきた西頭水支会は、サボタージュと構造物・設備の破壊闘争を繰り広げ、ストライキでも勝利をおさめていた。ストライキでは労働者突撃隊が大きな役割を果たした。西頭水支会は武装蜂起の準備も進めていた。

そうした西頭水支会に思いがけない事態が生じた。労働者の激烈な闘争によって窮地に追い込まれた日本帝国主義者は、太平洋戦争と中日戦争で莫大な人的・物的資源の損失ともあいまって、西頭水発電所の建設工事を中止することにしたのである。彼らは労働者を禿魯江(トンロ)(現在の将子江(チャンジャ))発電所工事現場と朝鮮南部の飛行場や海軍基地の工事現場へと移送しはじめた。軍事的に急を要する箇所に労働力を集中する一方、団結した革命勢力の分散をも

くろんだのであった。

　水力発電所工事の中止によって、数千名の労働者が各地に散っていかざるをえなくなり、革命勢力は分散を余儀なくされることになった。

　組織の中核メンバーは毎日のように集まって対策を練ったが、これといった打開策は見出せなかった。

　彼らが考えだした対策といえば、まず移動しなくてもよい組織のメンバーには他の職場を斡旋して当地を離れないようにさせ、移動を強要されたメンバーは、さまざまな口実を設けて移動を避けるというものであった。しかし、これは可能性の薄い弥縫策にすぎず、革命大衆の解体は避けられなかった。

　支会の責任者は、苦労して育てた組織のメンバーと、闘争の中で鍛えられた労働者が散り散りになると考えると残念でならない、と悲痛な表情で正淑に訴えた。事実、他に方法はなさそうだった。

　しかし正淑は、事情が困難になり複雑になればなるほど将軍の教えを深く研究し、そこから解決策を見出すべきであり、問題を狭い枠内で考えず、全般的範囲で幅広く考えなければならないとし、全国的範囲で全民抗争を準備するという将軍の方針を詳しく説明した。そして、日本帝国主義者は労働者を他の工事現場へ送って、軍事的になお急を要する箇所を埋め合わせる一方、団結したわが革命勢力を分散させ弱体化させようと狙っているが、われわれはこの機会に当地で豊富な闘争経験を積んだ組織のメンバーと労働者を集中的に教育し、訓練して各地域に送り込み、彼らが

他の工事現場で大衆に革命的影響を与え、先鋒的役割を果たすようにすべきである、これは結局、日本帝国主義にたいする全民抗争の準備に向けて多くの中核分子を広大な地域に派遣することになる、と言った。また、遠く三南（サムナム）地方（忠清（チュンチョン）・全羅（チョンラ）・慶尚（キョンサン）南北道）出身の者たちにも、故郷に帰って父母妻子や兄弟、友人たちを組織に結集して日本帝国主義との決戦に立ち上がらせる準備を整え、白頭山から人民革命軍が進撃してくれば、力を合わせて故郷を解放し、解放された祖国で再会することを約束すればいいだろうと教えた。

その後、西頭水発電所の工事現場からは、組織のメンバーと革命化された多くの労働者が全国各地に散っていき、その行く先々で全民抗争をめざす組織がつくられはじめた。

日本の官憲が控え目に発表した資料によっても、当時、国内には 180 余の反日地下組織に 50 余万人が結集されていた。

正淑は、茂山地区の党組織責任者には、鉱山の青年労働者によって組織された抗戦組織「白衣社」の活動方向を教え、延社地区の党組織責任者には、全民抗争に備えた武装隊の隊列を早急に拡大する方途をはじめ武装の強化対策、武装隊の訓練問題などについて助言を与えた。

さらに各地域の祖国光復会組織責任者と会って彼らの活動状況を聞き取り、全人民を日本帝国主義者との最後の決戦に立ち上がらせる祖国光復会組織の課題を示した。彼らのなかには、ソウルから来た祖国光復会組織の代表もいた。

彼からソウルにおける活動状況を聞き取った正淑は、1937 年 7 月に北青（プクチョン）で知り合いソウルに送り込んだ李英（リヨン）の安否を尋ねた。

当時、正淑は、国内の小部隊と工作班、革命組織にたいする全般的指導を担当していた。

ファシズム・ドイツが敗亡し、日本帝国主義者の滅亡が目前に迫った時期に、正淑は、将軍から豆満江沿岸と北部朝鮮一帯の小部隊と工作班､革命組織の最後の決戦準備を指導する任務を受け、再び国内へ向かった。

正淑は、人民革命軍の総攻撃作戦の戦略的要衝である先鋒（ソンボン）および羅津（ラジン）(現在の羅先（ラソン）市）などで偵察任務を遂行している小部隊と工作班を指導した。

正淑は、小部隊と工作班のメンバーに、偵察活動に革命組織のメンバーと愛国的人民を積極的に引き入れる一方、とくに敵としばしば接触する者や敵の機関に勤める者たちへの工作を積極的におこない、彼らを通じて敵の軍事情報など敵情資料を適時、正確に集めなければならない、と強調した。

当時、先鋒市内には反日会の名を持つ祖国光復会組織があり、そこには日本の官憲としばしば接触する者たちも少なくなかったが、偵察班は彼らとの連携を意識的に避けていた。以前、一部の工作班が顔見知りでない民家に泊まり、主人の密告で犠牲になったり、偵察中、山中で見知らぬ人に会ったことから敵の追撃を受けた例もあったのである。

正淑は、そんなことで気を使っている者たちに、こう言って聞

かせた。

——敵味方を正しく見分けず、油断して行動すれば、敵の罠にかかる恐れがある。だからといって人民を信じようとせず、まして革命組織の者たちまで信頼できないとすれば、どうやって敵中活動をおこない、革命闘争で勝利をおさめようというのか。もちろん、敵中活動の過程で敵の密偵や手先のために胸の痛む犠牲を払ったこともあり、苦しい試練を経験したことも少なくない。しかし、それは極少数の民族反逆者の行為であって、決して人民が悪いからではない。われわれは人民を教育して反日闘争隊伍に結集し、彼らと団結して祖国の解放をなし遂げようとしているのである。だから、人民をわれわれと同じ塹壕でたたかう革命同志とみなすべきであり、彼らを信じ、彼らに依拠してたたかうことをつねに行動の準則としなければならない。……

これは正淑が以前から一貫して守ってきた持論であり、行動準則であった。

正淑は小部隊と工作班のメンバーに、つねに強い革命的警戒心を持ち、どんな不慮の事態にも主動的に対処できるよう準備しなければならない、そしていったん機が熟せば、敵の武力と軍事対象を一撃のもとに撃滅する戦闘態勢を十分に備えていなければならない、と強調した。そして小部隊と工作班が将軍の方針貫徹において司令部の目となり、耳となり、手足となって、抗日大戦で最後の勝利を遂げるために大いに貢献するものと信ずる、と励ました。

清津(チョンジン)地区の革命組織には、車廠子遊撃根拠地で遊撃隊生活をしていたとき、排外主義者から「民生団」の嫌疑をかけられて当地に身を避け、組織のメンバーになっている者がいた。彼は当時、祖国光復会の下部組織である「土幕(トマク)反日労働者同盟」の責任者を務めていた。

車廠子遊撃根拠地で彼と顔見知りであった正淑は、その間 10 年の歳月が流れていたが、彼を信じてためらうことなく会った。

思いがけず正淑に会えた彼は、感激と喜びにただ嗚咽するばかりであった。正淑は彼に、全民抗争のための課題を話し、最後の決戦で誰よりも勇敢にたたかってほしいと信頼を寄せた。彼は将軍の命令にしたがって最後の決戦で生命を賭してたたかうことを誓った。

その後、彼は誓った通りりっぱにたたかい、祖国の解放後は清津市保安署の副署長となり、正淑を清津に迎えたときはその護衛任務を果たした。

正淑はさらに恩徳(ウンドク)地区や甑山(ツンサン)地区など敵の戦略的要衝へ出かけ、その一帯の小部隊と工作班に、最後の決戦時に敵背撹乱作戦を展開できるよう、万端の準備を整える任務を与えた。

後日、最後の決戦が繰り広げられたとき、この一帯の全民抗争組織は大きな役割を果たした。

訓戎(フンユン)、馬乳(マユ)山一帯の人民武装隊は、敵の火薬庫と砲弾・弾薬が野積みされた場を爆破して、全般的戦闘の勝利に大きく寄与した。会寧(ヘリョン)地方の鵲峰(カチボン)武装隊は退却してくる敵兵を掃討し、火薬庫とガソリンタンクを爆破した。彼らは自力で会寧市を解放し、

敵の航空機５機をはじめ数十門の高射砲と大量の衣服・装具類を分捕った。

先鋒─羅津地区、恩徳─先鋒地区など日本軍が 10 年余をかけて構築した要塞区域が、わずか数日間で崩壊したのは、全人民的蜂起と敵背撹乱作戦が果敢に展開された結果であった。

羅津と城津（ソンジン）も人民武装隊によって解放された。

正淑が祖国解放の最後の決戦前夜に活動拠点とした白鶴山（ペクハク）は現在、史跡としてりっぱに整備されている。

白鶴山の革命史跡では、正淑の革命活動のエピソードや白鶴山の新しい伝説も聞くことができる。そのなかには、「白頭山女将軍は縮地法を用い、変身術にも長じている」「日本人を盲にする道術も使う」という伝説もある。

1945 年 8 月 9 日、将軍はついに朝鮮人民革命軍各部隊に祖国解放をめざす攻撃作戦の開始を命じた。

万端の戦闘態勢を整えていた人民革命軍の各部隊は、ソ連軍とともに全戦線にわたって一斉に総攻撃を開始した。

これに呼応して人民武装組織の敵背打撃戦と全民抗争が果敢に展開された。

1945 年 8 月 15 日、日本帝国主義は敗北した。

抗日大戦の勝利には、いつどこにあっても金日成将軍を政治的、思想的に生命を賭して守り、その革命路線と方針を先頭に立って貫徹した金正淑の偉勲が秘められている。

九　祖国への凱旋

解放なった祖国で

1945 年 8 月 15 日、日本無条件降伏のニュースが伝えられた。

金正淑はこのニュースを訓練基地で聞いた。

当時、基地には、司令部にしたがって国内各地に進出し、全民抗争を指揮する任務を与えられた朝鮮人民革命軍の空挺隊が待機していた。

彼らは祖国解放のニュースに抱き合って喜んだ。日本帝国主義の敗亡により、金日成将軍にしたがって血みどろの抗日大戦をつづけてきた彼らの宿望はついにかなった。しかし、反面、日本のたちまちの降伏によって最後の決戦に参加できなかったことを彼らは残念がった。

世界大戦が終結し、ファシスト諸国の壊滅により、世界の多くの国で新しい民主社会建設の道が開かれた。

日本の敗亡とともに、朝鮮の全国各地に人民委員会が組織され、さまざまな政党や大衆団体が続々と出現した。金日成将軍の思想と路線にしたがって祖国光復会運動と党創立準備を進めてきた革命組織や全民抗争組織が、その先頭に立っていた。

訓練基地内の人民革命軍隊員は、一日も早く帰国したいと胸を

焦がしていた。

　将軍は凱旋に先立ち、新しい祖国建設の準備に心血を注いでいた。

　当時、情勢はきわめて有利に進展していたが、国内ではさまざまの難題が持ち上がっていた。国内各地では、日本の敗残兵や反革命勢力が抵抗をつづけており、分派分子が権力争いをはじめていた。それに北緯 38 度線を境に南には米軍が、北にはソ連軍が進駐することになっていたので、朝鮮半島は民主勢力と反動勢力の決戦場となる恐れがあった。

　このような情勢を見通した将軍は、8 月 20 日、朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部協議会を開き、『解放された祖国での党、国家および武力建設について』と題する演説をおこなった。この演説は、祖国の解放が達成された新たな条件のもとで、朝鮮人民が新しい民主朝鮮の建設を力強くおし進めていくための綱領的文書であり、党、国家および武力建設の基本的な指針となった。

　将軍は建党、建国、建軍の 3 大課題の実行をめざして、各道と主要な市・郡に派遣するメンバーを任命し、数日にわたって彼らのために講習をおこなった。

　正淑は、将軍の 3 大課題をしっかり身につけるため学習に励み、工作班の講習会にも熱心に参加した。

　講習会の終了後、司令部にしたがって国内各地に進出することになっていた人民革命軍の空挺部隊は帰国の途についた。

　将軍は万一の事態を考慮して子持ちの女子隊員を基地に残し、

後日帰国するようはからった。女子隊員たちは将軍と一緒に帰国するとせがんだが、将軍は、みんなの気持ちはよく分かるが、ここはよく考えるべきだ､この子らはみなかけがえのない子たちだ、この子らは革命の荒波のなかで、衣食もろくにあてがわれずに育った子たちではないか、喆鎬(チョルホ)さんもそうだし、ここにいる多くの母親がわが子を亡くして悲痛な思いをこらえてきたではないか、今度もまたそんな思いをさせてはいけない、と言い聞かせた。

正淑は将軍の意図にしたがって、他の女子隊員たちと基地に残った。そして、基地の後始末をするかたわら、女子隊員すべてが解放祖国で、新しい国づくりにりっぱに参加できるよう、彼女らの政治的・実務的水準の向上に力を尽くした。

正淑は、8 月 20 日の演説をはじめ、将軍の諸著作を深く学習し、女子隊員たちとたびたび研究討論をおこなった。

訓練基地で送った日々は、正淑にとって朝鮮の現実を知り、将軍の新祖国建設路線を深く体得する日々であったし、抗日武装闘争で鍛えられた女子隊員たちを新しい国づくりの有能な働き手にさせる日々でもあった。

正淑は 1945 年 11 月下旬、わが子を伴って軍艦に乗り、帰国の途についた。金喆鎬、金玉順(キムオクスン)ら数人の女子隊員が同乗した。

11 月 25 日、水平線上に祖国の大地が浮かび上がった。

甲板に幼い正日と並んで立っていた正淑は、朝焼けに赤く染まった祖国の山々が喜んで迎えてくれているように思えてならなかった。

「みなさん、祖国よ、祖国が見えるわ」

女子隊員たちは甲板に上がって来て、抱き合って歓声を上げた。

正淑の頬に熱い涙が流れた。なつかしい祖国、生死を分かつ数万里にのぼる長征の間、片時として忘れることのなかった祖国であった。国内地下活動で歩んだ道は数百里を超えたが、それらは祖国の地ではあっても、いまだ暗黒に閉ざされ、いたるところ敵のばっこする危険な敵地であった。

ところがいま、祖国の山々が水平線上に浮かび、喜んで迎えてくれているのである。

正淑はわが子を高く抱き上げた。

「ほらご覧、あれが祖国よ」

幼い正日は母親からおとぎばなしのように聞かされてきた祖国の岸辺に向かって、両手を振った。

ついに軍艦は先鋒(ソンボン)港に入港した。

埠頭には、当地で活動中であった抗日革命闘士の沈泰山(シムテサン)と金竜化(キムリョンファ)が出迎えに来ていた。

正淑は彼らとあいさつを交わし、女子隊員たちと一緒に宿舎に案内された。埠頭は日本軍が敗走を前に破壊したままの姿で、人影はほとんどなかった。

このように、正淑は 15 星霜にわたる血戦を終えて、祖国の地に静かに上陸したのである。

正淑は凱旋後、戦友たちとともに建党、建国、建軍の 3 大課題を遂行する活動に着手した。

正淑は先鋒の人民生活や、日本軍が破壊した施設の復旧状況を調査するため、女子隊員たちを伴って先鋒の街を見て回り、そのあと埠頭に向かった。埠頭からは広々とした東海が一目で見渡せた。

埠頭の復旧工事を指導していた沈泰山と金竜化が、正淑が来たことを知り、急ぎ足でやってきた。正淑は彼らから、港湾の復旧状況を聞いた。

そのうち、抗日闘士と話している女性が「白頭（ペクトウ）の女将軍」として名の高い正淑であることが知れ渡り、四方から人びとが押しかけ、埠頭は黒山の人だかりとなった。伝説のように伝え聞いていた抗日の女性英雄を目の当たりにした人々の感激は大きかった。

どよめく群衆のなかから一人の老婆が駆け寄り、正淑を胸に抱いた。正淑は老婆の手を取り、日本人のためさぞ苦労したことでしょう、もう国が解放されたのですから、なんの心配もすることなく長生きなさって幸せに暮らしてください、と言った。

正淑は工事中の埠頭の高台に上がった。無数の視線が正淑に注がれた。正淑が彼らに向かってお辞儀をすると、嵐のような歓呼の声が沸き起こった。

正淑は、きょうこうしてみなさんと会ってみると、久しく別れていた父母兄弟や親戚に会えたようなうれしさで胸が一杯になります、どれほど待ちに待ったこの日でしょうか、金日成将軍のもとで山中で日本軍と戦っていたときにも、わたしたちは一日として、みなさんのことを忘れたことがありません、と語った。

さらに正淑は、朝鮮の数多くの青年は解放されたきょうの祖国を見ることなく、白頭の密林や満州の荒野に埋もれて帰ることができなかった、革命の先達が流した貴い血を決して忘れることなく、彼らの念願どおり金日成将軍の指導にしたがって、三千里祖国の山河に人民の楽園を築くため力一杯たたかいましょう、と言った。そして「みな将軍のまわりにかたく結集し、富強な新しい民主朝鮮の建設をめざしていっそう力強くたたかっていきましょう」と呼びかけて演説を締めくくった。

群衆のなかから、またしても歓呼の声が沸き起こった。「民族の太陽、金日成将軍万歳！」「朝鮮の解放万歳！」

正淑は埠頭から海辺に出た。

そこには壊れた漁船がここかしこに散らばり、使えそうなのは小舟数隻にすぎなかった。

しかし、正淑は少しも失望の色を見せなかった。

正淑は金竜化に向かって、決して気を落としてはなりません、ここのように海をひかえたところで緊迫した食糧問題を解決する早道は、魚をたくさん捕ることです、と言った。そして、壊れた船と漁具を早く修理し、新しい船をつくり、当面はまず小舟で魚を捕るようにと言って埠頭を後にした。大豆を脱穀中のある農家に立ち寄った正淑は、脱穀を手伝いながら農作物の出来具合いを尋ね、金日成将軍は働く農民が土地の主人となる日のことを考えておられる、と話して聞かせた。

農民夫婦は感動して「将軍になんと感謝していいか分かりませ

ん。きっとそのご恩に報いて、精一杯農業に励みます」と言った。
　正淑は、当地で工作中の抗日闘士に、先鋒郡に組織された大衆団体、とくに青年団体について尋ねた。
　ここには共青が組織されていた。しかし共産主義を信奉する徹底した無産青年だけを受け入れていたので、人員は多くはなかった。
　一方、解放青年同盟が組織され、多くの青年がこれに加わっていたが、彼らは敵産の分配に割り込んだり、興味本位の「時局演説」などをして日々を過ごしていた。
　正淑は沈泰山と金竜化に、労働青年や農村青年をはじめ広範な青年を民主的青年団体に結集し、新しい国づくりに奮い立たせようという将軍の民主青年同盟建設路線を説明し、その路線にしたがって共青を早急に広範な青年が参加する民主的な青年団体に再編するよう教えた。
　一方、解放青年同盟の労働部長に会い、解放朝鮮の青年が進む道はただ一つ、金日成将軍の新しい祖国建設路線と方針を貫くことにあると話し、各階層の青年すべてが民主主義の旗のもとに一つに団結すべきであると説いた。
　宿舎に帰った女子隊員たちは、将軍がいる平壌に早く行こうと、出発の支度を急いだ。
　しかし正淑は、平壌行きをしばらく延ばすことにし、女子隊員たちに、将軍を補佐するためには、解放朝鮮の現実をよく知らなくてはならない、それも分からずどう将軍を補佐し、新しい国づ

くりに尽くせようか、わたしたちがここで人民に将軍の建党、建国、建軍の 3 大課題をはっきりと教え、彼らが新しい国づくりに奮い立つよう導いてあげよう、と言った。

祖国の地に凱旋の第一歩を印した正淑は、女子隊員たちと一緒に幌を張ったトラックに乗って清津（チョンジン）に向かった。清津で工作中の安吉（アンキル）が一行を出迎えた。彼の案内で一行が解放（ヘバン）洞の 2 階建ての宿舎に着いたのは夜中の 12 時過ぎであった。トラックの上で初冬の寒風にさらされながら 100 余 Km の道を走り、深夜に到着したにもかかわらず、正淑はすぐさま平壌の将軍に電話で無事到着したことを報告した。

一行の安否を尋ねた将軍は、清津で工作中の同志たちを助け、当分ここで仕事をするつもりだと言う正淑の意見に同意した。女子隊員たちがぐっすり寝入ったその夜に、正淑は清津での活動計画を練った。

当時、清津で発行されていた『セギル新聞』は、正淑の清津到着を第 1 面に大きく報じた。

「か弱い女性の身でけなげに銃を取り、満州の広野を舞台に吹雪をつき、露に濡れて野宿しながら、ひたすら朝鮮の解放をめざし、朝鮮が生んだ革命家金日成将軍とともに、日本帝国主義と果敢に戦い、武装闘争によって朝鮮革命を成就せんと 10 余年間、悪戦苦闘の血闘をつづけてきた金正淑女史……さる 26 日夜、清津に到着した」

翌日の 11 月 27 日朝、正淑は清津一帯で工作中の崔春国（チェチュングク）、

朴永純（パクヨンスン）、沈允景（シムユンギョン）らと久しぶりに会い、咸鏡（ハムギョン）北道の状況を聞いた。

当時、咸鏡北道の状況は複雑をきわめていた。安吉をはじめ抗日革命闘士が将軍の指示で当地へ派遣されてきたとき、朴憲永（パクホンヨン）の指令でもぐりこんでいた男が、道党委員会の最高責任者となって「ソウル中央」を云々し、将軍のうちだした党の組織路線と政治路線を陰に陽に妨害していた。

その日の午後、正淑は女子隊員たちと古末山（コマル）に登った。正淑は、清津市の全景を見下ろしながら女子隊員たちに、日本人はすべての工場を破壊してしまったと言い、「わたしたちは金日成将軍の新しい祖国建設路線にしたがって、政治活動を力強く繰り広げ、人民を奮い立たせなければなりません。このことが、ここでわたしたちがしなければならない当面の任務です」と強調した。

あくる日、正淑の宿舎に雪をかぶった『セギル新聞』の記者たちが訪ねてきた。

彼らは正淑の清津到着を知ると、ただちに『セギル新聞』の主幹を兼ねていた安吉を訪ね、金正淑との記者会見を取りもってくれるよう要請し、安吉の案内で解放洞の宿舎に来たのであった。彼らは正淑に、女性の身で満州の荒野を駆けめぐり、100 万の日本軍と戦って勝利した話を聞きたいと言った。

正淑はほほえんで記者たちを見回し、こう言った。

「わたし自身については、これといって話すことはありません。でも、将軍が強盗、日本侵略軍を撃滅した話はいくらでもあります」

記者会見はこのように始まった。

正淑はまず、抗日武装闘争を勝利へと導いた将軍の戦略、戦術と戦法について語った。

また、ともに戦った戦友たちについても話した。解放祖国を見ることができずに先に逝った同志たちを追憶するとき、正淑の目に涙が浮かんだ。

正淑は最後まで、自らについては一言も語らなかった。

記者が「女史の生涯についてお話し願えませんか」と言うと、正淑は「新聞は当然、偉大な金日成将軍について書くべきでしょう。戦士の話は領袖の歴史のなかに含まれているものではありませんか。ですから、将軍についてお書きください」と言って、自らのことを話すのを辞退するのであった。

記者たちは仕方なく、何歳のとき革命に参加したのか、朝鮮人民革命軍にはいつ入隊したのか、どんな戦闘に参加したのかなどと矢継ぎ早に質問した。

正淑は記者の質問に手短に答えるだけで、自らの功績についてはいっさい語らなかった。正淑の功績を大きく紹介しようと意気込んでいた記者たちはいたく失望した。しかし、取材にあまりにも多くの時間を取らせたので、恐縮して腰を上げた。

正淑は彼らの手を取って、これから新聞に将軍の路線と方針を分かりやすく解説して、新しい国づくりに大衆を奮い立たせてくださいと頼んだ。

『セギル新聞』は第 1 面に、「熱血 14 歳の少女の身で革命運動

に身を投ず」という表題のもとに「金女史の半生」という副題をつけて次のような記事を載せた。

「朝鮮の革命家、金正淑女史は……間島延吉県符岩で 14 歳の少女の身で、たぎる革命への熱を抑えきれずに遠大な抱負を抱いて家族のもとを離れ、満州で日本軍閥の獰猛な白色テロのもと、独立をめざして血戦をつづける金日成遊撃部隊に敢然と参加したという。

銃を取って遊撃戦の先頭に立ち、生命が危険にさらされたことが幾度もあったという。……金女史の話によると、驚くなかれ、金日成将軍は 30 歳の血気旺盛な青年将軍だとのことである。朝鮮解放の大志を抱き、満州広野を舞台に猛虎のごとく活躍して日本軍閥の心胆を寒からしめ、世界に勇名を馳せた金日成将軍は、さすがに朝鮮が生んだ革命家である。

……朝鮮の革命家はもとより、隣邦中国の革命家まで麾下においてひたすら朝鮮の解放をめざし、日本軍閥と熾烈な血戦をつづけてきたことは、われわれの誇るべき偉大な存在である。

金日成将軍は現在、平壌に健在し活躍中である」

新聞はまた「独立と解放のため女性の身をもって半生をたたかいに。見習おう！　この犠牲精神を」という記事を載せ、記者会見における正淑の言葉を伝えた。

「金正淑女史は旅の疲れもものともせず、軒昂たる意気で来訪記者の一人の手を取り、『ずいぶん苦労なさったことでしょう』とねぎらい、……次のように述べた。『みなさんもご存じのよう

に、朝鮮の解放はまだ完全に解決されたわけではありませんから、朝鮮人民大衆には、よりいっそう犠牲的な努力が求められています。

なによりも全民族的な大衆団結を実現しなければなりませんし、同時に建設も積極的に繰り広げなければなりません。

朝鮮女性は覚醒して朝鮮の現実を正しく理解し、偉大な建国事業にひとしく励むべきです。

……われわれの主権を一日も早く確立し、朝鮮の完全な独立を達成し、われわれ女性が願望する女性解放問題を解決しなければなりません。

わたしはこれから、朝鮮の実情を勉強して力の限り、朝鮮の建国に努めるつもりです』……」

記者会見の内容を報じたこの新聞は、咸鏡北道にとどまらず、平壌をはじめ全国各地に配布され、大センセーションを巻き起こした。

数日後、この記事を読んだ将軍は次のように語った。

「正淑がりっぱなことを言った。……わたしが考えていたこと、言いたかったことをそっくりそのまま言ってくれた」

正淑は清津にとどまっていた間、人民に将軍の思想と意図を認識させ、彼らを新しい祖国建設に奮い立たせるため精力的に活動した。

11 月 29 日、正淑は同行した女子隊員と党員協議会を開いて、今後の活動方針を打ち合わせた。

ここで正淑は、これまでと同様、解放された祖国でもつねに金日成将軍の革命戦士として生き、かつたたかわなければならない、これまでのたたかいと、今後のたたかいに違いがあるとすれば、これまでは銃を手にして日本帝国主義を撃滅するためにたたかったが、これからは、彼らが破壊した工場や農村を立て直すために、つまり将軍の新朝鮮建設路線を貫くためにたたかわなければならない、これは全人民の団結した力によってのみ達成することができる、これから、わたしたちは清津市内の各階層大衆のなかに入っていかなければならない、と述べた。

正淑はまた、わたしたちが将軍をいただいて日本帝国主義者と戦ってきたことを知ったら、人々がいろいろなことを知りたがるだろうから、そのつど金日成将軍は朝鮮民族の救世主であり、真の指導者であることをはっきりと教えなければならない、と強調した。

この日、正淑は清津市西興洞（ソフン）の市場を見て回り、将軍の意図どおり人民生活を向上させるためには物価の安定をはかる必要がある、と述べた。その翌日は、開業医の一人に会って、人民に尽くす医者になるよう激励した。また、清津市の「朝鮮会館」で開催された歓迎会に出席し、「解放望郷楽劇団」の祝賀公演を観た正淑は出演者たちに、流行歌より金日成将軍の建国路線を貫くための革命の歌、闘争の歌をうたうよう勧めた。この日、歌を一曲うたってほしいという参会者の要請に、「わたしは歌は上手ではありませんが、みなさんが是非とおっしゃるなら、白頭の密林で戦って

いたとき、故郷を思い、祖国の同胞のことを考えるたびにうたった歌を一曲うたわせていただきます」と言って『思郷歌』をうたった。

翌 12 月 1 日、正淑は清津市人民委員会の幹部たちとの座談会に参加し、そのあと、咸鏡北道女性同盟組織準備委員会の活動家に助言を与えた。

12 月 9 日の午前には安吉に案内されて清津駅を見て回り、午後には線路の復旧状況を知るため現地に出向いた。

この日は非常に寒かったが、正淑は、山中で戦ったときは雪の上でも寝たではないか、これくらいの寒さにおじけることはないと言って復旧現場に出かけ、そこで手動式のレール走行台車に乗り、富寧（プリョン）谷から吹きおろす寒風にさらされながら、自らレバーを手にして輸城（スソン）方面に向かった。鉄道の左右を破壊された工場があとからあとへと流れ去った。

輸城川の鉄橋付近で復旧された線路と鉄橋を見て回ったあと、線路の復旧現場にもどった正淑は、労働者たちに、鉄道は国の動脈であり、みなさんはその動脈を守ってたたかう労働者階級です、金日成将軍は建党、建国、建軍偉業を夜を日に継いで指導しています、わたしたちがりっぱに働いて将軍の労を少しでも省かなければなりません、と言った。

12 月 10 日、清津市労働組合評議会を訪れた正淑は、幹部に、労働者階級への将軍の信頼と期待がいかに大きいかを労働者に知らせ、彼らが工場の主人、国の主人としての自覚を抱いて、革命

の指導階級らしく、将軍の指導のもと全人民を新しい国づくりに導いていくようにすべきだと強調した。ついで清津市内の各工場、企業所から選ばれた 30 余名の労働者代表と会い、長時間にわたって新しい国づくりに関する将軍の構想を説明し、彼らの奮起を促した。

12 月 12 日、正淑は清津製鉄所（現在の金策（キムチェク）製鉄連合企業所）を訪れて、日本帝国主義者が破壊した工場の実態を確かめ、高炉の再建方途を討議している労働者たちと座をともにした。彼らは炉内に冷え固まった数十トンの鉄塊と残骸の除去対策が立たず、途方に暮れていた。

正淑は、なにか大胆な方法を考えてみてはと、彼らを励ました。

一人の労働者が、爆破によって除去できると思うが、ダイナマイトの入手が難しいと言った。

正淑は山中で戦っていたとき「延吉爆弾」を作って日本軍と戦った抗日革命闘士の精神と気迫さえあれば、ダイナマイトを手に入れるのは難しいことではないと話した。

正淑は、日本人が破壊していった機関車を修理し、かまに火をたきつけたばかりの機関助手に会い、以前は日本人機関士のもとでむごい仕打ちを受け苦しい労働を強要されてきたでしょうが、いまはもうこの機関車の堂々たる主人です、ひとつ勢いよく走らせてごらんなさい、と言って機関車に乗った。

ひっそりとしていた製鉄所の構内に鋭い汽笛の音が鳴り響いた。

「結構です。では機関車を動かしてごらんなさい」

機関車は蒸気を吹かして動きはじめた。

このように、正淑は清津で、将軍の建党、建国、建軍の 3 大路線を貫くため、わずかの休憩をも忘れて多忙な毎日を過ごした。時局講演会の講師ともなり、清津女子中学校や水源（スウォン）小学校南江（ナムガン）分校など各級学校も視察し、漁夫の操る舟に乗って海上にも出た。

正淑が富寧冶金工場と古茂山（コムサン）セメント工場の復旧状況を確かめるため、富寧に向かったのは 12 月 14 日の朝であった。木炭トラックに揺られ 12 時近くに一行は富寧に到着した。富寧冶金工場復旧委員会の委員が事務所に案内しようとしたが、正淑はまず現場から見ることにすると言って、変圧器の修理現場と電気炉の復旧現場で労働者たちと話し合い、技術も大切だが、それにもまして大切なのは、自力で復旧するという決心と、決心すればきっとやれるという信念を持つことだと強調し、自力で日本人が破壊した工場をこれ見よがしに、何倍も大きく建て直してみようと励ました。

その日、富寧冶金工場を後にし、古茂山に向かったときのことを、同行した抗日闘士は次のように回想している。

「古茂山は会寧（ヘリョン）に行く途中にあった。車で行けば、会寧まではさほど遠くない。

そこで、わたしたちはこの機会にどうしても金正淑同志と一緒に会寧へ行くことにしようと決めていた。

金正淑同志と連れ立って会寧の地を踏むことができると思うと、わたしたちの心は浮き立った。

車はわたしたちのそんな気持ちを乗せて、一路古茂山に向かって走った。車が大道路から古茂山セメント工場に向かう分れ道にさしかかると、わたしたちは車を止めさせ、金正淑同志にセメント工場は会寧に行っての帰りに寄ることにしようと勧め、運転手に車をまっすぐ会寧に向けるよう促した。

ところが、車から降りた金正淑同志は感慨無量の面持ちで茂山（ムサン）嶺のかなたの会寧の空を眺めやるのだった。鉄道も車道も会寧方面に向かって延びており、その道にそってあの茂山嶺一つを越えれば、夢にも忘れない故郷があった。

会寧の方を眺めていた金正淑同志はわたしたちにこう言った。

『いま将軍は、新しい祖国建設路線を示し、その実現のため寝食を忘れて奮闘しておられます。

それなのに、わたしがどうして……故郷から先に訪ねられるというのです。いまはここで早く仕事を終えて平壌に行って将軍の身辺を守らなければなりません』と。

わたしたちはがっかりして、道端に立ちつくしていた。

金正淑同志はほほえんで、『会寧にはこのつぎ、花が満開のときに行ってみることにしましょう』と言うのだった」

こうして正淑はなつかしい故郷を目の前にしながらも、そこへは立ち寄らず、古茂山セメント工場へ直行したのであった。

正淑が清津市で過ごした日々は、戦士が金日成将軍をどう補佐すべきかという手本を生き生きと示した意義深い日々となった。

12 月 22 日、正淑はついに平壌行の列車に乗った。それは客車

でなく、床にござを敷き、小さなストーブを置いた有蓋貨車であった。

清津市民の熱烈な歓送を受けながら､列車は清津駅を後にした。汽車はのろのろと前進した。線路がまだ復旧中で、しばしば停車しなければならないという状況で、平壌に着いたのは8日後のことであった。

正淑はこの8日間も将軍の建国路線の貫徹に努めた。

列車が最初に止まった明川（ミョンチョン）駅で、明川郡の幹部たちと長時間言葉を交わして、郡の実状から郡内住民の生活状況や幹部たちの活動状況にいたるまで詳しい説明を聞き、彼らが人民の忠僕となり、人民の生命、財産を大切に扱うようにと助言した。

翌朝、正淑は駅の近くで会った女性たちに、古い思想や因襲を振り払って、女性同盟の生活に励み、建国事業に積極的に参加するよう力づけた。

吉州（キルチュ）駅では駅前に集まった人たちと熱いあいさつを交わし、富強な自主独立国家の建設に奮い立つよう呼びかける演説をおこなった。そして車内で郡女性同盟の幹部たちと席をともにし、解放された祖国で女性同盟の活動家が将軍の路線をどのように受け止め、どう国づくりに尽くすべきかを語った。

翌12月24日は、正淑の誕生日であった。

正淑は祖国で初めての誕生日を、のろのろと走るこの清津－平壌間有蓋貨車の中で迎えた。ごとりごとりと絶え間なく鳴るレールの音、ストーブが煙を立て、ござとなん枚かの軍用毛布が敷か

れているうす暗い車内で、正淑は女性抗日闘士たちと手作りの簡素な食事を分かち合って、誕生日を送ったのである。

金正淑が平壌に凱旋したのは 12 月 29 日であった。全国が解放の喜びに沸き立った 1945 年は 2 日残っていた。

万景台の大慶事

1946 年の元日、金正淑は金日成将軍とともに息子の正日を連れて万景台（マンギョンデ）を訪れた。

万景台は正淑にとって、抗日大戦の日々、一日として忘れることのなかった心のふるさとである。将軍から教わった『思郷歌』をうたうたびに思い描いた万景台であり、宿営の夜、たき火の前で将軍が語る祖国の話を聞きながら思い描いた万景台であった。

万景台の家でも、正淑が平壌に到着したことを知って、正淑の訪問をいまかいまかと待っていた。将軍にしたがい山野を縦横に駆けめぐって戦った抗日の女将軍とはどんな人だろうか?

祖母はまだ見たことのない孫嫁の姿を思い描きながら、山中で戦ったその苦労はいかばかりであったろうかと、首を長くして待っていた。祖父の気持ちも同様であった。ヤチダモの枝に止まったカササギが朝早く鳴くと、きょうこそはやってくるに違いないと、終日縁側に出て、開かれたしおり戸の方を眺めるのであった。そのしおり戸を開けて、多くの孫子が万景台を去った。救国の大

志を抱いて彼らが家を出たあと、そのしおり戸は長い間開かれたままであったが、ほとんどが帰らぬ人となった。2 人の息子と嫁、2 番目の孫、それに多くの近親が革命に命を捧げた。

それが、抗日の女将軍として広く名を知られた孫嫁がひい孫の手を引いてやってくるという。祖父はこの日も、朝から縁側に出てそわそわしていた。

将軍にしたがい、正日の手を取って万景台に向かった正淑の胸もときめいていた。まだ見ぬ祖父母と親戚の人たちの面影がまぶたを去来した。

万景台の将軍の生家に着くと､祖母がしおり戸の外に走り出て、ひい孫をかき抱いた。

祖父は孫嫁とひい孫をまじまじと見つめた。

「わが家の孫嫁が明星のようなひい孫を連れて来た！　きょうはわが家のお祭りじゃ」

こう言う祖父の目に光るものがあった。

正淑は祖母と叔母の手にとられて部屋に上がった。

将軍の紹介で､正淑は祖父と祖母に向かって膝を折って礼をし、親戚の一人ひとりにもお辞儀をした。白頭の山野を縦横に駆けめぐって戦った女将軍だから、さぞかしいかめしく近寄りがたかろうと思っていた叔母は､その素朴な礼儀正しい振る舞いに驚いて、山中で戦いながら、いつそんな礼儀作法を身につけたのかと言った。祖父は「ばかな！　国を取り戻そうと戦うほどの者に礼儀をわきまえない者がいるはずがなかろう」と言った。

正淑はあいさつを終えると、わが子を前に立たせた。幼い正日は膝を折って、曾祖父母にそれぞれ礼をした。

礼を受けた曾祖父は、ひい孫を抱き寄せ、節くれだった手で顔や肩を撫でた。

「なんと、うちの将軍とこうもそっくりなのじゃ。あの苦しいときに、こんなりっぱな子を生んだとは」

祖父の頬にまたも熱いものが流れた。

早速つつましやかな祝宴が催された。食卓には、将軍の生家と近所の人たちが支度した質素ながら心のこもった料理が盛られた。

祖父は「お前たちに婚礼を挙げてやれなかったが、きょうのこの宴をそれと思って受けてくれ」と言った。

正淑は持参した酒を祖父に注いだ。盃を受けた祖父は、胡麻塩の髭を撫でおろした。

「ひどい世を生き抜いてきた甲斐があった。

将軍になって帰った孫に会えたし、きょうはお月さんのような孫嫁に会い、わが家の血統を継ぐひい孫をわしの膝に乗せることができた。こんなうれしい日を迎えて、先に逝った者も安らかに眠れるだろう。有難うよ。こうやってお前まで来てくれて、万景台のこの家がずいぶんと明るくなったわい」

祖父はこう言って会心の笑みを浮かべ、盃を干した。

正淑は祖父母に向かって「おじいさま、おばあさま、その間、どんなにご苦労なさったことでしょう。もう明るい世の中を迎えたのですから、どうか末長くお暮らしください」と言った。

祖母は「ここでは苦労といったって、屋根のある家で暖かいオンドルで過ごしたんだよ。苦労はお前たちがしたんだ。雪の上でろくろく眠れず、草の根をかみながら 15 年も山中で戦ったんだからさぞ苦しかったろう」と言って孫嫁の手を撫でさすった。

将軍はにこやかに祖母を見やって、「おばあさんは本当に苦労なさいました。日本の警官やその手先に引っ張り回されて、さぞひどい目にあわれたことでしょう」と言った。

祖母は昔のことを思い出した。

「あたしは、あのときのことは苦労などとは思ってもいないよ。日本のやつらやその犬が、あたしを引っ張り回して孫のいるところを教えろと大変な剣幕だったけど、あたしは絶対に負けなかったよ。そりゃ学校に通ったことなんかなかったけど、腹はちゃんと据わっていたさ。孫が将軍だと思うと心丈夫でね。

あたしは、そいつらに『孫がお前たちをただではおかんからね。お前たちがいくらやっきになっても孫は捕まらないよ』と言ってやったら、そいつらはおじけづいてね、あたしに手出ししようとはしなかったよ。あたしを下手に扱うと、いつ遊撃隊にやられるか分からんと思ったのだろうね。だからあたしをいじめることができなかったのだよ。

そんな辛かったこともみんな昔話になって、生き残った人には、そんな苦労ももう大した苦労ではなかったと思えるけど、きょうのこの日を見られないで先に逝った人たちのことを思うと……」

祖母はのどをつまらせ涙をぬぐった。救国の大志を抱いて郷里

を後にした長男が命を落とし、三男が亡くなってからも長い年月が経った。いとしい嫁と２番目の孫まで異郷の土となったと聞いたのも、もうかなり前のことであった。けれどもいくら歳月が流れても、祖母にそうした不幸は忘れられるはずがなかった。

将軍が解放後はじめて万景台に帰ったときもそうであったが、きょうこうして孫嫁を前に座らせ、ひい孫まで抱いてみると、亡くなった孫子たちのことがひとしお恋しくなるのだった。祖父や居合わせた親戚たちもみな涙をぬぐった。

悲痛な追憶にふける人々の重苦しい気持ちを喜びへと変えたのは幼い正日であった。正日は母の膝に乗って、「お母さん、雨の日にまた来ようよ」と言うのであった。

「あら、どうして?」

「ぼくも父ちゃんのように、ヤチダモの木に登って虹をつかむんだ」

正日のこの言葉に、人々は将軍の幼年時代にあった数十年前のことを思い出し、深い感激にひたった。

正日は村人たちから歌をうたうようにと言われて、すぐさま立ち上がり、『遊撃隊行進曲』をうたった。アンコールでも革命歌をうたった。悪びれた様子もなく、歌をうたう正日のけなげな姿に、人々は感嘆して拍手を送った。

祖父は「竹は竹やぶで生えると言うが、この子もさすがに将軍の器じゃ」と満足そうに言った。万景台の家はつきせぬ喜びにひたっていた。その夜、将軍の生家では、集まった人々が歌に興じ

たが、叔母は将軍の母の康盤石（カンバンソク）が愛唱していた『子守歌』をうたった。

正淑は叔母の指名と人々の拍手を受けて『思郷歌』をうたった。その歌は人々に深い印象を残した。

万景台の夜は更けていった。

将軍はその夜、平壌にもどった。わざわざ訪れた生家であったが、国事に多忙な将軍は一夜としてゆっくり過ごすことはできなかったのである。

村人たちもみな帰り、生家では床をとった。正淑は正日と一緒に、祖父母と並んで床についた。

どれほど時間が経ったのか、正淑が目をさまして見ると、正日を抱いて祖父母が枕元に座っていた。

「目がさめたのかい。まだ暗いからもっと寝なさい」

祖母の温かい言葉であった。

正淑が起き上がって、「おじいさま、おばあさま、どうしてお休みにならないのですか」と聞くと、祖父が穏やかに言った。

「年を取るとよく眠れないんじゃ。わしらのことは気にしないで、もう少し寝ていなさい。山中では石が枕で、一日として暖かいオンドル部屋で寝たことがなかったろう」

それでも正淑が横にならないので、祖父はこう言った。

「お前は小さいときに家を出て、ずいぶん苦労したようじゃが、小さい頃から国を取り戻そうという一念に燃えて、歯を食いしばって生きてきたことも聞いている。

国の運命が尽きようとしていたときだから、どの家だって穏やかな日はなかった。わしらも国を取り戻すと言って多くの孫子たちが家を出てゆき、一日として穏やかな日はなかった。

軒から雨だれが落ちる晩は、どこかの空の下で寒さに震えてはいなかろうかと、一睡もできず夜を明かしたことも多かった。

このばあさんが糸もない糸車を回しているので、なんでそんなことをしてるのだと聞くと、心配で心配でじっとしていられないと言ったものだ。しかし、それもいまは昔話になった。

愛国の魂を誇りとする、この家の血統を継ぐひい孫を連れて、お前が来てくれたので、わしはどんなにうれしいかしれない。お前がこの家を花と咲かせるのじゃ。この子をりっぱに育てて、国の代をりっぱに継がせるんじゃよ」

万景台で、将軍一家の革命的で愛国的な家風をしみじみと味わった正淑は、祖父の言葉を朝鮮人民と民族の切願として心に刻み込んだ。

正淑は横になったが、目が冴えて眠れなかった。

翌日、正淑は万景台を後にして平壌に帰った。

正淑はその後もしばしば万景台を訪れて祖父母に孝養を尽くした。

正淑は、祖父母を平壌に迎えようと心を砕き、寒くなると冬着を送り、なにか珍しい食べ物が手に入ると祖父母のことを考えた。

ある日の夕方、正淑は祖母が病気にかかったとの知らせを受け、急いで万景台に向かった。

昨夜来の雨で万景台への道はぬかるんでおり、もう日も暮れたのだから明日の朝に延ばしてはと勧める者もいたが、正淑はそのまま出発したのであった。

田園の道はすでに闇に包まれていた。車が万景台の方に折れると、土手の道が水に浸ってどろどろしていて、車を進めることができなくなった。

正淑は車を降り、コイと果物の包みを提げて、どろ道に足を踏み入れた。同行者が暗くて危険だからあきらめるようにと言って引き止めたが、山中で戦っていたときは何倍も危険な夜道を歩いたのに、これくらいの道がどうしたのですと言って、歩きつづけた。

正淑を迎えた祖母は、「大したことでもないのに知らせたりして、お前がこんな夜道をやってきてくれたんだね。ときどき起きるちょっとした病気だからあまり心配することはない。これもみなあの悪どい日本人のためにかかった病気だから、そいつらが追い払われたいまは、この病気もすぐに治るだろうよ」と言うのだった。

正淑は「おばあさまのおっしゃる通りです。日帝が滅んで国の病気も治ったのですから、おばあさまの病気もきっと治るはずです」と言って祖母をなぐさめた。

いつだったか、正淑が柱時計を買って行ったことがあった。万景台の家には、そのときまで柱時計すらなかった。

祖母は、こんな高いものを、と言いながらも、とても喜んでく

れた。

祖母は時計を眺めながら、「あたしがほんとに欲しがっていたものを買ってきてくれたんだね。お前の舅が中学校に通っていたとき、時間が分からなくておおよその見当で朝ご飯を炊いたもんだけど、あのころは柱時計が欲しくてならなかったものだ。お前はそんなあたしの気持ちまで察してくれたんだね」と言って涙ぐんだ。

正淑は平壌を遠く離れた地方に出向いているときも、万景台の祖父母のことをよく考えた。

1947 年 9 月、将軍と一緒に金剛山（クムガン）に登ったとき、正淑は土産物屋で、自分のものは何一つ買わず、将軍の登山帽と祖父に贈る杖を買った。

いまも、万景台を訪れる人たちは、縁側の隅に立てかけてあるその杖を見ることができる。

このように孝心の厚い正淑のことであったから、万景台では、気立てのやさしい孫嫁の来るのを待ち、正淑が訪れると、お祭り騒ぎをするのであった。

ある日のこと、祖母は将軍に、少し高くついても女性用の高級腕時計を手に入れてくれないかと頼んだ。柱時計もなしに過ごしてきた祖母が、突然女性用の腕時計を、それも高級品をと言うので、将軍はけげんに思った。

将軍は腕時計を買ってきて祖母に渡した。

「おばあさん、これをどうするつもりなのです」

祖母は腕時計を手にして言った。

「お前たちが山中で、なにもなしに結婚したというのが気にかかって仕方がなかった。お前たちが帰ってきてずいぶん長くなるというのに、この年寄りはろくにもてなすこともできなかったし、服の一着も作ってあげられなかった。それでお前の嫁に時計をあげたかったのだよ。あれが時計を手首に巻いているのを見たら、あたしの気持ちも少しは楽になると思ってね」

このような祖母の愛情こもった腕時計を、正淑は愛用した。

1949 年 9 月、金正淑との永別にあたって金日成将軍は、もっとも近しかった革命戦友の手首に、その時計を巻いて野辺送りをした。

十　つねに変わらぬ姿勢

自ら護衛兵になって

日本帝国主義の植民地支配から脱した朝鮮は、解放の感激と喜びに沸き返った。全国の村々と家庭では、徴兵や徴用から帰った人たち、異国や他郷をさすらいもどってきた人たちが親族との再会に涙を流した。

しかし、金正淑は平壌に来てからもいささかも休息することなく、以前と同様に金日成将軍を補佐し、身辺の安全をはかって精力的な活動を繰り広げた。

正淑は、故郷の会寧（ヘリョン）へ行き、親類や知人とも会ってみるよう勧められると、日本帝国主義者は駆逐されたが、いまは南朝鮮にアメリカ軍が居座っている、反動分子も蠢動しており、情勢は錯綜している、将軍はこうした環境の中で昼夜を分かたず活動している、こんなとき将軍の補佐をしないでどこへ行っていられると言うのか、国が安定するまでは親類を訪ねるつもりはない、と答えるのだった。

実際、当時反動分子の蠢動が激しくなっている情勢のもとで、将軍の身辺の安全をはかることはとりわけ重要な問題であった。

朝鮮の北半部で建国の基礎が築かれ、民主勢力が強化されてい

くと、階級の敵はアメリカ帝国主義者の差し金で盛んに白色テロをおこなった。平安（ピョンアン）南道党委員会委員長も敵のテロの犠牲になった。彼は解放前、正淑が平安南道地区に派遣した李周淵（リ ジュ ヨン）の指導で革命組織に加わり、将軍の思想にしたがって活動していた人物であった。

反動勢力の蠢動がどれほど悪どくなっていたかは、将軍の参加のもとに開かれた３・１運動27周年平安南道慶祝大会のさなかに幹部壇上に手榴弾が投擲された事件が如実に語っている。将軍の建国路線に呼応した康良煜（カンリャンウク）[27]牧師の家庭へのテロ事件もその一例である。

白色テロの主要目標は将軍を先頭とする党と革命の首脳部であった。ところが当時、警護隊は敵の蠢動をそのつど粉砕できるほど十分に準備されていなかった。将軍は抗日武装闘争で鍛えられた信頼すべき闘士たちをすべて、新しい国づくりの各要地に派遣していたのである。

正淑が平壌に初めて足を踏み入れたとき、警護隊には生まれて初めて銃を手に取り軍服を着た青年が大半を占めていた。

正淑の平壌到着を誰よりも喜んだのは金策（キムチェク）だった。

「金正淑同志が来たからもう安心できます」

これが金策の最初のあいさつであった。金策は、将軍の身辺の安全をはかる点ではいささかの譲歩も許さず、いつどこでも万全を期する正淑のことをよく知っていたのである。

彼から、自身の身辺や寝食については関心を向けない将軍につ

いて聞かされた正淑は、こう言った。

「金策同志、心配しないでください。警護隊を強化する問題はわたしが努力してみます。わたしとしては山中で戦ったときもそうでしたが、いまも将軍を守ることより重要な任務はありません」

正淑は毎朝、警護隊の指揮官と将軍の副官に会い、将軍の護衛で持ち上がる大小の問題についてこまごまと相談し、将軍の帰宅後は自身が警護隊員となって護衛の任務を果たした。

1946 年 2 月初めのある日、将軍が北朝鮮臨時人民委員会の樹立に関する報告文を徹夜で作成していたとき、巡察中の警護隊員は雪に打たれながら執務室の窓の下に立っている正淑の姿を見た。

彼らが早く中へ入って休むようにと言うと、正淑は山中で戦っていたときからの習慣で、止められないのだと言ってほほえんだ。正淑は抗日武装闘争時代と変わりなく将軍の安全を守る休息なき巡察兵、交替なき歩哨であった。それは、正淑にとって義務である前に、長い抗日武装闘争時代に身についた習慣であり、生活の第一の要求であった。

その年の 2 月中旬のことである。

将軍は自邸で夜遅くまで、宣伝部門の活動家に放送事業について意見を述べていた。正淑は活動家たちに茶菓子を出し、傍らに立っていた。

そんなとき近くで銃声が鳴り、電灯が消えた。室内は暗闇に包まれた。不意の状況にその場に居合わせた人たちはどうしてよい

か分からずとまどった。

しかし将軍は、「驚くことはない。何匹かのネズミが騒いでいるようだが、少し休んで話をつづけよう」と言って立ち上がり、戸口のほうへ向かった。

ところが、正淑が両手を広げて戸口の前に立ちはだかった。正淑の手には拳銃が握られていた。

「いけません。中にいてください」

将軍は、「大丈夫だ。何事か、行って確かめてみよう」と言って外へ出ようとした。

しかし正淑は、それをさえぎり、「絶対にいけません。お出になってはいけません。これは警護隊の要求です」と強く言い張った。

人々の前には、ついさっきまで茶菓子を勧めていた物静かな女性ではなく、拳銃を手にして厳しく暗闇の向こうを見据える白頭（ペクトウ）の女将軍、親衛兵が立っていた。このときの正淑は文字通り将軍を守る城壁であった。

そのときの目撃者であった許貞淑（ホジョンスク）は、後日、次のように語っている。

「本当に忘れられない光景でした。この世のどんなに有能な画家でさえ、将軍をかばうこの日の金正淑女史の毅然とした姿をそのまま描くことはできないでしょう」

その夜の銃声は、朝鮮革命の首脳部を攻撃するために侵入した曹晩植（チョマンシク）[28]のテロ団体「希望団」と巡察中の保安署員の間に飛び交

った銃声であった。

このように正淑は、つねに変わらぬ親衛戦士として将軍を断固として守る一方、警護隊員の教育と指導に精魂を傾けた。

正淑は、警護隊員は抗日革命闘士のように将軍の身辺護衛に心身をささげるべきだ、と彼らに教えた。

正淑は、警護隊員は誰よりも将軍の思想でしっかり武装すべきであり、政治的、思想的な覚悟が高くなければならないとし、彼らの政治学習に力を入れた。正淑は毎朝、党機関紙を読んで重要な記事をチェックし、警護隊指揮官に会読するよう指示した。そして、党機関紙には将軍が各時期ごとにうちだす路線と方針、それにもろもろの国内外の情勢が掲載されるが、それを読まなければ将軍の思想と意図を知ることができず、結局、革命戦士としての役割を正しく果たすことはできない、と説いた。こうして警護隊では、党機関紙をはじめ出版物を通じた隊内教育が整然とした体系をもって活発におこなわれるようになった。

正淑は、党政策を知らなければいくら党に忠実であろうとしても、党の方針に反する行動をとることになる、と強調した。

正淑は党生活も警護隊内の細胞に属しておこない、隊員たちにすぐれた手本を示した。

北朝鮮労働党創立大会直後の 1946 年 9 月、新党員証の授与に関する各党員との対話が全党的におこなわれた。そのとき、警護隊党細胞は正淑がいる細胞でことさらに対話をおこなわなくてもいいのではと考え、対話をしなかった。上部の党組織も同じ意見

であった。

　ところが正淑は、わが党には特別な党員はありえない、わたしたちは将軍のそば近くで活動している党員であるから、他の党員より党生活にいっそう励まなければならない、わたしたちが山中で戦っていたときも、司令部警護隊員は党生活でつねに手本を示してきた、と彼らをいましめた。

　翌日、正淑は、細胞の他の党員と一緒に上部の党組織を訪ね、対話に誠実に参加した。

　正淑の指導のもとでりっぱな護衛戦士に鍛えられていく警護隊員の胸には、熱く清らかな忠誠心をもって将軍を守る正淑の姿勢が、忠臣の最高の手本、行動の鑑として深く刻まれた。

　1962 年 4 月初めのある日、金正日総書記は、金日成主席がしばしば行き来する道端の花壇を手入れしている護衛たちの手助けをしながら、次のように回想した。

　「わたしの母は解放後のある日、金日成同志の執務室の窓の下にヒャクリコウを数株植えました。そのとき人々は、この木は移植が難しいと言いましたが、母は心をこめて手入れをし、とうとうその木に花を咲かせました。金日成同志は深夜、執務で疲労を感じると、窓を開けてその花の香りをかいだものです」

　その花樹を移植するとき手助けをした警護隊員たちは、正淑がとても大事に丹精してきた木、それも移植の困難な木をなぜ移そうとするのか、庭園のどこからでもよく見え、将軍の執務室からはとりわけよく見える位置にある木ではないか、と気にかけた。

正淑は額の汗を拭きながら、将軍の部屋からは花壇がちょっと遠いように思われる、それに風が建物の横を吹き抜けるので将軍の部屋に香りが入らない、と言うのだった。

雨の降る日は必ず傘を持って正門の前で待ち、車を降りる将軍に傘をさしかける正淑の姿も、警護隊員の心に焼きついた。

正淑は将軍が在宅中は、室内外を静粛にし、巡察兵の靴音にも気をつかって静かに歩くよう注意を与え､薪は庭園の片隅で割り、小鳥が騒々しくさえずると、その群れを追い払った。将軍が私邸を出る前や帰宅する前にはちり一つない道をさらに掃き清め、将軍が遠出するときは気象観測所に天気を問い合わせ、道路の状態まで確かめ、護衛メンバーに注意事項を話して聞かせ、また、どのような状況に遭遇しても将軍の身辺の安全に差し障りがないようことこまかに旅装を整えた。

正淑の一挙手一投足は警護隊員にとって、将軍護衛の姿勢と立場、将軍にたいする清い忠誠心の鑑であった。

正淑は警護隊員の射撃術の向上にとくに力を入れた。警護隊員の銃弾が一発で目標に命中しなければ、その銃は石ころや棒切れにも劣るとし、彼らがみな百発百中の名射手になるよう鍛えていった。

1946 年秋のある日、警護隊の射撃訓練を見た正淑は、ある小隊の射撃成績が思わしくないことを知った。

その原因を確かめてみたところ､小隊長の指導に欠点があった。自分が何日間か正しい指導を与えれば隊員の射撃術を間違いなく

向上させることができると思われた。しかし正淑は、指揮官の射撃術を高めれば新入隊員の射撃訓練が正しくおこなえると考えた。翌日、小隊長と一緒に射撃場に行った正淑は、彼の拳銃の性能を調べたあと、30m先の標的を射撃した。標的は一発で命中した。

正淑は彼に拳銃を返し、一度撃ってみるようにと言った。以前に拳銃射撃を何回してもほとんど命中したことのない小隊長は、今度も２発目に標的の端をかすめただけだった。

正淑は自身が体得した射撃原理を細かく話して聞かせ、彼の射撃動作の欠点を一つひとつ直していった。こうして何日かが経つと小隊長の射撃術は急速に上達した。

正淑は、指揮官は各種の武器に精通していなければならないと強調し、機関銃の射撃法も教え、また出現標的と移動標的、音声標的にいたるまで一発で打ち倒せるよう指導した。小隊長の射撃術が上達するにつれて隊員の射撃術も目に見えて向上した。

正淑は警護隊員に、歌にリズムや節があるように、どんな音にも特有のリズムがあるものだ、と言い、次のようにつづけた。

——警護隊員はすべての音のなかで、なによりも金日成将軍を識別できるようにならなければならない、将軍の乗用車のエンジンの音、足音、戸を開閉する音、咳ばらいなど、音を聞いただけでそれが将軍だと分からなければならない、とりわけ夜は音の判断がいっそう重要だから、夜の音には平素から習熟していなければならない、木の葉のそよぐ音、虫や鳥の鳴き声、草葉からしずくがしたたり落ちる音など、すべての音にしっかり慣れていてこ

そ、聞きなれない音を即座に識別して対策を立てることができる……

こうしたことはすべて、正淑が白頭の密林や満州の荒野で将軍を護衛していたときの貴重な体験によるものであった。正淑は、その経験をもって、警護隊員をさまざまな兆候を判断する名手に育てていった。

正淑は､警護隊員が規定と教範の要求を正確に守るよう強調し、隊列訓練に力を入れて精鋭武力として面目を一新するように指導した。とくに護衛規定を厳守するよう求め、自らその手本を示した。

ある日、外出先から帰った正淑は、私邸正門の前で見知らぬ将校に通過を差し止められた。新規に配属され、歩哨勤務状況を巡察していた将校であった。彼は正淑に、訪問の理由を尋ねた。正淑は微笑してこの家の者だと答えた。しかし、正淑の身なりがあまりにも質素だったので、目の前の女性が金正淑女史だとは夢にも思わなかった彼は、歩哨が口を挟むいとまも与えず、確認すると言って邸内へ入っていった。しばらくしてあわてふためいて走ってきた彼は、正淑の前でまごまごし、口もろくに利けなかった。

正淑は彼に「りっぱです。将軍を護衛する警護隊員は規定をそのように厳格に守らなければなりません」とほめ、彼を手本としてみんなに見習わせた。

正淑は警護隊員の服装にも細かい注意を払った。

ある日、警護隊員の就寝中に、彼らのえりあてを取ってきれいに洗い、アイロンまでかけてあげた。そして、恐縮する隊員たちに「家ではお母さんや姉さんが世話してくれていたのに、自分の手でするのは大変でしょう」と言うのだった。

隊員たちはただうなだれていた。

「女性同盟員に頼んだら、みなさんのためだから、喜んでしてくれるでしょう。けれども、軍人はなんでも自分の手でしなければならないのです。針仕事も、洗濯も、炊事もなんでもできるなら、どんな状況に際しても苦労せずにそれを克服することができます」

こう言って、正淑は彼らにえりあての付け方を教えた。

正淑は雨の降る日は歩哨たちのためにテントを張ってやり、寒い冬の日は温めた石を足の下に置いてあげた。

このような正淑の気づかいで、解放直後に結成されて日の浅かった警護隊は、高度の政治的・思想的準備と軍事技術的準備、鉄の規律を備えた精鋭部隊に成長していったのである。

警護隊の成長ぶりに満足した将軍は、平壌学院をはじめ全訓練所の責任幹部に、中央警護隊の軍務生活状況を見学させ、その模範を一般化するようはからった。

警護隊の軍務生活のすばらしさに感嘆した幹部たち、とりわけ金策らの抗日革命闘士は、革命の首脳部護衛の礎をしっかり固めた正淑に謝意を表した。

警護隊の経験はその後、朝鮮人民軍の内務規定および教範を完

成させる基礎となり、警護隊は正規の革命武力建設におけるモデルとなった。

正淑は将軍の安全を守るため誠意の限りを尽くした。普段から人民と同じ食事をとっている将軍にわずかの粗相でもあってはとつねに気を配り、将軍の現地指導用特別列車の電燈の笠を、目の疲れをいやす淡紅色のものと取り替えるようはからい、将軍の現地指導コースを事前に視察しては不備な道路や橋を普請するようにするなど、その心づかいを挙げれば枚挙にいとまがない。

祖国解放の決戦を準備していたある日、将軍が各種の書物がぎっしり並んだ書斎にいる夢を見た。その話をしたところ、抗日革命闘士たちは、大統領になる夢だと言って喜んだ。それから数年の歳月が流れ、抗日闘士も将軍も夢の話をすっかり忘れていた。ところが正淑だけは忘れていなかった。

1947 年 4 月、正淑は誠意をこめて将軍の書斎をしつらえた。書架や机の位置とその規格、備品について細心の注意を払い、将軍の利用に便利なようにと、本を書架に種類別に揃えて立て、新聞、雑誌、文書も順序正しく整頓した。

書斎を見た将軍は、書斎がりっぱなばかりでなく、書物の分類もよくできており、新聞、雑誌も利用しやすく整理されている、と言って満足した。

そして正淑と並んで書斎で記念写真を撮った。

将軍の江原（カンウォン）道現地指導に随行した正淑が金剛（クムガン）山で語った言葉は、朝鮮人民に広く知られている。

将軍の夕食の支度のため有名な万物相を目前にして山を降りた正淑は、翌日の 9 月 28 日も九竜の滝近くで独りきびすを返した。

「将軍の食事を支度する時間になったのに、『神仙の遊びに斧の柄朽つ』ということわざ通り金剛山の見物に夢中になって、食事の時間を違えるところでした」

せっかくここまで来たのだから滝を見ては、と勧める随員に、正淑はこう言った。

「午後、将軍はまた現地指導に出発することになっています。だから昼食の支度をし、出発の準備も整えなければならないのです」

後日、九竜の滝を再び訪れた将軍は、この日のことを感慨深く振り返った。1947 年の秋にここへ来たとき、正淑はわたしの昼食の支度のため、近くまで来ていながら滝の見物もできずに山を下りていった、わたしが九竜の滝はすぐそこだから見ていくようにと言ったが、後日また来る、と言って下りていった、こうして正淑はとうとう九竜の滝を見ることなく世を去った、と言って胸を痛めた。

思えば、チュチェ革命偉業の起源が開かれたその日から、朝鮮民族の救いの星であり、未来である金日成将軍をりっぱに守ることは、歴史が提起した朝鮮民族至上の課題であった。朝鮮革命の歴史が時代と民族に課したこの重大な使命を、金正淑は一身に体現していたのである。

不滅の頌歌

解放の喜びにひたりながら新しい生活を営む朝鮮人民の心は、解放の恩人である金日成将軍の業績を歌にこめて末長く伝えたいという思いに燃えていた。

1946 年 5 月のある日、金正淑が庭園で野菜畑の手入れをしていたとき、金策が訪ねてきた。

「急いで相談したいことがあってやって来ました」

金策はこう言ってカバンの中から厚い手紙の束を取り出した。毛筆のものもあれば、ペンや鉛筆で書かれたものもあったが、手紙には将軍の歌を作ってほしいという全朝鮮人民の一致した思いがこもごもに記されていた。

それでなくても当時、金策は将軍の歌を作るよう詩人の李燦（リ チャン）に任務を与えていた。それを聞いた正淑は、李燦のことは自分も前から知っている、彼の詩を新聞で見たこともある、あのように情熱的で才能も豊かな詩人だから、将軍の歌をりっぱに作れるだろう、と言った。

金策は、将軍がこのことを知ったなら、きっととがめられるだろうと言って心配した。

顧みれば、朝鮮革命の黎明期に戦友たちが将軍を仰いで革命頌歌『朝鮮の星』を作り、広くうたったものだが、それからは新しい歌は作られていなかった。

抗日武装闘争の時期に人民革命軍の隊員たちは、将軍の歌を作ってうたいたいと願っていたが、その問題が持ち上がるたびに将軍が厳しく禁じたのであった。

正淑は、将軍の歌はぜひ作るべきです、その歌は将軍の業績を称える歌として、朝鮮人民が孫子の代までうたう永遠の歌になるよう、りっぱに作らなければなりません、と強調した。

正淑はその後、歌の創作状況をしばしば尋ねた。

ある日、正淑は金策に、抗日革命闘争を体験していない詩人が将軍の歌を作るのは難しいだろうと言い、将軍が作った歌をはじめ100余編の革命歌が書き記されている手帳を詩人に贈った。それは、正淑が抗日武装闘争の全期間、革命歌を一編一編書き込み、大切にしまっておいたものであった。

やがて歌詞の草稿を書き上げた詩人は、金正淑女史に一度ご覧に入れ、助言を得たいと、金策に申し入れた。

正淑は早速詩人に会った。

この日、正淑は将軍のもとで抗日武装闘争をおこなった体験談を語ったあと、こうつづけた。

「ひたすら祖国の独立と人民の幸せのため半生をささげてきた将軍の偉大な足跡は、朝鮮のここかしこに残されています。その足跡は、白頭山の険しい山並みや鴨緑（アムノク）江と豆満（トウマン）江の流れにも反映されています。そして解放を迎えたこの国の各地にも刻まれています。わたしたちは満州荒野の寒風をついて戦い、密営のたき火の前で長い夜を明かしながらも、祖国と人民にささげている将軍

の偉大な愛をきっと感慨深く振り返るときが来るだろうとかたく信じていました。

……金日成将軍の不滅の革命業績は、将軍のご芳名とともに朝鮮人民の胸に永遠に光を放つことでしょう」

正淑の言葉は詩人が苦心して探し求めていた詩想であり、韻律であった。解放後、朝鮮で初めて作られた革命頌歌はこのような過程を経て完成された。この歌詞はただちに新聞、雑誌に紹介され、青年作曲家金元均（キムウォンギュン）によって作曲された。

『金日成将軍の歌』は試聴会を経てまたたくまに、新生活の創造に沸く全国各地の全人民に愛唱されるようになった。

『金日成将軍の歌』は新しい民主朝鮮の建設と祖国解放戦争、戦後の復興建設と社会主義建設の日々、そしてチュチェ革命偉業遂行の全期間にわたって朝鮮人民を鼓舞、激励し、導く不滅の頌歌、忠誠の歌となった。

他方、正淑の指導によって金日成将軍の銅像が建立され、朝鮮民族は普段でも将軍の英姿を仰ぎ見ることができるようになった。

1947 年 8 月 10 日、当時間里（カンリ）にあった万景台（マンギョンデ）革命学院を訪れた正淑は、院児たちに、いまはまだ生活が多少不便であろうが、将軍が万景台に建ててくださる新しい校舎が竣工したら、そこで何不自由なく勉強できるようになる、と言った。

子どもたちは大喜びし、早く万景台に行きたいと口を揃えて言った。

正淑は同行した抗日闘士や幹部たちにこう言った。

「新しく建てる万景台学院には将軍の銅像を立て、学院の子どもたちがいつも将軍の姿を見ながら生活できるようにしてあげましょう。……

将軍の銅像の位置は学院本館の前が最適です。そうすれば子どもたちは将軍の銅像を仰ぎ見ることができ、つねに自分たちのそばに将軍をいただきたいと願う彼らの希望をかなえてあげることができます」

金策ら抗日闘士たちは心から賛意を表し、喜んだ。

正淑は、将軍の銅像は大同（テドン）江と万景峰が一目で見渡せる学院本館の前に建て、子どもたちが大同江からも万景峰からも見ることができるようにしよう、と言った。

私邸に帰った正淑は、朝鮮で初めて建てる将軍の銅像をどのように形象化すべきかを深く考えた。そして翌日から銅像の建立に造詣の深い専門家を探し出させ、彼らが集まると、学院に建てる将軍の銅像は抗日武装闘争時代の姿を形象化すべきだと言い、その方途について助言を与えた。

1948 年 10 月 24 日、万景台革命学院で将軍の銅像除幕式が新校舎の竣工式と並んで挙行された。

このとき以来、朝鮮では全人民の願いをこめて金日成将軍の銅像が各地に建立されていった。

十一　祖国の復興のために

金日成将軍の路線にしたがって

解放直後の朝鮮の情勢は複雑をきわめていた。南朝鮮を占領したアメリカ帝国主義者は、新しい祖国の建設をめざす朝鮮人民の闘争を破綻させようと悪辣に策動し、階級の敵はアメリカ帝国主義に教唆、扇動されて人民を反動の道に誘導しようと狂奔した。それに加えて、「革命家」と自称する分派分子、左右の日和見主義者はブルジョア共和国を樹立すべきだの、即時社会主義革命を遂行すべきだのと人民を混迷に陥れていた。

金正淑は各地方に派遣されている抗日革命闘士に、かつて山中で戦ったときのように、革命の裏切り者や分派分子の蠢動を退け、将軍の建党・建国・建軍路線をあくまで貫きましょう、と強調した。これは、複雑な情勢のなかで一貫して堅持すべき合い言葉でもあった。

解放後、新しい祖国建設の成果いかんは、創立されたばかりの党の強化と役割にかかっていた。

正淑は行く先々で、各党組織の活動が将軍の革命思想通り進められるよう気を配った。1945 年 12 月、清津（チョンジン）市党委員会を訪ねた正淑は、党の組織建設路線を貫徹する方策が定まらないうえに

中核分子を見出せず頭を悩ませている活動家に、咸鏡（ハムギョン）北道には抗日武装闘争の影響下でつくられた地下組織が多く、祖国解放のために献身的にたたかった人が多いから、彼らを探し出して中核に育てるべきだと話した。そして、党を無産階級に依拠した大衆的政党に建設すべきだとした党創立大会での将軍の方針を伝え、そのためには、労働者、農民をはじめ各階層の大衆の中から鍛えられた人を大勢入党させ、製鉄所をはじめ各工場、企業所に早急に党組織を設けなければならないと強調した。

その後も各地方党組織に出向いて活動上の偏向を正し、活動方法を教え、将軍の党建設路線が正しく貫徹されるようはからった。

正淑は、青年組織にたいする活動に力を注いだ。朝鮮の青年運動を将軍の路線にしたがって進めることは、党と朝鮮革命の主体的力量強化の要諦であった。

祖国の解放は青年の胸を噴火山のように燃え上がらせた。しかし彼らは進むべき道を見出せず、情熱のはけぐちがなかった。

祖国の解放とともに全国各地に共青組織がつくられたが、それには少数の無産階級出身の青年が加わっただけで、「解放青年同盟」「学生同盟」「白衣青年同盟」「キリスト教青年会」「天道教青年同盟」といったさまざまな青年団体が結成され、てんでに青年を引き入れていた。このような青年運動の実態を把握した将軍は、「愛国的青年は民主主義の旗のもとに団結せよ！」というスローガンを示し、各階層の青年を結集する全一的な大衆的青年組織としての民主青年同盟を結成する方針をうちだした。ところが反党

分派分子らは、共青を民青に改編するのは青年運動の「後退」、「右傾化」だとして民主青年同盟の結成に執拗に反対し、民主青年同盟結成会議で共青は共青なりに存続させるという決議を採択してしまった。

将軍は党中央組織委員会第 3 回拡大執行委員会で、民主青年同盟の結成に反対する分派分子の分裂・破壊策動を厳しく批判し、遅滞なく民青を創立する対策を講じた。そして、1946 年 1 月 17 日に開かれた北朝鮮民主青年団体代表者会議で、北朝鮮民主青年同盟の創立を宣した。

その日、正淑は青年代表たちと夜更けまで語り合い、彼らに自信と勇気を与えた。そのときの正淑の言葉は、彼らの胸に深く刻みつけられた。

「金日成将軍は、青年は新しい民主朝鮮建設の柱だと述べています。青年運動から革命闘争を始めた将軍は、祖国解放をめざす血みどろのたたかいのときのように、新しい祖国の建設でも青年が大きな役目を果たすよう望んでいます。ですから、みなさんは将軍の新しい祖国建設路線にしたがって、工場と農村、学校を問わず、青年のいるところにはすべて入り、将軍の遠大な志を植えつけて彼らを民青組織にかたく結集しなければなりません」

民主青年同盟が創立されると、多くの青年が加盟した。

正淑は、民青が党の路線と方針の貫徹において、真の青年前衛、党のベルトとしての使命を果たすよう導いた。

一部の青年学生が敵のデマに惑わされて党の方針に反対し、平

壌市の某学校で「同盟休校」を起こしたとき、正淑は早急に市内の青年学生を集めて講演会をもたせ、自ら演壇に立った。そして敵のデマ宣伝の本質をあばき、青年に負わされた使命について説き、講演を次のような言葉で結んだ。

「再び帝国主義の奴隷になるまいとするなら、わが国が真の自主独立国家になることを望むなら、将軍にしたがわなければなりません。

新しい民主朝鮮を建設するために、学生は学びに学び、また学ばなければなりません。みなさんの進むべき道はただ一つ、金日成将軍の導く民主主義の道です」

会場に割れんばかりの拍手喝采とともに「金日成将軍万歳!」の歓声が沸き上がった。

正淑の精力的な活動によって、民主青年同盟は将軍の意図どおり党の青年前衛としての使命をりっぱに果たすようになり、党の青年基盤はいっそう強化された。

正淑は、将軍の建国路線の貫徹のために精力的に活動した。

当時、アメリカ帝国主義者は人民政権の樹立を挫折させようと悪辣に策動した。これに歩調を合わせて、分派分子をはじめ不純分子は、親米的な「ブルジョア共和国」の樹立を叫ぶかと思うと、一方ではただちに「プロレタリア独裁政権」を樹立すべきだと主張して真の人民政権の樹立を妨げた。そして、地方政権機関の要職を占めていた親日派、民族反逆者は、大衆のあいだで人民政権機関の権威を失墜させようとあらゆる術策を尽くした。

解放された祖国に帰って数日経ったある日、正淑は清津市人民委員会の活動家と席をともにした。正淑は彼らに、解放された祖国にどのような政権を立てるかは、国と民族の運命にかかわるきわめて重要な問題である、いま一部の人は「ブルジョア共和国」だの「プロレタリア独裁政権」だのと喧伝しているが、これは朝鮮革命の性格と任務を無視した詭弁にすぎないとし、朝鮮の具体的実情と人民大衆の要求にかなった民主主義人民共和国を樹立するという金日成将軍の方針を実現するため積極的にたたかわなければならない、と励ました。

正淑は陽徳（ヤンドク）や中和（チュンファ）をはじめ各地方を訪れるたびに、地方人民委員会の活動状況を調べ、政権機関の活動家が人民の忠僕になるよう強調した。

1946 年 5 月、正淑は将軍に随行して中和郡人民委員会を訪ねた。そのとき、同地の活動家は将軍から郡内の農村の実状を尋ねられたが、満足に答えることができなかった。のちに彼らに会った正淑は、日本帝国主義支配時代の郡庁は官僚主義と専横によって人民を統治する反人民的な支配機関であったが、いまの郡人民委員会は人民の利益を擁護する真の人民の政権であると話し、将軍の教えどおり活動を正しく進めるよう強調した。

1946 年 2 月 8 日、北朝鮮では中央政権機関である北朝鮮臨時人民委員会が樹立され、金日成将軍がその委員長に推戴された。しかしその後、敵の策動はさらに激しくなった。

正淑は身の危険をかえりみず、反動派の策動を粉砕するため積

極的に活動した。

　同年２月、北朝鮮臨時人民委員会樹立直後のある日、平壌第４女子中学校の講堂で開かれた人民政権樹立に関する大衆講演会が反動派の策動で流産する事件が起きた。講演の最中に一人の反動分子がつと立ち上がり、講師に向かって、まだ統一政府が樹立されていないのに、北朝鮮にだけ臨時人民委員会が樹立されたのは国を分裂させることになるのではないか、北朝鮮臨時人民委員会は労農大衆の政権だと言うが、だとすれば資本家や商人を排除するということを意味する、これは一方的な政権ではないか、と詰め寄った。当惑した講師が答弁に窮していると、反動分子らは、われわれはそんな曖昧(あいまい)な政権は支持できない、汎国民的な政権を要求する、と騒ぎ立て、ビラまでばらまいた。こうして講演会は中止されざるをえなくなった。

　事態を知った正淑は、講演会をやり直すべきだとして、自ら講師役を買って出た。活動家は、講演会はやり直すとしても、反動分子らがどんな暴挙に出るか分からないから演壇に立つことだけはひかえてほしいと押しとどめた。

　しかし正淑は、将軍の建国路線を大衆に認識させる重要なことなのに、危険だからとやめるわけにはいかないと言って、講演会を再開するよう手配りした。

　講演会が再開された日、講堂は正淑が講演に出るということを知って集まった聴衆で超満員になった。

　演壇に立った正淑は、まずこう述べた。

「みなさん！　わたしたちは先日、歴史的な北朝鮮臨時人民委員会の樹立を盛大に祝いました。自分の手に主権を掌握した朝鮮人民は、この意義深い慶事を限りない喜びと沸き立つ歓喜をもって迎えました」

そして、朝鮮人民が自己の真の主権機関をもつようになったのは、民族の英明な指導者金日成将軍が 20 年余の困難な抗日革命闘争を繰り広げ、解放後、政権樹立をめざして精力的に活動した結果であることを感銘深く話した。また、将軍がうち立てた北朝鮮臨時人民委員会は、かつて人民の膏血をしぼった日本帝国主義の支配機関とは根本的に異なる、人民大衆の中に根を下ろし、人民の意思にそって活動し、人民の利益を擁護する真の人民政権機関であると力説した。また、北朝鮮臨時人民委員会は統一政府の樹立になんの支障も与えないばかりか、かえって統一政府樹立の強固な土台を築いてその過程を促進するものであり、この政権は労働者、農民とともに良心的な民族資本家、宗教家を含む各階層人民の統一戦線にもとづく政権で、ただ日本帝国主義と結託していた民族反逆者、買弁資本家のみを排除する政権であることを明らかにした。

講演は最初から聴衆の心をゆさぶった。正淑はなんのつくろいもない淡々とした語調で講演をつづけた。

「わたしたちは、この講堂でおこなわれた前回の講演会のときに、一握りの反動分子がビラをまいて騒ぎ立てたことを覚えています。彼らは北朝鮮臨時人民委員会の樹立に反対しましたが、周

知のように人民委員会は樹立され、人民はそれを熱烈に支持しています。この厳然たる事実はなにを示しているのでしょうか。人民の敵がいくら悪辣に策動しても、正義を志向する人民の願いをくじくことも、前進する歴史の歯車を逆転させることもできないことを如実に示しているのです」

正淑は興奮した聴衆に向かって、まもなく北朝鮮臨時人民委員会は諸般の民主改革を実施して労働者、農民の宿望をかなえ、この地に大変革をもたらすでしょう、みなさん、金日成将軍のまわりにかたく団結して人民政権を守り、新しい祖国の建設にこぞって立ち上がりましょう、とアピールした。聴衆の拍手喝采で講演はしばしば中断された。

講演が終わると、場内では「金日成将軍万歳!」「北朝鮮臨時人民委員会万歳!」「金日成将軍の路線にしたがって民主の基盤を築く建国闘士になろう!」というシュプレヒコールが連呼された。

この日も反動分子らは講演会を破綻させようと講堂に潜り込んでいたが、理路整然とした正淑の講演と高ぶった聴衆の気勢に圧倒され、こそこそと逃げ出した。

この講演会は、反動分子の罪業を暴露し、大衆に人民政権路線の正当性を認識させ、彼らを新しい祖国の建設に奮起させる重要な契機となった。

将軍は土地改革法令と重要産業国有化法令、労働法令、男女平等権法令などを発布し、それをりっぱに実施して驚天動地の新時代を開いた。この偉大な変革の陰には正淑の不眠不休の労苦と輝

かしい業績が秘められていた。

土地改革がおこなわれた日々、正淑は農村へ行って地主と反動分子の陰謀を暴露、粉砕し、将軍の土地改革方針の貫徹に向けて農民を立ち上がらせた。

土地改革をひかえた 1946 年 2 月のある日、大同(テドン)郡古平(コピョン)面新興(シンフン)里に行った正淑は、村の女性たちの仕事を手伝いながら、将軍の土地改革方針を分かりやすく説明した。そのうちに打ち解けてきた女性たちは口々に心のうちを打ち明けるのだった。

——金日成将軍が地主の土地を没収して農民に分与するという噂は本当なのか。わたしたちのような貧乏人も土地をもらえるのか。土地はくれてもお金は出さなくてはならないという話もあるが、1 ヘクタール当たりいくらなのか。地主がやすやすと土地を手放すだろうか。……

正淑は彼女らに、金日成将軍は農民の願いをかなえるためまもなく土地を分与する、土地代を払わせるというのは反動分子が流しているデマだ、地主はごく少数で農民は数百数千もいるのだから、農民が団結し労働者とかたく手を握ってたたかうならば、地主は土地を出さずにはいられないはずだ、と分かりやすく説明し、彼女らが土地改革実施の担い手になるよう自覚させた。

土地改革が成功裏に実施され、ついに農民の宿望は実現されたが、その後も反動分子らの策動はつづいた。事態を憂慮した正淑は、ある日、大同郡の農村に行って農民の種播きを手伝いながら彼らと語り合った。農民が口々に土地の分与を受けた喜びと感激

について話しているとき、一人の農民が、もらった土地をまた返すことになるという噂があるが、本当なのかと質問した。

正淑は、それは土地を没収された地主が言いふらしている反動的なデマであると言い、「農民は土地の永遠の主人になったのです。だれもこの土地を奪うことはできません」と答えた。そして、いま土地を没収された地主はあらゆる陰謀をめぐらしている、彼らは､農民はいつまでも土地を自分の所有にすることはできない、やがて「統一政府」が樹立されれば、また返さなければならなくなると流言飛語をとばしている、はなはだしくは堅実な農村の活動家や中核党員を殺害するという卑劣な行為まで働いている、このような状況のもとで、われわれは、金日成将軍のまわりにかたく団結し、将軍から与えられた土地をしっかり守り、農業をりっぱに営んで建国の基盤を強固に築かなければならない、と強調した。

このように正淑は、土地改革に反対する反動分子の策動を粉砕し、動揺したり悲観していた農民を目覚めさせて新しい祖国の建設に奮起させた。

正淑はまた、重要産業の国有化に反対する階級の敵の策動を粉砕するため精力的に活動した。

当時、反動分子は産業国有化法令が発布されれば、私営工場は大小にかかわりなくすべて国有化されるというデマを流していた。それを真に受けた一部の企業家は、急いで工場の設備を市場で売却しはじめた。正淑はこのような事態を収拾するため、平壌市内

の中小企業家に会って重要産業国有化の本質と正当性を説明し、この法令が中小企業家の利益を侵害しないばかりか、自由な企業活動を保障するものであることを認識させた。こうして、中小企業家を民主陣営から引き離し、産業国有化を破綻させようとした反動分子の企図は粉砕された。1946 年 8 月 10 日、『産業、交通運輸、逓信、銀行などの国有化に関する法令』が発布された。

重要産業国有化法令と労働法令の実施によって、さげすまれ抑圧されていた労働者は奴隷のくびきから抜け出して工場の主人、国の主人となり、真の自由と平等を実質的に享受できるようになった。

将軍は男女平等権法令を発布するとともに、司法、検察、教育及び文化の民主化を実現する諸施策を講じ、民族幹部問題、知識人問題を解決するための活動もおし進めた。

将軍の指導のもとに反帝反封建民主主義革命の課題が成功裏に遂行された結果、人民政権はさらに強化され、1947 年 2 月には北朝鮮人民委員会が樹立され、朝鮮革命は社会主義への過渡期に移行した。

正淑は、将軍の建国路線を貫徹するにはまだほど遠く、全朝鮮を包括する統一政府が樹立されてこそ建国の偉業が完遂されるとみなし、その実現をめざして奮闘した。

1948 年の南北朝鮮政党・大衆団体代表者連席会議を契機に、南北朝鮮の全地域では、アメリカ帝国主義と李承晩傀儡（かいらい）一味の民族分裂策動を粉砕し、国の自主的統一を実現するための民族あげ

ての闘争が繰り広げられた。同年5月、アメリカは南朝鮮で単独「選挙」を強行させ、その結果をでっちあげて不法な単独傀儡「政権」を発足させた。

1948年6月29日、将軍は南北朝鮮政党・大衆団体の指導者協議会を招集し、遅滞なく民主主義人民共和国を樹立するという党の政治路線を具現し、全朝鮮を包括する政府を樹立する方針を示した。

正淑は共和国の国章と国旗の制定のためにも労をいとわなかった。将軍が帰宅して通覧できるよう、前もって各種の資料や文書、参考書の中から必要な内容をチェックしたり抜粋したりした。

ある日、共和国の国章と国旗の図案作成に苦慮していた北朝鮮人民委員会の宣伝局長が将軍の私邸に訪ねてきたとき、正淑は次のように言った。

「……われわれの国章と国旗は、北朝鮮人民だけでなく、南朝鮮人民にも受容できるものにし、将軍の新しい祖国建設の遠大な構想と方針を十分に盛り込まなければなりません。将軍は、共和国の国旗は祖国の自由と独立のためにたたかった革命烈士の赤い血潮と党のまわりに結集した革命力量を象徴する赤色を基調とし、国章の上部には赤い五角の星と光線を配して、祖国の明るい未来と、共和国が引き継ぐ革命伝統を表現しなければならないと述べました」

正淑は、党の革命伝統と祖国の未来を象徴する赤い星を国旗と国章に配することを絶対に忘れてはならない、と再三強調した。

当時、反党・反革命分派分子らは国旗の白丸の中に五角星ではなく、「朝鮮の特徴」を生かして犂（すき）を描くべきだと主張していた。正淑は宣伝局長に将軍の意図を正しく認識させて、反動的な主張を退けさせた。国章図案の完成段階でも、将軍が図案にある溶鉱炉が気に入らないとして電化を盛り込むべきだと指摘したとき、発電所を描けば電化を表わすことができるという意見を出して将軍を喜ばせた。朝鮮民主主義人民共和国の国旗と国章はこうしてつくられた。

共和国創建前後の時期、正淑は人民的で革命的な文学・芸術の建設のために尽力した。演劇『白頭山』の創作や抗日武装闘争をテーマにした初の劇映画『ふるさと』などの映画制作にも助力した。平壌第 4 女子中学校で演芸公演の準備が進められていたときには、自ら舞台に上がって生徒の舞踊と歌を指導し、遊撃区の児童団員がよく踊っていた歌舞『団結紐』を完成させた。

将軍は、国の経済状態が困難な中でも全国各地に数多くの病院と療養所を設置する対策を講ずる一方、近代的な中央総合病院を新設して、他の病院で治せない病気を治療し、各病院に技術的援助を与える事業を推進した。

1948 年 3 月 10 日、正淑は将軍に随行して中央総合病院(現在の朝鮮赤十字総合病院)の敷地を定めるため平壌市東（トン）区大新（テシン）里へ行った。つい先日、将軍は私邸である医療関係者と一緒に食事をしながら、中央総合病院の敷地を選んでみたかと尋ねた。彼が返答できずにいると、同席していた正淑が、あちこち見て回ったが、総合病院の敷地としては東平壌競馬場の横にある空地がふさわし

いと言うのであった。こうして、この日、金策（キムチェク）、李鏞（リヨン）などと一緒に将軍に随行して来たのである。現地に来ると正淑は、この空地は広く静かで、空気もきれいで交通の便もよいので、大きな病院の位置としては最適ではないかと進言した。将軍は大いに満足し、その場所を病院の敷地として確定した。

その後も正淑は、病院の基礎工事が始まったときから建設現場にたびたび足を運び、輸送や資材供給など建設過程での難問の解決をはかり、建設事業所が自力で技能工を速成養成できる対策を講じ、建設者への給養活動にも深い関心を払った。

翌年の4月初め、正淑が3度目に建設現場を訪れたときには、病院の築造工事は終わり、内部工事に入っていた。建設の進行状況をあらためた正淑は、部屋が400あるならさまざまな病気の治療に必要な科をすべて設置できると話し、とくに産婦人科と小児科をりっぱに整えるよう強調した。そして、人口の半数を占める女性が解放を迎えて男子と同等の権利をもって社会生活に参加しているが、少なからぬ女性が婦人病のため苦しんでいるので、彼女らが十分に治療を受けられるように産婦人科を充実させなければならない、と語った。また、朝鮮の女性は男性医師に治療を受けるのを嫌うので、女性の産婦人科医師を養成して配置するのがよいと話した。

1949年8月19日、保健相が将軍の私邸に往診した。正淑は自分の体調については気にもとめず、8月 15日に予定されていた総合病院の竣工式が遅れている理由を尋ね、一緒に現場に行って

みようと促した。保健相とともに病院に到着した正淑は、大きな病院の建物を眺めながら、「これなら、わが国も大きな病院を建てたと自慢できるでしょう」と言った。そして病院の内部を見て回りながら、各科と入院室の配置問題やその他未解決の問題についても助言を与えてから、われわれは大きな病院を一つ建てたが、今後この病院を母体にして全国各地に近代的な病院を建てよう、と語った。もっとも先進的で人民的な保健・医療制度を樹立し、人民に無病長寿の幸せな生活を享受させようというのが正淑の切なる願いであった。

正淑は、党機関紙をはじめマス・メディアを朝鮮革命の要請に即して編集、発行することに深い関心を払った。

1946 年 4 月 14 日、正淑はある編集者に会った席で、党機関紙の編集はかなり改善されたが、外国に関する記事が多すぎることを指摘し、次のように述べた。

「党機関紙はあくまでも朝鮮のことを基本にして編集しなければなりません。党機関紙は朝鮮革命をりっぱに遂行するための思想的武器です。われわれはつねに、朝鮮革命をりっぱに進める立場に立って問題を考察し、それにすべてを服従させなければなりません」

正淑はまた、マス・メディアが階級的線から逸脱しないよう、そのつど注意を喚起した。

実に、建党、建国の日々を振り返ると、正淑の労苦と心血が注がれていない部門はほとんどない。

1948 年 9 月 9 日、朝鮮民主主義人民共和国の創建を全世界に宣言したこの日、私邸に戻った将軍は正淑を食卓につかせた。そして、建党、建国、建軍の 3 大課題はきょう完遂された、その間、わたしの世話のためにいろいろと苦労をかけた、何もしてやれず苦労ばかりさせたが、きょうはわたしが一杯つぐからほしなさい、と杯をすすめた。すると、正淑はこう言うのだった。「なぜ何もしてくださらなかったと言うのですか。党を創立し、軍隊を創建し、共和国を創建したのに、それにまさる贈物などないはずです。一生の願いをかなえてくださったのですから、それ以上の望みはありません」

建党、建国、建軍の 3 大課題の実現、これは正淑が抗日の日々から抱いてきた夢であり、切なる願いであった。

建国思想総動員運動の先頭に立って

共和国北半部での反帝反封建民主主義革命課題の遂行によって、朝鮮革命は新たな高い段階に入ることになった。

しかし、社会経済的条件の変化に比べて人々の政治・思想意識は立ち後れていた。人々のあいだには依然として資本主義的・封建的思想の影響と悪習が多分に残っていた。

この古い思想的影響を一掃し、新しい民族的気風と革命精神を発揚させずには、民主改革の成果をかためることも、革命と建設

をより高い段階へと前進させることもできなかった。

金日成将軍は革命発展のこうした切実な要請を深く洞察し、1946 年 11 月 25 日、北朝鮮臨時人民委員会第 3 回拡大委員会で建国思想総動員運動[29]を繰り広げる方針を提示した。

金正淑はこの運動を全国に広げるため大衆のなかに入り、この運動の目的と意義を説明して彼らを奮起させた。

朝鮮では、1947 年から初めて人民経済計画を作成し、その遂行に取り組んだ。初の人民経済計画は未復旧の工場、企業所をすべて復旧し、工業生産を前年に比べておよそ 2 倍に高めることをめざす膨大な計画であった。それだけに難関も多かった。計画が発表されると、階級の敵は「山中で銃を使っていた者たちが天の星を取ろうと夢想している」と悪態をつき、外国からも憂慮する声が聞こえてきた。

こうした状況にあった 1947 年 2 月のある日、抗日革命闘士たちが将軍の私邸を訪ねてきた。彼らは、反動勢力が好ましくない世論を広めていることを正淑に告げた。

正淑は、反動勢力には言いたいことを言わせておくことだ、将軍が抗日武装闘争を開始したとき、日本帝国主義者はわれわれを「滄海の一粟」だとあなどり、炸裂弾で「大日本」の打倒を夢見る「馬鹿げた夢想家」だとうそぶいた、そしてわれわれが祖国を解放すると、今度は、山中で丸太小屋しか造れなかった者が斧や鋸で溶鉱炉を復旧するというのか、とあざ笑った、事実、そのときわれわれが持ってきたのは背のう

一つしかなかった、しかし、われわれは製鉄所や製鋼所を復旧して鉄鋼材を生産し、経済の復興発展をはかって朝鮮人民が生きてゆく基礎を築いたではないか、と言うのだった。そして「わが国で最初の人民経済計画は、人民の革命的熱意と現実的可能性を十分に計算して作成された計画です。みなさんは資金や資材、技術などの問題で心配しているようですが、それも将軍の言葉どおり労働者と農民、知識人と技術者のなかに入って彼らの力と知恵を引き出せば、すべて解決できるはずです。そのためには、将軍が発起した建国思想総動員運動を力強くおし進めなければなりません」と語った。

その後、正淑は各地の工場、企業所、農村にたびたび足を運び、幹部と労働者、農民の仕事の仕方を改めさせ、潜在力を探求しながら、建国思想総動員運動のさらなる高揚をはかった。

ある日、正淑は平壌市中区にある自動車修理作業場を訪れ、労働者たちとあいさつを交わしてから、車の修理は円滑に進んでいるのかを尋ねた。この時、正淑が来たことを知った作業場の責任者が駆けつけてきた。

責任者が事務室に案内しようとしたが、正淑はそれを断って作業場を見て回ろうと促した。作業場にはまだ十分使えるねじくぎや部品があちこちに転がっていた。これを目にとめた正淑は、労働者たちは資材や部品が不足して車の修理が思うようにいかないと言っているが、貴重な資材があんなに放置されているのを見ると、ここでは節約し増産しようという将軍の呼びかけがよく実行

されていないようだと指摘した。そして責任者と一緒に構内の隅にあるくず鉄集積場に行った。くず鉄の山を掻き分けてみると、ねじくぎやそのままでも使える部品だけでなく、手を加えれば再利用が可能な機械設備もあった。それを見た責任者と労働者たちは、自責の念に駆られて頭を上げることができなかった。

正淑は彼らにこう言って聞かせた。

――以前は、わたしたちは日本人の工場に雇われて働く植民地の労働者だったので、工場も機械も自分のものではなかった。われわれの膏血をしぼり取る資本家たちのものをわたしたちが大切にするはずはなかった。しかし、今はわたしたちが国の主人であり、工場も機械もすべて国家の財産であり、わたしたち自身の財産なのだ。

国の主人がその財産を大事にせず、このように捨てたり、浪費したりしては国の経済はどうなるだろうか。長い間日本帝国主義者に略奪され、無から建国の第一歩を踏み出したわたしたちは、持っているものよりないもの、足りないものの方が多い。こういう状況のもとで富強な新しい朝鮮を一日も早く建設するためには、みんなが歯を食いしばって取り組み、ないものはつくりだし、あるものは節約して難関を切り抜けなければならない。

将軍が建国思想総動員運動を発起したのも、すべての人に国の主人だという自覚と誇りをもたせることに重要な目的がある。わたしたちは将軍のこのような高い志を体して、建国思想総動員運動に奮起しなければならない。……

正淑は、この運動をさらに積極化するための方途についても詳しく話した。まず、この運動はスローガンを叫んだり、アピールをしたりして終わるものではなく、すべての人が古い思想を捨て、実際の行動によって民主朝鮮の建設に貢献するように導く実践的運動であると言った将軍の教えを伝えた。そして、将軍の意図どおりこの運動を力強く繰り広げるためには、誰よりも幹部が先頭に立つべきだと強調し、幹部は将軍の演説内容を深く学習し、仕事の手配を綿密にして、大衆をこの運動に奮い立たせるべきだと説いた。

これを機に、自動車修理作業場では建国思想総動員運動と大衆的増産競争運動が活発に繰り広げられるようになった。そして、この作業場の労働者は資材や部品を丁寧に管理し、なかったり不足する部品は自分の手で作り、車の修理計画を毎月超過遂行した。

1947 年 4 月 16 日、正淑は平壌穀物加工工場へ行き、幹部と労働者を建国思想総動員運動と増産競争運動に立ち上がらせた。

当時、この工場では毎日数十トンもの水飴やノンマ（ジャガイモの澱粉）、葡萄糖が生産されていた。しかし幹部と労働者の仕事ぶりには、依然として日本帝国主義者が残した影響が少なからず禍していた。彼らは日本人が破壊していった製菓設備を復旧して人民により多くの菓子類を供給しようとは考えず、現行生産のみに満足していた。そして、澱粉職場ではノンマを粗雑に扱うために少なからぬ量が地面にこぼれ落ちていた。

工場の生産工程を見て回って実態を調べた正淑は、菓子類の生

産問題を協議するために集まった労働者、技術者、幹部たちに、解放後２年にもなるのに、子どもたちにキャンデーや菓子を食べさせられずにいることに将軍が心を痛めていることを話した。

数日前、現地指導を終えて帰る途中、農村の子どもたちに会った将軍は、彼らがまだ砂糖菓子も食べられないという話を聞いて非常に心を痛めた。将軍は前日の朝も、子どもたちに砂糖菓子一つも満足に与えられないというのに、自分の誕生祝いなどできないと、質素な祝いのお膳さえ受けようとしなかった。

将軍がそのように心を痛め、穀物加工工場に大きな期待をかけているという正淑の話を聞いた工場の幹部たちは、いまだに雇われ根性が抜けきれず、国の主人、工場の主人としての自覚に欠けて将軍の期待にこたえられなかったという自責の念に駆られた。

しばらくの間、室内に重くるしい沈黙が流れた。

やがて一人の年配の労働者が立ち上がり、われわれも決心すれば製菓設備は十分つくれるから、今からでも取り組んで機械をつくり、子どもたちにキャンデーや菓子を供給できるようにするとの決意を述べた。すると、人々はわれもわれもと生産工程の技術的改造と設備の補充に拍車をかけて生産の画期的増大をはかる方途を提案し、その決意を示した。

その後、工場の生産に一大転換がもたらされた。

この年、正淑は平壌製糸工場、降仙(カンソン)製鋼所、被服工場など数多くの工場、企業所を訪れ、労働者を新しい祖国建設に立ち上がらせた。

正淑は農民のあいだに残っている古い思想の影響と因習を一掃することにも関心を払った。

1947 年 2 月のある日、正淑は中和郡の農村に足を運んだ。5、6 戸の農家が住むこじんまりとした村だった。ある農家に立ち寄ってみると、村人が寄り集まり、食卓を囲んで笑い興じていた。将軍のおかげで生まれて初めて自分の土地を耕し、大豊作を迎えた幸福感にひたり、古い因習どおり冬場のひとときを飲酒にまぎらしていた。彼らは、農民はただこれを楽しみに生きていると言うのであった。

彼らと席をともにした正淑は、いま金日成将軍は国の食糧問題で心配しているというのに、こんなふうに食糧を浪費し、営農準備もせずにいたのでは将軍の恩恵と期待にこたえることはできない、明日からでもみんな精を出して堆肥を十分に用意し、今年は豊作の稲むらをもっと高く積み上げて将軍に喜んでもらおう、こうすることが将軍が呼びかけた建国思想総動員運動に積極的に参加することになる、と諭した。

その晩、農村の実態について正淑から報告を受けた将軍は、ただちに農民を建国思想総動員運動に立ち上がらせる対策を講じた。

1947 年 9 月、正淑は零細漁民の生活の改善策を講じるため鏡城（キョンソン）郡温大津（オンデジン）里の執三（チプサム）村を訪ねた。

11 戸の漁民で組織されていた水産生産班の実態を調べた正淑は、資金を出し合って船をつくり、漁労を始めたのはたいへんよいことだ、これは水産合作社を組織するという将軍の方針の正当性を

実践で示す大事な萌芽だとほめたたえ、彼らの生活が改善されているのをたいへん喜んだ。数日後、再び執三村を訪ねた正淑は、実情をさらに詳しく調べて将軍に報告し、9 月 25 日には将軍に随行して塩分鎮（ヨンブンジン）を訪れた。正淑の報告を受けた将軍は、まさに水産合作社を組織しようという漁民の意志が高まっていることを意味するものだとして、生活の苦しい漁村の実態をもう一ヵ所調べるために塩分鎮に来たのである。

この日、将軍は長時間にわたって漁民たちと語り合い、水産合作社の発展方向を示した。

正淑は鏡城に留まっている間、中小企業家に会って将軍の私営商工業に関する方針を説明し、彼らを建国事業に奮い立たせた。

そのとき、正淑が泊っていた鏡城郡の温泉場の宿所は、郡の幹部が正淑のために用意しておいたものであったが、家の中には寝具だんすや主婦の几帳面さをうかがわせる台所用品がそのまま残されていた。

正淑は郡の幹部に、この家は私有住宅ではないかと尋ねた。事実、その家には解放前に酒造業を営んでいた人の未亡人が姪を引き取って住んでいた。それを当分の間借りることにして、彼女らに親戚の家に移ってもらったのであった。

こうしたいきさつを聞いた正淑は、あなたたちはわたしを安心させるつもりで親戚のところに行ってもらったと言っているが、実際は解放前、酒造業をして不自由なく暮らしていた階層だからとけむたがって追いやったのではないか、わたしが来ると聞いて

黙って家を空けてくれただけでなく、このように寝具だんすに鍵もかけず、倉の米びつも開けたままで出て行ったのを見ると、家の主人はわたしたちを信頼しているのに違いない、と言った。そして「家の主人は何も言わずに家を空けてくれたけれど、きっとわたしたちと一緒にいたかったことでしょう」と言って、すぐ連れもどすよう命じた。こうして、正淑は翌日からこの家の主婦と同居することになった。

何日か経つうちに、正淑の謙虚な品性と温かい人情味に触れた主婦はある日、こう尋ねた。

「わたしたちのように以前ぬくぬくと暮らしてきた人たちは、これからどうなるのでしょうか」

それは解放されたその日から、彼女の頭にこびりついていた心配事であった。

正淑は彼女の心中を察してこう言った。

「そんなことは何も心配するにおよびません。党の政策を支持する人なら、どこでも胸を張って生きていけます」

彼女の顔は明るくなったものの、心の片隅にはまだ自分のような者を本当に最後まで信じてくれるだろうか、という危惧の念がくすぶっていた。

正淑は彼女と一緒に穀物を踏みうすで搗いたり箕を使ったりしながら、抗日武装闘争の時期、将軍を支持して遊撃隊を支援した良心的な企業家たちについて話し、また地方の実状を知るため市場や商店に足を運ぶときにも彼女を連れて歩き、ときには人民の

生活に必要なものを作って売っている私営企業家に会って励ましたりした。

　その過程で、彼女は将軍の建国思想を深く体得するようになり、親戚にはもちろん隣人たちにもそれを話して聞かせるようになった。その話は近所の写真屋や洋服店をはじめ、鏡城一帯の中小企業家のあいだに広まった。数日後、酒造業者の一人が正淑を訪ねてきた。解放前、彼は正淑の宿泊していた家の主人と同業者であった。この家の主人からいろいろ聞かされてはいたが、かなり緊張した面持ちでおずおずと入ってきた。

　彼は解放後、新しい祖国の建設に貢献しようと少なからぬ寄付金を出していたが、「打倒対象」と指弾されることが多かったのである。

　正淑は自ら庭に出て彼を迎え、部屋に招き入れて椅子をすすめ、彼の話を聞いた。酒造業者の過去の経歴や苦衷を知った正淑は、将軍が新しい祖国建設のため、私営企業の運営を奨励し、業者の創意をいっそう高めることを望んでいることを話した。

　「……ここに来てみると、中小企業家にたいして『ブルジョアジー』だの『打倒対象』だのと非難の声が多いようですが、それはみな将軍の意に反する分派分子や地方割拠主義者の罵詈雑言です。

　将軍はすでに抗日武装闘争のときから、国と民族を愛する中小企業家や商人はもちろん民族資本家も信頼していました。これは解放された今日も変わりありません」

正淑は、解放前には国を奪われたため日本人に虐げられ、解放された今になっては苦労せずに暮らしてきた過去があるので良心の呵責を受けるという話ですが、これからはそんなことを気にせず、国と自身のために建国事業にひと役買って出るべきだ、と励ました。

酒造業者はすぐさま正淑に言われたことを同僚に伝え、鏡城一帯の中小企業家がすべて建国事業に奮起するよう積極的に働きかけた。

数日後、正淑は女性同盟の幹部たちとともに市場へ行ったその足で、そのときの酒造業者の家を訪ねた。そして企業運営状況を尋ね、国と人民に奉仕する立場に立って企業を運営すれば将軍の信任を得ることができ、また人民からも感謝されるようになる、と諭した。

正淑は彼らと昼食をともにし、抗日武装闘争時代の思い出を話して聞かせた。

車廠子遊撃区時代の話を聞く女性同盟の幹部や主人夫婦の目には涙が浮かんでいた。当家の主人は、愛国者たちが祖国を取り戻すため将軍にしたがっていい知れぬ苦労に耐えて戦ったのに、自分たちは温かいオンドル部屋で安穏な生活をしてきたのだから、まったく肩身の狭い思いがする、と声を震わせるのだった。

彼の話しぶりから、いまなお彼のような立場の者をどこまでも信じてくれるだろうかと危惧の念を抱いていることを見抜いた正淑は、彼の手を握り、解放された今、将軍は建国事業に協力する中小企業

家、商人に大いなる信頼を寄せ、配慮をめぐらしている、誰から何と言われようと絶対に動揺せず、ひたすら将軍を信頼することだ、と話した。

長時間にわたって将軍の新しい祖国建設路線を説明し、未来にたいする確信を与えた正淑は、帰りぎわに当家の家族と庭園で記念写真をとった。

それ以来、その酒造業者は他の中小企業家とともに建国思想総動員運動に乗り出し、後に地方主権機関の代議員にまでなった。

正淑は女性の識字運動にも積極的に参与した。

ある日、龍岡(リョンガン)郡の農村を訪れた正淑は、地元の女性たちに識字運動の意義を説き、この運動は単に読み書きを覚えることだけが目的なのではなく、金日成将軍の建国思想を体して富強な新しい民主朝鮮を建設することに目的がある、読み書きができなければ建国事業も子どもの教育もできなくなる、女性たちは農作に励むかたわら識字運動も活発に繰り広げ、新しい生活の道を開いてくれた将軍のご恩に必ず報いようと呼びかけた。

女性問題の解決のために

1946 年の初め、咸鏡北道女性同盟の代表 2 名が金正淑宛の手紙をたずさえて北朝鮮民主女性同盟中央委員会を訪れた。

「……わたしたち咸鏡北道の女性は、東方朝鮮の誇りであり、

全朝鮮女性の誇りである金正淑女史にもっとも熱烈な敬慕の念を表するものです」

このような書き出しで始まった手紙は、正淑が 10 代の幼い身で、金日成将軍の遊撃隊に入隊し、祖国の解放と女性解放のために死闘を繰り広げ、国が解放された今日、朝鮮女性運動のめざましい発展のために活躍していることを称賛し、女史が前年の 12 月に咸鏡北道に来て正しく指導してくれたおかげで、道内に多くの女性同盟組織が結成され、数万を数える女性が結集したことに触れた後、次のようにしめくくられていた。

「解放朝鮮の女性として、正義の道を歩もうとするわたしたちは、わが民族の偉大な指導者である金日成将軍の志でわたしたちを導いてくださる女史の指導なくしては、民主女性同盟の強化、発展も、また女性の完全な解放も期待することができないと断言します。

尊敬する女史!

女史がわが国の女性同盟の活動を率先して指導し、わたしたち女性を真の闘争の道に導いてくださることを咸鏡北道女性同盟員一同切望してやみません」

このような請願の手紙は、ほかの道や地方からも毎日のように届けられた。

だが、正淑は、その信頼に力の限りこたえる決心だとしながらも、自分は将軍の意を体してこれまでどおり女性同盟の活動を後押しするつもりだから、みんなで力を合わせて活動しよう、と女

性同盟の活動家を励ました。

解放直後、朝鮮女性運動内部の状況は、分派分子と反動分子の分裂策動のため複雑をきわめていた。

だがこの複雑な問題は、女性運動と女性問題解決に関する金日成将軍の思想と方針を具現するため労苦をいとわぬ正淑によって解決されていった。

北朝鮮共産党中央組織委員会第3回拡大執行委員会の決定を実行するため、女性同盟中央委員会幹事会議が開かれたときのことである。

会議では、第3回拡大執行委員会での将軍の報告の基本的内容が伝達され、党の政治路線を貫徹するための女性同盟の課題が討議された。ところが、会議が終わりかけたとき突然、なぜ共産党の政治路線についてのみ討議するのか、民主党の「政治路線」についても討議すべきではないか、という意見が出された。すると、それを待っていたかのように、女性同盟中央委員会副委員長の朴(パク)賢淑(ヒョンスク)が、女性同盟ではほかの政党の路線についてもないがしろにせず討議すべきだとし、親日派であれ、民族反逆者であれ「大同団結」して李承晩を大統領とするブルジョア共和国を樹立すべきだという民主党の「政治路線」を提唱した。

会議の執行部の一員であった副委員長の安信好(アンシンホ)は憤然として机を叩き、民主女性同盟が支持すべき政治路線は金日成将軍の路線以外にないと断言した。会議は何の決定も採決できないまま休会となった。

安信好はその足で正淑を訪ねた。彼女から一部始終を聞いた正淑は、今日の会議で朴賢淑一派はその正体をさらけだした、彼らの策動を即刻粉砕しなければならない、と言った。そして、アメリカ人宣教師と結託してキリスト教系の女性団体を組織し、曹晩植(チョマンシク)とともに日本帝国主義の走狗団体である「研政会」に加担して妥協と無抵抗主義を唱えた朴賢淑の解放前の罪業しか知らない安信好に、解放後、はっきりと現れた彼女の正体について話した。

解放後、朴賢淑は曹晩植とともに民主党と平安(ピョンアン)南道人民政治委員会の上層部にまぎれこみ、党の新しい祖国建設路線の貫徹を妨害しただけでなく、ソウルで結成された右翼反動政党の「女子国民党」ともかかわりをもっていた。

正淑は、女性同盟は労働者階級の党の指導を受けてこそ、女性解放の課題を遂行することができると話し、反人民的政府をうち立てようとする反動分子の策動を粉砕し、彼らの正体を暴露すべきだと強調した。

翌日再開された会議では、朴賢淑など反動分子の策動が暴露、糾弾され、彼らは会場からほうほうの体で退場していった。しかし、朴賢淑の策動はその後もつづいた。

正淑は、朴賢淑の反動的罪業をあばく対策を講じた。

朴賢淑についての暴露は、女性同盟活動者会議で集中的におこなわれ、ついで地方の女性同盟組織でも広範に繰り広げられ、朴賢淑一派はついに女性同盟組織から排除された。

後日、正淑はこれを回想して、解放直後、朴賢淑一派を適時に

排除できたので、女性運動の分裂を防ぎ、隊伍の組織的・思想的統一を保つことができたと述懐している。

解放直後、女性運動にはさまざまな派があって、その主義主張もまちまちだったが、とくに問題となっていたのはブルジョア女性運動の影響であった。

1946 年の春、女性同盟中央委員会の協議会に参加した正淑は、街頭に見られる「女性の人権を擁護しよう!」「真の女性解放は参政権の獲得から!」というスローガンについて触れ、なぜあのようなスローガンがいまなおかかっているのかと尋ねた。

ある幹部が、スローガンについては女性同盟中央の幹部のあいだで何回も論争があったが、まっとうな結論が出ず、この会議で金正淑女史の教えを仰ぐことにした、と答えた。

正淑は、この論争を正しく収斂するためには、当然、金日成将軍の女性運動思想と女性同盟建設方針にもとづいて進めなければならない、と述べた。

「将軍はすでに解放直後、朝鮮女性運動の進路を明らかにして『すべての女性は民主の旗のもとにかたく団結し、新しい民主朝鮮建設にこぞって立ち上がろう!』というスローガンを提示しています。われわれは将軍が提示したこのスローガンをかかげるべきです」

さらに、女性の人権擁護問題について言及し、それはブルジョア女性運動のスローガンであり、それには人権が踏みにじられた搾取社会において女性の権利を擁護するという主張が盛り込まれ

てはいるが、労働者階級がかかげた女性解放とはかけ離れたものであり、「参政権」というスローガンは、資本主義社会で女性が議会政治に参加する権利を主張したもので、勤労女性の政治的権利とは無縁のものである、われわれの人民政権が女性の権利を擁護する数々の施策を講じ、女性が各級人民委員会の委員に選出されて、男子と同等な権利をもって国の政治に参与し、工場の主人、土地の主人となった今日の状況のもとで、「人権擁護」や「参政権」をスローガンとしてかかげるのは、朝鮮革命の要請に合わないものである、と条理を尽くして説明した。また、その弊害は、各道の女性同盟から提出された土地改革遂行のための政治活動総括報告に反映された「妾反対闘争」に如実に示されている、と指摘した。

土地改革が実施される時期、一部の地方では分派分子が、女性は人権を取り戻さなければ建国事業に参与することができないといって、女性を土地改革の遂行に参加させず、「妾反対闘争」に駆り立てていたのである。

彼らは妾暮らしをしている女性を、女性同盟員の集まりに呼び出して前に立たせ、人身攻撃をするかと思えば、そのような家庭の女性と親戚関係にある女性を女性同盟に加盟させず、すでに加盟している女性まで除籍処分に付していた。

政治教育団体である女性同盟が法機関、行政機関の如くふるまい、いたるところで騒ぎを起こしたため、女性同盟の活動家は「がさつな女」と非難され、女性は女性同盟に加盟するのをためらい、

また妾だった婦人が妾暮らしをやめはしたが生計が立たず街をさまよい、あげくのはては妾を囲っていた者が仕返しとして、女性同盟の活動家に暴行を加えるという有様だった。

正淑はこうしたことを教訓として、女性同盟活動で提起されるすべての問題を将軍の思想と意図どおり分析し判断し、解決するよう注意を促した。

また、正淑は日帝時代、男のなぐさみものとしてさげすまれ、不遇な境遇にあったキーセンも、新しい生活の道を踏み出せるよう配慮した。

正淑は、北朝鮮民主女性同盟の綱領の起草にも助力した。

ある日、綱領の起草を担当していた許貞淑（ホ ジョンスク）が正淑を訪ねてきた。彼女は、綱領作成に参加しているメンバーがそれぞれ自説に固執し、自分自身もこの問題にたいする明確な見解が定まらないので、一向にはかどらないもどかしさを打ち明けた。

異なる主張は二つに大別することができた。一つは、女性の人権を擁護し、政治的・法律的束縛から解放するという内容を含めようという主張であり、いま一つは、無産階級女性の団結力と組織力をもって女性の解放をめざし、当面の利益のためにたたかうという条項を含めようという主張であった。これを聞いた正淑は、前者の主張はブルジョア女性運動の綱領を受け売りするものであり、後者の主張は、社会主義女性運動家が提唱していたプロレタリア女性解放綱領を機械的に置き換えたものである、と指摘した。そして、正しい女性同盟綱領を作成するには、民主主義革命期の

女性問題解決に関する将軍の独創的な思想を知らねばならないとし、将軍が示した解放された朝鮮女性の基本的任務は、日本帝国主義と封建思想の影響を一掃し、女性の真の社会的解放をなし遂げることであり、すべての女性が建国事業に奮起し、祖国の完全な自主独立をかちとることである、と説明した。

「わたしの考えでは、すべての女性が党の基本政治課題である朝鮮民主主義人民共和国の樹立をめざしてたたかうことを女性同盟の第一の任務とすべきだと思います。

そして、女性を植民地的・封建的抑圧から完全に解放する問題、女性を政権の主人、土地と工場の主人にならしめ、その政治的・経済的地位を高める問題、人身束縛と男女不平等から解放する問題、女性をさげすむ封建的悪習と長年来の無知と蒙昧から解放する問題などを、綱領に盛り込むことができると思います」

朝鮮民主女性同盟の綱領は、こうして作成されたのである。

綱領の草案を通覧した将軍は、りっぱに作成されていると高く評価した。

民主女性同盟の最初の綱領は、1946 年 5 月 10 日から開催された女性同盟第 1 回代表者会議で満場一致で採択された。

正淑は当時、女性運動内で論議を呼んでいた朝鮮女性運動の伝統に関する問題にも明確な解答を与えた。

いくつかの女性団体の統合によって民主女性同盟が結成されはしたが、民主党系やキリスト教系の女性団体出身者は、おのおの自己の「伝統」を押し立て、共産党の外郭団体であった婦女同盟

出身の一部の者は、分派分子のかつての「闘争」や「運動」なるものを押し立て、あたかもそこから朝鮮女性運動が始まったかのように主張した。ある出版物では、朝鮮女性運動の起源を、1924年に組織された「朝鮮女性同友会」だとし、その「業績」を仰々しく並べ立て、はなはだしくは日本帝国主義の御用婦人団体であった「愛国婦人会」の「活動」まで称賛し、押し立てていた。

女性同盟中央委員会では、このような不当な見解に打撃を与えるため、『朝鮮女性』誌に宣伝部長の名で反論を掲載することにした。しかし、女性同盟中央委員会の幹部自身がこの問題にたいする理解に欠けていたため、「愛国婦人会」のような反動的な女性団体を厳しく暴露、批判しながらも、国内外でのかつての女性の「闘争」をすべて朝鮮女性運動が受け継ぐべき「伝統」としようとするいま一つの偏向を犯すことになった。

こうした状況下にあった 1947 年 2 月のある日、女性同盟中央委員会の幹部と席をともにした正淑は、『朝鮮女性』誌の 2 月号を手にして、朝鮮女性運動の伝統に関するさまざまな主張の不当性を明らかにし、次のように述べた。

「わが国における女性運動の真の伝統は、金日成将軍が革命の道に立って朝鮮の革命と女性運動を勝利に導くことによって築かれたのです」

そして、将軍によって築かれた朝鮮女性運動のこの強固な基礎があったからこそ、解放直後のあの困難で複雑な情勢のなかでも朝鮮女性の大衆的政治組織である民主女性同盟をただちに結成す

ることができたのだと語った。

　また、朝鮮女性運動が継承すべき革命伝統について正しい認識をもたせるため宣伝活動を活発に展開すべきだとし、その形式と方法を示した。

　女性同盟では、朝鮮女性運動が受け継ぐべき革命伝統について宣伝教育活動を集中的に繰り広げ、それを歪曲したり中傷する行為とは妥協することなくたたかった。こうして、朝鮮女性同盟は、抗日革命闘争期に築かれた革命伝統を継承し発展させていくことができた。

　女性を封建的束縛と無権利から解放し、新しい生活の創造へと導くには、彼女らを一日も早く女性の政治組織に結束する必要があった。

　正淑は、平壌穀物加工工場や東平壌地区をはじめ各地に足を運んでは女性同盟組織を結成する活動を支援し、広範な女性が新しい祖国の建設に邁進できるようにした。

　当時、平壌穀物加工工場では、職業同盟に婦女担当指導員を置いて女性労働者の社会・政治生活の指導に当たらせていたが、その指導員は女性ではなく、中年の男性であった。男性が女性同盟委員長を務めるというケースは他にも見られたが、これは女性同盟の活動において早急に是正しなければならない問題であった。

　正淑は、従業員の大多数が女性である穀物加工工場のようなところに女性同盟が組織されていないのは大きな誤りだとして、こう述べた。

「いま女性同盟組織が工場と農村の女性のなかに根を下ろしていないのは、将軍が示した女性同盟組織の建設原則に甚だしく反することです。もちろん、専業主婦を組織的に結束することも重要ですが、基本は、勤労女性を女性同盟組織に結集させることです。女性同盟に広範な女性を結集するうえで、勤労女性を基本とするのは女性同盟組織建設の原則的要求です」

こうして、平壌穀物加工工場では女性同盟の組織化に取り組み、その年の3月下旬にはすべての職場に女性同盟組織が設けられ、やがて穀物加工工場女性同盟委員会を組織する集会がもたれた。

専業主婦を女性同盟に受け入れることでも、さまざまな問題点があった。ある女性同盟組織では、暮らしの貧しかった女性だけを加盟させ、企業家や商人、その家族は加盟させなかった。

ある日、上船橋里（サンソンギョ）に立ち寄った正淑は、この里に女性同盟員が少ない理由をそこの女性同盟幹部に尋ねた。彼女は、多くの婦女がいるが、企業家や商人、その家族、それに宗教人、キーセンなどの非適格者が多いので同盟員を速やかに増やすことができないでいる、と答えた。

正淑は、そのような女性のなかに女性同盟の組織生活をしたいと望む人はいないのか、と問い返した。するとその女性同盟幹部は、先日、中小企業家や商家の女性たちが訪ねてきたが、彼女らを加盟させると同盟の純潔が保てなくなるので断った、上級にも問い合わせてみたが、同じ意見だったと、言うのだった。

その話を聞いた正淑は、わたしたちは将軍の意図どおり、新し

い民主朝鮮の建設に尽くそうとする各階層の女性をすべて女性同盟に結集しなければならない、と説いた。

女性運動に関する将軍の路線を貫徹するための正淑の努力によって、女性同盟結成当時の 1945 年 11 月に 15 万名であった全国の同盟員数は、翌年 5 月に女性同盟第 1 回代表者会議が開かれたときには 60 余万名、同年末には 100 万名に達した。

女性同盟員数の急激な成長で、組織の質的強化と女性同盟幹部の政治的・実務的資質の向上が切実に求められるようになった。

この時期、分派分子や異分子は、労働者、農民出身の女性同盟幹部を無学だとして排斥した。こうなると、勤労女性出身の女性同盟幹部のあいだに、自信を失って退こうとする傾向が少なからず現れてきた。

こうした状況にあった 1946 年 5 月初旬、女性同盟第 1 回代表者会議に参加した女性同盟中央委員会の幹部たちと席をともにした正淑は、この会議が終わり次第、女性同盟活動家のための特別講習をおこなうようにという将軍の教えを伝え、こう言いそえた。

「全国の女性同盟幹部が一堂に会するのは難しいことですから、こうして集まった機会に講習をおこなえば、幹部の水準を高める面でも、また女性同盟活動の発展のためにも有益だと思います」

15 日間にわたっておこなわれた特別講習は、女性同盟幹部の水準向上に資するところが大きかった。

1946 年 7 月 30 日、男女平等権法令が発布された日、正淑は女性同盟中央委員会の幹部たちと喜びを分かち合い、法令の発布を

祝う集会を中央と道に限らず郡や面、里、そして機関、企業所、学校や農村、漁村など女性のいるすべてのところで催すのがよいとし、その形式と方法について話した。こうして、全国が祝賀の雰囲気に沸き、自己の権利と尊厳を守ろうという女性の自覚が高まった。

数日後の 8 月初旬のある日、正淑は黄海（ファンヘ）道で起こったある事件について報告を受けた。

ある家庭で患っている嫁を追い出したことから、姻戚同士の争いが起こり、それが氏族門閥の争いにまで発展した事件である。嫁は産後の肥立ちが悪くて 2 年間床に臥していたので、婚家では「七去の悪」ときめつけて追い出したのである。

封建儒教教理の「七去の悪」とか「三従の義」というのは、女性に無条件に従順と屈辱を強いる古い倫理である。追い出された嫁も、その倫理の犠牲者である。婚家では嫁を荷車に乗せ、実家の庭に下ろして立ち去ってしまった。こうして始まった争いが拡大し、社会的に物議をかもしだしたのである。

正淑は、これをある一家で起こった私事としてではなく、古い封建的倫理の産物、女性の社会的解放を妨げる悪習としてとらえた。

このような現象は、程度の差こそあれ、他の地方にも見られた。

博打に狂った夫に口答えしたことが禍して追い出された婦人がいるかと思えば、瘭疽（ひょうそ）にかかって仕方なく片手でしゅうとにお湯を差し出したのが不遜な態度とみなされ、実家にもどされた婦

人もいた。

　正淑は、このような悪習は長い歳月にわたって定着してきたものなので、法的統制や何回かの説得によって解決される問題ではないとし、女性同盟では「三従の義」「七去の悪」といった古い生活倫理を一掃する運動を繰り広げるべきだと言った。この運動は、全国的範囲で一大旋風を巻き起こして展開された。

　これにつづいて正淑は、女性のあいだで迷信を打破する運動を繰り広げていった。

　1947 年 12 月のある日、女性同盟中央委員会に出向いた正淑は、最近、平安南道龍岡郡で迷信行為によって起きた出来事を知っているかと尋ねた。

　誰も答えられずにいると正淑は、それをまず知る必要があると強調し、龍岡郡である女性が急病で倒れた母親を医者に見せようとせず、巫女を呼んで 3 日間神霊の加護を頼む儀式をつづけているうちに死なせてしまったことを話した。正淑はこのような迷信行為が女性のあいだでなくならず、新しい社会の建設と女性運動の発展に大きな支障をきたしている、と指摘した。そして、龍岡郡での出来事をもとに寸劇をつくって公演するのがよいと言い、抗日革命闘争の時期に創作、公演された革命演劇『城隍堂[30]』が大衆の啓蒙に大いに役立ったことを話して聞かせた。

　その後、平安南道の女性同盟が迷信の打破を主題にしてつくった芸術小品が大きな反響を呼んだ。これは講演や解説、統制に比すべくもない効果をあげた。

正淑は、それまで巫女や占い師をしていた人を女性同盟で正しく教育し、彼女らが自身で迷信のでたらめさを暴露する集いや座談会などを開くようにすれば、小品公演に劣らぬ効果をあげることができるだろうと述べた。その後、その趣旨にそった集いや座談会が各地で広範に催された。

女性同盟がこのような活動を繰り広げる過程で、かつて女性の精神世界を強く支配していた迷信は次第に姿を消し、女性の思想に新たな変化が生じてきた。

女性の封建的従属と迷信的束縛からの解放、これは朝鮮女性運動史だけでなく、朝鮮人民の 5,000 年の歴史において特記されるべき出来事の一つである。

だが、正淑は、これを女性解放の第一歩に過ぎないとみなした。女性が社会生活のすべての分野で男子と同等の地位を占め、革命の片方の車輪を回転させてこそ、男女平等の権利が具現され、女性解放の偉業が実現されるからであった。

将軍が普通（ポトン）江改修工事の鍬入れをした 1946 年 5 月 21 日の夕方、正淑は女性同盟第 1 回代表者会議についで 15 日間の特別講習を受けている道・市・郡女性同盟の幹部たちを訪ねた。

正淑は彼女らに、金日成将軍の参加のもとに普通江改修工事着工式がおこなわれたことを伝え、新しい朝鮮の主人となったわたしたち女性も男子と肩を並べ、自分の力で普通江の堤防を見事に築いてみせたいと思う、ここに集まった女性同盟の幹部たちが講習を 1 日受けられなくても、最初ののろしを上げてはと思うが、

どうだろうかと問いかけた。

女性同盟の幹部たちは、この提案を熱烈に支持した。

正淑は、わたしたち女性が普通江改修工事に参加するのは、単に人手を補充するためではない、この工事に積極的に参加するのは結局、女性の地位と役割にたいする社会的認識を正すよい契機となり、男女平等を政治分野だけでなく、経済、文化など、社会生活のすべての領域で実質的に具現していく過程になるであろう、と述べた。

女性が普通江改修工事に参加するという話は、その晩のうちに平壌市内の女性のあいだに伝わり、みんなが工事に参加する支度を整えた。

翌日の 5 月 22 日、女性同盟中央委員会の幹部と 200 名余りの講習参加者が工事現場へ向かうと、市内の女性もこれに合流し、その数はたちまち 1,000 余名に膨れあがった。

隊伍を組み、女性同盟旗をなびかせて意気揚々と工事現場に入って来る女性たちを、多くの青壮年が目を丸くして見つめた。

こうして始まった女性同盟員の普通江改修工事支援活動は、日増しにその規模を増していった。

だが、いまだに家に閉じこもって出てこようとしない婦人も少なくなかった。正淑はそういう女性もすべて立ち上がらせるため、平壌市家庭婦女大会の開催を発起した。

6 月 16 日は普通江改修の基本工事に突入する第 2 次突撃戦が始まる日だった。この日の朝、光成(クァンソン)中学校の運動場には、1 万

余名の専業主婦が集まった。市内の各組織が掲げてきた女性同盟旗とプラカードが風にはためき、吹奏楽が鳴り響くなか、女性たちは声高らかに歌をうたい、シュプレヒコールを叫んだ。平壌はじまって以来の専業主婦の盛大な集会となった。報告につづいて発言があり、金日成将軍に送る感謝の手紙が採択された。

集会が終わると、参加者たちは勇躍して工事現場へと向かった。現場は、将軍のまわりに団結して建国運動にはせ参じた朝鮮女性の力を初めて誇示した、聖なる闘争の場となった。

3 年かかってもできないといわれたこの膨大な工事を、着工して 55 日目の 1946 年 7 月 15 日に完成することができたのは、女性の力に負うところが大きかった。

工事期間、正淑は誰にも知らせず、質素な作業服姿で現場に出ては女性同盟員と一緒にシャベルを使ったり、しょいこを背負ったりしながら同盟員たちを励ました。

7 月に入って大雨が降りはじめたが、正淑は毎日のように工事現場に出かけた。そのうち、将軍の夫人が子息と一緒に働いているという噂が、現場の隅々まで広まった。

そうしたある日、土手の上で現場を見渡していた高齢の老人が正淑に近づき、深々と腰を曲げであいさつした。

「おじいさん、これは一体どうしたことですか」

正淑はシャベルを地に差し込んで老人を支え起こした。老人はすこぶる興奮していた。

「われわれ朝鮮人民が、天がたまわった金日成将軍を民族の太

陽として仰ぎ戴いただけでもこの上ない喜びだというのに、ご夫人までこうして苦労をいとわず、万民の苦衷を深く察してくださるのですから、その高い徳望は天の高さにたとえられましょうか」

老人は代々、普通江のほとりで暮らしながら、たびたび洪水の被害を被ってきた人で、改修工事が始まって以来、毎日のように現場の仕事を手伝っていたのである。彼は多くの女性が現場に出て、男子に負けじとばかり熱心に働く姿を感動したまなざしで眺めた。

女性のあいだで起こったこの驚くべき変化が、正淑によってもたらされたものであることを知った老人は、かつて家の中に閉じ込められ、弱者の象徴とみなされてきた女性を国の主人、れっきとした担い手に育ててくれたその恩があまりにも有難く感じられて、感謝の意を表したのだった。

その後、正淑は普通江改修工事の経験を生かして、咸鏡北道鏡城郡と江原(カンウオン)道高城(コソン)郡、平安南道大同郡と陽徳郡をはじめ各地方に出かけては、女性同盟組織をしてすべての女性を新しい祖国建設のための張り合いある闘争に立ち上がらせた。

正淑は朝鮮で初の民主選挙がおこなわれたときにも、選挙を通じて女性の社会的解放に新たな前進をもたらすために活躍した。正淑は女性同盟の幹部たちに、今回の選挙は朝鮮の女性にとって男女平等権法令により法的に保障された男子と同等の政治的権利を実質的に行使する、意義深い出来事になると強調した。

選挙の日が近づくにつれ、選挙を破綻させようとする反動分子の策動はいっそう悪辣になってきた。ある地方では反動分子が占い師や巫女を操って、今回の選挙に参加しなければ3年間は厄払いをしなくてもすむ、票を投票箱に入れないで家に持ち帰って燃やしてしまえば病にかからない、選挙の仕方が変わって、賛成ならば黒箱に、反対ならば白箱に入れることになった、などとデマを飛ばしていた。悪質な牧師は、11 月 3 日は「安息日」の日曜日だから、信者は礼拝をすませたらそのまま家に帰り「安息」しなければならない、とうそぶいた。

10 月の下旬、正淑は女性同盟中央委員会の幹部に会った席で、反動分子らの策動に対処して、優秀な活動家と女性同盟員を選挙宣伝に集中的に動員することにし、戸別の有権者名簿をつくり、一人ひとり直接会って選挙の日付と方法を具体的に教え、投票の仕方を示すことにしようと話した。

こうして、反動分子の策動は失敗に帰し、すべての女性が高い政治的自覚と熱意をもって、初の民主選挙にこぞって参加することになった。

11 月 3 日、歴史的な初の民主選挙の日、正淑は女性同盟の幹部とともに、平壌市中区の中城（チュンソン）選挙区第 52 号分区で投票した。投票を終えて出てきた正淑を大衆が取り囲んだ。

正淑は彼らに向かってこう言った。

「今日実施された歴史的な初の民主選挙には、人口の半数を占めるわたしたち女性が、堂々たる有権者として参加しました。ま

た、数多くの女性が各級人民委員会の委員候補に推薦されて選挙されることになりました。これは、朝鮮人民の5,000年の歴史において初めてのめでたい出来事です。

これはまた、わたしたち女性があらゆる人格的・社会的従属と差別から解放され、社会・政治生活の主人になったことを力強く示すものです」

この頃、朝鮮の女性運動はいま一つの慶事を迎えた。朝鮮の女性同盟が国際民主婦人連盟に加入し、それによって朝鮮の女性が世界各国の女性と肩を並べて国際舞台に進出することになったのである。

正淑がこの問題を提起したのは1946年4月であった。そのとき、女性同盟第1回代表者会議の報告書草案に目を通した正淑は、わが国の女性同盟が国際舞台でどう活動するかについてなぜ触れていないのか、と尋ねた。対外活動を始めるのは時期尚早ではないかという意見にたいし正淑は、今回の代表者会議に国際民主婦人連盟への加入問題を上程して討議すべきだ、わが国の女性同盟の歴史は浅いが、活動を通して経験を積み、大胆に仕事を進めていけば、世界の進歩的女性に、金日成将軍のまわりにかたく団結して新しい祖国建設を担っていく朝鮮女性の力を示すことができ、彼らの支持と共感を呼ぶことができるはずだ、と述べた。

こうして、女性同盟第1回代表者会議で国際民主婦人連盟への加入問題が討議、決定され、正式に加入申請をすることになったのである。

国際民主婦人連盟では、その年の 10 月 10 日から開かれる臨時大会でこれを承認することにし、大会に朝鮮の女性同盟の代表を招請した。10 月 14 日の大会では朝鮮女性代表の演説があった。その後、朝鮮の女性同盟の国際民主婦人連盟への加入が満場一致で決定された。

新しい世代をりっぱに育てよう

金日成将軍は、1946 年 2 月 20 日に開かれた北朝鮮臨時人民委員会第 1 回会議の議題として鉛筆の問題を上程し、これを国内生産でまかなうという決定を採択するようはからった。

これには人知れぬいわれがあった。

1946 年 1 月のある日、農民の暮らし向きをうかがうため平壌市近郊の農村に出かけた金正淑は、ある農家の一部屋で数名の学童が砂箱を囲んで字を書いたり消したりしているのを目撃した。鉛筆がないのかと聞くと、鉛筆は学校で使おうとしまってあるとのことだった。

正淑は学童の本を包んだ風呂敷を開いて見た。そこには手にやっとつかめるくらいのちびた鉛筆しかなかった。かつては自分も符岩洞の夜学でこういう砂箱を使って文字を習い、抗日武装闘争の時期にも隊員たちが雪の上や地べたに指で字を書きながら学習したことが思い出された。けれども祖国が解放されたいまとなっ

ても、どうして子どもたちに鉛筆も持たせてやれないのだろうか、と思うと気が重くなった。

その日、正淑は農村で目撃したことを将軍に話した。

将軍は、日本帝国主義者は長期にわたる植民地支配期間に鉛筆工場の一つも建てなかった、今後、国で大きな鉛筆工場を建設することにし、さしあたって各地の中小企業家に鉛筆をどんどん生産させる対策を講じよう、と言うのだった。

鉛筆生産の対策を考えていた正淑は、市内に鉛筆を切らさず売っている雑貨店があるという話を耳にして行ってみた。その雑貨店では、普通原のある業者が簡単な設備でつくっている鉛筆を引き取って販売していた。

正淑はそれを何本か買ってきて将軍に見せた。

その鉛筆で字を書いて見た将軍は「これくらいなら結構だ。子どもたちに使わせてもよさそうだ。大切な芽を発見した」と喜んだ。

翌日、その業者の作業現場を訪れた将軍は、黒鉛と石炭の粉にまみれた労働者の手をとり、りっぱなことをしていると称賛し、これからは国家が必要な資材をすべて提供するから、良質の鉛筆をより多く生産するようにと励ました。

こうして、その年の 2 月に開かれた北朝鮮臨時人民委員会第 1 回会議に、鉛筆問題が議題として上程されたのである。

一方、正淑は、学校で扱うすべての課目に民主的で革命的な思想と内容が貫かれるよう関心を払った。

同年の３月下旬、平壌第４女子中学校を訪れた正淑は、教員や生徒と話し合う過程で、どの学校でも教員が不足しているうえに教具・校具や実験・実習設備も不備なことが分かった。そのなかでも第一の難問は、内容の充実した教科書がないことであった。代数、幾何、物理、化学などの自然科学系統の教科書は、日本帝国主義支配当時のものがそのまま利用されており、社会科学系統の課目は教育局からそのおりおり下達される指導要綱にもとづいて教えられていた。

正淑は、近いうちに教科書や教具・校具が提供されるはずだ、いまは困難な状況下で授業をしているが、ゆるがせにしてはならない重要な問題があるとして話をつづけた。

――現在、教育事業でもっとも重要なのは教育の民主化を実現することであると将軍は教えている。そのためには、なによりもまず、日本帝国主義の植民地奴隷教育の残滓を一日も早く一掃しなければならない。自然科学の教科書にしても数学の応用問題などに朝鮮人民を見くだす内容があるはずであり、学校の教育事業秩序や生徒の課外活動のやり方、そして教務管理にも日本帝国主義支配期の悪弊が残っていないかを検討してみる必要がある。そして生徒には、将軍が示した新しい朝鮮建設の路線を深く認識させ、これから朝鮮人は日本帝国主義の奴隷ではなく、堂々たる独立国家の主人であるという高い自覚を抱かせるべきである。朝鮮の歴史と地理、文化について詳しく教え、とくに朝鮮人民のすぐれた息子、娘が武器を手にとって日本帝国主義といかに戦ったか

を教えなければならない。また、民主建設に役立つ生きた知識を与えるだけでなく、土地改革宣伝隊のような社会活動にも広く参加させ、新しい民主朝鮮の有能な人材に育てなければならない。

正淑はその後も多くの学校に行って教育実態を調べ、難問の解決をはかった。

1947 年 7 月のある日、正淑は教科書を扱う印刷工場を訪れた。その日の朝、将軍が新学年度用の教科書と学習ノートがまだ完全に準備されていないことを心配していたからだった。

ところが工場では、出版物の重要さにはかかわりなく、契約された順序によって印刷がおこなわれていた。そのため、教科書の印刷は後回しにされるありさまだった。

正淑は、解放されたこんにち、われわれは営利目的ではなく革命のために働いているのだから、印刷の順序も当然革命の利益の見地から定めるべきだと強調し、新学年度の始業日を前にしている現在、教科書の印刷より緊急を要するものはないと説いた。

工場から帰ってきた正淑は、印刷工場の実態とあわせて、これから教科書を適時に印刷するためには教科書専門の印刷工場を別個に設ける必要がある、と将軍に提言した。

将軍はただちにその印刷工場で教科書を優先的に印刷するようはからい、その後、教科書専門の印刷工場を設ける措置を講じた。こうして、学校教育事業でもっとも大きな難点となっていた教科書の問題は円滑に解決されることになった。

正淑は、新しい世代を幼いときから組織生活とさまざまな課外

活動を通じて革命的に教育する問題に大きな関心を払った。

1946 年 6 月のある日、正淑は平壌新陽（シンヤン）小学校での少年団入団式に参加した。正淑を迎えた教職員と児童は大いに喜び、晴れ姿で集まった父兄で式場は盛況を呈した。

校長の報告につづいて少年団団長が誓約文を朗読し、入団する児童に少年団バッジを授与する儀式がおこなわれた。

校長は正淑に祝辞を述べてほしいと要請した。予想外の申し入れであった。いつもだったら辞退するはずの正淑だったが、新しい世代のためを思って演壇に立った。まず、新しく入団した少年団員を熱烈に祝い、こう述べた。

「わたしは金日成将軍の懐に抱かれて少年団に新しく入団するみなさんを見ると、遊撃根拠地の児童団員を思い出します。金日成将軍は荒れ狂う吹雪をついて日本帝国主義者とたたかう困難な状況のなかでも、革命の将来を見通して少年の真の組織である児童団を結成しました」

つづいて児童団員が厳しい試練に堪えてひるむことなくたたかったことを話し、こうつづけた。

「強盗日本帝国主義者を撃滅する血みどろのたたかいの日々、金日成将軍が児童団員に持たせたその赤旗は、こんにち朝鮮少年団に引き継がれ、その隊伍は数十万に成長しました」

正淑は最後に、少年団員は革命の節操をまげずにあくまでたたかった児童団員のように、将軍に忠実な新しい朝鮮の担い手に育たなければならない、と強調した。

入団式が終わった後、少年団の指導メンバーと席をともにした正淑は、まず少年団の誓約文に目を通した。

そして、少年団の誓約は少年たちが最初の組織生活を始めながら誓う決意なのだから、なによりも将軍への忠誠を誓うことが大切だと説いた。少年団細則を見ては、現在の四つのスローガンの代わりに、「金日成将軍の旗のもとに団結しよう！」という一つのスローガンにしてはどうだろうか、と意見を述べた。

この意見にもとづいて、民青中央委員会では新しい誓約文とスローガンを制定した。

このように、少年団活動の政治的・思想的主軸をうち立てた正淑は、その後「模範少年団創造運動」を発起し、たびたび少年団員に会って抗日武装闘争期に勇敢にたたかった児童団員について話して聞かせ、その不屈の闘争精神と革命的気概を見習うよう導いた。

正淑は生徒のマスゲームを広く奨励して、新しい世代の組織性と集団主義精神を培った。

1947 年 4 月、平壌市南山(ナムサン)町にある民青体育館の開館をひかえて、民青では「特別体育の夕べ」を準備していた。

このとき平壌第 4 女子中学校では、マスゲームを準備しようという意見が体育教員から提起された。しかし、マスゲームの経験も技術もないのだからそれは不可能ではないかという意見が出て、幾つかの簡単な体育種目を準備しようということにまとまりかけていた。

この話を聞いた正淑は、体育教員がよい意見を出した、マスゲ

ームは体力の鍛練に有益であるだけでなく、生徒の組織性と集団主義精神を培ううえでもよい運動だと述べた。そして、抗日武装闘争の時期に遊撃根拠地内の児童団学校で運動会を催したとき、規模は小さいながらもそういった体操を盛んにおこない、その過程で出場する児童団員と観客が大いに教育されたことを話し、教職員と生徒が力を合わせ、マスゲームに教育的内容を盛り込んでりっぱにやってみるよう鼓舞した。

この言葉を伝え聞いた体育教員は、マスゲームの創作構想がはっきり浮かんでくる、と喜びを隠しきれなかった。

4 月下旬のある日、正淑は将軍とともに「特別体育の夕べ」に参加した。

多彩な競技があった後、最終プロとしてマスゲームがおこなわれた。まず、さっぱりした白いユニホームの 1 団が民主学院で思う存分学び、元気に育つ姿を見せる迫力のある徒手体操が演じられた。ついで両手に赤い花を持った体操チームが登場し、さまざまな隊形をつくりながら、金日成将軍にささげる栄光と感謝の念を体操にのせて披露した。つづいて 18 名の生徒が隊列の前に走り出ながら、懐から文字入りの布を取り出して「新しい民主朝鮮の担い手にしっかり準備しよう!」というスローガンを組み立てて見せた。その瞬間、退場していた徒手体操チームが扇の形に広がった体操チームの間を縫うように走ってきて「金日成将軍万歳!」を声高く唱えた。

場面が変わるたびに将軍は拍手を送り、満面に笑みをたたえる

のだった。

正淑はたいそう喜んだ。元気に育つ生徒たちの姿から、将軍を仰いで進む朝鮮の未来を確信し、大きな幸福感にひたるのであった。

1949 年 6 月 5 日に少年団創立 3 周年を記念しておこなわれた 4 万余名の少年団員のパレードと連合団体集会に参加した正淑は、帰りの道すがら、16 年前の王隅溝北洞での少年先鋒隊員と児童団員のメーデー祝賀行進を感慨深く回想し、車窓に流れる少年団員を見ながらこう言うのだった。

「朝鮮の未来を担っていく子どもたちがたくましく育つ姿を見ると、それにまさる喜びはありません」

新しい世代にたいする正淑の関心は、学齢前の子どもたちにも向けられた。

正淑の努力により、1947 年 7 月には全国的に普及させるモデルケースとして設けられた託児所、幼稚園が保育・教育事業を開始した。

正淑は、1946 年 5 月に北朝鮮民主女性同盟第 1 回代表者会議に参加した女性活動家と席をともにし、託児所と幼稚園を各地に設けるべきだとする将軍の教えを実行する方途を模索してきた。

翌年の 1 月 10 日、託児所に適した建物が見つかったという話を聞いた正淑は、すぐ現地に出かけた。中区巡営(スンヨン)里に位置する 2 階建ての煉瓦づくりの屋舎を訪れた正淑は、修築すれば託児所に利用できそうだと言って 1 階と 2 階の各部屋を見て回りながら、

なにかと手帳に書き入れたりした。この屋舎はその頃まで音楽学校の校舎として利用されていたものであったが、内部は荒れ放題だった。同行者の一人が、この屋舎を託児所にするとなるとかなり手がかかりそうだと難色を示した。

正淑は、条件が整うまで待とうとせず、われわれの力で託児所を整備しよう、自分もできる限りの助力をするから思いきってやってみるようにと励ました。

その晩、正淑は机の上に大きな紙を広げ、建物を見て回りながらメモした手帳をもとに、さまざまな色鉛筆で描いたり消したりしながら夜更けまで図案の作成に没頭した。それは、2 階建ての建物に配置する寝室や食堂、授乳室、遊戯室、医務室、更衣室、浴場、炊事場、倉庫、事務室、それに各部屋にセットする設備まで具体的に記した託児所の設計図案だった。

1 月 12 日、正淑はその図案をもって再び現地に足を運び、部屋の配置と整え方について助言を与えた。そして託児所の要員を早急に抜擢して配置し、医者が足りないことを考慮して医務室には看護婦をおき、病院に託児所担当の医師を定めて常時、検診と治療に当たらせるようはからった。

託児所の整備がほとんど終わりかけていた 1947 年 5 月のある日、まだ不備な点はないかを確かめた正淑は、戦友から贈られた布地で数組の布団をつくり、ミシンや炊事道具、蓄音機まで取り寄せて寄贈した。

また、子持ち女性の出退勤の便宜をはかって託児所の日課を定

め、字の読めない子どもたちのために自分の戸棚がすぐわかるよう扉に飛行機や自動車、戦車、リンゴ、トマトなどいろいろな絵を貼りつけるようにした。

託児所の運営が始まった数日後、託児所の名を付けてほしいという要請を受けた正淑は、女性の国際的祝日である3・8デーにちなんで「3・8託児所」と命名してはどうかと言った。

朝鮮における人民的な幼児保育・教育の歴史は、このように正淑の努力によって開設された3・8託児所をモデルにして始まったのである。今日、朝鮮人民はその日の「3・8託児所」を「金正淑託児所」と呼んでいる。

1947年9月のある日、3・8託児所を訪れた金日成将軍は、託児所の整備に努めた関係者の労をねぎらい、託児所の日課が適切に定められていると話し、戸棚に貼られた絵を見ては、子どもの知的水準を考慮したよい着想だ、こうすれば子どもの情緒を培う面でも有益なはずだ、と満足の意を表した。

託児所のある部屋で3歳の子どもたちが遊びたわむれる様子を見ていた将軍は、子どもらが倒れたり這い回って膝を痛めるようなことがあってはいけないと、随行の幹部に党中央委員会の庁舎に敷かれているカーペットをこの部屋に敷いてやるよう指示した。

正淑は幼稚園の運営にも深い関心を払った。

1947年に、小学校の1年制の幼稚園班をなくし、3年制の幼稚園を設けるという国家の措置が講じられて以降、国家運営の幼稚園が数多く設立されていった。

1949 年 1 月 25 日、ある幼稚園に出かけた正淑は、赤にも青にもすぐ染まりやすい白紙のように無垢（むく）で、周囲の環境に敏感な子どもたちの特性に合った正しい教育をほどこすよう指摘した。そして、教育事業は祖国と民族のあすの運命にかかわるきわめて重要な事業であるから、祖国の将来はわたしたちが子どもをいかに教育するかによって決定される、と強調した。

同年 3 月、再びこの幼稚園を訪れた正淑は、授業を参観した後、幼稚園の子どもたち、とくに上級班の子どもたちはじきに就学することになるので、学校のように授業時間に合わせて課目別の知識を与え、唱歌や遊戯の時間には情操教育を通じて階級敵を憎悪する精神を培うことをゆるがせにしてはならない、と強調した。

このように、正淑はこの幼稚園を全国のモデルにつくりあげ、同年 6 月下旬、現地でこの成果を確認し、その経験を全国に普及させる措置を講じた。

翌年、平壌で全国幼稚園教養員の経験交流会が開かれた。惜しくもそのとき正淑はすでに他界していた。参会者は正淑を失った大きな悲しみのなかで、正淑が生前にあれほど心血を注いだ崇高な志を体して、新しい世代をさらにりっぱに育てていく誓いをかためた。

正淑は、民族幹部の養成が新社会建設においてもっとも重要な意義をもつ問題であり、祖国の限りない繁栄を保障する重要な事業であるとみなし、これを優先させる将軍の気高い志を実現すべく心を砕いた。

当時、総合大学の創設は民族幹部育成の原種場をつくるという重要な事業であった。

将軍は 1946 年 7 月、朝鮮で初の人民の大学である総合大学を創設するという北朝鮮臨時人民委員会の決定を公布し、その準備を推進した。

総合大学創立準備委員会では、この大学に将軍の尊名を冠することにしてその準備を進めていた。

そうしたある日、正淑はいっとき「ソウル中央」を唱道していた連中が、総合大学に将軍の尊名を冠する問題についてあれこれと論難しているという話を準備委員会の幹部から聞いた。

正淑は、その連中は最初から総合大学の創設は「時期尚早」だと言って反対したではないか、だから彼らの策謀に驚くことはない、総合大学に将軍の尊名を冠することは人民の一致した願いであり、あまりにも当然のことだと強調し、こう述べた。

「総合大学の創立を発起したのも将軍であり、また将軍の精力的な指導によってその創立が間近に迫っているではありませんか。われわれは一日も早く金日成総合大学を創立して、その名を世界にとどろかせましょう。金日成総合大学を世界トップクラスの大学にしましょう」

総合大学の創立準備はいっそう活発に推進された。

正淑は、総合大学で労働者、農民の息子、娘や革命家の遺児を民族幹部に育てる方法を模索し、彼らに予備教育を与えて大学に進学させてはどうだろうかと将軍に提言した。

また、その後、総合大学の一部の学部を母体にして理科系の大学を創立するという将軍の構想にしたがい、新しい大学の創設にも大いに助力した。こうして、一つの大学もなかった朝鮮に多くの大学が生まれ、数多くの民族幹部を養成する新しい歴史を開くうえで、正淑は不滅の貢献をした。

建軍史に残した功績

金日成将軍は、朝鮮が完全な自主独立国家になるためには、国と民族を防衛し、革命の獲得物を守りぬくことのできる強力な民族軍隊をもたねばならず、とくにアメリカ帝国主義が国土の半分を占領して全朝鮮を植民地化しようと狂奔している状況のもとでは、強力な民族軍隊の創建がさし迫った課題であるとし、朝鮮人民革命軍を早急に正規の革命武力に発展させる建軍路線を提示した。

革命に身を投じた当初から、銃をもってのみ国の解放をなし遂げ、党と領袖、祖国と革命を守りとおすことができるという革命の真理を悟った金正淑は、将軍の建軍路線の貫徹に惜しみなき情熱を注いだ。

正淑は、正規の革命武力の根幹をなす軍事・政治幹部の養成に第一義的な関心を払い、30 数回にわたって平壌学院を訪問し、この学院が軍事・政治幹部養成基地としての使命と任務をまっと

うするよう尽力した。

1946 年 2 月 23 日、将軍に随行して平壌学院の開院式に参加した正淑は、学院の幹部に、この学院でのすべての教育はあくまで将軍の革命思想を指針にしておこなうべきであると説いた。

学院内の廊下にかかっている外国人名将の肖像に目をとめた正淑は、朝鮮にも愛国的名将が多いというのに、なぜ外国人の写真ばかりかけておくのか、これからは朝鮮の愛国的名将の写真をかけよう、祖国愛はなによりも自国のことをよく知ってこそ湧き起こるものだと指摘した。そして、学院でつくったさまざまな直観教具を見て回りながら、学生の大半が国文をやっと読める程度という実情を考慮し、実物教育、直観教育を広く導入して学習に役立てるよう強調した。また、軍事教育はどの国の方式であれ機械的に模倣してはならず、抗日武装闘争の時期にわれわれが実践したとおり朝鮮式におこなうべきだとした。

平壌学院では、その性格と使命に合わせて教育内容をすべて将軍の思想にもとづき、朝鮮のものをより効果的に教えられるように構成し、教育方法も改善して学生の革命的な学習気風を確立していった。

正淑はなによりもまず、平壌学院をはじめ各軍事・政治幹部養成機関の学生を将軍への限りない忠実性で教育するよう力を注いだ。『金日成将軍の歌』がつくられたときには、平壌学院の院長を務めていた金策にはからって、その歌を平壌学院の学生に大合唱させた。

1946 年に入り、アメリカ帝国主義侵略者は 1 月から 6 月までの期間だけでも、8 個連隊の南朝鮮「国防警備隊」と「海岸警備隊」を編成してその統帥権を掌握し、南朝鮮を恒久的な植民地にしようとする野望を露骨化していた。こうした情勢は、朝鮮人民革命軍を早急に近代的な正規の革命武力に発展させることを求めていた。

将軍は、同年 7 月に中央保安幹部学校を設立して軍事指揮官を専門に養成し、平壌学院では軍隊の政治・文化活動家を養成するなど、軍事教育を新たに発展させる措置を講じた。

正淑は、中央保安幹部学校にたびたび出向き、将軍の軍事思想と朝鮮式の戦法、戦術を学生に体得させるため鋭意努力した。戦術訓練場にもたびたび赴き、そのたびに教員と学生に、将軍の攻撃戦法や東声西撃の戦術など朝鮮式の霊妙な戦法と戦術を正しく修得させることに努め、将軍の砲兵建設方針を貫徹するよう導いた。

正淑はまた、軍隊の政治幹部養成に大きな意義を付与した。1947 年 3 月末と 5 月初旬に平壌学院を訪れた正淑は、同学院の教育でもっとも重要なのは思想教育であり、思想教育を正しくおこなってこそすべての学生を将軍に忠実な政治幹部に育てることができると話した。また政治幹部を養成するからといって軍事課目の教育をおろそかにする偏向をとらえ、政治・文化活動家が軍事にうとくては軍人に軍事課題を正しく遂行させることはできず、軍事指揮官の活動も政治的に後押しすることはできないと指摘した。

平壌学院の第3回卒業式がおこなわれた1947年10月5日、正淑は再び学院を訪れた。

正淑は革命武力建設のため任地に赴く卒業生を熱烈に祝い、党の中核であり人民軍の政治幹部であるみなさんに将軍は大きな信頼を寄せている、部隊に行ってはまず、すべての軍人を将軍の革命思想で武装させ、将軍のまわりにかたく結束させ、彼らが朝鮮革命に限りなく忠実であるように導くべきだと強調した。

正淑は、正規武力の軍種指揮官の養成にも力を注いだ。

軍種、兵種、専門兵の指揮官を養成することは、正規軍建設における必須の要求であった。しかし、解放直後の新たな情勢と諸条件からして、こうした幹部養成機関を直ちにすべて設けるのは無理だった。

1946年3月17日、将軍は、平壌学院に航空班を新設する措置を講じた。

同年6月30日、平壌学院を訪れた正淑は、学院の幹部に、新しい朝鮮の航空隊創設の問題に関する将軍の意図を伝え、飛行場の建設を学院の力で速やかになし遂げるよう強調した。そして、建設現場へ行っては学生の仕事を手伝いながら、飛行場の建設を早く終えるよう励ました。

学院では集団的革新を起こして7月末までに必要な工事を終えて飛行訓練を開始し、8月11日に将軍と正淑の臨席を仰いで示威飛行をおこなった。

翌年の11月、水上保安幹部学校の校長に赴任する某幹部を私

邸に迎えた正淑は、3 面が海に囲まれている朝鮮は海上を防御する強力な海軍を持つべきであり、海軍建設でもっとも早い道は海軍指揮官を自力で育てることだ、海戦の指揮能力を備え、近代的な軍艦を管理できる海軍指揮官を早急に養成してもらいたいと強調した。そして当該道の責任幹部にたいし、大衆に働きかけて水上保安幹部学校の建設を積極的に援助するよう念を押した。

正規軍の根幹育成に向けての正淑の努力により、朝鮮の革命武力は朝鮮人民軍に発展していく当初から、党の軍隊となり、朝鮮革命偉業の守護者としての本分をまっとうする政治的・軍事的基礎をうちかためることができた。

この時期、正淑は正規軍の建設に必要な給養活動を活発化させるためにも多忙な日々を送った。

さしあたり解決すべきことは軍服の問題であった。まだ軍服が定められていなかったため、兵士も指揮官も入隊当時のさまざまな服を着用したままで、なかには日本軍から奪った軍服を着ている軍人もいた。

将軍は、われわれの軍服は抗日武装闘争時期の伝統を生かして、革命の軍隊、人民の軍隊としての性格がよく表われ、民族的特性と生活感情に合い、戦闘行為にも至便な朝鮮式の軍服でなくてはならないという軍服制定の原則を示した。

正淑は軍需被服工場にしばしば出向き、軍服、革帯、帽子、肩章、背のう、弾帯、弾倉袋、水筒袋、工兵シャベル袋など、被服や装具類の試作品の生産を促した。

1947 年 2 月 25 日に軍服の試作品ができあがった。正淑は、これをまず警護小隊員に着させ、欠点を改めさせてから将軍に見てもらった。警護隊員が身に着けた軍服を見た将軍は、兵士服の上着は開襟にして、あい色の胸当てを付け、袖口とズボンの裾には縫い足しの布をあててボタンをつけ、帽子の縁を低くして重ね折りにするよう細やかに教えた。

正淑は、その言葉どおりに軍服が仕上がるよう気を配った。

この日、正淑は女性兵士の軍服を着用させたモデルも将軍に見てもらい、スカートが朝鮮女性の体格に不釣り合いで活動的でないように見える、正規軍の女性軍服のスカートは、抗日遊撃隊の女性隊員が着用していたものを参考にして、裾の部分を広げた折りひだのスカートにするのがいいのではないかと助言した。

将軍はそれに賛成した。しかし、きょう見た背のうの試作品は感心できない、軍事行動に至便で実用的なものにつくり直すようにと言った。

翌朝、正淑は徹夜してつくり直した背のうの見本を将軍に見せながら、遊撃隊で使っていたものを模倣したのだがどうだろうかとうかがった。そして、背のうの大きさは軍人が携帯する食糧や弾薬、非常用品が入る程度のものにし、毛布などをくくりつける紐をつけ、常用具を入れる袋を外側につけ足したと説明した。また遊撃隊では背のうの担い帯を綿布を縦幅にそのまま切ってつくったが、正規軍の風格が損われそうなので、布地を 2 重に広く刺し縫いにしたとつけ加えた。

説明を聞きながら背のうを細やかに見た将軍は、使用に便利で格好も悪くない、工場でもつくりやすいだろう、担い帯も刺し縫いにしたので正規軍の風格に遜色はなく、布地もかなり節約できる、と満足の意を表した。

1947 年 3 月 17 日、将軍はこの試作品を朝鮮人民軍の軍服に決め、4 月末までにすべての軍人に着用させることができるよう、夏季の軍服を生産する指示を与えた。

正淑は毎日のように軍需被服工場や関連工場に出かけ、流れ作業を導入して生産を増やし、質も高めるようはからった。こうして同年 5 月からすべての軍人が新しい軍服を着用し、正規の革命武力としての風格を備えることができるようになった。

1947 年 10 月末のある日、将軍は、中央主権機関創立 2 周年を迎える翌年の 2 月 8 日に朝鮮人民革命軍を近代的正規軍に発展させて朝鮮人民軍を組織することを内外に宣言し、その日に朝鮮人民軍の閲兵式を挙行する計画を示した。

その閲兵式のために、1,200 名余の将校と 6,000 名余の兵士の軍服を追加生産しなければならなかった。ところが期間は 3 ヵ月しか残っていないうえに、生産能力は限られていた。一部の給養担当者からは、外国に注文しようという意見まで提起された。

正淑は、幹部と労働者たちに、閲兵式に参加する軍人に外国でこしらえた軍服を着せようとしてはならないという将軍の訓戒を伝え、われわれが山中で抗日戦をしていたときも、春と秋に裁縫隊員は夜を明かして軍服を仕立て、隊員に着替えさせた、当時は、戦闘がつ

づくなかで自力で布地や綿を求め、手回しミシンや手針で軍服をつくり、くけ針でミシンの針を作って使いながらも、将軍が定めた期日をたがえたことはなかった、と彼らを奮起させた。軍服の生産に携った者たちは、朝鮮人民革命軍の裁縫隊員のそういう精神と気概を発揮して生産に励み、期限内に閲兵式用の軍服を全部整えた。

軍旗の製作も担当した正淑は、図案の作成から製作にいたる全過程に心を配り、将校の家族たちとともに自ら刺しゅうをしたりミシンを踏んだりした。今日の朝鮮人民軍の軍旗には、正淑のその日々の労苦がにじんでいる。

正淑は、閲兵式当日の将軍の服装にも誠意を尽くした。

軍服と外套、帽子、長靴まで、すべてが正淑の手によって整えられた。今日でも、写真や記録映画で見ることのできる閲兵式壇上での将軍の服装にはそうした経緯があったのである。

1948 年 2 月 8 日、平壌では朝鮮人民が願ってやまなかった正規武力の誕生を宣する閲兵式がおこなわれた。

正淑も式場に列席した。歩武堂々と行進する閲兵隊伍に拍手を送り、壇上の将軍の英姿を仰ぐ正淑の目はうるんでいた。この日をどんなに待ち望んできたことか。

正淑は傍の抗日革命闘士たちにこう言うのだった。

「世界のどの総帥も、金日成将軍のようにあれほど困難な状況のもとで大きな犠牲を払って軍隊を創建し、それを強化し発展させたためしはありません。そういう意味でも、人民軍はきょうもあすも永遠に偉大な金日成将軍の軍隊でなければならないので

す」

　抗日革命闘士たちの顔も涙に濡れていた。この日のために尽くしてきた将軍の労苦とともに、その建軍偉業を助けて正淑が尽くした労苦と功績を思い、胸を熱くするのであった。

　閲兵式がすんだ後も、正淑は人民軍の急速な強化、発展のために時間と努力を惜しまなかった。

　将軍は、人民軍の隊伍をたえず拡大し、整然とした組織・指揮系統を確立し、各種の兵種を新たに編制した。将軍は人民軍内に強力かつ近代的な機甲部隊を建設する構想から、1948 年 8 月初旬、初の戦車部隊を組織する任務を柳京守（リュギョンス）に与えた。

　正淑は自ら仕立てた軍服を柳京守に着せてやり、「この軍服には一日も早く強力な戦車部隊を編制してほしいという革命同志たちの願いがこめられています」と言い、早急に戦車部隊を編制して無敵の鉄甲部隊に強化していくよう頼んだ。

　その後、正淑は足しげく部隊に出向いて戦車部隊の編制を助けた。戦車兵の学習と訓練に必要な筆記道具を配ってやりながら彼らを鼓舞し、また万景台（マンギョンデ）にいる将軍の祖父が畑で作った葉タバコを分けてやりながら、人民の期待にこたえて訓練に励むよう強調した。

　訓練がつづくある日、将軍に随行して部隊を訪れた正淑は、同行した外国の軍事教官から、戦車を自分で操縦できるようになるには少なくとも 1 年はかかるという話を聞いた。正淑は部隊の指揮官たちに「われわれは外国のようにそんなに長い期間、戦車の

操縦法を習っているわけにはいきません。軍人のレベルに合わせて訓練を組み、正しく指導すれば短期間に操縦法を習得することができます。軍人たちは、数ヵ月の間に操縦法をマスターしようとするはずです」と断言した。

部隊では、朝鮮式の方法で訓練に拍車をかけ、3 ヵ月で操縦法を身につけて閲兵式に参加するまでになった。地軸を揺るがしながら進む戦車の閲兵隊伍を見守っていた正淑は、われわれは山中で戦車を持たずに戦ったが、解放されたいまは多くの戦車がなくてはならない、アメリカ軍が南朝鮮を占領し、共和国北半部まで攻め込もうとしているのに、以前のように小銃だけでは戦えない、われわれは戦車のような機甲部隊を増強して人民軍をさらに強化すべきだ、と力説した。

1949 年 6 月のある日、航空部隊を訪れた正淑は、指揮部の図書室に勤めている女性がぜひ飛行士になりたいと言っているという話を聞き、「……りっぱなことだと思います。将軍のお言葉どおり飛行士に育てるのがよいでしょう。朝鮮の女性は強靭で愛国心が強いので、飛行機を十分乗りこなすことができます」と言い、かつて朝鮮人民革命軍の女性隊員が男性にも難しい落下傘の降下訓練を見事にやってのけたことを述懐した。

祖国解放戦争(朝鮮戦争)の時期、英雄的偉勲を立てた太善姫(テソンヒ)は、こうして正淑の信任を得て朝鮮で初の女性飛行士となったのである。

1949 年に入り、内閣特殊産業指導局の管下に数ヵ所の被服・

装具類工場が所属するようになると、正淑はそれらの工場の生産増大のために大きな力を注いだ。

同年 3 月 6 日、正淑は某被服工場に出かけて生産工程を見て回りながら実態を調べた後、労働者を前にして講演をおこなった。アメリカ帝国主義者と南朝鮮傀儡一味の新たな戦争挑発策動が露骨化し、38 度線一帯では一日として銃声が鳴り止むことがなく、いつ戦争が起きるか分からない情勢がかもされているとし、抗日武装闘争時期の裁縫隊員たちの闘争について語った。そして、すべての幹部と労働者が課された任務の重要性を深く自覚し、被服や装具類の生産のために奮起するよう呼びかけた。

これに励まされた労働者は、数ヵ月の間に軍服や装具類の生産計画を超過達成するという成果をあげた。

正淑はまた、軍人への給養活動にも深い関心を払った。人民軍後方局直属の副業農場を何回となく訪れ、野菜づくりと養豚のモデルケースをつくり、それをすべての軍部隊の副業農場に普及させた。そしてパン工場を訪ねては、軍人の食生活を豊かにするため良質のパンを生産、供給するようにし、訓練や有事の際には食事を簡易にできる乾パンを量産するようはからった。

将軍の建軍偉業に資するため正淑がとくに関心を払ったのは、軍機関紙『朝鮮人民軍』を創刊し、編集の政治的・思想的水準を高めることであった。

1948 年 5 月初旬、正淑は創立されたばかりの朝鮮人民軍新聞社の新聞の雛形を検めた。ところが、その編集形式は外国の軍機

関紙をそのまま模倣し、内容もその国の軍隊を紹介したものが多く、朝鮮の軍機関紙としての特色が生かされていなかった。それは、新聞社の幹部と記者、編集員の大多数が社会分野のライター出身で新聞編集の経験に欠けていたからであった。

このような実態について報告を受けた将軍は、記者、編集員を政治的・軍事的分野に精通させるため、45 日間にわたる講習をおこなう措置を講じた。

講習が終わった直後の 7 月 4 日、新聞社を訪れた正淑は、人民軍新聞は将軍の軍事思想と路線を解説、宣伝し、軍人をその遂行に奮起させるための新聞であるから、伝統を紹介するにしても抗日遊撃隊の伝統を紹介し、訓練の様子にしても人民軍軍人の訓練の様子を紹介し、新聞編集におけるバックボーンを確立しなければならない、と指摘した。

その翌日、人民軍新聞社のスタッフは、創刊号の発行に向けた将軍の指示を伝達された。

創刊号発行の準備が進められていた 7 月 7 日、再び新聞社を訪ねた正淑は、ひと通り編集案に目を通した後、1 面に載せる社説の真ん中に将軍の肖像を入れ、タイトルの下に、先の朝鮮人民軍閲兵式での将軍の演説内容を掲載するのが望ましいと助言した。また、訓練で模範的な軍人を紹介する記事に写真をそえる問題、自主独立国家の堂々たる正規軍をもった人民の反響や、祖国防衛の前哨に立った息子や娘、兄や夫に宛てた留守家族の手紙を載せる問題など、編集スタッフの思い及ばなかった問題にも助言を与

えた。

4 面記事の編集案に目を通した正淑は、今朝の通信にアメリカ軍が独島(トク)付近で操業していた南朝鮮の漁船を爆撃して沈没させ、漁夫たちを殺害した記事があったが、そういう記事を多く載せてアメリカ帝国主義にたいする軍人の憎悪心をかき立てなければならない、と指摘した。

やがて 7 月 10 日、人民軍新聞の創刊号が発行された。

昼食どきにそれを私邸に持ち帰った将軍は、朝鮮人民軍の新聞が創刊されたと喜び、編集も上手にできていると評価した。

正淑はすぐさま新聞社の主筆に電話をかけ、創刊号を発行した労をねぎらい、その編集がうまくできているという将軍の称賛の言葉を伝えた。

将軍の建軍路線がりっぱに貫徹されるにともない、朝鮮人民軍は不敗の革命的武力、近代的強兵に成長し、日増しにその威容をとどろかしていった。

正淑はその雄姿を目のあたりにするたびに、異国の広野で石を枕に野宿し、近代兵器で装備した日本帝国主義侵略軍と血戦を繰り広げたときから、遊撃隊員たちが夢にまで描いた願いが現実となったという感慨にひたり、この日を見ずに倒れた革命戦友への懐かしさで涙ぐむのであった。

1948 年 10 月 14 日、第 1 中央軍官学校第 2 回卒業式がおこなわれる日の早朝、正淑は私邸の庭で将軍に随行するため待機していた抗日闘士の孫宗俊(ソンジョンジュン)に会った。彼は、きょうの卒業式には将軍

とともにぜひとも臨席してほしいと正淑に要請した。

正淑は、「ええ、きっと行きます。本当にうれしいことです。あなたも覚えているでしょう。白石灘密営での学習討論会で、将来祖国を解放したら一日も早く正規軍を組織すべきだと、どんなに熱心に討論したことでしょう」と話した。

この日、正淑は将軍に随行して卒業式に列席し、実弾射撃を兼ねた学生たちの戦術訓練を観た。正淑は、ほんとうにうれしいことだ、昨日の労働者、農民が国の主人となり、軍官学校に入って教育を受けるというのはなんと誇らしいことか、と感激するのだった。

そして戦術訓練が終わると食堂に行き、炊事当番と一緒になって袖をまくりあげ、学生のために特別の料理をこしらえた。

この日は、正淑の生涯においてもっともうれしい一日となった。

後日、党中央委員会の責任幹部と席をともにした金正日総書記は、当時の母を回顧してこう語っている。

「先日、姜健（カンゴン）総合軍官学校の革命事績館を見て回ったとき、解放直後、主席が正規の革命武力建設のためにどれほど労苦を尽くしたかを示す写真がありましたが、わたしはそれを見て深い感動を覚えました。そのなかに、1948 年 10 月 14 日の第 1 中央軍官学校第 2 回卒業式に主席と母とともにわたしも参加した写真がありました。

写真で母は頭を下げていますが、それは泣いていたからです。そのとき、わたしがなぜ泣くのですかと聞くと、母は、こんなに

たくましい将校の隊伍を見ると抗日武装闘争のときのことが思い出され、また先に逝った革命同志たちが思い出されるからだと言うのでした。……

建軍史に残した母の功績は実に大なるものがあります」

実に、軍建設において正淑の労苦が及ばなかった部門はなく、今日、朝鮮の空と陸、海を鉄壁のごとく守る無敵の隊伍と、全国土を一つの要塞に変えた全民武装化の第一歩に正淑の不滅の足跡が大きく残されている。

まず祖国統一から

金正日総書記は1981年9月22日の夜、席をともにした幹部たちに次のように述べている。

「わたしの母のように祖国統一を願った人は多くないでしょう。いまは白頭(ペクトウ)山のときとは違って領土もあり、主権も樹立され、国の財力もあるのに、どうして服の一着も新調しようとしないのかと抗日闘士たちから問われると、国が統一されて全同胞が不自由なく暮らせるようになったら、わたしたちも絹の服を着てよい暮らしをしましょう、とたしなめたものです。母はいつもまず祖国統一のことから考え、幸福はすべて後まわしにしたのです」

金正淑にとって祖国の統一は最大の悲願であった。全民族が統一された祖国で暮らすその日のために、正淑は解放直後から情熱

を傾けた。

国土の両断は「解放者」「援助者」の仮面をつけて南朝鮮に押し入ったアメリカ帝国主義者によって朝鮮人民に強要された不幸であり、悲劇であった。しかし解放直後、一部には、敵の欺瞞宣伝にたぶらかされて、アメリカ帝国主義にたいし幻想を抱く者がいた。

ある日、一人の活動家が正淑に、宣伝活動中に当惑させられた一件について話した。彼が宣伝演説を終えたとき、インテリ風の女性が立ち上がって、南朝鮮に駐屯した米軍をどう見るべきか、米軍は「連合軍」の一員なのだから、彼らも「解放者」ではないか、と質問した。その活動家はこれに明確な回答を与えることができなかったのである。

正淑は彼にこう説明した。

――アメリカ帝国主義が第 2 次世界大戦のとき「連合軍」に加わったのは、「戦勝の利得」をより多く手にし、戦敗国と「同盟国」を支配し従属させて、世界制覇の野望を遂げるためであった。歴史的に朝鮮を侵略し、略奪したものが朝鮮解放のために血を流すはずはない。事実、米軍は朝鮮が解放されて 20 日も過ぎた後に銃一発撃たず、血一滴流さず南朝鮮に進駐した。そういう米軍が解放者と言えるのか。米軍は解放者ではなく南朝鮮を占領した侵略者だ。狼が羊になりえないようにアメリカ帝国主義の侵略的本性は変わらないということを肝に銘じ、警戒心を強めなければならない。

正淑は、活動家に会ったり人民のなかに入ったりするたびに、祖国統一問題について話し、アメリカ帝国主義の分裂策動を暴露し、全民族の団結した力で自主的に祖国を統一しなければならないという信念を植えつけた。

とくに、南朝鮮の革命家や各階層の人士を統一聖業に奮起させることに深い関心を払った。

つとに革命闘争の過程で積んだ大衆工作経験と人の心を引きつける特有な品性によって、正淑は南朝鮮の革命家と各階層の人士、さらには広範な南朝鮮人民の心に敬慕の対象として刻み込まれていた。

1946 年の初め、平壌に来て 1 ヵ月近く将軍の私邸に宿泊して正淑のもてなしを受け、その人柄を知ってソウルに帰った呂運亨（リョウンヒョン）[31]は、家族や友人たちによくこう話していた。

「……わたしはこれまで、朝鮮はもちろん外国でもひとかどの女傑や女性名士に多く会ってきた。しかし、百発百中の名射手として名をとどろかせた女将軍で、高い政治的見識を身につけた政治活動家でありながらも、あれほどしとやかで優しく、素朴でおおらかな女性は見たことがない。金正淑女史のような方は古今東西またといないだろう」

呂運亨は青年時代から国を取り戻すべく青雲の志を抱き、3・1 運動のときには万歳を叫び、東方民族の自決権をめざす国際会議にも参加して植民地弱小民族の悲しみを吐露し、また「上海臨時政府[32]」を訪ねたり共産主義運動家なる人物にも会い、アジア

とヨーロッパ諸国を巡り歩き、我こそはという人物にも会ってきた当代きっての朝鮮の名士であった。いつか東京に呼ばれ、「男爵」の爵位を授与し、台湾総督に任命するという総理大臣にたいし、たとえ男爵や総督よりもっと高い官位が与えられるとしても、それは独立した朝鮮で作男を務めるより劣るとして、断固拒絶した呂運亨であった。

こういう人生行路を歩む過程で、世に名だたる政治家や英雄豪傑まで見下げる豪気な姿勢が身についた彼であったが、将軍の私邸での約１ヵ月間の生活を通じて正淑には完全に感服し、南朝鮮に帰ってからも正淑にたいする賛辞を惜しまなかった。

彼が梨花（リファ）女子大に通っていた二人の娘をアメリカに留学させてやるという敵の懐柔をはねのけ、娘二人を平壌に送って将軍と正淑に任せたことは、まさにこの夫妻こそ民族の父母であり、統一の希望の星であるという信念と敬慕の念がいかに高いものであったかを物語っている。

1948 年に入って、祖国統一の前途はさらに厳しい状況となった。ソ米共同委員会の活動を破綻させたアメリカは 1947 年 11 月、不法にも朝鮮問題を国連に持ち込み、投票機械を発動して南朝鮮に単独「政府」を樹立するという「決議」を採択させた。

将軍は新たな情勢に対処して南北のすべての愛国勢力が団結し、アメリカ帝国主義の傀儡単独「政府」陰謀を粉砕する方針を示し、ついで南北朝鮮の政党、大衆団体代表者連席会議の招集を提議した。

正淑は、この会議がアメリカ帝国主義の朝鮮永久分裂策動を粉砕し、統一を早める決定的な転機となるよう精力的に活動した。連席会議準備委員会が作成した南朝鮮代表の招請計画に女性代表が 6、7 名しか予定されていないことを知った正淑は、南朝鮮女性代表の数が少ないのではないか、南朝鮮女性に連席会議を招集した将軍の意図を明確に知ってもらい、人民が主人となった北朝鮮の現実を正しく認識させるためにも、女性代表を一人でも多く招請すべきだ、と指摘した。こうして、会議への参加を申し込んできた南朝鮮の女性代表全員が連席会議に参加することになった。

平壌に到着した彼女たちの服装はまちまちで、38 度線を越えてくるとき身なりが乱れたりした人もいることを知った正淑は、一夜のうちに 20 数名の代表の体と年齢に合ったチョゴリ・チマを仕立てさせ、全員が朝鮮民族固有の衣装で会議に参加できるようにした。

南朝鮮の女性代表たちは会議に参加して将軍の祖国統一方案に接した興奮と感激も覚めやらぬなか、4 月 27 日には将軍と正淑の接見を受け、2 日後再び正淑に会う機会を得た。

正淑は、病人はいないか、不便を感じていることはないか、旅に出て 10 日余り経ったので家族が恋しいのではと細かく気づかった。そして、連席会議の精神を体してより多くの女性大衆を奮起させ、救国闘争を力強く展開し、さしあたり「5・10 単独選挙[33]」を粉砕する闘争に力を集中することなど、今後の活動で指針とすべき事柄に言及した。

代表たちの帰る日が迫ったある日、南朝鮮の自主女性同盟の幹部から出発する前にもう一度正淑に会いたいという申し入れがあった。

自主女性同盟は民族主義の影響下にある小さな女性団体であった。政治的立場からすれば中道派に属するこの団体の代表たちは、平壌に来ても誰にも気を許さず、参観のときにも客観的で無表情な態度をとっていた。

ところが正淑に会った席で自主女性同盟の幹部は、ソウルに帰ったら自主女性同盟を南朝鮮民主女性同盟と合同する問題を提起するつもりだと言うのだった。これは思いもよらぬことであった。もともと仏教徒の家庭で生まれ、若い頃から民族主義の影響を多分に受けていたため共産党系の女性団体を快く思わず、李承晩（リ スンマン）、金性洙（キム ソン ス）一味の反動的女性団体にも背を向けていた人物であった。

そういう人物が突然、民主女性同盟との合同問題を持ち出してきたのである。事実、彼女らは北朝鮮の現実を一度見に行こうという傍観者的な態度で平壌に来たのであった。しかし、見たり聞いたりすることすべてがあまりにも新しく、感嘆させられることばかりだった。北朝鮮で男女平等が法的に保障され、女性が自己の権利を十分行使しているのは、民族解放の課題が達成され主権問題が解決された結果であるということ、そのため南朝鮮民主女性同盟は何よりもアメリカ帝国主義とその手先に反対し、祖国の統一独立をめざす闘争に女性を立ち上がらせているのだということを認識するようになり、この同盟との合同に踏み切る決心をか

ためたのであった。

正淑は彼女らに、平壌に来て正しい認識をもつようになったのは非常に喜ばしいことだが、自主女性同盟が南朝鮮民主女性同盟と合同したいという意向には賛成しがたい、と言った。

北の女性幹部はもちろん、自主女性同盟の代表も、両女性団体の合同を正淑が歓迎するものとばかり思っていた。

正淑は、現段階では両同盟を合同すべきではない、いま合同するなら、双方のかかげるスローガンが相異なる状況下で同盟員間の融合が難しくなり、また、自主女性同盟の構成から見て合同に賛成せず、別個の女性団体を新たに結成しようとする人が生じかねない、自主女性同盟には主に民族主義的立場に立つ知識人、宗教人、商工人出身の女性が加わっている、南朝鮮にはそういう階層の女性が少なくないが、彼女らを目覚めさせ、反米救国闘争に立ち上がらせるためには、勤労女性が基本勢力をなしている南朝鮮民主女性同盟より自主女性同盟の方が有利なはずだ、自主女性同盟はその組織を解体するのではなく、中間層の女性をより多く隊伍に結集させ、南朝鮮民主女性同盟と歩調を合わせて祖国統一のための闘争を繰り広げていくべきではなかろうか、と説いた。これは、非凡な政治活動家の英知と豊富な革命活動経験にもとづいてのみ下せる科学的な判断であった。

これに感動した自主女性同盟の幹部は、正淑の言葉を肝に銘じ、組織を反米・祖国統一をめざす愛国的な団体として強化し、南朝鮮民主女性同盟と強く連帯し、さしあたり「単独選挙、単独政府」

に反対する闘争を展開することを誓った。

その後、南朝鮮に戻った南朝鮮女性団体の代表たちは「5・10単独選挙」を粉砕する全民族的な闘争で大きな役割を果たした。自主女性同盟は、アメリカ帝国主義者と李承晩傀儡一味が彼らの反動的婦人団体に引き入れようとする策動を断固排撃し、1949年6月に北朝鮮民戦と南朝鮮民戦の合同によって祖国統一民主主義戦線が結成されたとき、南朝鮮民主女性同盟とともにその一員となった。

南北連席会議には、南朝鮮の極右翼政客も少なからず参加した。

将軍は、その中でも金丸（キムグ）がこの会議に参加していかなる態度をとるかは、共産主義者と南朝鮮の右翼民族主義者との統一戦線が結成されるか否かを決定づける試金石となるとみなし、彼との活動に格別な意義を付与した。

少なからぬ人は、日本帝国主義支配当時には「上海臨時政府」の主席を務め、解放後には南朝鮮の極右翼政党である「韓国独立党」の党首として「反共」に生涯を賭けてきた金丸を連共に変身させることはほとんど不可能だと思っていた。

しかし正淑は、金丸に民族的良心があるかぎり、北朝鮮における人民的施策と世紀を画する変革、そして将軍の自主的な祖国統一方針を正確に理解するようになれば、彼も連共の道に進むであろうと信じた。

正淑は、労働党の路線と政策を十分に理解しており、金丸の信頼を得ていた安信好（アンシンホ）を彼にたいする工作に当たらせた。一時「上

海臨時政府」の要職にあった安昌浩（アンチャンホ）の妹にあたる安信好は、金丸との親交が厚かった。

将軍は安昌浩の反日愛国の志を尊び、解放後は彼の家族に深い配慮をめぐらし、安信好を労働党の党員に育て、南浦（ナムポ）市女性同盟委員長・女性同盟中央委員会副委員長の職に就かせていた。会議を間近にひかえたある日、将軍の私邸で金丸が会議に参加するという話を将軍から聞いた彼女は目を丸くした。

将軍が執務室に向かうと、彼女は正淑のところに行った。還暦を過ぎた年齢に似合わず興奮した面持ちの彼女を見た正淑は、何ごとかといぶかりながら席を勧めた。

「あんまりびっくりさせられることを聞いたので……。いましがた将軍から金丸が南北連席会議に参加するため平壌に来るという話を聞きました」

「まあ、そんなことでびっくりなさったのですか。国の統一を願う人なら誰もが団結しようというのが将軍の思想ですのに、統一を願うなら、彼だからと来れないわけはないでしょう」

しかし安信好は、どう考えても金丸のような反共分子とは全民族的な統一問題を論ずることができないはずだ、国の統一にかかわる重大事を失敗させるような気がしてならない、と言うのだった。

正淑は彼女に、将軍の統一戦線政策について説明した。正淑の話に感服した安信好は、自分の考えが浅かったことを悔い、金丸が来たら将軍の政治について知っているかぎり説明すると言った。

数日後、安信好はまた正淑を訪ねてきた。いざ金丸と会って話すとなると、何からどう話したらよいのか考えがまとまらないので訪ねて来たと言うのであった。

正淑は笑みを浮かべてこう諭した。

「何もそんなに難しく考えることはないでしょう。安先生が北朝鮮で暮らしながら見聞きし、感じたことを少しも誇張せずありのままに話せばよいのです。おそらく金丸は、共産主義者というのは自分のような民族主義者を頭から排斥するだろうと思っているはずです。そして、北朝鮮では地主の土地を没収して少数のものが分け合って所有したという南朝鮮の御用出版物の悪宣伝を真に受けているはずです。また、北朝鮮では宗教に反対しているので、寺もみんな取りつぶしてしまったというとんでもない話も真に受けているかもしれません。これがみんな嘘だということを認識させることです。そして将軍はどういう政治を施しており、祖国と民族のために昼夜を分かたずいかに奮闘しているかを見聞きしたとおり話せばよいではありませんか。

安先生が女性同盟の重要な職責について働いているということを話してもよいし、すべてをありのままに話せばよいのですから、絶対に難しく考える必要はありません」

安信好はようやく自信と勇気を得て、金丸を迎える心の準備を整えた。

4 月中旬、平壌に到着した金丸は、その日に将軍の接見を受けた。

将軍は金丸を熱烈に歓迎し、連席会議に参加するため平壌に来たことを愛国的な壮挙だと称賛した。

金丸は感きわまる思いだった。民族の明るい未来を思わせる若く凛々しい姿、このうえなく謙虚で情感あふれる風格、力あふれる気性……。

つねに長身にトゥルマギ(外衣)をまとい、眼鏡越しに人をねめつけて威厳をふるっていた金丸のその態度は、将軍の大海原のような度量と高潔な風貌を前にしてはみるみるうちに崩れさった。

金丸が将軍と会見した感激を抱いて宿所にもどったとき、安信好が訪ねてきた。二人の対面は感激的であった。互いにあいさつを交わして旧懐の情を分かち合ったのち、安信好は北朝鮮の現実、とくに将軍の偉大さと人民的品性について自分が見て感じたとおり話し、将軍の温情のもとで営んでいる張り合いある生活についてもありのままに語った。

その後、金丸は万景台の将軍の生家を訪ね、祖父の金輔鉉(キム ボ ヒョン)が80 に近い高齢にいたっても農作にいそしみ、質素な生活をしている姿を目のあたりにし、万景台革命学院では将軍の懐ですこやかに育ちゆく昔日の独立軍司令梁世鳳(リャン セ ボン)の息子に会い、竜岳(リョンアク)山を訪ねては、ひところ自分が身をひそめていた寺が以前のまま保存されているのを見た。また黄海(ファンヘ)製鉄所を訪れては、日本人によって破壊された溶鉱炉を自力で復旧し、鉄湯をとるのに余念のない労働者の雄々しい姿を見ながら、勇ましく前進する北朝鮮人民の気概を肌で感じとった。すべてが安信好から聞いたとおりであ

った。

平壌を発つ前に将軍に会った金丸は、「わたしは将軍にしたがう決心をかためました。将軍は世界史上類を見ない偉人であり、朝鮮の唯一無二の領袖です」と賛辞を惜しまなかった。

南朝鮮にもどった金丸は、金日成将軍の偉大さについて、またその卓越した政治路線と統一方針について広く宣伝し、将軍の路線を受けとめて連共統一のために一命を賭してたたかった。

正淑は、祖国統一問題においてつねに自主的立場を堅持し、祖国統一のための闘争を国際的な反帝・反ファッショ闘争と密接に結びつけるよう活動家に説いた。

1949 年 1 月、女性同盟中央委員会拡大会議では、国際民主婦人連盟第 2 回大会に参加した朝鮮代表団の活動状況を聴取し、それと関連する対策を講じるため女性同盟活動者会議を開くことにした。

女性同盟中央委員会の幹部たちと席をともにした正淑は、国際民主婦人連盟第 2 回大会のもっとも重要な精神は、ファシズムと帝国主義に反対し、世界の平和と安全を守り、圧制者に踏みにじられている女性の権利をかちとり保護することであり、われわれはこれをわが国の新しい社会の建設と祖国統一をめざす闘争に有利な局面を開く方向で受けとめなければならない、と指摘し、こうつけ加えた。

「ですから、今回の会議を北半部の女性活動家のみを集めて開くのではなく、南朝鮮の女性代表も多く参加させ、全国的な範囲

の女性大会にするのがよいと思います」

そして、会議の性格と討議される内容からみて、アピールを採択して発表することにしてはどうかと提言した。

その後、女性同盟中央委員会の幹部たちは南朝鮮の各女性団体と合議し、全国的な会議を開いて全国の女性にアピールを発することにした。

こうした対策案について報告を受けた将軍は、これに同意し、会議の名称を「全朝鮮女性活動者大会」とした。

アピールの草案を通覧した正淑は、女性活動者大会の重要な目的は、南北朝鮮のすべての女性のあいだで反米・自主統一をめざす闘争の火の手をさらに激しく燃え上がらせ、とくに南朝鮮の愛国的な女性の闘争を鼓舞激励することだとした。そして、アピールはわれわれの経済建設問題を基本とするのではなく、反米・反傀儡闘争の問題、祖国統一問題を基本として南朝鮮女性にアピールする内容のものにすべきだと指摘した。

その年の2月6日、平壌で開催された全朝鮮女性活動者大会で採択されたアピールは、通信、放送、出版物を通じて広く報道され、女性団体を通じて南北朝鮮のすべての女性のあいだに浸透し、彼女らを反米救国闘争へと奮い立たせた。

南朝鮮の愛国的な女性は、アメリカ占領軍の即時撤退と李承晩傀儡「政府」の打倒を叫んで闘争に立ち上がり、南朝鮮各地で激しく展開された遊撃闘争に参加したり、それを支援する闘争を繰り広げた。

正淑は、南朝鮮革命と祖国統一のためにたたかって平壌に来る革命家を温かく見守った。

そのなかには南朝鮮革命家の成始伯（ソンシベク）、済州（チェジュ）島の抗争闘士姜圭贊（カンギュチャン）・高珍姫（コジンヒ）夫妻もいた。

1948 年 8 月のある日曜日、成始伯は万景台を訪れた。彼が将軍の生家へ行って祖父の金輔鉉と祖母の李宝益（リボイク）にあいさつをし、将軍の父・金亨稷（キムヒョンジク）が手ずから植えたドロの木陰で休んでいると、正淑が出てきて「敵地での活動でさぞかし苦労が多かったことでしょう。ここにいる間、ゆっくり休息をとって健康を取り戻してください」とねぎらった。

成始伯は正淑に、抗日武装闘争時期の豊富な地下工作経験を聞かせてほしいと言った。

正淑は聞いてもらえるような話はないと固辞したが、重ねての要望を受けて話しはじめた。

抗日武装闘争の時期、村人のなかに入って地下工作をおこなった経験によれば、敵地での活動で何よりも重要なのは人民大衆のなかに深く根を下ろすことだ、大衆のなかに入らず、彼らの積極的な支持と声援を受けなくては地下活動を成功裏に遂行することはできない、と前置きし、まず大衆のなかから中核を掌握して教育し、彼らを中心に地下革命組織をうちかため、そのまわりに広範な大衆をかたく結集する問題、地下組織を新たにつくったり拡大するときは必ず援護の手配を綿密にする問題、敵味方を判別し、ことごとに革命的警戒心を強める問題など、敵地工作で指針とす

べきことを話してから、こうつけ加えた。

「また、地下活動でもっとも重要なことは、困難に直面すればするほどあわてず、ひたすら将軍を信頼する革命的信念を抱き、沈着かつ果敢に行動することです」

正淑の話を肝に銘じた成始伯はその後、南朝鮮にもどって地下組織を拡大し、果敢な闘争を繰り広げて敵の凶悪な反共和国策動を破綻させるうえで大きな功労を立てた。彼は逮捕されて壮烈な最期を遂げる瞬間まで、革命的節操を守り通した。

姜圭賛・高珍姫夫妻は解放後、済州島に人民委員会を組織し、将軍の政治を南朝鮮全域に施すべく献身的にたたかい、アメリカ帝国主義の「単独選挙、単独政府」に反対して武装闘争を繰り広げ、1948 年 3 月、4 人の子女を済州島に残したまま将軍の懐に抱かれた革命家であった。

将軍は、姜圭賛は党中央委員会、高珍姫は平壌市人民委員会の要職につかせ、南朝鮮人民に選挙されて最高人民会議の代議員になった彼らに会っては、済州島から選出された戦士の代議員夫婦だとほめたたえた。

正淑は、たびたび高珍姫に会ってその活動と生活に気を配り、彼女が中央高級指導幹部学校に入学することになったときには、最高人民会議代議員の女子学生だという誇りをもって熱心に学ぶようにと励ました。

そして、彼女と打ち解けて語り合う過程で、この夫婦が済州島に残してきた 4 人の子どものことで心配していることを知り、そ

のことを将軍に報告して子どもたちを連れてくる対策を講じるようはからった。やがて彼ら一家が新しい家に入居することになると、家具一式や寝具、米、副食物まで整えて届け、数日後にはその家を訪ねて子どもたちを抱き上げ、肉親さながらの愛情を注いだ。

　正淑は高珍姫に、やがて祖国が統一されたら将軍と一緒に漢拏(ハンナ)山の白鹿(ペクロク)潭に行きましょう、そのときには漢拏山の麓であなたが栗毛の馬にまたがって走る姿を見せてもらいます、と冗談まじりに語り、彼ら夫婦に祖国統一への熱望を沸き立たせた。

　祖国解放戦争が起こると、姜圭賛・高珍姫夫妻は故郷を解放するため最前線と敵背で勇敢にたたかい、偉大な祖国解放戦争の勝利と祖国統一偉業の推進に大きく寄与して壮烈な最期を遂げた。

十二　崇高な信義と愛

万景台の遺児たち

金日成将軍は、祖国に凱旋してまもないある日、抗日革命闘士たちに次のように語った。

――戦火のさなかに散り散りになり、その行方も生死も分からなくなった戦友たちの遺族や遺児を捜し出し、われわれが彼らの面倒をみてりっぱに育てなければならない。倒れた同志たちは、祖国が解放されたら自分たちの子どもを勉強させて革命家に育ててくれと頼んだ。わたしは苦しい戦いの日々、片時も彼らの遺言を忘れたことがない。遺族や遺児を一人残らず捜し出し、面倒をよくみて勉強もさせ、彼らが革命先達の志を受け継いでりっぱな革命家になるようにしよう。……

抗日戦の日々にも、遊撃区に児童団学校を設け、倒れた戦友たちの子女を革命家に育てた将軍であり、彼らの母、姉となってその世話をした正淑であった。朝鮮革命の歴史に輝かしい足跡を残した朝鮮人民革命軍主力部隊の少年中隊の道程は、とりもなおさず将軍と正淑のもっとも高潔な革命的信義と愛の偉大な足跡であった。

1942 年 6 月のある早朝、将軍と正淑は白頭山(ペクトウサン)密営の小白水(ソベクス)の

ほとりを散策しながら、祖国が解放されたら、倒れた戦友たちの子女をみな捜し出してりっぱな革命家に育てようと話し合った。

解放後、将軍はなお多忙な日々を送った。党と人民政権をうち立てて強化する問題、壮大な民主改革の課題を遂行してその成果を強固にする問題、人民経済の計画化を実現する問題、正規の革命武力を建設する問題など、早急に解決すべき問題が山積していた。

将軍はこうした事業をおし進めながらも、1946 年 3 月に革命家の遺族や遺児を社会的、国家的に援護するため反日闘士後援会を組織し、翌年には万景台（マンギョンデ）革命学院を設立し、学院生徒募集委員会を設ける措置を講じた。そして抗日闘士をはじめ多くの活動家を国内外の各地に派遣し、遺児たちを捜し出して平壌へ連れて来るようはからった。

正淑は各地に派遣される戦友や活動家に、1、2 回遺児たちを捜してみて消息が知れないからと断念してはいけない、1ヵ月かかっても2ヵ月かかっても構わないから必ず捜し出して連れて来るように、と頼んだ。

1947 年の夏、中国の東北地方に散らばっている遺児たちを捜し出す任務を受けた林春秋（リムチュンチュ）が東満州へ向かうときにも、正淑は、抗日大戦の戦場で倒れた数多くの革命戦友の顔を一人ひとり思い浮かべながら、天地の果てまで行ってでも彼らの子女を捜し出すという覚悟さえあれば、みな捜し出すことができるはずだ、と話した。

それまで愛する家族の生死さえ分からなかったにもかかわらず、正淑は、先に逝った戦友たちの子女をみな捜し出して思う存分勉強させ、革命の頼もしい継承者に育てあげて戦友たちの願いをかなえてやろうという熱い思いに駆られていたのであった。

将軍が講じた措置と正淑が傾注した努力によって、その後、数多くの遺児が平壌に集まるようになった。

正淑は、彼らが勉強する臨時校舎の建設に深い関心を払った。間（カン）里に建設中の臨時校舎を訪ねた正淑は労働者たちに、これからここで祖国の解放のためにたたかって戦死した革命家の遺児たちが勉強することになる、あらゆる迫害と虐待を受けながら苦労を重ねてきた子どもたちが学ぶ校舎だから、煉瓦を一枚積み、窓を一つ取り付けるにしても誠意を尽くすように、と言った。そして自ら土をこね、労働者たちとともに汗を流した。

1947 年 8 月の初め、革命家の遺児たちが到着したという知らせを受けた正淑は、将軍とともに間里に向かった。将軍の車が学院の校庭に入ってくると、はしゃぎ回っていた子どもたちが一斉に「金日成将軍万歳!」を叫びながら駆け寄ってきた。

どんなに抱かれたかった父なる将軍の懐であったろうか。

ところが彼らは、将軍の数歩手前で急に立ち止まり、それ以上近づこうとはしなかった。将軍の前にみすぼらしい身なりをさらすのが恥ずかしかったからである。肩がまる見えのひとえの上衣、膝のすり切れた粗麻の半ズボン、横緒の切れたわらじ……。

子どもたちの様子をじっと見つめていた正淑は激情に駆られて

彼らを抱きしめ、「将軍様はぼろをまとっているからといってあなたたちをとがめはしませんよ。ぼろをまとい貧しい暮らしをしたのは、あなたたちのせいではないのだから」と言い、将軍のそばへ押しやった。

子どもたちは将軍の懐に顔を埋め、「将軍様！　将軍様！」と声を上げて泣き出した。

将軍も激情に声を震わせ、「大丈夫だ、泣くんじゃない。これから服もりっぱなものをこしらえ、勉強もすればいいのだ」と言い聞かせた。

この日、将軍は正淑に、遺児たちにまず学院の制服をこしらえて着させ、靴や帽子もつくってやるようにと言った。

その後、正淑は、学院の開院準備を急ぐ一方、院児たちの制服をりっぱにつくるようはからった。

当該部門の活動家が作成した制服のデザインに目を通した正淑は、わたしたちがつくろうとするのは革命学院の制服であるから、軍服形式にし、袖とズボンには赤い筋を入れて、抗日の革命伝統を継承していることがはっきり分かるようにしなければならないと話し、自らその図案を描いて見せた。

制服のデザインが出来あがると、正淑は学院の裁縫室や被服工場に詰めきって制服づくりの後押しをした。こうして、開院式の前にすべての院児に制服が支給されることになった。

開院式をひかえたある日、数名の遺児を私邸に呼び寄せた正淑は、「このように新しい服を着るとみな頼もしく見えるわね。も

う一度見せて」と言い、前を向かせたり後ろを向かせたりして服装をあらためた。ところが、一人の女児が体に合わない服を着ていた。正淑は、合わない服はみな仕立て直すようにしたのにどうしたわけなのかと聞いた。彼女は、服をつくり直してあげると言われたとき、それっきり返してもらえないのではないかと思い、出さずに隠しておいたのをそのまま着てきたと言うのであった。

正淑は彼女を抱きしめ、「生まれてはじめて着る新しい服なので、そんなことをしたのね。将軍様があなたにくださった服なのに誰が取り上げるというの。もう誰もあなたたちからこの服を取り上げることはできないのよ」と安心させた。正淑はその場で彼女の体にぴったり合うように服をつくり直し、アイロンでスカートのひだまでつけて着せた。

ある日、東満州で放浪生活をしていた遺児たちが遅れて到着したという報告を受けた正淑は、すぐ彼らを私邸に連れてくるよう頼んだ。

子どもたちが正門に足を踏み入れると、正淑は「どうしていまになって。国が解放されて3年になるというのに……。将軍様があなたたちをどんなに捜したか分からないでしょう」と言って彼らを抱きしめ、涙にむせんだ。子どもたちも声を上げて泣いた。彼らの手を引いて部屋に入った正淑は、一人ひとりに両親の名前を聞いた後、古い戦友と再会したかのように子どもたちをまた抱きしめ、「どんなに苦労したことか。お父さんもお母さんもなしに……」と声を詰まらせた。

涙にぬれた子どもたちの顔をぬぐっていた正淑は、ある少年の膝小僧がのぞいているのを目にした。

「ズボンがひどいこと……。さあ脱ぎなさい。わたしが繕ってあげるから……」

ところが少年は席をずらし、腰のあたりをつかんだまま立ち上がろうとしなかった。

「下着を着ていないのね……。お母さんが生きていたら、こんなことはないはずなのに……。さあ、こっちへ、ズボンをはいたまま繕ってあげるから」

少年は「お母さん!」と声を上げ、実の母を彷彿させる正淑の胸に顔を埋めた。

正淑は少年の頭をなでながら「泣いたらだめよ。これから学院へ行き、将軍様がくださった新しい服に着替えるのよ」と言い、破れたズボンを繕いはじめた。

そばにいた女性活動家が自分にまかせるようにと言うと、正淑はかぶりを振り、「いいえ、戦友たちが息を引き取るときに将軍に託した子どもたちですから、これからはわたしが母の代わりを務めなければなりません。ですからわたしの手でしなくては……」と言うのであった。

針仕事をする正淑の手を見つめながら、遺児たちや活動家たちは熱いものを呑み込んだ。

1947 年 10 月 12 日、抗日児童団学校の後身として万景台革命学院が開院することになった。

この日、正淑は開院式に参加し、院児たちを祝った。

その後も正淑は、遺児たちを将軍に忠実な革命戦士に、そして党と国家、軍隊の中核に育てあげるため学院の事業に力を注いだ。

1947 年 10 月 23 日、学院の政治担当副院長が呼ばれて将軍の私邸を訪ねた。

彼を温かく迎え入れた正淑は、将軍は緊急の電話を受けて執務室へ行かれたから、待つ間に院児たちの教育問題について話し合ってみようと言った。

彼は、自分は教育事業の経験に乏しいので、児童団活動の経験を積んでいる金正淑同志から一度だけでも教えを受けたいと思っていたところだと言った。

正淑は、自分にもこれといった知識はないが、今日、抗日児童団学校の後身である万景台革命学院には生徒を解放された祖国の党、国家、軍隊の中核に育成すべき重要な課題が提起されている、とくに軍隊の指揮官を多数養成するのは学院の第一の課題だ、と述べた。

そして解放直後、党内に将軍の路線に反するさまざまな主義主張があったことを想起させ、学院では、かつて彼らの親たちがそうであったように、すべての遺児をひたすら将軍の思想を信奉し、将軍の指し示す道で命もささげる真の朝鮮の革命家に育てあげるべきだ、と強調した。

つづいて、授業と多様な課外活動を通じて院児たちをりっぱに教育し、射撃法をはじめ軍事教育を着実におこなう問題について

語った。

政治担当副院長は、院児たちは幼い頃から系統的な教育を受けていないため、自然科学の課目を非常に難しがっていると、現状をありのままに述べた。

正淑は、だからといって先生たちまで自信を失ってはならない、一般的な科学知識がなければ現代的な軍事知識を身につけることができないことを院児たちによく説明し、困難を克服して自然科学の課目を必ず習得するようにしなければならない、と指摘した。

課目の教育内容が話題にのぼったとき、政治担当副院長は、院児たちはみな党と国家、軍隊の根幹になるのだから、男女を問わず同じ課目を教えるのがよいのではないか、と自分の意見を述べた。

正淑は、先生の言うことも理解できるが、女児には女児としてそなえるべき品性がある、炊事や裁縫もしなければならないので、家事・裁縫の課目をおろそかにせずによく教えるべきだ、と答えた。

次に正淑は、道徳教育と体育を強化する問題について述べた。

正淑は、将軍が大同(テドン)郡の某中学校に出向いた際、同校を「三興(サムフン)中学校」と命名し、生徒たちを知・徳・体を兼ね備えた新しい朝鮮の担い手に育てあげるよう教えたことを話し、院児たちもそのように育成すべきだと強調した。

そして、学院の生徒たちは幼い頃に両親を亡くし家庭教育を受けることができなかった、彼らを礼儀正しく、目上の人を敬い、

友人を愛し、同志と集団のためにわが身をささげる気高い道徳的品性の持ち主にしなければならない、と述べた。

正淑は、革命的節操と信義を守りぬいた父母たちのように、院児たちを革命的に育てるべきであるとし、彼らの学習と組織生活を強化し、生活条件を十分に整える問題、体育と労働によって心身を鍛える問題、給養活動を改善する問題など、万景台革命学院の事業で提起される諸問題について助言を与えた。

1948 年 3 月 20 日、正淑は万景台革命学院の射撃訓練場に出向いた。

訓練場では、実弾射撃を数日後にひかえて射撃訓練がおこなわれていた。

正淑は訓練に熱中している院児たちを見やり、あの子たちが学院で学びはじめて半年しかならないのに見違えるほど成長した、戦死した同志たちにあの子たちの姿を見てもらえたらどんなに喜ぶことだろうか、と言うのだった。そして彼らの射撃動作を正してやった。

この日、将軍は院児たちに模範射撃をして見せた後、正淑に銃を手渡し、撃ってみるようにと言った。正淑は銃座の位置についた。銃声が響くと同時に、遠くに据えられていた 3 本の瓶がこっぱ微塵になった。

射撃が終わると、一人の女児が正淑に、どうすればそんなに射撃がうまくなれるのかと聞いた。正淑は、銃は手で撃つのではなく心で撃つのだ、強い敵愾心をもってこそ百発百中させることが

できる、と答えた。

正淑の言葉から、生徒たちは射撃の秘訣だけではなく、それよりもっと大きなもの、銃を手にした革命戦士の姿勢というものを学びとった。

正淑は母親のような愛情をもって院児たちを見守った。

1947 年の晩秋、一部の院児が熱病にかかったときのことである。

学院の幹部は将軍と正淑の身辺の安全を気づかい、病気が快方に向かった後に報告することにし、治療に専念していた。

そうしたある日、学院を訪ねた正淑はこのことを知り、病気の子どもたちが収容されている隔離室に行って見ようと言った。子どもたちの看病にあたっていた女性が、熱病なので誰も入れないことになっていると言って制止した。

「それなら、あなたはどうして入るのです」

「わたしは学院の職員ではありませんか。それに、わたしのような者が病気にかかったとしてもなにも差し支えありません。けれども、国の大事をあずかり、まして将軍のそばにおられる女史は絶対に入ってはなりません」

彼女の言葉には真情がこもっていた。そばにいた幹部たちも、隔離室には入らないようにと懇願した。

正淑は語気を強め、あの子たちは祖国の解放のためにたたかって倒れた革命戦友たちがわたしたちに託した子女たちだから、わたしが会いに行かなくてはならない、実の親なら、自分の子ども

が病に苦しんでいるのに、伝染病だからといって会いに行かないはずはない、あの子たちはいま高熱にうなされながら母親の暖かい手が差しのべられるのを待っているはずだ、と言った。

そしてためらうことなく隔離室に入り、子どもたちの病状をいちいち確かめた後、もう峠を越したようだから、これからは予後を見きわめ治療に専念するように、と言いおいて部屋を出た。

帰宅した後、正淑はセリの漬物や糯米の飴をつくり、各種の薬とともに学院に送った。そして院児たちの健康診断をおこない、軽い病気でも徹底的に治療させるようにした。

同年秋のある日曜日、私邸に遊びに来た二人の院児と一緒にひとときを過ごした正淑は、女児の一人の顔色がすぐれないのに気づき、入院して治療を受けさせた。

面会日になると、朝から浮き浮きして家族が来るのを待っていた同室の子どもたちが、なにげなく彼女に「あんたの家からは誰が来るの」と聞いた。

見舞いに来る人などいなかった彼女は、返事ができずにベッドに横になり、寝るふりをした。ところがそのとき、彼女にお母さんが面会に来たという知らせが届いた。

(お母さんだって？！)

彼女は大きく目を見開き、ベッドから飛び起きた。

そのとき戸が開いて、正淑が入ってきた。

足早にベッドに近寄った正淑は彼女を抱きしめ、「わたしを待っていたんでしょう。体の具合はどう?」と尋ねた。

彼女の目からこらえていた涙がせきを切ってあふれた。そして正淑の胸に顔を埋め、「お母さん！　お母さん！　わたしのお母さん！」と声を上げて泣きじゃくった。

3 ヵ月半後に退院することになり、その日、将軍も健康を取り戻した女児を見て、「おや、うちのおちびさんは病気も治り、背も伸びて見違えるほど変わったな」と喜びの色を隠さなかった。

同年の夏休みのことである。私邸に遊びに来たその子が庭で本を読んでいると、正淑がたらいの水に桃色の染料を溶かし、布地を染めはじめた。

それを見て、こんなに蒸し暑いのだから少し休んではと言うと、正淑は「わたしにかまわないで本をお読みなさい。お母さんは仕事をしなければいっときもじっとしていられないの」と答えるだけで、仕事の手を休めようとしなかった。

そのとき彼女は、暑い盛りに制服を着て革帯を締めている自分のために、正淑が着替えをつくろうとしていることなど知るよしもなかった。数日後、正淑から出来あがった着替えをもらってはじめてそのことを知り、母のような心づかいに涙した。

正淑は時間を割いてしばしば学院を訪ねながらも、日曜日になると朝から院児たちが来るのを心待ちにし、通りで院児を見かけると私邸に連れてくるのであった。そして、キムチを漬ける季節になると学院に足を運んで自らキムチを漬け、正月には学院で院児たちと食卓を囲んで彼らを喜ばせた。

朝鮮人民革命軍の地下組織のメンバーであった人の息子が入学

したときには、彼に会うためにわざわざ学院に足を運び、彼を励まし、遊撃隊時代から愛用していた万年筆を与えた。

万景台の院児たちは正淑の慈しみのなかで、党に限りなく忠実な革命戦士に、朝鮮革命の血脈をしっかり継いでいく根幹に成長していった。

今日、朝鮮革命の頼もしい指揮メンバーとなった革命家の遺児たちはその頃を追憶し、口をそろえてこう語っている。

金正淑同志はわたしたちのまたとない実の母であると。

温かい人情味

金日成主席は次のように回顧している。

「金正淑は自分のためではなく、同志のために一生をささげた。彼女の生涯は同志愛から始まり、同志愛にもとづいて発展し、その過程で共産主義的道徳・信義を最大限に発揚する非凡な革命家になったのだ。彼女が一生の間になしたことはすべて、同志と人民、革命のためのものであって、自分のためのものは一つとしてなかった。金正淑には、自分という観念がまったくなかったのだ。わたしは飢えても凍えても病気にかかってもかまわない、ただ同志たちがひもじい思いをせず、寒がらず、元気であれば、それで満足する、わたしが死んで同志たちを生かすことができるなら、何も思い残すことなく喜んで死を選ぶ、というのが金正淑の人生

観だった」

張哲九（チャンチョルグ）は正淑を「一度会えば本当に別れがたい人」と評している。

将軍の直属部隊で正淑と起居をともにした徐順玉（ソスンオク）も、生涯正淑のことを忘れることができなかった。正淑は寝床につくと、当時16 歳であった徐順玉に自分の毛布をかけてやり、彼女を抱いて寒さを防いでやった。そして訓練基地で彼女と別れるときには、長い間愛用していた一枚しかないその毛布を記念に与えた。隊員たちは行軍中、背のうが大きくて誰なのかよく見分けがつかないときにも、背のうについているその毛布を見て正淑だと分かったものだった。

正淑は、別れぎわに自分に抱きついてしきりに泣く徐順玉の背のうに毛布を入れてやりながら、「これを記念に持って行きなさい。新品ではないけれど、あなたを実の妹のように可愛がったわたしの体温がしみていることを忘れないでほしい」と言った。

徐順玉はそれから半世紀以上もの間それを大事にしまっておき、1992 年 8 月、祖国を訪問した際に金日成主席に贈った。現在、その毛布は朝鮮革命博物館に展示されている。

解放後、祖国に凱旋した若い抗日革命闘士たちが一人、二人と所帯を持ちはじめると、正淑はそのたびに彼らの結婚式の祝膳を整えてやった。李乙雪（リウルソル）はいまでも、正淑が自ら育てたもやしが添えられた簡素な祝膳を受けたときのことを感慨深く回想している。

正淑は、彼らが所帯を持った後には、いろいろな副食物を届け

たりもした。

　将軍が太炳烈の媒酌の労をとったときも、正淑は彼らの祝膳を整えてやり、その生活を見守った。

　将軍と正淑の祝福を受けたのは彼らだけではなかった。金明俊、孫宗俊、李五松、姜尚昊など若い闘士たちはもとより、抗日戦で伴侶を亡くした年配の闘士たちも、将軍と正淑の慈しみのもとで新家庭を築いた。

　革命同志への正淑の愛は彼らの遺族にも注がれた。

　呉仲和、呉仲洽、呉仲成などわが子をみな抗日戦にささげた呉泰熙、呉昌熙老の一家が中国の東北地方から平壌にやって来たのは、1948 年 3 月のことであった。

　彼らが到着したという知らせを受けた正淑は、すぐその宿所を訪ねた。あわててはだしで飛び出てきた呉泰熙老とその家族が正淑に深々と腰を折ってお辞儀をしようとすると、正淑は彼らの手をとり、先にあいさつをした。

「おじいさん、おばあさん、これまでどんなに……」

　正淑は声が詰まって言葉をつづけることができなかった。みなが涙を流し、苦難の日々に悲報に接したときも涙を見せなかった呉泰熙老も、正淑の手の甲に熱い涙を落とした。

「凶悪な日本軍と戦われたあの厳しい時期に、女史が朝鮮人民の願いを一身に担われ、将軍にりっぱに仕えてこられたので、わたしたちもいまこのように明るい世の中を迎え、祖国の地を踏むことができたのです」

「おじいさん、わたしたちが今日のこの喜びを分かち合えたのは、おじいさんたちの御子息たちが将軍に忠誠を尽くし、りっぱにたたかってくれたからです」

その日の午後、彼らを私邸に招いた正淑は、3 人の嫁のうち 1 人は義父母の世話をし、あとの 2 人は万景台革命学院で院児たちの面倒をみるようにしよう、と話した。

彼らが将軍の定めた家に居を移した後も、正淑は変わることなくその生活を見守った。1949 年の正月をひかえて、正淑は正月を楽しく過ごすようにと、糯米や肉をはじめいろいろな主食や副食物、菓子類、果物、たきぎなどを送り、正月には彼らの家を訪ねた。

その日、正淑は、このように暖かいオンドル部屋で正月を過ごしていると、呉仲洽同志たちとともにたたかっていた頃、雪が降り積もった深い山中で迎えた正月のことが思い出される、あのとき思い描いた夢が現実になったと語り、こうつづけた。

「おじいさんたちは抗日遊撃隊を助けるために苦労をし、国を取り戻すたたかいに多くの肉親をささげたのですから、これからは将軍のもとで、長生きし、子孫をみなりっぱな革命家に育ててください」

正淑は子どもたちに、最期の瞬間まで将軍に忠誠を尽くしたお父さんたちの代を継いで、国の柱になるように、と諭した。帰宅後、正淑は老人たちが薄い衣服をまとっていたのが気にかかり、服地を送った。

吉州（キルチュ）で暮らしていた李悌淳（リジェスン）の妻崔彩蓮（チェチェリョン）が平壌にやって来たとき、正淑は正門の衛兵所まで出て彼女を迎えた。

正淑は、黒瞎子溝密営で会った李悌淳をしのびながら、李悌淳同志は最後まで革命家の節操を曲げることなくりっぱにたたかった、李悌淳同志が果たせなかったことを子どもたちがやり遂げるよう彼らをりっぱに育てあげよう、と鼓舞した。

崔彩蓮は正淑の心のこもったもてなしを受けながら、将軍の私邸で意義深い日々を送った。正淑は多忙をきわめていたにもかかわらず、彼女を牡丹（モラン）峰や大同（テドン）江の船着場に案内し、映画も観覧させ、将軍に言われたとおりメーデーの祝賀宴にも参加させるようはからった。

正淑は彼女に、将軍が望んでいるとおり子どもたちを革命学院にやって革命家に育てましょう、どうすれば先に逝った革命同志たちの遺児たちを一人残らず捜し出して学院にやることができるだろうか、どうすればなんの心配もない満ち足りた生活をさせ、寂しい思いをさせずに育てることができるだろうか、服はどんな色の布地でどのようにつくれば気に入るだろうか、こういったことが次々と頭に浮かんで夜もろくに眠れません、と話した。

正淑の温かい思いやりで、抗日革命闘士の朴達（パクタル）も晩年に楽しく張り合いのある生活を送った。日本官憲の拷問のため身動きできない体となり、解放後、西大門（ソテムン）刑務所を出て病院生活を送っていた朴達は、平壌にやって来て正淑に会った。

「朴達同志！」

「金正淑同志!」

2 人の対面は、白頭山麓の黒瞎子溝密営と天上水洞窟付近での対面についで、これが三度目であった。正淑は、彼が祖国解放の日まで獄中でりっぱにたたかったことをねぎらい、国が解放されて将軍の懐に帰ってきたのだから安心して治療に専念するようにと力づけた。

将軍は朴達の家を私邸の近くに定めるようはからった。正淑は、室内のしつらえから引っ越しにいたるまで世話を焼き、キムチを漬ける季節になると自ら足を運んでキムチを漬けてやった。

将軍の私邸にはいつも多くの人が訪ねてきた。抗日革命闘士はもとより、桃泉里——新坡(シンパ)地区の以前の地下工作員や李周淵(リジュヨン)、李鏞(リヨン)、李英(リヨン)など党と政府の要職に就いた以前の国内闘士たちもやってきた。そのたびに正淑は、彼らを温かく迎え入れ、活動上の助言を与え、生活のすみずみにまで気を配った。

正淑は、勤労する人民に限りない愛情を注ぎ、搾取と無権利に苦しんできた彼らを国のれっきとした主人、将軍に忠実な担い手に育てていった。

清津(チョンジン)発平壌行きの列車が明川(ミョンチョン)駅に停車した日の早暁にあった話は、いまも当地の住民のあいだに伝説のように語り継がれている。

その日、金[illegible]鎬(キムチョルホ)は炊事当番だったので、水を汲むため朝早く起きた。ところが、いつのまにやら正淑がバケツを手にして外へ出ていった。外は晩に雪が降り積もり、あたり一面銀世界であっ

た。井戸はすぐ見つかったが、つるべがなくて水を汲むことができなかった。朝方のことで水を汲みに来る女たちの姿も見えなかった。金[illegible]鎬は、そばの家の軒下につるべが吊されているのを目にし、足を向けようとした。

　正淑は彼女を引き止め、すぐ主人が目を覚ますだろうから少し待とうと言った。そして、音を立てないように井戸の周りの雪を掃きはじめた。正淑が雪を掃きおえても、その家からは何の物音もしなかった。金[illegible]鎬は、いまにも列車が発ち、また朝食が遅れるのではないかと心配になり、主人を起こそうとした。しかし正淑は、「寝入っている人たちを起こさずに、わたしたちがもう少し我慢して待ちましょう」と言い、またほうきを手にして庭の雪を掃きはじめた。庭の雪をきれいに掃きおえたとき、ようやく外に出てきたその家の主婦は、意外な出来事に呆然と立ち尽くした。そして、わたしの家は駅に近いので多くの人が行き来するが、こんなことは初めてだ、と言った。

　彼女は、この人情味あふれる大らかな女性が誰であるかは知るよしもなかったが、その人柄に解放がもたらしてくれた新しい世の中の息吹を感じとり、正淑をじっと見つめるばかりであった。

　祖国は解放されたものの、誰を問わず朝鮮人民の姿には、植民地民族としての受難の傷跡が残っていた。

　正淑は、一日も早く彼らを将軍がもたらしてくれた張り合いのある生活へと導き、新しい朝鮮建設の主人として押し立てようと心を砕いた。

1947 年 4 月 12 日のことである。

正淑は息子の正日をともなって平壌製糸工場に出向いた。工場の幹部から生産状況と労働者の暮し向きについて聞いた後、正淑は生産工程を見て回った。まゆの選別場を経て糸繰り職場の前に来ると、幹部たちはあわてて「ここには入らないでください」と言い、戸口の前に立ちふさがった。実際、職場の中はひどいものであった。人の顔も見分けられないほど立ち込める蒸気、天井から垂れ落ちる水滴、息が詰まるようなゆであげたまゆの臭い……。

しかし正淑は「糸繰り工の女性たちが仕事をしているところなのに、わたしが入れないというわけはありません。わたしは彼女たちの仕事ぶりを見るためにここに来たのです。さあ、入りましょう」と言って、先に足を踏み入れた。

正淑は、湯を伝って流れて来るまゆを素手で取り出している糸繰り工の一人に近寄った。湯はとても熱そうだった。80 度近いその湯に手をつけてみた正淑は、糸繰り工の手を握りしめたままなにも言わなかった。しばらくして正淑は、若い娘の手がこんなに荒れているのだから、どんなに痛むことだろうと、むせび泣く糸繰り工の肩をやさしく撫でるのであった。そして、国は解放されて勤労人民の世の中になったのだから、胸を張って明るくたくましく生き、楽しく働くことができるようになるだろうと話した。つづいて工場の幹部たちに、解放前に強いられた労苦やさげすみだけでも胸の痛むことだというのに、いまになってもこんな状態ではどうするのか、この工場には親のない女性が多いそうだが、

みなさんが親代わりになって彼女らの面倒をよくみるべきだ、と説いた。

また、湯がはねても服が濡れないようにゴムの前掛けをつくってやり、工場内の空気がよくないので換気扇を取り付けるようにと言った。

糸繰り職場を見て回り、絹糸職場に向かうため中庭に出た正淑は、工場の周りに高く築かれた垣とその上に幾重にも張りめぐらされた有刺鉄線を目にした。日本帝国主義者が、強制的に連れてきた娘たちが逃げられないように設けたものであった。正淑は「見ただけでもぞっとするあの忌まわしい有刺鉄線をなぜそのままにしておくのですか。残忍な日本人が有刺鉄線まで張りめぐらして朝鮮人民の膏血をしぼったことを考えると、歯ぎしりがしてなりません。この工場の女性たちがあれを見て、どんなに心を痛めることでしょう。わたしたちが山中で苦労したのも、あのような人間を束縛する垣を打ち壊すためでした。有刺鉄線を取り払い、垣も低くしましょう。そして、女性の心の傷跡を早くいやしてやりましょう」と切々と語った。

この日、正淑は労働者の寮も見て回ってから工場を後にした。

正淑から工場の実態について報告を受けた将軍は、数日後、この工場を現地指導し、多くの毛布や炊事道具、オンドルの床紙、各種医薬品、ゴムの前掛け、それにさまざまな副食物を送った。

正淑の人民への愛は、彼女が訪ねた多くの工場や農・漁村など随所に秘められており、彼女が会った労働者や農民、知識人、企

業家、商人などすべての人の胸に刻まれている。

1946 年の初夏のことである。

正淑は、山中で戦ったときの傷跡が痛みだし、高麗医の治療を受けるため外出した。正淑が往診を拒むので、副官がそれでは車を利用するようにと言うと、病院に行くのに車を使うことはないと言い張り、一人で出てきたのであった。

途中、北朝鮮共産党中央組織委員会で青年活動を担当しているある幹部が、足を引きずって歩いている正淑を見かけて駆け寄ってきた。ことのいきさつを知った彼は「ここでしばらくお待ちください」と言うが早いか、一目散に駆け出した。ほどなくして、彼は老人が引く人力車を引っ張ってきた。そして、ほろを開き、早く乗るようにと勧めた。

自分が乗るのを待っている腰の曲がった車夫を痛ましげに見つめていた正淑は、彼を連れてきた幹部を見つめ、「わたしたちは、祖国が解放された後、人力車に乗って威張るために草の根を食べ、雪の上で野宿しながら戦ったのではありません。われわれ革命家がたたかうのは、あくまでも人民をあらゆる搾取と抑圧から解放し、すべての人が平等で自由な生活を営む新しい社会を建設するためです。あなたは人力車に誰かを乗せるために神経を使うのではなく、人が人を乗せて街を行き交うといった不平等をなくすためにたたかうべきです」ときつくとがめた。

老人の顔には、積もり積もった悲しみを洗い流すかのように大粒の涙がこぼれ落ちた。

正淑は彼に近寄り、人力車の梶棒に手をおいて「おじいさん、お許しください。わたしの気持ちがこの人には分からなかったようです」と言い、別れのあいさつをして立ち去った。

幹部に支えられて歩いてゆく正淑の後ろ姿を見つめていた老人は、たまりかねて人力車を引いてその後を追った。正淑の前に人力車を止めた老人は、これまで金持ちだけを乗せていたこの老いぼれに、今日を最後にあなたのような高貴な方を乗せて人力車を引かせてほしい、と懇願するのだった。

正淑は老人の手を両手で握りしめ、こう言った。

「まだわたしの気持ちが分かってもらえなかったようですね。かつてわたしは、奪われた祖国を取り戻し、解放された祖国の地に、おじいさんのようにさげすまれていた貧しい人たちがみな裕福に暮らせる新しい社会を建設するため、朝鮮民族の太陽、金日成将軍のもとで日本帝国主義者と戦いました。なのに、多くの革命烈士が命に代えて取り戻した自分の国で、体の具合がよくないからといって、老人が引く人力車に乗ることが許されるでしょうか。おじいさんの気持ちだけは有難く受けとめておきます」

老人は言い知れぬ感動を覚え、正淑の姿が見えなくなるまでその場に立ちつくしていた。

それ以来、平壌市の街頭から車夫の姿が消えていった。彼らは尊厳ある人間として、新しい朝鮮の主人として生きるため、工場へ、建設現場へと向かったのである。

解放後、土地改革をはじめさまざまな民主改革は反動分子との

熾烈な階級闘争をともない、その過程には胸の痛む犠牲もあった。

自分の村を訪れた将軍と正淑にまみえた平安（ピョンアン）南道江西（カンソ）郡星台（ソンデ）面星二（ソンイ）里農村委員会委員長の金恵善（キムヘソン）も、そうした犠牲者のうちの一人である。

土地改革に献身していた金恵善は 1946 年 4 月 9 日、反動分子によって殺害された。彼の訃報に接した正淑は翌日の 4 月 10 日、反動分子が暗躍する星二里に行って遺族に会い、将軍の指示にしたがって葬儀を国葬として執り行うようはからった。そして葬儀委員会を組織し、中央の軍楽団を呼び、弔辞を準備するなど葬儀がりっぱに執り行われるよう心を配り、敵の手にかかった一農民に永遠の生命を与えた。

翌年 8 月、9 月に予定されている咸鏡（ハムギョン）北道にたいする将軍の現地指導を補佐するため、正淑は一足先に鏡城（キョンソン）郡に赴いた。そこで正淑は、温泉湯治に来ていた清津紡績工場整糸課の職業同盟委員長の蔡姫（チェヒ）に出会った。工場党委員会から休養券を渡されて休養所にやってきた彼女は、思いがけなく正淑に出会い、こおどりして喜んだ。

正淑が彼女を知ったのは、解放直後、清津で活動していたときのことである。

ある日の朝、正淑が寝泊りしている解放（ヘバン）洞の 2 階建ての宿所にぼろをまとった女が物乞いに来た。軍服姿の正淑が出てくると、彼女は驚いて逃げ出した。その女がほかならぬ蔡姫であった。

正淑は女性同盟の活動家に、彼女を呼び戻すようにと言った。

そして外で彼女を待ち受け、温かく迎え入れた。そして彼女を自分のそばに座らせ、荒れたその手を握りしめながら名前や年を聞いた。彼女は、それまで「乞食」とさげすまれ、放浪生活をしてきた悲しみが込み上げ、両手で顔をおおって部屋を飛び出した。

翌日、正淑は「乞食谷」を訪れて蔡姫に会った。女性同盟の活動家から、軍服姿のこの人が抗日の女性英雄金正淑女史であると聞かされた彼女は、それまで誰にも話したことのない自身の過去を打ち明けた。

正淑は蔡姫の不幸な身の上話を聞いた後、彼女の髪をとかし、身なりを正してやった。

「自信をおもちなさい。あなたもこれから勉強をし、建国事業に参加すればりっぱな活動家になれるはずです」

日暮れどきまで、新しい生活を始めるよう彼女を切々と諭した正淑は、帰りがけにそばに置いておいた風呂敷包みを解いた。

「あなたを助けてあげたいのはやまやまですが、私の手もとにはなにもないのです。それでこれをもってきたのですが、遠慮せずに受け取ってください」

風呂敷包みの中には、きれいに手入れした軍服が入っていた。

彼女に軍服を着せた正淑は、朝鮮人民革命軍の新入隊員のようだと喜んだ。

その足で清津市保安署を訪ねた正淑は、帰属財産のなかに米や布地のようなものがあれば一日も早く生活の苦しい人たちに分け与えるべきだとし、「乞食谷」に住んでいる蔡姫の面倒もよくみ

るようにと言い残した。

数日後、正淑は再び保安署を訪ね、蔡姫の実家が会寧（ヘリョン）にあるとのことだが、必ず捜し出すようにと頼んだ。

同年 12 月の末、会寧の弓心（クンシム）洞で蔡姫は母親と感激の対面を果たした。その後、彼女は病気を治し、勉強に励んで党員になり、弓心炭鉱の女性同盟委員長を務めた後、清津紡績工場整糸課の職業同盟委員長の職にあった。

休養生活を終えた蔡姫が別れのあいさつをしようと正淑を訪ねてきた。正淑は、この前より顔色が大分よくなったと喜び、紙包みの半袖のブラウスを取り出して、まだ国が豊かでないので質はよくないが、わたしの誠意と思って受け取ってほしいと言った。

彼女はすぐにそれを受け取ることができなかった。自らは以前と変わらず質素な身なりでいながら、自分には新しい服を着せようとする正淑の心づかいに胸が詰まったのである。

正淑は顔をほころばせ、そのうち良質の糸を紡いでわたしにきれいな服を一着つくってくれればいいではないか、と言って彼女にそのブラウスを持たせ、遠くまで見送った。

正淑に見守られて成長した蔡姫は、第 2 回党大会に代表として参加し、1949 年 4 月には職業同盟代表団の一員として外国を訪問した。

正淑はこのように人々には仁恕を施しながらも、自らはいつも地味なチマ・チョゴリ姿で質素に暮らし、新しい朝鮮の礎石を築くために力を尽くした。

そのため、正淑に会った人たちはみな、その品性とつましい暮らしぶりに感銘を受け、彼女が誰なのか分からず「失策」を犯してしまうことが少なくなかった。

愛国米献納運動を発起した農民、金済元（キムジェウオン）も、そうであった。

彼が牛車に米を積んで将軍の私邸を訪ねたとき、正淑は彼を温かく迎え、遠路の労をねぎらい、彼が米俵を下ろすのを手伝った。仕事が終わると、彼の服についたわらくずやほこりを払ってやり、ちょうずを使うようにと湯の入ったたらいを差し出した。

彼は、質素な身なりで親切にもてなしてくれるその女性が誰なのか分からなかった。彼は、平壌に来て金日成将軍にまみえるという一生の願いはかなったが、将軍に忠誠を尽くし、見事な銃さばきで日本軍を震えあがらせたという金正淑女史に会えずに帰るのは心残りだ、一目だけでも女史に会わせてもらえないだろうか、と懇願した。

彼を暖かい眼差しで見つめていた正淑は、「あなたをお迎えし、一緒に米俵まで下ろしたのに、改めてごあいさつしなければならないとは」と言ってほほえんだ。

「えっ？　それではあなたが……」

彼は言葉に詰まり、平身低頭して自分の非礼をわびた。

新義州（シンイジュ）からやって来たある企業家も同じような「失策」を犯し、ご夫人は絹の服をまとっておられるものとばかり思っていた、と言った。すると正淑は、人民が身につけることのできない絹の服をわたしがどうして着られると言うのですか、今後、将軍の政治

を奉じてすべての人が絹の服をまとえるようになったら自分も着るつもりです、と話した。

正淑の温かい思いやりは、朝鮮に来た外国人にも施され、彼らは朝鮮人民の親しい友人となった。

1946 年のことである。

敗亡して帰国する日本軍にまじって中国の東北地方から平壌にまで逃げ延びてきた 19 歳と 16 歳の 2 人の日本人娘が将軍の私邸に食料をもらいに来た。

正淑は彼女たちを家に入れて面倒をみてやることにした。すると幼い正日が、お母さんは日本軍と戦ったのに、なぜ日本人を家に連れてきてご飯を食べさせたりするのかと聞いた。

正淑は、お父さんとお母さんは日本帝国主義に反対して戦ったのよ、日本の労働者や農民など勤労人民に反対して戦ったのではないのよ、と答えた。

一部の護衛兵は、将軍の私邸にいる敵性国の娘たちに警戒心を抱いていた。しかし正淑は、彼女たちと一緒に将軍の食事の支度をしたり果汁をつくったりするなどして、わけへだてなく接した。

そうしたある日、将軍が風邪をひいて高熱にうなされていたとき、彼女たちが非常用の薬を差し出すと、正淑はためらうことなくそれを受け取って将軍に服用させた。

彼女たちは数ヵ月の間、このように将軍の私邸で家族同様に暮らした。日本へ帰った後も、彼女たちは、もっとも困難な時期に自分たちを見守ってくれた正淑のことを忘れなかった。それから

24 年後の 1971 年 1 月、彼女たちは金日成主席に感謝の手紙を送り、日朝親善のために尽くすという決意を示した。

正淑は、朝鮮人と結婚して近所に住む日本人女性も温かく見守った。

その女性は、自分が日本人であることに引けめを感じていた。正淑は彼女に会い、そんなことは気にせず、新しい朝鮮の建設に専念する夫を内助するように、と力づけた。そして幼い正日には、その家の子どもたちも近所の子たちと同じく兵隊ごっこに入れて一緒に遊ばせるようにした。

その後、長い歳月が流れ、彼女は 80 をすぎ、その子たちも 60 に手が届こうとしているが、彼らはいまでも当時を振り返り、正淑を懐かしんでいる。

解放直後、将軍に会うため各国の代表団や各階層の外国の友人が平壌を訪ねてきた。その際、正淑はしばしば彼らを私邸に泊めた。

1948 年の夏、抗日武装闘争の時期に将軍と親交が厚かった周保中の夫人・王一知と娘が平壌を訪れると、正淑は彼女たちを私邸に連れてくるようはからった。

その頃、中国では国民党との熾烈な戦いが展開され、将軍が派遣した朝鮮人民革命軍の各部隊が中国革命を支援していた。

正淑は、王一知とその幼い娘の周偉を家族と同様に扱った。何日か経つと、周偉は自分の家のように遊び回り、食べたいものがあれば、自分の母親ではなく正淑にせがむようになった。

正淑は、周偉の願いはなんでも聞き入れた。ジュースが飲みたいと言えばつくってやり、中国料理が食べたいと言えば自らギョーザやジャージャー麺をこしらえてやった。そしてあるとき、わたしたちはいまはこのように一緒に食事をし、帝国主義者と戦うときには同じ塹壕で血をも分かち合う階級的兄弟だ、としみじみと語った。その後、祖国解放戦争が始まると、周保中は朝鮮人民のたたかいに連帯を示し、1951 年には自分の副官と運転手を朝鮮戦線に送り込んだ。

十三　将軍の志を継がせるために

白頭山の子として

金日成主席は次のように述べている。

「一生涯、同志と人民のためにすべてをささげた金正淑だったが、子女には一銭の金も、一つの財産も残さなかった。彼女が使った金はわたしの月々の給料であり、彼女が使用した家や家具は、すべて国のものだった。

金正淑がわれわれに残した遺産といえば、金正日を未来の指導者に育て、党と祖国の前に立たせたことだ。みなさんはわたしが金正日を後継者に育てたと言うが、その基礎を築いたのは金正淑なのだ。彼女が革命の前に残したもっとも大きな功績は、まさにこれだった」

正淑が正日を生み育てた日々は平穏な時期ではなかった。

それは抗日の銃声が響く厳しい血戦の日々であり、廃墟の上に新しい民主朝鮮を建設するという未踏の道を歩む苦難の日々であった。

厳しい抗日武装闘争の時期、正淑はあるときは弾雨をわが身で防ぎ、またあるときは自分の体温で凍えた体を温め、火薬の臭いの染みた軍服に抱いて正日を育てたのである。

正淑はいつも正日に、早く大きくなってお父さんに仕え、お父さんの志を受け継いで祖国と人民のために尽くすりっぱな人になるのだ、と言い聞かせた。

そして正日が幼い頃から、金日成将軍を一家の父としてではなく、全人民の領袖としていただき、その志を肝に銘じてそのまま受け継いでいくよう心を砕いた。

ある日、正淑は、お父さんの名前は朝鮮人民の願いをこめて革命同志たちがつけたのだ、お父さんの名前には、朝鮮を明るく照らし、人民に永遠の幸せをもたらす太陽になってほしいという深い願いがこめられている、月は太陽の光を受けて明るく見えるのであり、空にある無数の星もみな太陽の光を受けて輝いているのだ、だから太陽はこの世に一つしかない光の源である、とかんで含めるように教えた。そして、お父さんは祖国と人民の太陽であるから、わたしたちはみなその戦士としての信義を守らなければならない、と諭した。

祖国に凱旋して万景台（マンギョンデ）の将軍の生家を初めて訪ねた翌日、正淑は正日に、お父さんの一家はみな祖国と人民のために敵と勇敢にたたかった、だからこれからはお前が早く大きくなってお父さんの志を継ぎ、解放された朝鮮をこの世で一番りっぱな国にしなければならない、そうするのが万景台の血を受け継いでいくことになるのだ、と話した。

正淑は正日を連れて、将軍の一家が居を構えていた七谷（チルゴル）や烽火（ポンファ）里も訪ねた。そして万景峰に登っては、祖父の金亨稷（キムヒョンジク）がつくっ

た詩『南山の青松[34]』の話をし、麦田（メクチョン）の渡し場に行っては、お父さんは幼い頃おじいさんの言いつけを守り、おじいさんの活動を助けたものだと話した。

代々外来侵略者に抗して祖国と人民のためにたたかってきた革命的家系の大本を植えつけようとする正淑の言葉は、幼い正日の心に忘れがたい印象を残した。

ある日、正淑が万景台に出かける支度をしていたとき、正日が、ぼくのふるさとはどこなの、と聞いた。

そのとき正淑の脳裏に、うっそうとした密林の中の白頭山（ペクトウサン）密営、小白水のほとりの質素な丸太小屋、そして１歳にもならない正日を同志たちに託して敵地へ向かったこと、任務を遂行して帰ってくると、外哨まで迎えに来た戦友からわが子を抱き取り、その頬をなでてやったことなどがありありと浮かんできた。

「お前のふるさとは白頭山だよ。朝鮮で一番高い山なのよ。白頭山には天池があり、木もたくさん生えているのよ。そして、そこはお父さんが日本の侵略軍をやっつけたところなんだよ」

そして、白頭山には百ぺん倒れても立ち上がり、最後まで戦って勝利した革命精神が秘められていると言い聞かせた。

こうした話を聞かされるうちに、正日の胸に、白頭山を縦横無尽に駆け巡りながら日本の侵略軍を征討した父にたいする誇りと尊敬の念が根づいていった。

正淑は、将軍が現地指導をするたびに正日をともなって随行した。それは、人民のためにすべてをささげる父の気高い品性を身

につけさせるためであった。

そして、将軍とともに工場や農村、漁村を訪ね、労働者、農民の創造的熱意と愛国的熱情にあふれる祖国の現実から、人民のために尽くす将軍の労苦と心血を汲み取るよう正日を教育し、父のように勤労人民を愛し尊び、彼らのために尽くすよう懇々と諭した。

雨の日も雪の日も将軍に付き従って全国津々浦々を巡り歩く過程で、正日は、革命の目的は人民に最大の幸福をもたらすことにあり、人間の自主性を実現する革命は人間への最大の愛であるという真理を体得し、金日成将軍こそは人民への愛を体現した偉大な人間であることを悟った。

正淑はまた、自ら模範を示して、父によく仕えるよう正日を教育した。

早朝、正門まで将軍を見送り、どんなに帰りが遅くなっても正門で出迎えるのをつねとしていた母を見慣れていた正日は、父が帰宅する時間になると母と一緒に正門で待つようになった。

風雨が吹きつけるある晩のことである。人気に目を覚ました正日は、家の中に入ってきた母の冷たい手をとり、どこへ行ってきたのかと尋ねた。正淑は微笑をたたえ、雨風がひどいので家の周りを見回ってきたと答えた。ところが母が毎晩のように外へ出ていくので、正日はなにをしに行くのかとしきりに尋ねるようになった。すると正淑は正日の頭をなでながら、「お母さんはお父さんを守る警護隊員なのよ」と言うのであった。

翌日、将軍が帰宅する時間になると、正日は木銃を手にして正門の衛兵所に立った。

正淑は、将軍の書斎の前を通りすぎるときは、いつもつま先で静かに歩いた。母を見習って、正日も将軍の書斎の前にいたると音を立てないように注意して歩いた。

正淑は、正日が幼い頃から、ひたすら革命の勝利と人民の自由と幸福のためにすべてをささげている将軍の日課をそのまま見習うよう、正日の日課表をつくった。それは将軍の日課に合わせたものであった。

正日はその日課をきちんと守った。将軍は、朝早く起きて散歩についてくる正日の手をとって庭園を歩きながら多くのことを教えた。自然と社会、朝鮮革命と世界革命、古代史から現代史にいたる偉人の話、経済や軍事など、対話の内容と範囲を次第に広げていった。

こうして、正日は指導者としての資質と天稟をさらにはぐくんでいった。

ある日、正日が日課を鉄則としていることを知ったある幹部が正淑に、まだ遊び盛りなのに御子息に将軍の日課を見習わせるのは無理ではないか、と言った。

すると正淑は、人の習慣は幼い頃につくものだ、正日はゆくゆく将軍に仕えるべき身であるから、いまから将軍の日課に慣れさせるべきだ、と答えた。

将軍は仕事に追われ、毎日のように深夜か明け方近くに帰宅し

た。正淑は将軍が帰ってくるまで必ず待つ習慣を正日につけさせるため、初めのうちは面白い昔話や童話を聞かせたり、なぞなぞをしたりして正日の興味を引き、次第にその時間を正日のその日の生活を総括し教育するのに利用していった。

正淑は、将軍に喜んでもらうことを最大の幸せ、生涯の信条とする自らの革命的人生観を、正日がそのまま受け継ぐよう導いた。

正淑は、夜半過ぎにも机の前に座って将軍の著作を学習し、車内でも新聞を開いて新しく発表された将軍の演説を読むのをつねとした。こうした母の模範的実践と革命的教育は、正日の真摯な学習気風を確立するのに大きな影響を及ぼした。

正淑はとりわけ、正日の非凡な思考力と観察力、人並みはずれた探究心と強靭かつ大胆な気質、豪放かつ寛大な性格を助長することに努めた。

そして、正日がさまざまな自然現象について聞くと、絶対に聞き流したりいい加減に答えるのではなく、自然と社会の複雑な現象にたいする観察力をはぐくみ、事象の道理を筋道立てて説明した。

正淑は、地球はどんな形をしており、なぜ回るのか、夜と昼、季節の区別はなぜ生じるのか、なぜ雪や雨が降り風が吹くのか、なぜ川は流れ海に注ぐのか、石を放りあげると地に落ちるのにゴム風船はなぜ空に舞い上がるのかといった自然現象はもとより、人類社会はいつ始まってどのように発展してきたのか、地主と資本家はどのように労働者、農民を搾取したのか、労働者、農民は

なぜ工場と土地の主人にならなければならないのか、アメリカ侵略軍はなぜ南朝鮮にやって来たのか、といった複雑な社会現象にいたるまで一つひとつ教え、正日の思考力を伸ばしていった。

また、正淑が正日の音楽にたいする愛好心と才能をはぐくもうと心を砕いたため、ある抗日革命闘士から、将来子息を音楽家にするつもりかと聞かれたこともあった。

正淑のこうした教育は、正日が人間のきわめた科学と技術のあらゆる領域はもとより、文学・芸術にいたるまでの博学多才な実力を蓄える下地となった。

将軍の意を体して正日をりっぱに育てようとする正淑の心配りには、なみなみならぬものがあった。

正淑はよく正日に、将軍が構想している新しい祖国建設の壮大な展望について分かりやすく話して聞かせた。それは、幼少の頃から父の仕事に深い関心を持たせるだけでなく、祖国という大きなスケールですべてを大胆に考えるようにさせるためであった。

正淑は、正日が山に思いを馳せるなら朝鮮で一番高くて雄大な白頭山に思いを馳せ、広くて大きなものなら川や湖でなく茫々たる大海原に思いを馳せる大きな心をもつよう導いた。

1989 年 11 月のある日、金日成主席は、白頭山を見ると金正日同志の姿が目に浮かぶ、金正日同志は白頭山の子であり、白頭山は彼のふるさとであり胆力を養った揺籃である、その思想や性格を見ても、趣味や習慣を見ても、彼は白頭山によく似ている、白頭山の精気と気概が彼の全精神と全身にみなぎっている、金正日

同志こそは白頭山タイプの人間である、と語った。

白頭山の気概をそのまま体現した金正日総書記のこうした気質は、正淑の手で培われ、開花したのである。

猛烈な軍事・政治訓練がおこなわれていた抗日武装闘争時期のある日、その日の訓練を終えて正淑が戦友たちと一緒に帰ってくると、正日が大きな岩によじのぼろうとしていた。

戦友たちがけげんな顔をすると、正淑は、あの岩が高いので、そこに登って密林を見下ろそうとしているのだろうと言った。そして、正日に手を貸そうとする戦友たちを引き止め、自分の力で登ろうとしているのだから放っておこう、あれぐらいの岩に登れないわけはないだろう、と言った。

このように正淑は、正日がまだ幼少の頃に、その意地と勇敢さに不屈の気概と無比の胆力の芽を見いだし、つねに大胆に考え行動するよう気を配り、一度決心したことはあくまでやり遂げるよう導いた。そして原則と道義にもとる行為にたいしては絶対に許さず、正日を気骨のある正義感の強い子に育てた。

雪が降り、冷たい風が吹く冬の日も、正淑は正日に厚着をさせなかった。

正淑は、お父さんは山中で日本軍と戦ったとき、寒い冬にもよくひとえの服で過ごしたものだ、それでもひとしきり戦闘をしたり行軍したりするとびっしょりと汗をかいた、だから寒いからといって厚着をせずに、外に出て雪合戦でもして遊びなさい、と言い聞かせた。

こうして正日は、鉄の意志と胆力、体力をそなえていった。

1946 年夏のある日のことである。

正日は私邸の前につながれている馬を見て、乗せてくれとせがんだ。そばにいた護衛兵は正日を馬に乗せ、手綱を取って歩きはじめた。ところがしばらく行くと、正日は自分に手綱を持たせてくれと言った。しかし護衛兵は、まだ 4 歳にしかならない正日に手綱を持たせることはできなかった。日頃従順な馬でも急に走り出したり跳びはねたりすることがあるからである。それを考えると、彼としては絶対に手綱を渡すわけにはいかなかったのである。

あとで彼がこのことを話すと、正淑は「まだ幼いのに独りで馬に乗ろうとするのは非常に大胆で将帥らしい気迫といえるでしょう」と喜び、自分が乗馬の訓練を施し、馬に乗る正日の姿を将軍にお見せすると言うのだった。

正日の突飛な要求、ときには実現不可能と思われる願いも心にとめ、そのつどかなえてくれる正淑の心づかいで、正日は乗馬の訓練を始めた。

正淑は正日のために鞍やあぶみを直し、注意すべきことも教えた。そして、馬も主人が自分を可愛がってくれるかどうかが分かるものだ、だからよく撫でてやり、好物の餌もやって馬を手なずけるように、と諭した。

それから 1 年過ぎたある日、競馬場から白馬が引かれて来た。

正日がその馬に乗ろうとすると、庭にいた曽祖母の李宝益（リボイク）が、怪我でもしたら大変だと言って止めた。そばでこれを見ていた

将軍と正淑は笑みをたたえ、大丈夫ですと曽祖母を安心させ、正日が馬に乗るのを助けてやった。正日は白馬にまたがり、手綱をしっかりと握りしめた。馬ははじめのうちは何回か跳びはねていたが、しばらくするとおとなしく歩きはじめた。正日はいささかも動じることなく手綱を握り、門の外へ馬を駆って行った。

その日、将軍の家に来ていた曽祖母をはじめ親戚一同は、凛々しい正日の姿に感嘆の声を上げた。

1947年9月のある日、咸鏡（ハムギョン）北道鏡城（キョンソン）地区に滞在していた正淑は、現地指導のため当地を訪ねた将軍に、馬に乗った正日の姿を見せた。

馬に乗って大通りに出た正日が早足に移って駆けていたとき、不意に1台の牛車が道の真ん中に出てきた。

すると正日はさっと手綱を引き、駆けていた馬をその場に止めた。馬は前足を上げていないたが、正日は平然と馬にまたがっていた。

馬に乗って後ろからついてきた将軍は、それを見て豪快に笑った。

正淑は、正日が銃も上手に扱うよう導いた。

木や岩に依託しての射撃の姿勢、飛ぶ鳥や水中の魚に照準をあてるコツ、そして照星と照門の合わせ方や狙いの定め方などを教え、自ら模範動作をしてみせた。

そうしたある日、地方へ出向いた際、正淑は将軍に正日の射撃

の腕前を見せた。標的はドロノキの枝にかけられた紙であった。正日は将軍が装弾してくれた拳銃を受け取り、自信満々の面持ちで射撃の姿勢を取った。正淑は正日の姿勢を正してやり、銃は手で撃つのではなく心で撃つべきだと言った。

銃声が鳴り響いたかと思うと、3 発の銃弾はみな白紙を撃ち抜いていた。

将軍は正日を抱きしめ、よくやった、これからは馬を走らせながら銃を撃ってみるようにと励ました。

正淑は正日に友愛の精神を植えつけるため心を配った。

幼稚園で三輪車競争がおこなわれたときのことである。普段から体を鍛えていた正日は、この日の競争でも断然トップに立っていた。ところが、そのとき競争相手の一人が転倒した。これを見た正日はすぐ三輪車を止めて駆け寄り、その子を助け起こして三輪車に乗せてやった。そのため、惜しくも正日は 2 等になってしまった。正淑は正日を抱きしめ、「倒れた友達を助けてやったんだから、1 等になるよりりっぱなことをしたのよ。本当に偉いわ」とほめた。

正淑は人のために尽くしてこそりっぱな人間になれるとし、正日が高潔な人間愛と厚い道義心、革命的原則性と正義感をもつ革命家に育つよう気を配った。

解放直後、将軍の私邸には馬東熙（マドンヒ）、柳栄燦（リュヨンチャン）をはじめ多くの闘士の遺族や革命戦友が訪ね、数日、ときには数ヵ月間も寝泊まりしたが、正淑はそのわけを聞く正日にこう話した。

——人がこの世で生きていくうえで大切なのは愛と信義だ。人は独りで生きていくことはできず、必ず他の人たちと一緒に暮らすことになるが、そのためには人を愛し、人から愛されたらそれに報いなければならない。もし愛されることを求めるだけで、それに報いようとしなければ人間としての道義にもとることになり、人から悪い人とみなされて見放されてしまう……。

ある日の晩、正淑は正日の日課を総括しながら、きょう友達と仲よく遊んだのは大変よいことだ、敵でない以上は、誰でも信頼し愛してやればみなお前を慕うようになる、と言った。

そして、革命の道を踏み出したすべての人を同志にするためには、愛と信頼によって導かなければならない、と懇々と諭して聞かせた。

将軍の息子だからこそ

金正淑は､質素で簡素な生活をするよう息子の正日をしつけた。

正淑は、朝鮮人民がお父さんを慈父として仰ぎ慕うのは、お父さんが偉いからだけでなく、人民と一緒に生活し、つねに謙虚で素朴であるからだ、お父さんの言いつけどおり、いつも人民と同じように暮らさなければならない、と言い聞かせた。

人民によりよい暮らしをさせるため、穀物加工工場、製糸工場などの工場や農村、漁村へと現地指導をつづける将軍と正淑であ

ったが、その暮らしぶりは質素そのものであった。家具といえば、たんす代わりの衣桁とごく普通のベッド、それに机が一つあるだけだった。

正淑が正日の夏服をつくっていたときのことである。

そばで手伝っていた女性が正淑の手にしている布地が落下傘をほどいたものであることを知り、ご子息の服なのだから、どうせならもう少し上等の生地でつくってはと言った。落下傘の生地は風がよく通らず汗を吸わないので、夏物には適していないと思ったのである。

すると正淑は、いま上等の生地で子どもに服をつくってやれる家がどれほどあるだろうか、わたしたちも普通の家のように子どもたちに質素な身なりをさせるべきだ、と言うのだった。白い落下傘の生地を利用した半袖のシャツと黒のズボン、それが正淑のこしらえた息子の夏服であった。

冬になると、正淑はまたほかの子どもたちと同じような服をつくって正日に着せた。

ある日、正日は正淑が継ぎはぎした靴下をはいて警護隊の詰め所へ行った。

それを見た警護隊の若い兵士たちは驚き、「将軍のご子息が継ぎはぎの靴下をはいているとは……」と絶句した。

正日からこのことを聞いた正淑は、「それは、おじさんたちの思い違いというものよ。継ぎをした靴下をはいているのがなぜ恥ずかしいことだというの」と言い、自分は子どもの頃、寒い冬にも

靴下はおろか足をくるむ一片の布切れさえなかった、山中で戦ったときは靴が擦り切れて縄を巻いて行軍したこともある、と話した。そして、祖国は解放されたが人々はまだ苦しい生活をしている、新しい靴下をはいている子どもより継ぎ当ての靴下をはいた子どものほうが多いということをお前も知っているだろう、将軍の息子だからといって特別な存在だと思ってはいけない、他の人たちが粟飯を食べるときはわたしたちも粟飯を食べ、繕った靴下をはいていたらわたしたちもそのようにすべきだ、他の人たちが継ぎはぎの服を着て繕った靴下をはいているときに、新しい服や靴下を身につけているほうがもっともっと恥ずかしいことだ、と言い聞かせた。

正淑は食生活も質素にするよう努めた。

1947 年の秋、咸鏡北道鏡城郡に滞在していたときも、正淑は正日に粟入りのご飯を食べさせた。これを知ったある女性活動家が気をもむと、正淑は、将軍は山中で戦っていたときいつも隊員たちと一緒に食事をとり、隊員たちが粥をすすれば自分も粥をすすり、トウモロコシを口にすればそれを召し上がった、今も将軍は人民がまだ雑穀のご飯を食べているというのにわたしたちが白米のご飯を食べるわけにはいかないと戒め、雑穀のご飯が出されてこそ安心して召し上がる、と話した。

その女性活動家が、それなら御子息にだけでも白米のご飯を食べさせてはと言うと、正淑は微笑をたたえて、幼い頃から他の人と同じものを食べる習慣をつけなければならない、と言うのだっ

た。

あるとき、護衛担当の幹部が正淑に、御子息にせめておやつだけでももう少しましな物をあげてほしいと言った。

すると正淑は、将軍はいま子どもたちにキャンデーや菓子を思う存分食べさせられないため心を痛めている、将軍の息子であるからといって特別扱いをしてはならない、そうするのは将軍の意に反し、またわたしも許せない、とたしなめた。

正淑は正日に、日本人が逃げていくときに穀物加工工場をすべて破壊してしまったため、まだキャンデーや菓子を十分に生産することができない、だから労働者や農民の家では子どもたちにおやつを食べさせられないありさまだ、と話した。

その頃、将軍の家をたびたび訪れた魏昌淑（イ チャンスク）はこう回想している。

「わたしは、託児所と幼稚園のすべての子どもたちに毎日おやつとして与えられるあん入りのパンや、祝日ごとに贈られる抱えきれないほどのキャラメルやお菓子を目にすると、あのときの金正淑同志の言葉が思い出され、ふかしたジャガイモをおやつ代わりにしていた金正日同志の姿が浮かんできます」

正淑は、正日が将軍の共産主義的品性をそのまま受け継ぎ、真の人間になるよう心を砕いた。

ある日の夕方、正日はアイロンがけをしている正淑に、他の人たちは歩哨の前を通り過ぎるとき何も言わないのに、お父さんとお母さんはどうしてあいさつをするのかと聞いた。すると正淑は、

歩哨のおじさんたちはいつもお父さんを守ってくれているのだからあいさつをするので、それが礼儀というものだ、と答えた。

正淑は、礼儀を守るかどうかによってその人の尊厳と人格が評価されるのだと言い、礼儀作法について教えた。

万景台の曽祖母が将軍の家で数日間過ごしていたときのことである。

正日は毎朝早く起き、身なりを整えてから「おばあさん、お早ようございます」とあいさつし、夜になると、曽祖母が夜中に目を覚ましてもすぐ水が飲めるように水差しを持っていき、「おばあさん、お休みなさい」とあいさつしてから寝床に入った。また外へ遊びにいくときは、「おばあさん、外で遊んできます」と言って出かけた。

曽祖母はそのたびに、正日の殊勝な心がけに目を細めたものであった。

正淑はまた、正日が人民を尊重し、人民に迷惑をかけないよう教えた。

正淑が鏡城郡にとどまっていたときのことである。訪ねて来た地元の女性たちが、正淑が重ねて断ったにもかかわらず、持ってきた布団を置いていった。

彼女らを見送った正淑は、家庭で布団を手入れするとなると容易なことではない、この新しい布団にはあの人たちの誠意がこもっている、布団を大事にしまっておいて、ここを発つときに返すことにしよう、と言った。そして、正日にも家から持ってきた毛

布だけを使わせた。

　幹部たちが御子息にだけでもこの布団を使わせてはと言うと、正淑は、抗日武装闘争の時期、将軍は人民の利益に反するようなことは絶対にしてはならないと戒められた、人民の誠意だからといって彼らが大事にしている布団を使うわけにはいかない、とたしなめた。

　正日は、自分は毛布の方がいい、自分もお父さんに見習って人民の利益に反するようなことはしない、と言うのだった。正淑は正日の肩をなでながら、本当に偉い、わたしたちはいつもお父さんの言いつけどおりにしなければならない、と言い聞かせた。

　母の人民的品性を鑑とした正日は、自分を特別な存在と考えたことは一度もなかった。幼稚園、小学校の頃、正日は友達と同じ木綿の靴下にゴム靴や運動靴をはき、服も普通のものを着、学用品を風呂敷に包んで通った。中学校に通っていたある年の夏、正日が水道でゴム靴を洗っていると、そばにいた友達が、なぜかっこうのよいシューズみたいなものをはかずに、汗がにじむゴム靴をはいているのか、と聞いたほどである。

　正日は高級中学校や大学に通うときも、勤労動員のときも、普通の学生服や作業服を着て、学友と一緒にもっこを担いだり泥を掘り出すなどして、同じ規律のなかで生活した。こうした正日の品性はみな正淑によって培われたものであった。

　正日があまりにも質素で規律正しい生活を送っているので、将軍の私邸の近くに住んでいたある女性が正淑に、御子息のしつけが厳

しすぎはしないかと忠言した。すると正淑は、わたしの息子は白頭山で生まれ、わたしが軍服にくるみ背のうの上に乗せて歩いた、そしてわたしの銃にすがって歩きはじめ、白頭山の水を飲み山菜を食べて育った、だからわたしは息子を白頭山の子らしく育てるつもりだ、と答えた。

このように正淑は、祖国と革命の遠い将来を見通し、正日を将軍の切り開いたチュチェの革命偉業の代を継いでいく偉大な革命家、祖国の息子、人民の息子に育てたのである。

解放後、朝鮮では、朝鮮労働党が創立されて新しい祖国の建設を指導し、初の自主独立国家である朝鮮民主主義人民共和国が創建されるとともに、抗日の伝統を継いだ革命武力が強力な軍隊に成長しつつあった。そして2回にわたる人民経済計画を遂行する過程で、人民の物質生活も向上した。

1949年9月21日、金日成将軍は新しい祖国建設に立ち上がった人民を励ますため、兎山(トサン)郡へ現地指導の途についた。正淑はいつものように門の外まで将軍を見送った。足どりや言葉づかいもいつもと変わりなかった。

実のところ、そのとき正淑の病状は悪化していた。しかし、そんなことはおくびにも出さず、笑顔で将軍を見送ったのである。

将軍の車が見えなくなった後も、正淑は正日と一緒にその道をじっと見つめていた。これが将軍への最後の見送りになろうとは、彼女自身も知らなかった。

正淑は幼稚園へ行く正日を見送ってから部屋にもどった。そして痛みをこらえながら、編みかけの将軍の毛糸の肌着をつくりあげた。

夕暮れになると正淑の病状はさらに悪化した。しかし正淑は、幹部たちが入院を勧めても応じなかった。将軍が帰ってくるまで家で待つというのであった。すると、副官が長距離電話で将軍に正淑の病状を知らせようとした。正淑はそれを制止し、将軍の活動に支障をきたしてはならないと言った。

正淑がもうろうとする意識をなんとか持ちこたえながら苦しい息をつくと、副官はたまりかねて受話器をとった。午後 11 時 40 分、将軍が私邸に着いたとき、正淑は昏睡状態に陥っていた。正淑は意識を失ったまま病院に運ばれた。

1949 年 9 月 22 日未明、祖国と人民、同志と同胞を思ってやまなかった抗日の女性英雄、不撓不屈の革命闘士である金正淑は帰らぬ人となった。

新聞やラジオで正淑の逝去が報じられた。思いがけない悲報に接し、全国の人民が涙にくれた。

22 日の朝から弔問客が引きも切らず訪れた。

将軍は生花に包まれて静かに眠る正淑の顔をつくづくと眺め、こう語った。

「金正淑は、祖国の解放と朝鮮革命の勝利のためにすべてをささげた熱烈な革命家だった。彼女は名立たる名射手で有能な地下工作員であり、厳しい試練と難関にも屈しない剛直な共産主義者

だった。彼女は幼い頃に両親と弟を亡くし親戚とも生き別れ、ありとあらゆる辛苦をなめ尽くした。彼女は人一倍祖国を愛し、同志を愛し、革命の利益のためであれば自分のすべてをささげてきた。彼女のなしたことはみな同志たちのためであり、自分のためのものは一つもなかった」

9 月 24 日午後、葬送曲が流れるなか、党と政府の幹部たちが正淑の霊柩を送り出した。

正淑は抗日の血路を切り開きながら、あれほど心に描いていた解放された祖国で 4 年しか生きられず、32 年の生涯を終えた。正淑の死は全朝鮮人民にとって大きな悲しみであった。

しかし正淑は、その短い生涯に祖国と民族に不滅の功績を残したのである。

正淑の生涯は、偉大な領袖金日成主席のためにすべてをささげた親衛戦士としての高潔な生涯、祖国の解放と人民の自由と幸福のためのたたかいで不滅の業績を積みあげた生涯、金正日総書記を朝鮮革命の指導者に育てあげ、チュチェの革命偉業の代を継がせた生涯であった。

金正淑の業績は朝鮮人民のあいだで永遠に語り継がれるであろう。

注　釈

1　**チュチェ 6(1917)年**　朝鮮では、チュチェ思想を創始し、朝鮮の革命と建設を勝利に導いた金日成主席の革命的生涯と業績を称えるため、主席の誕生した 1912 年を元年とするチュチェ年号を制定した。チュチェ年号は、主席の 3 周忌にあたる 1997 年 7 月 8 日に制定された。

2　**林春秋**(1912～1988)　抗日革命闘士。早くから革命闘争に参加し、反日学生事件に関与してソウル西大門刑務所に収監される。出獄後、朝鮮人民革命軍に入隊し、軍党委員会委員、東満党工作委員会書記などの要職で活動。解放後、道党委員会委員長、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会書記長、副主席を歴任した。

3　**革命互済会**　金日成主席が抗日革命闘争の時期に組織した反日大衆団体。抗日革命家に好意を寄せて中立を守る人たちや共鳴者、老人などが加わったこの会は、抗日武装闘争の大衆的基盤の強化に大いに寄与した。

4　**春慌闘争**　1932 年の春、金日成主席の指導のもとに中国の間島地方

の農民が日本帝国主義と反動的地主に抗して展開した大規模な組織的闘争。これにより、抗日遊撃隊の創建と遊撃根拠地の創設、武装闘争の大衆的基盤の構築に有利な条件がもたらされた。

5　**「自衛団」**　日本帝国主義が 1932 年から中国東北地方の各村落に「自力で地方の治安」を維持するという口実のもとに青壮年を強制徴集してつくりあげた武装組織。これは、抗日遊撃隊の「討伐」と革命勢力の抹殺をもくろむ日本帝国主義侵略軍と警察隊の補助隊とされた。

6　**『団結紐』**　金日成主席が革命活動の初期に創作した革命歌舞。この作品は、全民族が一丸となってたたかえば、国の独立は達成できるということを、色とりどりの帯で形象化している。

7　**「満州国」軍**　日本帝国主義が 1932 年 3 月 1 日の「満州国」樹立後につくりあげた軍隊。1945 年、日本帝国主義の敗亡と「満州国」の崩壊によって消滅した。

8　**半遊撃区**　抗日武装闘争の時期に創設された遊撃根拠地の形態の一つ。形式上は敵の統治地域であるが、実際には朝鮮人民革命軍の管轄地域で、人民革命軍への支援や革命の後続隊の育成をおこない、敵地と遊撃区との中間連絡所としての役割を果たした。

9 **「民生団」**　日本帝国主義侵略者が 1932 年 2 月に中国の間島地方でつくりあげた反革命的スパイ・御用団体。「民生団」は、日本帝国主義の差し金のもとに朝鮮人の「民族としての生存権の確保」「朝鮮人による間島自治」といった欺瞞的なスローガンをかかげ、朝鮮民族の利益をはかるかのように装って朝鮮人民の反日意識を麻痺させ、朝鮮の革命家に危害を加え、朝中人民を離間し対立させ、革命隊伍を内部から瓦解させようと画策した。「民生団」は、当初からその正体があばかれ、1932 年 7 月に解体した。しかし日本帝国主義は、その後も特務や手先を動員し、革命隊伍内に多くの「民生団」員が潜入したかのように見せかけた。その奸計に乗せられた民族排外主義者と分派・事大主義者の政治的愚鈍さと不純な政治的野望のため、反「民生団」闘争は極左的に進められ、革命隊伍の統一団結と朝鮮革命の発展に甚大な損失をもたらした。反「民生団」闘争の極左的偏向は金日成主席によって正された。

10　**満州国**　日本帝国主義者が中国の東北地方を占領し、1932 年 3 月 1 日に清国の最後の皇帝であった溥儀をおし立ててつくりあげた傀儡国家。

11　**崔　賢**(1907～1982)　抗日革命闘士。反日闘争に参加して逮捕され、7 年間獄中生活を送る。1932 年 7 月に出獄し、金日成将軍の導く朝鮮人民革命軍に入隊して指揮官として活躍。祖国解放戦争(朝鮮戦争)の時期には朝鮮人民軍軍団長、戦後は人民武力部長など党

と国家の要職を歴任した。

12　**朴　達**（1910～1960）　朝鮮民族解放同盟の責任者。1938 年 9 月、日本帝国主義の手先の密告によって警察に逮捕される。野蛮な拷問によって廃人同様の身となり、1945 年 8 月、朝鮮の解放とともにソウル西大門刑務所から出獄。その後、平壌に移り住み、病床で執筆活動をつづけた。

13　**「恵山事件」**　日本帝国主義が 1937 年と 1938 年に恵山を中心とする朝鮮国内と中国東北地方の長白一帯で、朝鮮の革命家と愛国的人民にたいして強行した 2 回にわたる大検挙事件。

　1941 年 8 月、日本帝国主義は「恵山事件」を名目に、「咸興地方法院」でだけでも 167 名に不法な有罪判決を下し、多くの愛国者を死刑、無期懲役に処した。

14　**「協和会」**　日本帝国主義が 1932 年 7 月 25 日につくりあげた傀儡「満州国」の反動団体。「協和会」は、日本帝国主義の侵略政策を擁護する別働隊、反動的本拠として、「関東軍」の「治安粛正」計画にもとづき、満州で抗日武装力を「討伐」し、人民に反動的思想を植えつけようと策動した。1945 年、日本帝国主義の敗亡と「満州国」の崩壊によって解体した。

15　**甲午農民戦争**　1894 年から 1895 年にかけて、封建支配層と日本の

侵略者に抗して朝鮮半島西南部の全羅道地方で起こった農民戦争。この戦争が始まった 1894 年が甲午年であることから、甲午農民戦争という。

16 **義兵闘争**　侵略者に抗して自発的に展開された愛国的人民の闘争。近代の義兵闘争は、朝鮮にたいする日本の侵略策動が強化された 1895～1896 年頃から激化していった。とくに、日本帝国主義が朝鮮を占領した前後 10 年間(1904～1914)の反日義兵闘争は、国内外で日本帝国主義侵略者に大きな打撃を与えた。

17 **3・1 人民蜂起**　日本帝国主義の野蛮な植民地支配に抗して 1919 年 3 月 1 日に起きた朝鮮人民の全民族的反日愛国闘争。3・1 運動ともいう。独立万歳示威闘争に立ち上がった群集は、日本の統治機関を襲撃、破壊し、侵略者と売国奴を誅殺した。蜂起は、中国東北地方や上海、ロシア沿海州、日本、ハワイなど、海外の朝鮮同胞にも波及した。

18 **新幹会**　1927 年 2 月、ソウルで共産主義者と民族主義者の合作によって創立された統一戦線組織。全民族の団結をはかることを綱領としてかかげ、民族の総力をもって朝鮮の独立を達成しようとした。しかし、日本帝国主義の破壊策動と内部の改良主義的策動、組織の指導中核の欠如のため、1931 年 5 月に解体を余儀なくされた。

19　**天道教宗理院**　天道教（朝鮮固有の民族宗教）で教徒のための諸業務を担当する機関の一つ。中央宗理院と地方宗理院があった。

20　**熱河遠征**　中日戦争勃発の前後に、コミンテルン内の極左冒険主義者が中国東北地方で活動する抗日武装部隊に、「満州国」の首都・長春を包囲して攻撃し、熱河方面へ進出するよう求めて強行させた遠征。この計画は無謀かつ非現実的な軍事作戦であったため、多大の損失をまねき失敗に終わった。

21　**5・30 暴動**　1930 年 5 月、分派・事大主義者が中国の東満州で起こした極左冒険主義的暴動。この暴動は、日本帝国主義と中国国民党軍閥に共産主義者と反日大衆弾圧の口実を与え、多数の犠牲者を出して失敗に終わった。

22　**「縮地の術」**　伝説でいう、地脈を縮めて一気に数十、数百里を行き来する術のこと。抗日革命闘争の時期、朝鮮人民は金日成将軍の卓越した用兵術と戦法を縮地の術にたとえて称賛した。

23　**「東南部治安粛正特別工作」**　日本帝国主義が 1939 年 9 月、中国の吉林に「討伐司令部」を設置し、朝鮮人民革命軍にたいして強行した大規模な「討伐」作戦。一名「通化・吉林・間島三省討伐」または「東辺道三省討伐」ともいう。日本帝国主義はこの「討伐」作戦に 20 万の兵力を投入した。

24　安　吉（1907～1947）　抗日革命闘士。1933 年、金日成将軍の導く朝鮮人民革命軍に入隊し、連隊長、第 3 方面軍参謀長を務める。解放後、党と政府の要職に就き、建党、建国、建軍の 3 大課題を実現するため力を尽くした。

25　呉振宇（1917～1995）　抗日革命闘士。朝鮮戦争の時期に朝鮮人民軍師団長、軍団参謀長を務める。戦後、人民武力部長、朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員会委員など党と国家の要職を歴任。1992 年に朝鮮人民軍元帥の称号を授与された。

26　金　策（1903～1951）　抗日革命闘士。1927 年から革命に参加。日本警察に逮捕され、数回にわたって獄中生活を送る。1932 年に朝鮮人民革命軍に入隊し、指揮官として活躍。解放後、北朝鮮人民委員会副委員長、朝鮮民主主義人民共和国内閣副首相兼産業相を歴任。朝鮮戦争の時期には軍事委員会委員兼前線司令官を務めた。

27　康良煜（1904～1983）　愛国闘士、政治活動家。日本帝国主義の植民地支配当時、教師、牧師として愛国的な教育活動と布教活動に従事。解放後、最高人民会議常任委員会書記長、朝鮮社会民主党中央委員会委員長、朝鮮民主主義人民共和国副主席を歴任した。

28　曹晩植　解放後、平壌で創立された朝鮮民主党の指導的ポスト

に就き、ソウルの米軍政庁の差し金で、党を売国・反民族の道へと誘導する一方、北朝鮮での民主社会の発展と全国的な自主独立国家の樹立をめざす人民の闘争を破綻させ、北朝鮮の民主勢力を分裂させようと画策した。1946 年 2 月、曹晩植とその追随分子は党の指導部と党から除籍された。

29 **建国思想総動員運動**　解放後、日本帝国主義が扶植したあらゆる古い思想と因習を一掃し、新しい建国思想を身につけ、生気にみちた民族的気風を確立するために展開された思想改造運動。金日成主席は 1946 年 11 月 25 日、北朝鮮臨時人民委員会第 3 回拡大委員会で、この運動方針をうちだした。

30 **『城隍堂』**　金日成主席が革命活動の初期、中国の賈家屯で創作し公演した革命演劇。この作品は、迷信の虚偽性と欺瞞性、地主や日本帝国主義の手先の反動性をあばき、勤労人民が生活を改善するには神ではなく、自らの力を信じるべきであるという思想を芸術的に形象化している。

31 **呂運亨(1886～1947)**　朝鮮の独立運動家。京畿道楊平出身。初期に「上海臨時政府」と「高麗共産党」に関与して朝鮮の独立のためにたたかう。ソウルで朝鮮中央日報社社長、朝鮮建国同盟委員長、朝鮮人民党党首などを歴任。解放後、南朝鮮で自主的な政治路線と連共・統一をめざしてたたかい、暗殺された。

32　**「上海臨時政府」**　1919 年 4 月、上海に亡命していた 29 名の民族主義者が組織した「大韓民国臨時政府」。この「臨時政府」は、いかなる大衆的・政治的基盤もなく、誰からも認められなかった亡命者の集団で、「政府」の要人たちは派閥争いと内閣改造に明け暮れ、アメリカをはじめ帝国主義列強にすがって朝鮮独立のための「請願運動」を展開した。「運動資金」の名目で同胞から莫大な資金をかき集め、腐敗堕落した生活を送る一方、共産主義者にテロを加え、朝鮮人民の抗日武装闘争を妨害した。1945 年 8 月、太平洋戦争の終結とともに消滅した。

33　**「5・10 単独選挙」**　アメリカ帝国主義者が朝鮮の自主的統一を阻み、南朝鮮を完全に植民地化するため、1948 年 5 月 10 日、南朝鮮で不法に実施した単独選挙。その結果、売国的な李承晩傀儡政権がつくりあげられた。

34　**『南山の青松』**　朝鮮の反日民族解放運動の卓越した指導者金亨稷が、1918 年の秋、祖国解放の大志を抱いて故郷の万景台を後にするときにつくった革命歌。この歌には、金亨稷の不屈の革命精神と反日愛国思想、祖国解放の遠大な志が表現されている。

南山のあの青松が
雪霜に埋もれて

千辛万苦を耐えしのび
ふたたび陽春を迎え蘇るを
友よ君知るや

国の独立ならずんば
生きてなにするものか
この身裂け粉となるも
解放の道ひとすじに進むを
はらからよ信じたまえ

この身倒れても
代を継いでたたかいつづけ
三千里錦繍江山に陽春を迎え
独立万歳の雄たけび
朝鮮よいざあげん